埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第360集

川 島 町

東野／平沼一丁田

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う
川島地区埋蔵文化財発掘調査報告
（第２分冊　平沼一丁田遺跡）

２００９

国土交通省　関東地方整備局
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

1　遺跡遠景（1）

2　遺跡遠景（2）

1　調査区全景

2　平沼一丁田遺跡出土陶磁器

平沼一丁田遺跡の紹介

昔から川島町の人々は、川に沿って形成された自然堤防の上に住み続けてきました。

平沼一丁田遺跡も現在の町役場から北西に約１㎞、川島町のほぼ中央に位置する自然堤防上にあります。

今回の調査は、首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の建設に伴うもので、縄文時代（約４,２００年前）の土壙、古墳時代前期（約１,７００年前）の建物跡や周溝状遺構、室町時代（約７００年前）の建物跡や井戸跡、江戸時代（約３００～４００年前）の建物跡や溝跡などが見つかりました。

特に縄文時代に作られた土壙の発見は、この地が何千年も前から人々がくらせる場所であったことを示すものです。また、古墳時代前期の掘立柱建物跡の１棟は、溝を掘ってからその中に柱を立てる「布掘り」と呼ばれる基礎工事を行って建設されており、この工事を行った建物跡としては県内最古の発見例となりました。

例 言

1．本書は、埼玉県比企郡川島町に所在する東野遺跡第１次、平沼一丁田遺跡第１次調査の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

東野遺跡第１次（ＨＧＳＹ）

埼玉県比企郡川島町大字三保谷字東野918番地

平成18年11月２日付け　教生文第２－63号

平沼一丁田遺跡第１次（ＨＲＮＭ）

埼玉県比企郡川島町大字平沼1341－７番地他

平成18年４月26日付け　教生文第２－６号

3．発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ－３の組織により実施した。発掘調査については、東野遺跡第１次調査は平成18年11月１日から平成19年１月31日まで実施し、飯持和夫・金子直行・栗岡潤が担当し、橋本勉の補助を得た。

平沼一丁田遺跡第１次調査は平成18年４月10日から平成18年８月31日まで実施し、上野真由美・福田聖が担当した。

また、整理報告書作成事業は、東野遺跡は平成20年６月２日から平成20年８月29日まで、平沼一丁田遺跡が平成20年６月２日から平成21年３月24日まで、宮井英一・上野・岡田勇介が担当して実施し、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第360集として印刷・刊行した。

5．発掘調査における基準点測量は、精進測量設計株式会社（東野遺跡）、株式会社未央測地設計（平沼一丁田遺跡）に、空中写真撮影は、株式会社東京航業研究所（東野遺跡）、中央航業株式会社（平沼一丁田遺跡）に委託した。

遺物の巻頭写真及び展開写真は小川忠博氏に委託した。

放射性炭素年代測定、炭化材樹種同定、土壌の炭素・窒素同位体比、プラント・オパール分析、炭化種実同定、骨の同定は株式会社パレオ・ラボに委託した。出土漆器の保存処理は株式会社吉田生物研究所に委託した。

6．樹種及び種実の同定に関しては、能城修一氏、佐々木由香氏、村上由美子氏の協力を得た。

7．黒曜石の産地分析、一部の石器・石製品の鉱物名の分析結果の同定は大屋道則が行った。

8．発掘調査における写真撮影は各担当者と橋本が行い、出土遺物の写真撮影は富田和夫・宮井・岡田が行った。

9．出土品の整理・図版作成は上野・岡田が行い、金子・鈴木孝之、兵ゆり子、矢田美知子、山北美穂の協力を得、中嶋淳子が補助した。

10．本書の執筆は、Ⅰ－１を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、Ⅰ－２、３、Ⅲ－４（１）、（２）、（４）を上野、Ⅱを上野・岡田、Ⅲ－１、２、４（３）を金子、Ⅳ－１、２、３、４、６を岡田が行った。分析、保存処理の執筆は分析・保存各担当者が行った。

11．本書の編集は宮井・上野・岡田が行った。

12．本書に掲載した資料は平成21年度４月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。

13．発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

川島町教育委員会　礒野治司　馬橋泰雄

岡田賢治　及川良彦　駒井潔　笹森健一

清水康守　田中信　辻誠一郎　利根川宇平

平野寛之　藤沼昌泰　堀口萬吉　村田章人

山崎勝義

凡 例

1．遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示し、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

東野遺跡のC－3グリッド北西杭の座標は、X＝－820.000m、Y＝－29290.000m。北緯35°59′31″8095、東経139°30′30″5276である。

平沼一丁田遺跡のC－6グリッド北西杭の座標は、X＝－1620.000m、Y＝－32480.000m。北緯35°59′05″4882、東経139°28′23″2795である。

2．調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3．グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に算用数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと算用数字を組み合わせ、例えばB－2グリッド等と呼称した。

4．本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＪ…竪穴住居跡　ＳＢ…掘立柱建物跡
ＳＡ…柱穴列　ＳＲ…周溝状遺構
ＳＥ…井戸跡　ＳＫ…土壙　ＳＣ…集石土壙
ＳＴ…火葬土壙　ＳＤ…溝跡
ＳＸ…その他・特殊遺構
Pit…小穴・柱穴

5．本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もある。

全測図 1：150　1：400
遺構図 1：60　1：80　遺構拡大図 1：30
縄文土器・土師器・陶磁器など 1：4
土器拓影図 1：2　1：3　1：4
石器・石製品 2：3　1：2　1：3
金属製品・鉄製品 1：2　古銭 1：1
木製品 1：3　1：4　1：6　1：8

6．実測図の表記方法は以下のとおりである。断面を黒塗りしたものは須恵器。また、彩色された土器についてはその範囲に網をかけて示した。（赤彩及び赤色漆10％・銅緑釉15％・油煙20％・黒色漆30％）

7．遺構断面図に表記した水準数値は、海抜標高を表す。

8．遺構図及び火葬炉壁実測図中、焼土範囲・柱痕跡20％、炭化物範囲60％、還元面範囲40％の網をかけて示した。

9．遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・口径・器高・底径の単位はcm、重さの単位はgである。
・口径・底径の（　）内の数値は推定値、器高の［　］内の数値は現存高を示す。
・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。
　A：雲母　B：片岩　C：角閃石　D：長石
　E：石英　F：軽石　G：砂粒子　H：赤色粒子　I：白色粒子　J：白色針状物質
　K：黒色粒子　L：礫
・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けて示した。
・色調は、『新版標準土色帖』に照らし、最も近い色相を記した。
・残存率は、図示した器形に対する大まかな遺存程度を％で示した。
・備考には、出土位置、注記No.などを記した。

10．本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/25000・1/50000地形図、川島町都市計画図1/2500を使用・編集した。

目 次

(第１分冊　東野遺跡)
巻頭図版
序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要 ……1
　1．発掘調査に至る経過 ……1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 ……2
　3．発掘調査・報告書作成の組織 ……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 ……4
Ⅲ　東野遺跡の調査 ……13
　1．遺跡の概要 ……13
　2．遺構と遺物 ……19
　（1）住居跡 ……19
　（2）土壙 ……48
　（3）集石土壙 ……73
　（4）性格不明遺構 ……74
　（5）遺構確認トレンチ調査 ……75
　（6）グリッド出土遺物 ……77
　（7）試掘出土遺物 ……88
　3．自然科学分析 ……91
　（1）放射性炭素年代測定 ……91
　（2）土壙出土炭化材の樹種同定 ……96
　（3）第１号集石土壙内土壙の
　　炭素・窒素同位体比測定 ……99
　（4）プラント・オパール分析 ……101
　（5）出土炭化種実 ……106
　（6）出土骨同定 ……116
　（7）石器の理化学的分析 ……118
　4．調査のまとめ ……125
　（1）調査の成果 ……125
　（2）東野遺跡と自然堤防上の
　　縄文時代の遺跡 ……126
　（3）東野遺跡出土の
　　十三菩提式土器について ……128
　（4）東野遺跡出土の石器について ……137
写真図版

(第２分冊　平沼一丁田遺跡)
巻頭図版
例言
凡例
目次
Ⅳ　平沼一丁田遺跡の調査 ……141
　1．遺跡の概要 ……141
　2．縄文時代の遺構と遺物 ……146
　（1）土壙 ……146
　（2）集石土壙 ……147
　（3）グリッド出土遺物 ……148
　3．古墳時代の遺構と遺物 ……149
　（1）掘立柱建物跡 ……149
　（2）周溝状遺構 ……154
　（3）土壙 ……164
　（4）溝跡 ……166
　（5）遺物集中 ……171
　（6）その他の遺物 ……173
　4．中・近世の遺構と遺物 ……173
　（1）掘立柱建物跡 ……175
　（2）柱穴列 ……191
　（3）井戸跡 ……192
　（4）土壙 ……211
　（5）火葬土壙 ……224
　（6）溝跡 ……226
　（7）ピット ……265
　（8）その他の遺物 ……275
　5．自然科学分析・保存処理 ……278
　（1）出土木材の樹種 ……278
　（2）溝跡出土の種実同定 ……291
　（3）出土材の放射性炭素年代測定 ……292
　（4）漆器の保存処理 ……296
　6．調査のまとめ ……298
　（1）平沼一丁田遺跡の変遷過程 ……298
　（2）古墳時代前期の掘立柱建物跡について
　　……304
写真図版

挿 図 目 次

（第２分冊　平沼一丁田遺跡）

第87図　平沼一丁田遺跡調査地点位置図 ……142
第88図　調査区全測図 ……143
第89図　基本層序 ……144
第90図　第27号土壙・出土遺物 ……146
第91図　第１号集石土壙 ……147
第92図　第１号集石土壙出土遺物 ……148
第93図　グリッド出土遺物 ……148
第94図　古墳時代遺構配置図 ……150
第95図　第２号掘立柱建物跡 ……151
第96図　第２号掘立柱建物跡出土遺物 ……152
第97図　第７号掘立柱建物跡 ……153
第98図　第７号掘立柱建物跡出土遺物 ……154
第99図　第１号周溝状遺構 ……155
第100図　第１号周溝状遺構遺物出土状況 ……156
第101図　第１号周溝状遺構出土遺物 ……157
第102図　第２号周溝状遺構 ……158
第103図　第２号周溝状遺構遺物出土状況 ……159
第104図　第２号周溝状遺構出土遺物 ……160
第105図　第３号周溝状遺構 ……161
第106図　第３号周溝状遺構遺物出土状況 ……162
第107図　第３号周溝状遺構出土遺物 ……163
第108図　古墳時代の土壙 ……165
第109図　古墳時代の土壙出土遺物 ……165
第110図　古墳時代の溝跡（１）……167
第111図　第32号溝跡遺物出土状況 ……168
第112図　古墳時代の溝跡（２）……169
第113図　古墳時代の溝跡出土遺物 ……170
第114図　遺物集中遺物出土状況 ……172
第115図　遺物集中出土遺物 ……172
第116図　古墳時代のグリッド・表採遺物 ……173
第117図　中・近世遺構配置図 ……174
第118図　第１号掘立柱建物跡 ……175
第119図　第３号掘立柱建物跡……176
第120図　第３号掘立柱建物跡出土遺物……177
第121図　第４号掘立柱建物跡……178
第122図　第４号掘立柱建物跡出土遺物……179
第123図　第５号掘立柱建物跡……180
第124図　第６号掘立柱建物跡……181
第125図　第８号掘立柱建物跡……182
第126図　第８号掘立柱建物跡出土遺物……183
第127図　第９号掘立柱建物跡出土遺物……184
第128図　第９号掘立柱建物跡……185
第129図　第10号掘立柱建物跡……186
第130図　第11号掘立柱建物跡……187
第131図　第12号掘立柱建物跡……188
第132図　第13号掘立柱建物跡……189
第133図　第15号掘立柱建物跡……190
第134図　柱穴列……191
第135図　井戸跡（１）……193
第136図　井戸跡（２）……195
第137図　井戸跡（３）……198
第138図　井戸跡（４）……201
第139図　井戸跡（５）……203
第140図　井戸跡（６）……205
第141図　井戸跡（７）……207
第142図　井戸跡出土遺物（１）……208
第143図　井戸跡出土遺物（２）……209
第144図　中・近世の土壙（１）……212
第145図　第３号土壙遺物出土状況……213
第146図　中・近世の土壙（２）……216
第147図　中・近世の土壙（３）……218
第148図　中・近世の土壙（４）……221
第149図　中・近世の土壙出土遺物……223
第150図　第１・２号火葬土壙……225
第151図　中・近世溝跡全体図区割り図……226
第152図　中・近世溝跡全体図……227
第153図　中・近世溝跡区割り図（１）……230
第154図　中・近世溝跡断面図（１）……231
第155図　中・近世溝跡出土遺物（１）……232

第156図　中・近世溝跡出土遺物（2）……233
第157図　中・近世溝跡出土遺物（3）……234
第158図　中・近世溝跡出土遺物（4）……235
第159図　中・近世溝跡出土遺物（5）……236
第160図　中・近世溝跡出土遺物（6）……237
第161図　中・近世溝跡出土遺物（7）……238
第162図　第14号溝跡遺物出土状況（1）……240
第163図　第14号溝跡遺物出土状況（2）……241
第164図　中・近世溝跡出土遺物（8）……243
第165図　中・近世溝跡出土遺物（9）……244
第166図　中・近世溝跡出土遺物（10）……245
第167図　中・近世溝跡区割り図・断面図（2）
……248
第168図　中・近世溝跡区割り図・断面図（3）
……249
第169図　中・近世溝跡断面図（4）……250
第170図　中・近世溝跡出土遺物（11）……251
第171図　中・近世溝跡区割り図（4）……253
第172図　中・近世溝跡断面図（5）……254
第173図　中・近世溝跡断面図（6）……255
第174図　ピット出土遺物……265
第175図　ピット全体図……266
第176図　ピット……267
第177図　ピット全体図区割り図……267
第178図　ピット区割り図（1）……268
第179図　ピット区割り図（2）……269
第180図　ピット区割り図（3）……270
第181図　ピット区割り図（4）……271
第182図　中・近世のグリッド・表採遺物……276
第183図　樹種同定試料（1）……281
第184図　樹種同定試料（2）……282
第185図　平沼一丁田遺跡出土木材の
顕微鏡写真（1）……286
第186図　平沼一丁田遺跡出土木材の
顕微鏡写真（2）……287
第187図　平沼一丁田遺跡出土木材の
顕微鏡写真（3）……288
第188図　平沼一丁田遺跡出土木材の
顕微鏡写真（4）……289
第189図　平沼一丁田遺跡出土の竹笹類……290
第190図　平沼一丁田遺跡出土種実……292
第191図　放射性炭素年代測定試料……293
第192図　放射性炭素年代測定及び
暦年較正の結果……295
第193図　平沼一丁田遺跡の集落変遷（1）…299
第194図　平沼一丁田遺跡の集落変遷（2）…300
第195図　平沼一丁田遺跡の集落変遷（3）…302
第196図　平沼一丁田遺跡の集落変遷（4）…303
第197図　平沼一丁田遺跡検出の掘立柱建物跡
……305
第198図　埼玉県内の掘立柱建物跡
検出遺跡（1）……306
第199図　埼玉県内の掘立柱建物跡
検出遺跡（2）……307
第200図　掘立柱建物跡分布図……309
第201図　埼玉県内の掘立柱建物跡の類型……311
第202図　関東地方の布掘り建物跡検出遺跡…313
第203図　布掘り建物跡分布図……315

表目次

（第２分冊　平沼一丁田遺跡）

第19表　第７号掘立柱建物跡出土遺物観察表…154
第20表　第１号周溝状遺構出土遺物観察表…157
第21表　第２号周溝状遺構出土遺物観察表…160
第22表　第３号周溝状遺構出土遺物観察表…164
第23表　古墳時代の土壙出土遺物観察表……166
第24表　古墳時代の溝跡出土遺物観察表……171
第25表　遺物集中出土遺物観察表……172
第26表　古墳時代のグリッド・表採遺物観察表
……173

第27表　第３号掘立柱建物跡出土遺物観察表…177
第28表　第３号掘立柱建物跡出土古銭観察表…177
第29表　井戸跡出土遺物観察表 ……210
第30表　中・近世の土壙出土遺物観察表 ……224
第31表　中･近世の溝跡出土遺物観察表 ……259
第32表　ピット出土遺物観察表 ……265
第33表　ピット一覧表 ……272
第34表　中・近世の
　　グリッド・表採遺物観察表 ……277
第35表　中・近世の
　　グリッド・表採古銭観察表 ……277
第36表　平沼一丁田遺跡出土木材樹種同定試料
　　……279
第37表　平沼一丁田遺跡出土木材の樹種（1）…284
第38表　平沼一丁田遺跡出土木材の樹種（2）…285
第39表　種実同定結果 ……291
第40表　測定資料及び処理 ……293
第41表　放射性炭素年代測定及び
　　暦年較正の結果 ……294
第42表　埼玉県内の古墳時代前期掘立柱建物跡
　　……308
第43表　埼玉県内の弥生時代掘立柱建物跡 …308
第44表　掘立柱建物跡の平面形態 ……310
第45表　掘立柱建物跡の平面積 ……310
第46表　関東地方の布掘り建物跡 ……314
第47表　遺構番号新旧対応表 ……317
第48表　掘立柱建物跡一覧表 ……318
第49表　柱穴列一覧表 ……318
第50表　屈溝状遺構一覧表 ……318
第51表　井戸跡一覧表 ……318
第52表　土壙一覧表 ……319
第53表　火葬土壙一覧表 ……320
第54表　溝跡一覧表 ……320

写 真 図 版 目 次

（第２分冊　平沼一丁田遺跡）

巻頭図版１　１　遺跡遠景（１）
　　２　遺跡遠景（２）
巻頭図版２　１　調査区全景
　　２　平沼一丁田遺跡出土陶磁器
図版25　１　調査区全景　東から
　　２　調査区西側壁面
図版26　１　第２・３・４・８号掘立柱建物跡
　　２　第５・６・９・12・13号
　　掘立柱建物跡
　　３　第１号掘立柱建物跡
図版27　１　第２号掘立柱建物跡
　　２　第２号掘立柱建物跡ピット２
　　礎板出土状況
　　３　第２号掘立柱建物跡ピット５
　　礎板出土状況
図版28　１　第３号掘立柱建物跡・第１号柱穴列
　　２　第３号掘立柱建物跡ピット４
　　柱材出土状況
　　３　第４号掘立柱建物跡
図版29　１　第４号掘立柱建物跡ピット７
　　柱材出土状況
　　２　第５号掘立柱建物跡
　　３　第６号掘立柱建物跡
図版30　１　第７号掘立柱建物跡
　　２　第８号掘立柱建物跡
　　３　第９号掘立柱建物跡
図版31　１　第９号掘立柱建物跡ピット１
　　遺物出土状況
　　２　第10号掘立柱建物跡
　　３　第11号掘立柱建物跡
図版32　１　第12号掘立柱建物跡
　　２　第13号掘立柱建物跡
　　３　第15号掘立柱建物跡

図版33　1　第１号周溝状遺構遺物出土状況（１）
2　第１号周溝状遺構遺物出土状況（２）
3　第１号周溝状遺構遺物出土状況（３）
図版34　1　第１号周溝状遺構遺物出土状況（４）
2　第２号周溝状遺構
3　第２号周溝状遺構遺物出土状況（１）
図版35　1　第２号周溝状遺構遺物出土状況（２）
2　第２号周溝状遺構遺物出土状況（３）
3　第３号周溝状遺構
図版36　1　第３号周溝状遺構遺物出土状況（１）
2　第３号周溝状遺構遺物出土状況（２）
3　第３号周溝状遺構遺物出土状況（３）
図版37　1　第５・12号井戸跡
2　第14号井戸跡
3　第14号井戸跡遺物出土状況（１）
4　第14号井戸跡遺物出土状況（２）
5　第15号井戸跡
6　第15号井戸跡遺物出土状況
7　第26号井戸跡
8　第27号井戸跡
図版38　1　第29号井戸跡遺物出土状況（１）
2　第29号井戸跡遺物出土状況（２）
3　第37・39号井戸跡
4　第41号井戸跡
5　第３号土壙遺物出土状況（１）
6　第３号土壙遺物出土状況（２）
7　第３号土壙
8　第15号土壙
図版39　1　第16号土壙遺物出土状況
2　第27号土壙検出状況
3　第27号土壙遺物出土状況（１）
4　第27号土壙遺物出土状況（２）
5　第１号集石土壙検出状況
6　第１号集石土壙遺物出土状況（１）
7　第１号集石土壙遺物出土状況（２）
8　第１号集石土壙
図版40　1　第１号火葬土壙遺物出土状況
2　第１号火葬土壙
3　第２号火葬土壙遺物出土状況
図版41　1　第２号火葬土壙
2　第１・２号溝跡
3　第２号溝跡遺物出土状況（１）
図版42　1　第２号溝跡遺物出土状況（２）
2　第３号溝跡
3　第７号溝跡
図版43　1　第７号溝跡遺物出土状況
2　第８号溝跡
3　第８号溝跡遺物出土状況（１）
図版44　1　第８号溝跡遺物出土状況（２）
2　第14号溝跡
3　第14号溝跡遺物出土状況（１）
図版45　1　第14号溝跡遺物出土状況（２）
2　第14号溝跡遺物出土状況（３）
3　第14号溝跡遺物出土状況（４）
図版46　1　第32号溝跡
2　第32号溝跡遺物出土状況（１）
3　第32号溝跡遺物出土状況（２）
図版47　1　第38・39号溝跡
2　第43号溝跡
3　第48号溝跡遺物出土状況（１）
図版48　1　第48号溝跡遺物出土状況（２）
2　遺物集中
3　遺物集中遺物出土状況
図版49　1　第１号周溝状遺構
2・4・5・6　第２号周溝状遺構
3・7　第３号周溝状遺構
図版50　1・5　第１号周溝状遺構
2　第２号周溝状遺構
3・4・6・7　第３号周溝状遺構
図版51　1　第３号溝跡
2・3　第32号溝跡
4・5　遺物集中
6　表採
7　第１号周溝状遺構

8　第２号周溝状遺構
図版52　1・4　第３号周溝状遺構
2・3　第１号周溝状遺構
5　第３号溝跡
6　遺物集中
図版53　1　第２号井戸跡
2　第15号井戸跡
3・7　第２号溝跡
4　第８号溝跡
5　第25号溝跡
6　第14号溝跡
8　第16号溝跡
9　第25号井戸跡
図版54　1・3・4・6　第２号溝跡
2　第１号溝跡
5・7・8　第14号溝跡
図版55　1　第１号井戸跡
2　第25号井戸跡
3　第35号井戸跡
4～6　第１号溝跡
7～9　第２号溝跡
10　第25号溝跡
図版56　1・2　第14号溝跡
3　第14号井戸跡
4　第７号溝跡
5　第１号溝跡
6　第２号溝跡
図版57　1　第８号溝跡
2　第14号溝跡
3　第７号溝跡
4　第１号溝跡
5　第２号溝跡
6　第11号溝跡
図版58　1　第14号溝跡
2　第１・24号溝跡
3・4　第３号土壙
5　第２・13号土壙
図版59　1　第27号土壙
2　第１号集石土壙
3　グリッド出土遺物
図版60　1　第５・14・25・44号井戸跡
2　第１号溝跡
3　第２号溝跡
図版61　1　第２・６号溝跡
2　第14号溝跡
3　第16・23・24号溝跡
図版62　1　第25号溝跡
2　第32号溝跡
3　グリッド・表採
図版63　1　第２号掘立柱建物跡ピット２
2・3　第４号掘立柱建物跡ピット７
4　第８号掘立柱建物跡ピット10
5・7　第14号井戸跡
6・8　第22号井戸跡
図版64　1～4　第29号井戸跡
5　第８号土壙
6　第１号溝跡
図版65　1・3　第１号溝跡
2・4　第２号溝跡
図版66　1・2　第11号溝跡
3～6　第14号溝跡
図版67　1～4　第14号溝跡
図版68　1～7　第14号溝跡
8　平沼一丁田遺跡出土種実
図版69　1　石製品
2　古銭
3　鉄製品

Ⅳ　平沼一丁田遺跡の調査

１．遺跡の概要

平沼一丁田遺跡は、比企郡川島町大字平沼1341－7番地他に所在し、川島町役場の北西約１㎞に位置している。

遺跡は、平沼付近から東西方向に馬の背状に延びる幅の狭い自然堤防の西端に位置している。自然堤防は平沼付近で２条並行して認められ、東側約１㎞に位置する対岸の自然堤防には、白井沼遺跡がある。

堆積状況の土層断面図を第89図に示した。上面の土を取り除くと黄褐色の土となり、この層で遺構確認を行った。直上にある第Ⅵ層の土を含む土壙及び集石土壙から縄文時代中期の土器が出土しており、当遺跡が乗る自然堤防が中期にはすでに形成されていたことが分かる。この傾向は同一の形成と考えられる自然堤防の、対岸に位置する白井沼遺跡にも認めることが出来る。

第Ⅰ・Ⅱ層は近世に相当し、第Ⅰ層中には天明三（1783）年の浅間山噴火に伴う浅間Ａ火山灰が混入している。第Ⅲ層・第Ⅳ層は古代から中世期に堆積したものと推測される。

第Ⅴ層は古墳時代に相当する。10～20㎝の幅で堆積する黒色あるいは黒褐色を主体とする土層の中からは古墳時代前期の遺物が出土している。この層は後世の撹乱を一部受けつつも調査区全域で認められ、土層観察では緩やかに西から東へと傾斜しながら調査区外の谷へと続いている。

確認面よりも下層では再堆積ロームによって形成される粘土質の第Ⅶ層があり、さらに下層は砂層となる。

遺跡が所在する自然堤防は、馬の背状となっているため、東西100mと狭い範囲である。調査はこの自然堤防を横切る形で行ったため、調査区内の標高は中央よりやや西側が最も高く、東に行くに従い低くなる。

遺構の方向は、概ねＮ－40～50°－Ｗに傾いている。この傾向は時期を問わず認められることから、おそらくは自然地形が反映されたものと推定される。

平沼一丁田遺跡は、首都圏中央連絡自動車道建設に伴って調査を行い、縄文時代から近世に至るまでの遺構・遺物を検出した。遺構の時期は概ね縄文時代中期、古墳時代前期、中・近世の３時期に分けることが出来る。

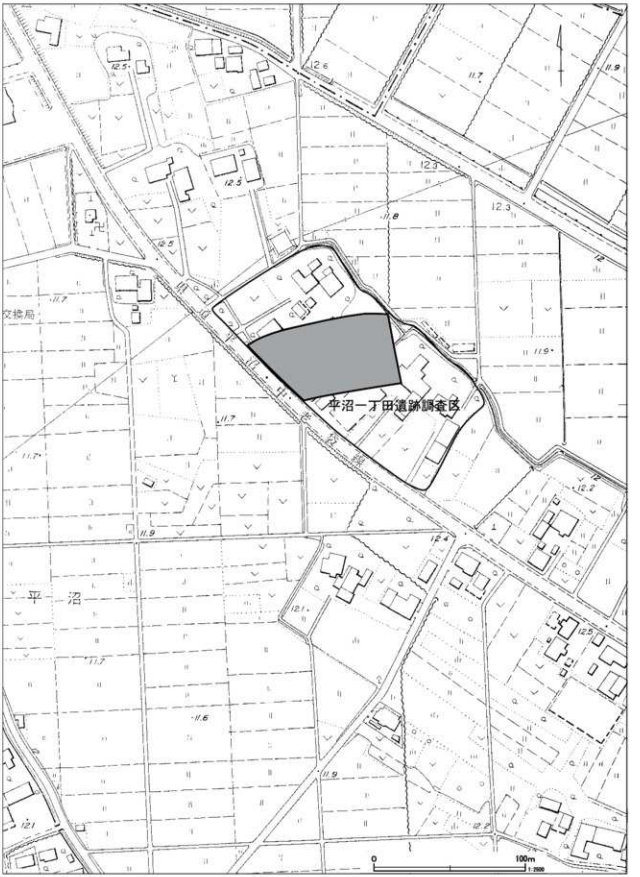
検出した遺構は、掘立柱建物跡14棟、柱穴列２条、周溝状遺構３基、井戸跡49基、土壙58基、集石土壙１基、火葬土壙２基、溝跡59条である。

縄文時代の遺構は土壙１基、集石土壙１基である。第27号土壙からは縄文時代中期後葉の深鉢形土器が出土している。第１号集石土壙からは大量の礫とともに縄文土器、石器が出土している。調査区内では住居跡を検出出来なかったが、周辺に存在している可能性が考えられる。

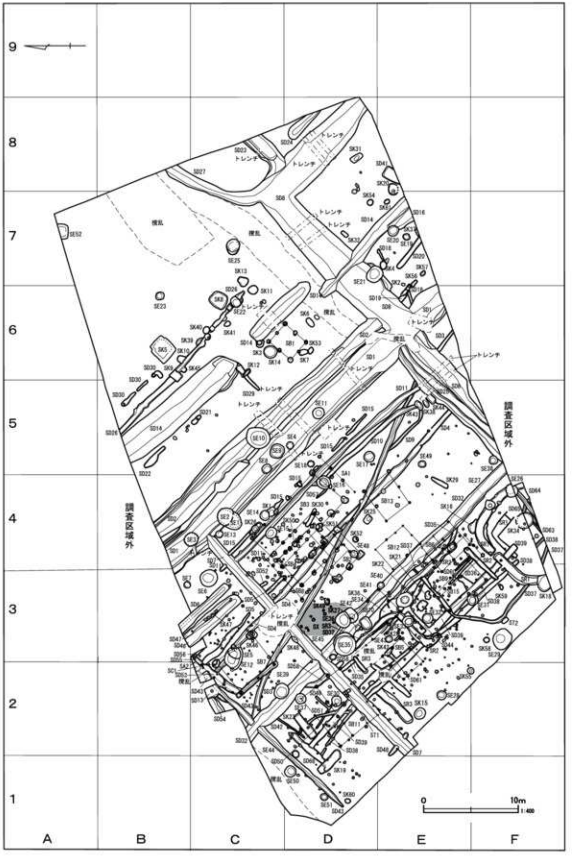
次に集落が形成されるのは古墳時代前期である。発見された遺構は、掘立柱建物跡２棟、周溝状遺構３基、土壙５基、溝跡４条である。掘立柱建物跡は２棟とも桁行２間、梁行１間で、第２号掘立柱建物跡では、沈下防止のための礎板が認められた。第７号掘立柱建物跡は、桁行の片側が布掘りになっており、この基礎工事を行っている同期の建物跡は県内初例である。

周溝状遺構は近年、東海地方東部や北陸地方の低地遺跡で検出される住居跡との類似性が指摘されている。近隣の遺跡では対岸の白井沼遺跡や圏央道建設に伴い発掘調査が行われた富田後遺跡、元宿遺跡においても発見されている。

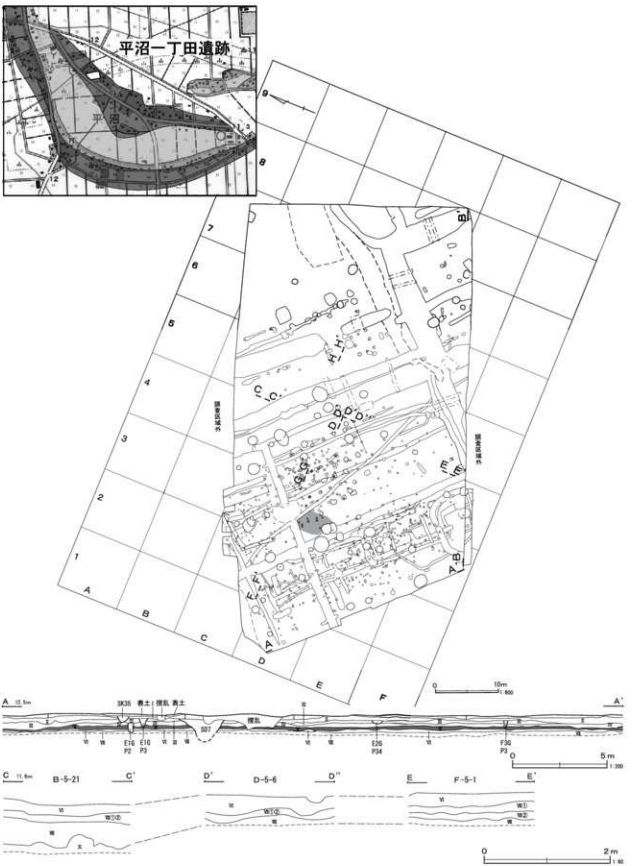
中・近世は、大きく２つの時期に分けられ、第７号溝跡、第４・８号掘立柱建物跡、第14号井戸跡が中世に該当するものと考えられる。第８号掘



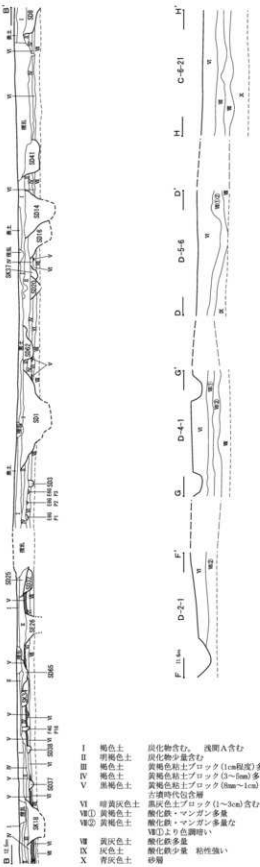
第87図　平沼一丁田遺跡調査地点位置図



第88図　調査区全測図


平沼一丁田遺跡
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
SK35 焼土 撹乱 焼土
撹乱
E16 P2
E16 P3
E26 P34
F36 P3
B-5-21
D-5-6
F-5-1
0 10m 1:600
0 5m 1:200
0 2m 1:80

第89図　基本層序



立柱建物跡は、南と東に廂を持つ建物跡であると考えた。当該期の建物跡は少ないが、他の建物跡とも関連してくることが推測出来る。建物跡の周辺には、井戸跡及び溝跡が分布している。

近世では調査区を二分する様に第１・２号溝跡が縦断している。溝跡よりも西側では遺構が密に分布し、対して東側では遺構の分布は希薄となる。２条の溝跡は重複し、掘り直しを行っている。その東側には溝が一旦途切れる第14号溝跡が位置し、土橋の両側からは木製品や伐採木が出土している。また、南東に位置する第８号溝跡は、L字に曲がりながら調査区外へと延びることから、第１・２号溝跡とは異なる区画が存在することが予想される。

掘立柱建物跡は桁行５間、梁行２間の大型のものから、桁行２間の小型のものを検出した。そのほとんどが側柱建物跡であるが、第６号掘立柱建物跡のように床束を有する建物跡も検出している。

井戸跡は48基あり、分布が建物跡に隣接することから当該期のものがほとんどであったものと思われる。確認面から約１mほど掘削すると水が湧き出し、この地域の水位の高さを物語る。

このように、平沼一丁田遺跡で発見された遺構・遺物は縄文時代中期から近世に至るまでの幅の広いものであるが、検出された遺構の時期は連続したものではない。しかし、調査区が自然堤防を横断するように設定されているため、遺跡の乗る自然堤防の一部を調査したにすぎない。本報告の遺構も調査区外に延びるものが多く存在し、それらとともに、検出していない時期の遺構・遺物が発見される可能性は高いものと考えられる。

なお、木製品については遺物観察表を設けていないが、「５.自然科学分析・保存処理」の樹種同定に平沼一丁田遺跡出土木材樹種同定結果資料として詳しい情報を一括で掲載している。

2．縄文時代の遺構と遺物

平沼一丁田遺跡から、縄文時代の遺構は土壙と集石土壙が各１基検出された。遺構は、古墳時代前期に相当する基本土層第Ⅴ層直下にあるⅥ層の黄灰褐色土層内より検出された。縄文時代の包含層など、明確な確認面は検出されなかった。遺構は調査区の西側から検出され、古墳時代前期の遺構の検出域と重なっており、自然堤防の一番高い場所が利用されていたと考えられる。

検出された遺物から、時期は縄文時代中期であるが、土壙からは加曽利ＥⅠ式土器、集石土壙からは勝坂式土器が検出されており、遺構には時期差があることが確認された。

（1）土壙

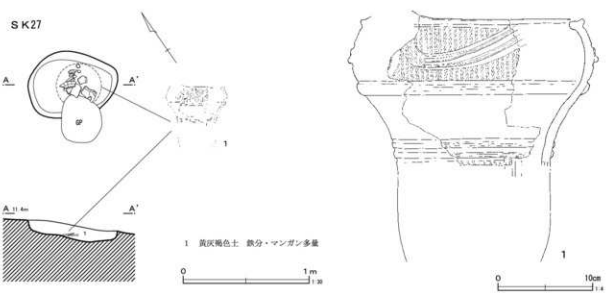
第27号土壙（第90図）

Ｄ－３グリッドに位置する。北東側半分が第32号溝跡と重複し、南西側の一部がグリッドピットと重複している。残存している部分で、平面形は楕円形で、長径0.70ｍ、短径0.53ｍ、深さ0.18ｍである。

遺物は土壙の中央から検出された。同一個体の破片が検出されたことから、埋甕であった可能性が考えられる。また土器は裏側を向いて検出されており、上半分は後世の掘削によって失われたと考えられる。

１はキャリパー系の深鉢形土器である。口縁部から頸部、胴部の一部が検出された。口縁部には把手が作り出される。検出時は把手部の一部が残存していたが、風化が著しく復元することができなかった。口唇部はやや広い面を持つもので、中央部には溝状の凹みを巡らしている。口唇部直下には沈線を１本巡らしている。口縁部は隆帯で文様を施文するもので、隆帯は１本の隆帯を沈線で２本に分割し、隆帯の両側には沈線を沿わして施文している。文様は波頂部で渦巻き状となると考えられる。口縁部と胴部は１本隆帯によって区画し、隆帯の上側には１本の沈線を巡らしている。頸部は無文帯を持ち、胴部とは両側に沈線を沿わせる２本の隆帯によって区画している。残存部分には、胴部に２本１組の隆帯を垂下させている。地文は撚糸文Ｌを、口縁部、胴部ともに縦方向に施文している。

遺物の時期は中期後葉の加曽利ＥⅠ式の新段階であると考えられる。



第90図　第27号土壙・出土遺物

（2）集石土壙

第１号集石土壙（第91・92図）

Ｃ－２・３グリッドに位置する。北側の一部が調査区域外となっている。遺構の上部分は重複する第56号溝跡のため失われている。残存部から、平面形は円形と考えられる。残存する長径1.03ｍ、短径0.74ｍ、深さ0.15ｍである。

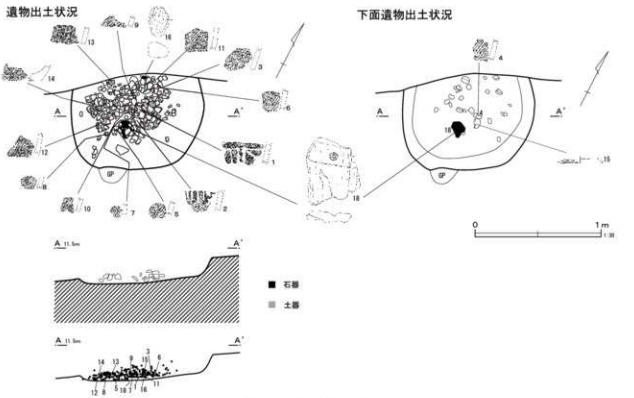
覆土中から焼礫は401点が検出された。土器片は15点検出された。焼礫の総数は接合作業の結果、329点となった。ほとんどが破砕されており、礫の原形の長さが復元できるものは11点のみであった。11点のうち、長さ８～９㎝が５点、６～７㎝が４点で、３㎝大が１点、５㎝大が１点であった。他の破砕した焼礫も10㎝を超えるものはなく、破砕前の焼礫は概ね10㎝以内の大きさであったと考えられる。

石質は326点中、チャート264点（80.2%）、砂岩40点（12.2%）、結晶片岩（結晶片岩など含む）23点（７%）、石英２点（0.6%）である。焼礫の総重量は12344.96ｇで、チャート9321.26ｇ（75.5%）、砂岩1753.8ｇ（14.2%）、結晶片岩1259.3ｇ（10.2%）、石英10.6ｇ（0.1%）である。

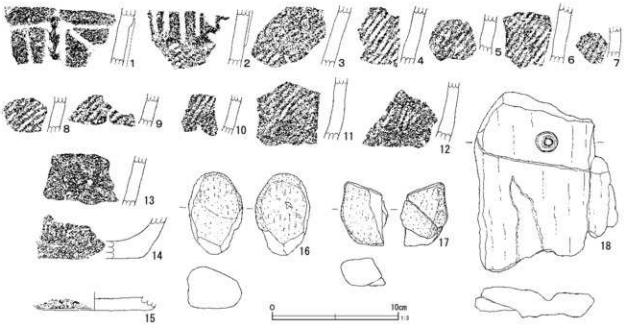
第92図１～18は、検出された遺物で、焼礫に転用された石器や、土器片である。

１～15は検出された深鉢形土器の破片である。いずれも風化が著しい。土器の検出状況は、焼礫と混在していることから、一緒に廃棄されたものと考えられる。

１・２は円筒形の深鉢形土器の文様帯部分である。１は口縁部に無文帯を持つ。文様は隆帯を懸垂させて縦位に分割し、その間の区画に沈線文を施文している。隆帯上には矢羽根状の刻みが施されている。２は文様帯の下端部分で、１と同様に器面を隆帯で区画し、区画内には沈線文を施文している。隆帯上には矢羽根状に刻みが施される。胴下半部は地文が施文される。風化のため明確ではないが、単節または０段多条のＲＬの縄文を縦方向に施文している。３～12は胴下半部の地文の



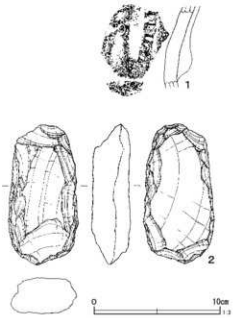
第91図　第１号集石土壙



第92図　第１号集石土壙出土遺物

みが施文される破片である。器面は風化が著しく、４・５・８・９は０段多条のＲＬの縄文で、他は０段多条あるいは単節のＲＬの縄文であると考えられる。地文は縦方向に施文している。13は無文の胴部の破片である。14・15は底部の破片である。検出された遺物の時期は勝坂式の終末である。

16～18は石器である。16・17は磨石で、17は被熱のため表面が赤化している。16は長さ6.50㎝、幅4.30㎝、厚さ3.35㎝、重さ107.1ｇである。石質は砂岩である。17は長さ5.05㎝、幅3.75㎝、厚さ2.30㎝、重さ46.4ｇである。石質は砂岩である。18は底面直上から検出された石皿の破片である。器面は被熱のため赤化している。表面には凹部が１ケ所残存している。残存する長さ14.35㎝、幅11.30㎝、厚さ2.60㎝、重さ349.0ｇである。石質は緑泥片岩である。



第93図　グリッド出土遺物

（３）グリッド出土遺物

出土土器（第93図１）

１は第32号溝跡内から検出されたもので、グリッドではＤ－１にあたる。円筒形の深鉢形土器の、胴部上半の文様帯部分の破片である。隆帯を懸垂させるもので、隆帯上には刻みが施されている。時期は勝坂式の終末である。

出土石器（第93図２）

２は調査区の東端部のＣ－８グリッドから検出されたもので、打製石斧である。長さ11.15㎝、幅5.60㎝、厚さ3.05㎝、重さ299.2ｇである。石質は緑泥片岩である。

3．古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は掘立柱建物跡２棟、周溝状遺構３基、土壙５基、溝跡４条を検出した。これらは主に遺物の出土状態から古墳時代と判断したものであるが、遺物の出土が無くとも覆土から当該期としたものも含む。逆に遺物の出土が無く、当該期に含まなかったものもあり、遺構の密度は更に増える可能性がある。

遺構の分布は、Ｃ－２・３、Ｄ－１～５、Ｅ－２～６、Ｆ－３～５グリッドというように調査区西側に分布し、馬の背状の自然堤防上で最も高い場所を利用している。

西側は現道を挟んで急激に落ち込み、東側はなだらかに傾斜しているため、遺構の東西の分布範囲は非常に狭かったものと考えられる。各遺構は南北に疎らに分布しながら調査区外へと延びて行くため、遺跡は更に南北に広がることが推測される。

第２・７号掘立柱建物跡と第３号溝跡、第１号周溝状遺構と第16号土壙のように、重複している場所があるが、遺物の年代に開きは認められない。短期間に営まれた集落の中で、集落の形成期に関わる前後関係か、あるいは同時併存していたものと考えられる。

第32号溝跡を中心として、東側が掘立柱建物跡、西側が周溝状遺構及び土壙という配置になっており、それぞれの遺構ごとに異なった機能を持ち、用途別に選地する場所を使い分けていたことが推測される。

遺構の覆土は黒灰色土を主体とするものが多く、他の時期に掘削された遺構に比べて黒色が強い傾向があった。

遺物の出土は、壺・甕類が主体で、高坏も少量出土している。これらは破片での出土が多く、接合率も悪かった。その為、図示出来ない遺物が多く存在する。図示出来なかったものは、遺構ごとに重さを計測して記載した。

ピットに関しては当該期に含まれるものもあろうが、検出したピットが多数であること、遺物の出土がほとんど無いということから、これらの時期を特定することが難しいと判断した。なお、ピットは一括でピット群として中・近世の項において記載している。

（１）掘立柱建物跡

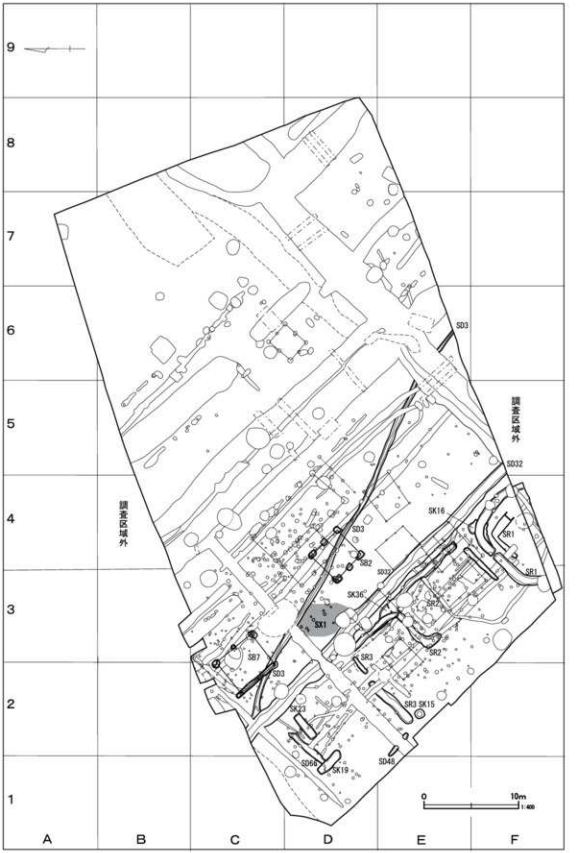
調査区西部で２棟の掘立柱建物跡を検出した。２棟とも調査区で最も高い場所に位置し、主軸方位は概ね揃う。

主軸方位の一致は自然堤防の規制を受けているためと考えられるが、両者に並行して南北に延びる第32号溝跡の軸方向に影響を受けている可能性もある。また、掘立柱建物跡はこの溝跡を挟んで東側に選地しており、周溝状遺構とは別の機能があったものと推測される。

２棟とも構築材の一部を検出し、第２号掘立柱建物跡で沈下防止の為の礎板を、第７号掘立柱建物跡で柱材の一部を検出した。

第７号掘立柱建物跡は桁行の片側を布掘りしており、第２号掘立柱建物跡の礎板とともに基礎工事を施した上で建物の建設を開始しているものと考えられる。

掘立柱建物跡は掘削する面積が少なく、掘形には柱が入る。そのため、遺物の混入する時期がごく短い時間に限られてしまい、遺物はほとんど出土しない特徴がある。この２棟も遺物の出土はほとんど無く、僅かに第７号掘立柱建物跡で小片が出土したにすぎない。

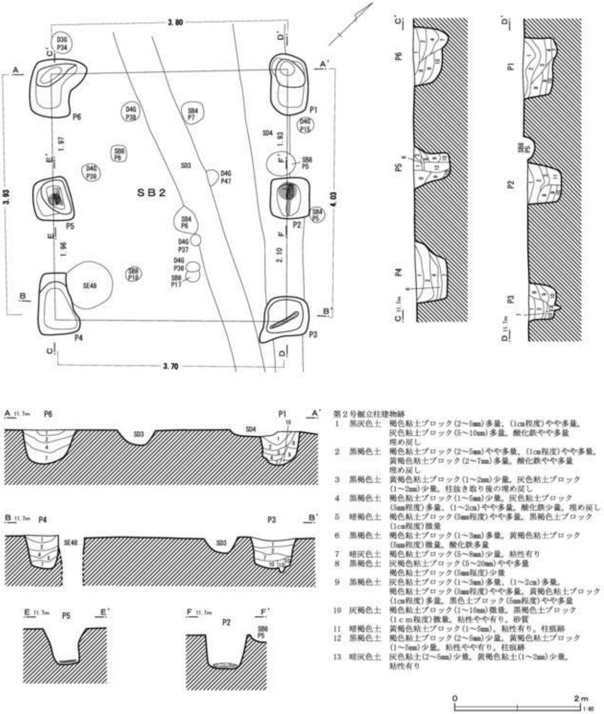


第94図　古墳時代遺構配置図

第２号掘立柱建物跡（第95図）

Ｄ－３・４グリッドに位置し、第４・８号掘立柱建物跡と重複するが柱穴相互の切り合いは無い。平面観察及び断面観察により、第48号井戸跡よりも古い。第３・４号溝跡との前後関係は不明である。

桁行２間、梁行１間の側柱建物跡である。規模は、桁行3.98m、梁行3.75m、平面積は14.93㎡である。柱間距離は桁行Pit１－Pit２間が1.93m、Pit２－Pit３間が2.10m、Pit４－Pit５間1.96m、Pit５－Pit６間1.97m、梁行がPit１－Pit６間3.80m 、



第95図　第２号掘立柱建物跡

Pit 3 －Pit 4 間3.70m、平均で桁行1.99m、梁行3.75mである。柱掘形は隅丸の方形を呈し、隅柱はややいびつなL字を呈す。長径0.97m、短径0.64m、確認面からの深さ51.5cmである。掘形底面のレベルは一定である。主軸の方位はN－44°－Wを指す。

Pit 5の土層断面には柱痕跡が認められ、その下方から柱の沈下防止のための礎板を検出した。礎板はPit 2からも同様に出土している。礎板は柱を受ける部分に平坦な面が来るように据えられていた。Pit 3ではゼリー状に腐食した礎板が遺存しており、他の柱穴にも礎板が存在していた可能性がある。

出土遺物はPit 2・5から礎板が出土している。第96図1はPit 2の出土で、みかん割の部材である。残存長の長辺〔35.6〕cm、短辺6.7cm、厚さ5.4cmである。2はPit 5の出土で残存長の長辺〔24.7〕cm、短辺4.8cm、厚さ2.9cm、木取りは柾目である。3はPit 5の出土で残存長の長辺〔18.8〕cm、短辺4.1cm、厚さ2.9cm柾目である。

覆土から古墳時代の遺構と判断した。

第７号掘立柱建物跡（第97図）

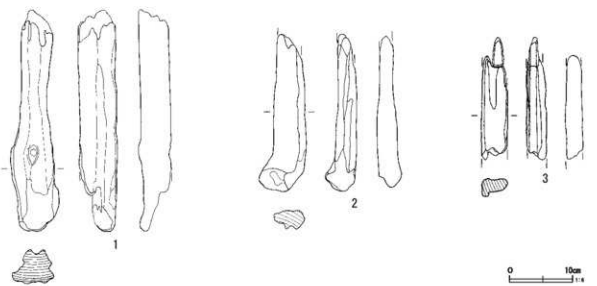
C－2・3グリッドに位置し、第３号溝跡よりも古く、第５・12号井戸跡、第３・４・53号溝跡と重複するが前後関係は不明である。

桁行２間、梁行１間の側柱建物跡である。調査区北端で検出した。さらに北に続く可能性が考えられたため調査区を拡張し、平面観察を行ったが柱穴は確認できなかった。桁行の西側列は柱痕跡を確認出来たが、東側列は抜き取りを受けているため、柱痕跡を確認することは出来なかった。

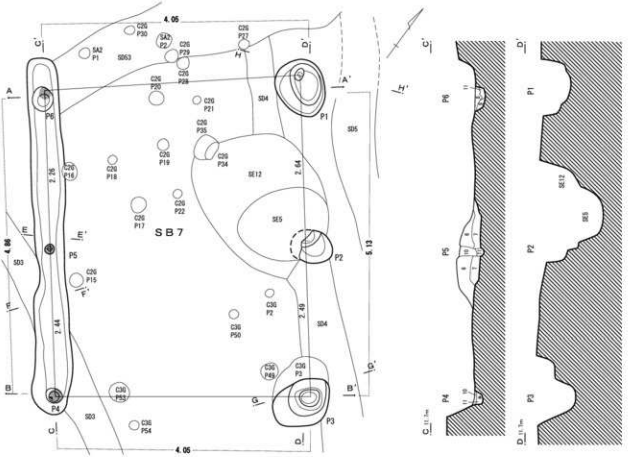
規模は、桁行５m、梁行4.05m、平面積は20.25㎡である。柱間距離は桁行Pit 1 －Pit 2 間が2.64m、Pit 2 －Pit 3 間が2.49m、Pit 4 －Pit5間2.44m、Pit 5 －Pit 6 間2.26m、梁行がPit 1 －Pit 6 間4.05m 、Pit 3 －Pit 4 間4.05m、平均は桁行2.46m、梁行4.05mを測る。

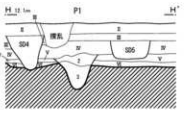
柱掘形は楕円形を呈し、長径0.93m、短径0.15m、確認面からの深さ56.5cmである。主軸の方位はN－39°－Wを指す。

桁行き西側列は溝を掘削した後に立柱する布掘りの基礎地業が行われている。布掘りの規模は溝



第96図　第２号掘立柱建物跡出土遺物

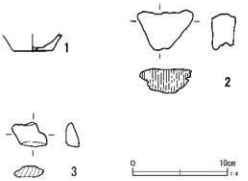




第7号掘立柱建物跡

1	黒褐色土	褐色粘土ブロック(1～2mm)少量。黄褐色粘土ブロック(1mm程度)やや多量。酸化鉄少量
2	黒褐色土	褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量。黄褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量。酸化鉄多量
3	暗褐色土	褐色粘土ブロック(2～5mm)多量。黄灰色粘土ブロック(2～3mm)多量。(1～1.5cm)やや多量。酸化鉄多量
4	黄灰色土	黒色土ブロック(5mm程度)やや多量。褐色粘土ブロック(2～5mm)やや多量。酸化鉄やや多量
5	黒褐色土	褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。黄褐色粘土ブロック(1～2cm)多量
6	にぶい黄橙色土	黒褐色土ブロック(1～5mm)やや多量。(1cm程度)少量。酸化鉄やや多量。粘性やや有り
7	にぶい黄橙色土	黒褐色土ブロック(1～5mm)少量。粘性やや有り
8	黒色土	黄褐色粘土ブロック(5～7mm)やや多量。褐色粘土ブロック(1～2mm)微量
9	黒褐色土	灰白色粘土ブロック(1cm程度)やや多量。褐色粘土ブロック(1mm程度)やや多量
10	黒褐色土	黄褐色粘土ブロック(1～3mm)少量。酸化鉄やや多量。柱痕跡
11	灰褐色土	黄褐色粘土ブロック(1～2mm)微量。柱痕跡

第97図　第7号掘立柱建物跡



第98図　第７号掘立柱建物跡出土遺物

幅0.55m、確認面からの深さ41.65cmである。Pit５では土層観察の結果柱痕跡が認められ、粘性の高い黒褐色土中には腐食した柱材が散在していた。

出土遺物は、Pit３から土師器小片が、Pit４（第98図２）・５（第98図３）から柱材の一部が出土している。第98図１はミニチュア土器の小片である。器面は風化が激しく、調整方法を確認する事が出来なかった。２は柱材の一部である。残存長の長辺〔3.9〕cm、短辺〔5.4〕cm、厚さ〔2.6〕cm、柾目である。３は柱材で、残存長の長辺〔2.6〕cm、短辺〔3.1〕cm、厚さ〔1.2〕cm、柾目である。

覆土及び調査区壁面における土層観察から古墳時代と判断した。

第19表　第７号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第98図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	ミニチュア	―	[1.8]	(4.0)	40	C・E・G・H	普通	橙	P3	

（２）周溝状遺構

調査区西部で３基の周溝状遺構を検出した。調査を南側から行ったため、南側から第１号周溝状遺構と呼称し、順次北側に番号を振り分けていった。

北西側には周溝状遺構が認められないが、深度の浅い周溝が表土除去時に削平されてしまい、深度の深い部分が土壙及び溝跡として捉えられている可能性も考えられる。

３基の平面形は長方形ないし隅丸方形を呈すが、四辺の中で溝の周わらない一辺があり、ここが開口部に当たるものと考えられる。

第１号周溝状遺構以外の２基は開口部が西側を向き、第１号周溝状遺構は南側に存在しているものと推測される。溝の角に当たる位置や、一辺が部分的に途切れており、周溝が全周するものは認められなかった。

それぞれの周溝状遺構は大きく重複はしておらず、互いの位置関係が意識されていたものと考えられる。また、その影響により３基の軸方向は概ね一致している。

３基はいずれも第32号溝跡の西側に隣接して掘削されており、それを越えて東側に展開するものは無かった。

遺物は開口部からの出土が多く、いずれも完形のものは出土せず、破片が多い事が共通する。

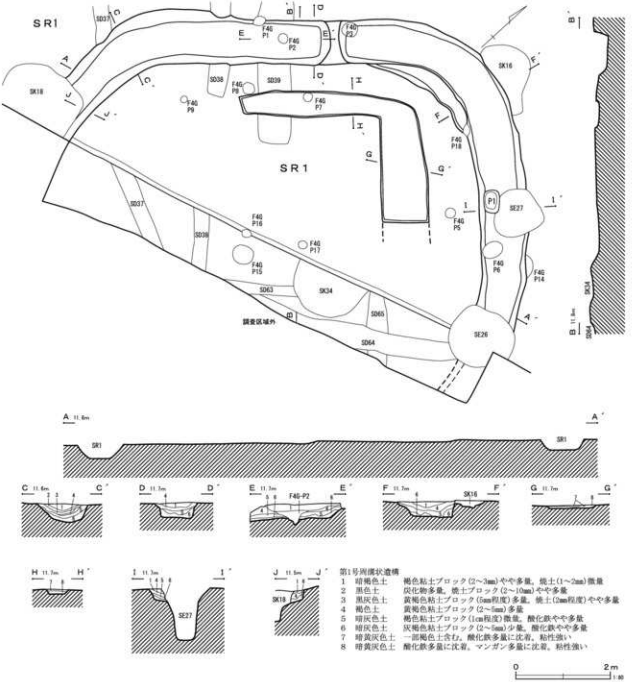
なお、周溝に囲われた空間地には、遺構に伴うPitが存在する可能性がある。しかし、他の時期に属すPitが多量に存在していたため、一部のPitを除き、直接遺構に伴うものとしては取り扱わなかった。

第１号周溝状遺構（第99・100図）

F－３・４グリッドに位置する。第26・27号井戸跡、第16・18号土壙、第38・39号溝跡と重複し、第16号土壙よりも新しく、他の遺構よりも古い。

溝幅が狭いこと、周溝の深さが無いこと、遺物の完形率の低さなどから、周溝状遺構とした。

隅丸方形に周る周溝は、調査区外に延びており、全てを調査することはできなかった。また、開口部は発見できず、調査区外に存在するものと推定



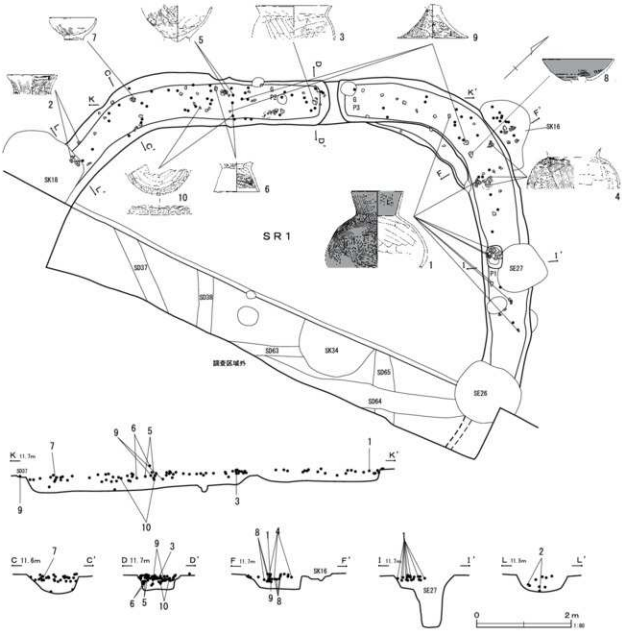
第99図　第１号周溝状遺構

される。北辺ではブリッジ状の高まりが認められたが用途等は不明である。

周溝に囲われた内法の規模は、長軸8.38m、短軸3.92mである。この中には幅約60cm、深さ８cmの落ち込みがL字状に認められた。用途は不明で、調査区壁面における土層観察においても捉えることは出来なかった。いずれにしても周溝に添ってL字に屈曲しており、遺構に伴うものである可能性が高いものと考えられる。

周溝の幅は0.9～1.2m、確認面からの深さ0.31mを測り、主軸方位はN－45°－Wを指す。

断面の形状は逆台形で、底面からやや斜めに立ち上がる。覆土は明度の暗い土を主体とし、西側のC－C´第２層には、炭化物を多量に含む黒色



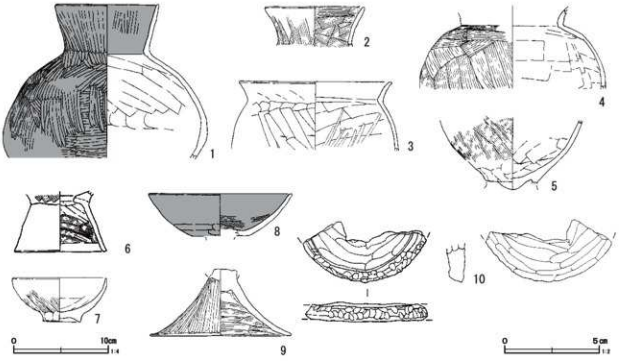
第100図　第１号周溝状遺構遺物出土状況

土の中に、焼土ブロックがやや多量に混入していた。

遺物の出土位置は周溝全面で出土しているが、破片での出土が多く、接合し図示出来たものは僅かであった。出土した高さは、ほとんどが４層よりも上面からの出土である。また、西辺では遺物と共に焼土塊が出土している。その下層に位置する５・６層からは植物性の酸化土を検出している。

出土遺物は壺、甕、台付甕の脚部、高坏、鉢、土製品が出土している。

第101図１・２は壺で、１は表面の劣化が激しく調整の痕跡を捉えにくいが、赤彩が疎らに残る。横への磨きの後に縦方向への磨きを行っている。周溝底面から20.4cmの高さで出土した。３～５は



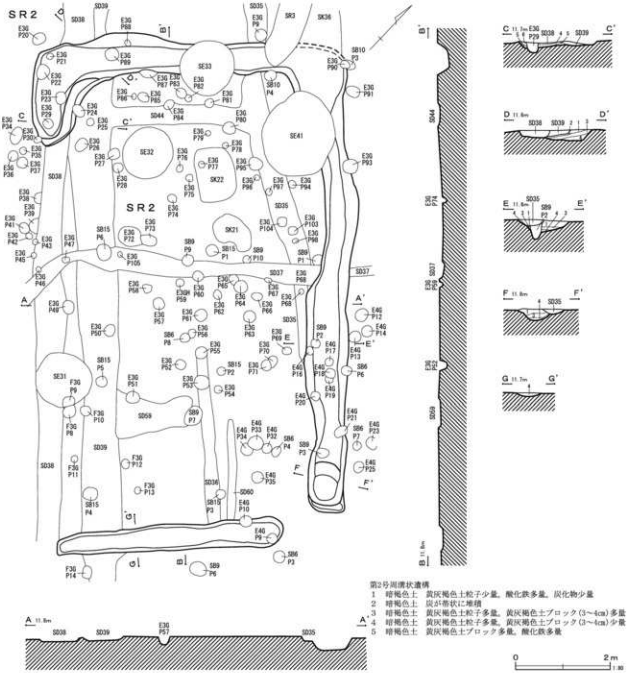
第101図　第１号周溝状遺構出土遺物

第20 表　第１号周溝状遺構出土遺物観察表（第101 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考		図版
1	土師器	壺	(10.7)	[17.0]	―	70	H・I・G	普通	にぶい橙	赤彩		49 - 1
2	土師器	壺	(10.4)	[4.2]	―	50	H・I・E	普通	にぶい橙			
3	土師器	甕	(15.8)	[7.3]	―	20	C・G・H	普通	橙	外面黒斑		
4	土師器	甕	―	[8.7]	―	20	C・E・H・I・L	普通	明赤褐	外面黒斑		50 - 1
5	土師器	甕	―	[7.6]	―	70	C・E・H・L	普通	明赤褐			
6	土師器	台付甕	―	[6.3]	(9.6)	30	A・C・E・H・I	普通	明赤褐			50 - 5
7	土師器	鉢	(9.8)	[4.7]	3.9	60	A・C・E・H	普通	橙			52 - 3
8	土師器	高坏	(15.0)	[4.5]	―	40	E・G・H・L	普通	明赤褐	赤彩		
9	土師器	高坏	―	[7.1]	(14.8)	80	C・G・H・I	普通	黒褐	赤彩の痕跡		51 - 7
10	土師器	土製品	径(6.0)cm 厚さ0.9cm 重さ17.0 g				E・H・I	普通	黒褐			52 - 2

甕で、台付甕の上部と思われる。それぞれ周溝底面から、３が23.2㎝、４が24.5㎝、５が27.2㎝で、５に接合した別の破片が32.2㎝の高さから出土している。７は小型の鉢で、底部には高台状に摘み上げている。出土した高さは周溝底面から17.7㎝である。８・９は高坏で、胎土の組成から、同一個体の可能性があるが、接合出来なかった。８は内外面を赤彩している。出土した高さは、８が周溝底面から17.7㎝、９が17.2㎝、これに接合した破片が28.4㎝の位置からの出土である。10は用途不明の土製品で、表・裏ともに磨いている。また、側面には無数の刻目が２段ある。下方の１列を左回りに行い、続いて上部を左回りに行っている。これらは、磨きに使用した工具によって行われたものと考えられる。出土した高さは、溝底面から24.8～29.4㎝の高さである。

他は土師器小片が出土しているが図示出来なかった。総重量1691.4g出土している。



第102図　第２号周溝状遺構

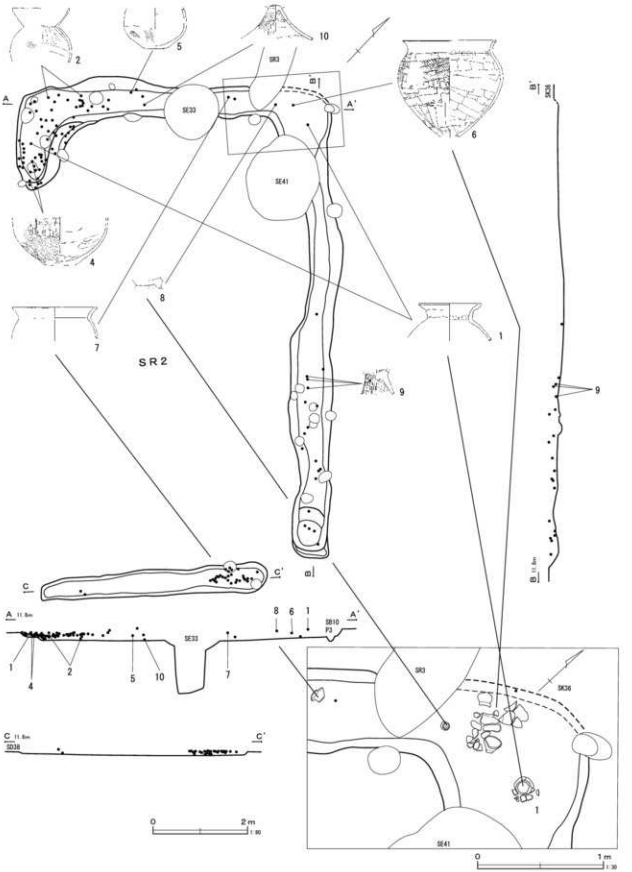
第２号周溝状遺構（第102・103図）

E－３・４、F－３・４グリッドに位置する。第36号土壙、第33・41号井戸跡、第35～39・60号溝跡と重複する。第３号周溝状遺構と一部重複するが新旧関係は不明である。あるいは同時に併存していた可能性も考えられる。

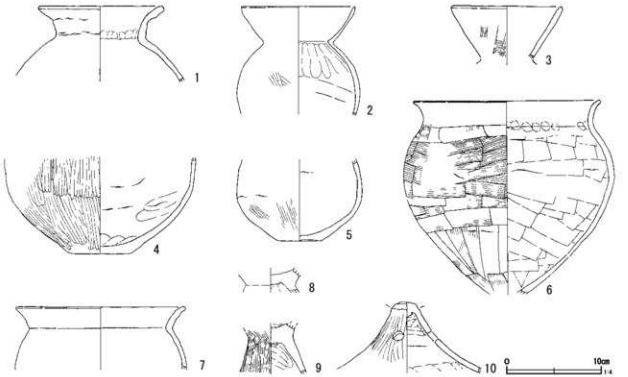
開口部は西側を向き、周溝の形状は開口部方向から見て長方形の形状である。南西隅では一部溝が途切れる。

周溝に囲われた内法の規模は、長軸9.32m、短軸5.21m、溝幅0.53～1.30m、確認面からの深さ0.16mを測る。開口部の溝幅は0.85m、深さ0.07mである。主軸方位はN－45°－Wを指す。

遺物の集中は開口部付近で最も多く出土してい



第103図　第２号周溝状遺構遺物出土状況



第104図　第２号周溝状遺構出土遺物

第21表　第２号周溝状遺構出土遺物観察表（第104図）

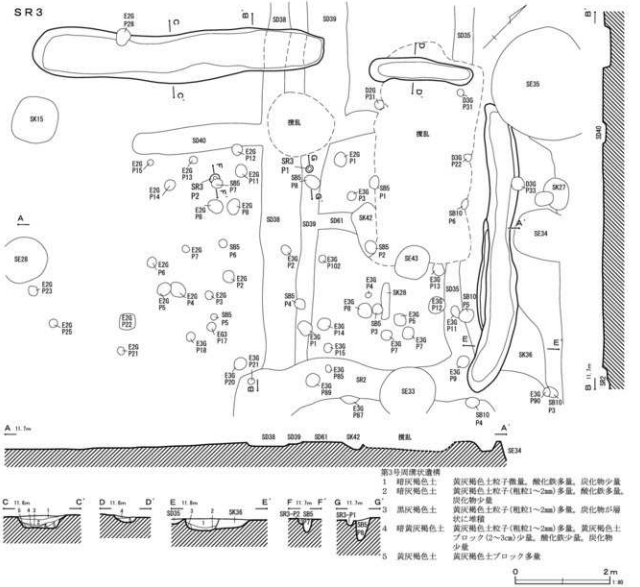
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	壺	12.8	[8.0]	－	80	E・H・I	普通	橙		49・4
2	土師器	壺	(6.0)	[11.5]	－	50	C・E・H・L	普通	橙	赤彩の痕跡	49・2
3	土師器	壺	11.5	[5.5]	－	80	A・C・E・H・I・L	普通	橙		
4	土師器	壺	－	[10.2]	6.2	60	C・E・H・I・L	普通	明赤褐	外面黒斑	49・5
5	土師器	壺	－	[8.6]	4.6	60	E・H・L	普通	橙		49・6
6	土師器	甕	19.8	[20.5]	－	70	A・C・E・H・I・L	普通	明赤褐		50・2
7	土師器	甕	(17.8)	[7.1]	－	20	A・C・E・H・L	普通	橙		
8	土師器	台付甕	－	[2.7]	－	90	A・C・E・H・I・L	普通	明赤褐		
9	土師器	台付甕	－	[5.3]	－	80	E・H・I	普通	明赤褐		
10	土師器	高坏	－	[7.5]	－	80	E・G・H・I・L	普通	橙	円孔3	51・8

る。全て破片での出土であり、接合率も悪い。周溝の底面レベルは浅く、東側では深くなっている。

周溝の断面は、平らな底面から垂直方向に立ち上がる。遺物の出土位置は３～５層であるが、やや底面よりも浮いた状態での出土であった。

出土遺物は土師器壺、甕、高坏の脚部が出土している。

第104図１～５は壺である。１～３が口縁部で、２・３は小型壺である。２は周溝の底面直上のものと床から8.5cmの位置から出土したものが接合した。４・５は底部で、４は縦方向に磨きを右回りに行っている。周溝底面から６～6.5cmの位置で出土した。５は周溝底面からの出土である。６・７は甕の口縁部及び胴部である。６は大きく４段階に分けて成形されている。調整は、縦方向の刷毛調整の後に体部上半を横方向に刷毛調整し、頸部を横方向にナデ調整している。出土した高さは周溝底面から15.6cmの位置である。８・９は台



第105図　第３号周溝状遺構

付甕の脚部である。10は高坏の脚部で胴部は検出出来なかった。出土位置は周溝の底面直上である。

他に小片が多数出土しているが図示出来なかった。総重量1338.0g出土している。

第３号周溝状遺構（第105・106図）

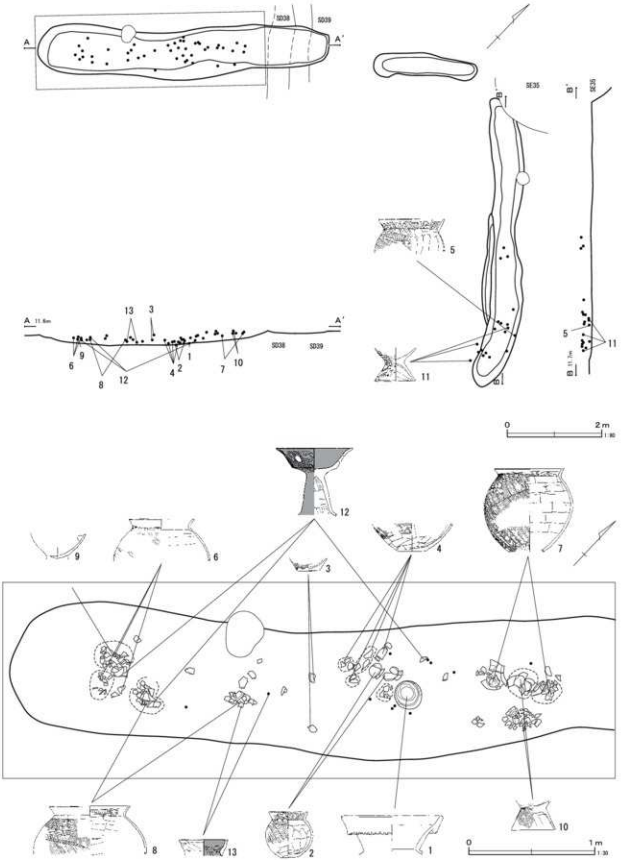
D－２・３グリッド、E－２・３グリッドに位置する。第35号井戸跡、第36号土壙、第35・38・39号溝跡と重複し、全てに切られる。また、第10号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

周溝はL字状を呈して第２号周溝状遺構と連結する。直接的な新旧関係は確認できかなったが、同時併存していた可能性も考えられる。

北辺では、２ヶ所ほど周溝が途切れている。また、周溝の内法で第５号掘立柱建物跡が存在するが、伴うものであるとは言い切れない。

周溝に囲われた内法の規模は、長軸9.42m、短軸6.50m、溝幅0.38～1.05m、確認面からの深さ0.21mを測る。開口部の溝幅は1.05m、深さ0.20mである。方位はN－45°－Wを指す。

周溝の底面は平坦で、土壙等は存在しない。断



第106図　第３号周溝状遺構遺物出土状況

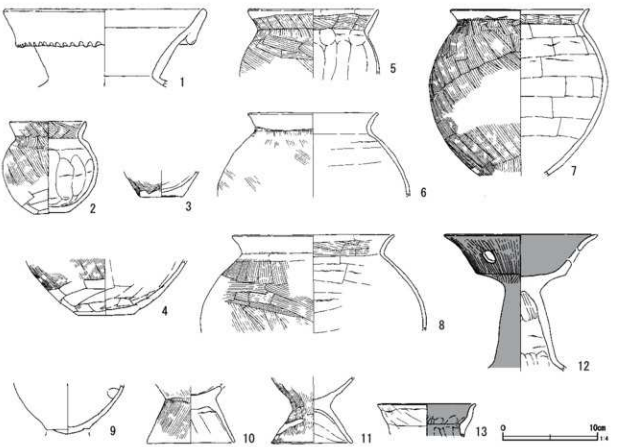
面形は逆台形である。

遺物の出土は北辺の調査区際に集中し、底面直上での出土も多い。第2層から第5層の間で出土し、多くは第2層と第3・4層の間か、第2層中からの出土である。

出土遺物は壺、甕、鉢、高坏が出土している。

第107図1は複合口縁壺の口縁部で、折り返した縁に刻み目を入れている。出土位置は周溝の底面直上である。2は小型の壺で、斜めの刷毛調整を右回りに行い、体部下端を削り調整している。3・4は壺の底部である。4は縦方向の刷毛調整の後に横方向に撫で調整を行っている。底面から2.7～9.8㎝の高さで出土している。5～9は甕である。5は横方向に近い斜めの刷毛調整である。7は斜めの刷毛調整を左回りに行っている。体部は大きく4段階に分けての成形である。内面は横方向の撫で調整を左回りに施す。周溝の底面から9.2～9.7㎝の位置で出土している。8は横方向の刷毛調整である。頸部には、刷毛調整の後に撫で調整を行っている。底面から10.2㎝の高さから出土した。10・11は台付甕の台部で、台部の高さは低い。12は長脚の高坏である。表面の風化が激しく、調整方法を確認しきれなかったが、僅かに磨きの痕跡が残る。透かしは隅丸長方形で長辺1.9㎝、短辺1.6㎝である。脚部内面は指による撫で調整を行っている。破片での出土で、主な出土位置は周溝底面から5.0㎝、14.5㎝の位置である。13は鉢の口縁部で、内面に赤彩の痕跡が僅かに残る。

他に土師器小片が出土しているが図示出来なかった。総重量823.6gである。



第107図　第3号周溝状遺構出土遺物

第22表　第３号周溝状遺構出土遺物観察表（第107図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	壺	20.9	[8.2]	－	100	C・E・G・I	普通	明赤褐	複合口縁	49・7
2	土師器	壺	8.0	9.7	3.7	90	C・E・H・I・L	普通	にぶい橙	外面黒斑	49・3
3	土師器	壺	－	[2.85]	4.6	80	C・E・H・I・L	不良	淡赤橙	外面黒斑	
4	土師器	壺	－	[6.0]	6.0	60	C・E・H・L	普通	橙		
5	土師器	甕	13.9	[7.2]	－	40	A・C・E・H・I	普通	橙		50・4
6	土師器	甕	(13.4)	[8.9]	－	20	G・H・I	普通	明赤褐		
7	土師器	甕	14.4	[18.9]	－	60	B・E・G・H・I	普通	橙		50・3
8	土師器	甕	(17.0)	[10.3]	－	30	C・E・H・I・L	普通	明赤褐		
9	土師器	台付甕	－	[5.45]	－	60	C・G・H・I	普通	赤褐		
10	土師器	台付甕	－	[5.9]	10.2	60	C・E・H・I・J・L	普通	黄褐		50・6
11	土師器	台付甕	－	[7.0]	8.5	80	A・C・E・H・I	普通	橙		50・7
12	土師器	高坏	(8.0)	[14.5]	－	70	C・E・H・I・L	普通	にぶい橙	赤彩	52・1
13	土師器	鉢	(10.2)	[3.5]	－	50	G・H・I	普通	橙	赤彩　外面黒斑	52・4

（３）土壙

５基の土壙を検出した。遺物の出土から当該期と判断したが、出土が無くとも覆土により当期としたものも含んでいる。いずれも調査区西部での検出である。

第15号土壙（第108図）

Ｅ－２グリッドに位置する。掘立柱建物跡の柱掘形の可能性も考えられるが、近隣に対応するピットが認められなかったことから、土壙とした。

平面形は隅丸方形で、検出長は長軸長0.98m、短軸長0.92m、確認面からの深さ0.46mを測る。長軸の方位はN－37°－Wを指す。

断面は逆台形で、立ち上がりは外反する。底面は平坦である。覆土は黒褐色土と黒灰色土を主体とする。３層は他の性質の土の混入で、埋め戻し又は崩落土と考えられる。

遺物は出土していないが覆土の状況から古墳時代と考えた。

第16号土壙（第108図）

Ｅ・Ｆ－４グリッドに位置する。重複する第１号周溝状遺構よりも古い。

平面形は不整形で、検出長は長軸長1.56m、短軸長0.67m、確認面からの深さ0.15mを測る。長軸の方位はN－71°－Wを指す。

断面は逆台形で、立ち上がりは外反する。底面はやや凹凸が目立つ。

出土遺物は全て破片で、底面からやや浮いた位置で出土している。

出土遺物は土師器が２点出土している。第109図１は台付甕の台部で縦ないし斜めの刷毛調整を右回りに施している。２は高坏の脚部から体部にかけての破片で、刷毛調整の後に磨きを施す。内外面は赤彩している。他には、土師器小片が167.6ｇ出土している。

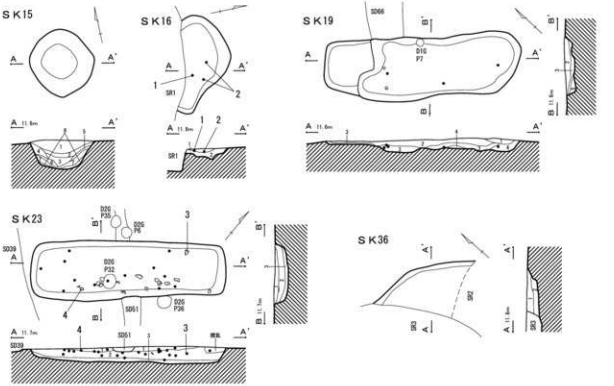
第19号土壙（第108図）

Ｄ－１グリッドに位置し、第66号溝跡、Ｄ－１グリッドPit７と重複する。

平面形はややいびつな隅丸方形をしており、検出長は長軸長3.12m、短軸長0.92m、確認面からの深さ0.15mを測る。長軸の方位はN－48°－Wを指す。

断面は逆台形で、立ち上がりは外反する。底面は凹凸が目立ち、西側はテラス状に浅くなる。

遺物は土師器の小片が24.0ｇ出土している。



第15号土壙
1　黒褐色土　褐色粘土ブロック(5mm程度)やや多量。黄褐色粘土(2～5mm)やや多量。酸化鉄やや多量
2　黒褐色土　褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。黄褐色粘土(1～3mm)多量。炭化物(1～2mm)微量
3　白灰色土　褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。埋め戻し
4　黒褐色土　褐色粘土ブロック(5mm程度)やや多量。黄灰色粘土(2～5mm)やや多量。(1cm程度)少量
5　黒色土　黄灰色粘土ブロック(1mm程度)少量
6　黒褐色土　褐色粘土ブロック(2～5mm)微量。黄灰色粘土(1～3mm)多量
7　黒灰色土　褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。黄灰色粘土(1～5mm)やや多量
8　黒灰色土　褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。黄灰色粘土(5mm程度)多量

第16号土壙
1　黒灰色土　褐色粘土(2～5mm)少量。焼土(2～5mm)多量。炭化物(2～5mm)やや多量
2　黒灰色土　黄褐色粘土(2～5mm)やや多量。焼土(2～5mm)やや多量。炭化物(2～5mm)やや多量

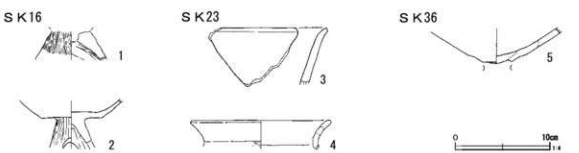
第19号土壙
1　黒褐色土　黄灰色粘土ブロック(2～3mm)少量
2　黒褐色土　黄灰色粘土ブロック(5～8mm)まばら
3　暗褐色土　黄灰色粘土ブロック(1～2cm)まばら
4　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(5～8mm)多量
5　黒褐色土　黄褐色粘土ブロック(5～8mm)少量

第23号土壙
1　暗灰褐色土　黄灰褐色土粒子多量。酸化鉄多量
2　黒灰褐色土　黄灰褐色土粒子多量。黄灰褐色土ブロック(3～5cm)多量。炭化物少量。埋め戻し
3　黒灰褐色土　黄灰褐色土粒子多量。黄灰褐色土ブロック(3～5cm)少量

第36号土壙
1　暗灰褐色土　黄褐色土ブロック(3～4cm大)微量。酸化鉄ごく多量。マンガン多量
2　暗灰褐色土　黄褐色土粒子(粗粒1～2mm)多量。黄褐色土ブロック(3～4cm大)少量。酸化鉄多量。マンガン少量

0　2m
1:40

第108図　古墳時代の土壙



第109図　古墳時代の土壙出土遺物

第23号土壙（第108図）

D－2グリッドに位置し、第51号溝跡、D－2グリッドPit32・Pit36と重複する。

平面形は長方形で、検出長は長軸長3.08m、短軸長0.86m、確認面からの深さ0.24mを測る。長軸の方位はN－51°－Eを指す。

断面は逆台形で、立ち上がりは外反する。底面は平坦である。

遺物は破片で、中層以上からの出土が多く、土師器の壺、甕が出土している。

第109図3は甕の破片で、口径が広い。表面は風化が激しく、調整を確認する事は出来なかった。4は甕の口縁部破片である。頸部に僅かながら刷毛調整の痕跡が残る。他に土師器小片が324.0g出土している。

第36号土壙（第108図）

E－3グリッドに位置する。第2・3号周溝状遺構と重複し、第3号周溝状遺構よりも古い。

平面形は不整形で、検出長は長径1.15m、短径0.75m、確認面からの深さ0.20mを測る。長軸の方位はN－35°－Wを指す。

断面は逆台形で、立ち上がりは外反する。底面は平坦である。

遺物は高坏の破片及び土師器小片が出土している。

第23表　古墳時代の土壙出土遺物観察表（第109図）

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	SK16	土師器	台付甕	－	[3.2]	－	40	A・E・H・I・L	普通	橙		
2	SK16	土師器	高坏	－	[5.4]	－	50	B・C・E・H	普通	にぶい橙	円孔4 赤彩の痕跡	
3	SK23	土師器	甕	－	[5.0]	－	5	A・C・E・H・I・L	普通	明赤褐		
4	SK23	土師器	甕	(14.7)	[3.1]	－	10	C・E・H・I	普通	明赤褐		
5	SK36	土師器	高坏	－	[3.8]	－	40	E・H・L	普通	橙		

（4）溝跡

調査区西部から4条の溝跡を検出した。南北方向に縦断するものが多いが、第66号溝跡の様に東西方向に直行するように伸びるものもある。南北方向に伸びる溝跡は、第3号溝跡以外の2条が自然堤防によって軸方向の影響を受けている為か同一方向に主軸を持つ。

南北に伸びる溝跡は、北に行くに従い浅くなる。これは、遺構の分布する調査区西部の遺構確認面が、北側に行くにつれて現地表面からの深度が深くなることによるものと考えられる。

第3号溝跡（第110図）

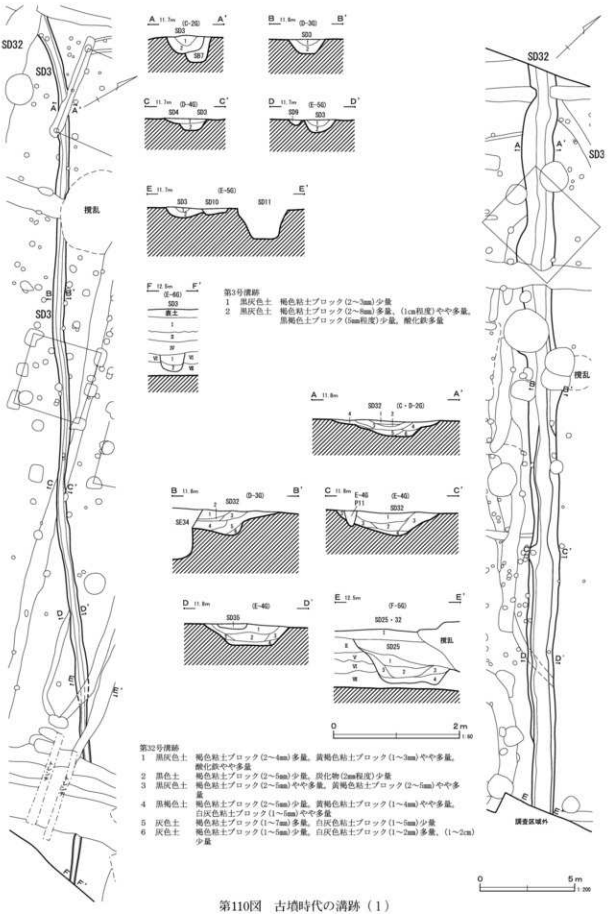
C－2・3、D－3・4グリッドから、D－5、E－5・6グリッドへと南北に延びる。第4・7～11・32・43号溝跡、遺物集中、第4・7・8・13号掘立柱建物跡と重複し、第7号掘立柱建物跡よりも新しい。

規模は、全長45.8m、幅は最大0.66m、最小0.28m、確認面からの深さは、最大0.09m、最小で0.02mである。走行方位はN－50°－Wを指す。

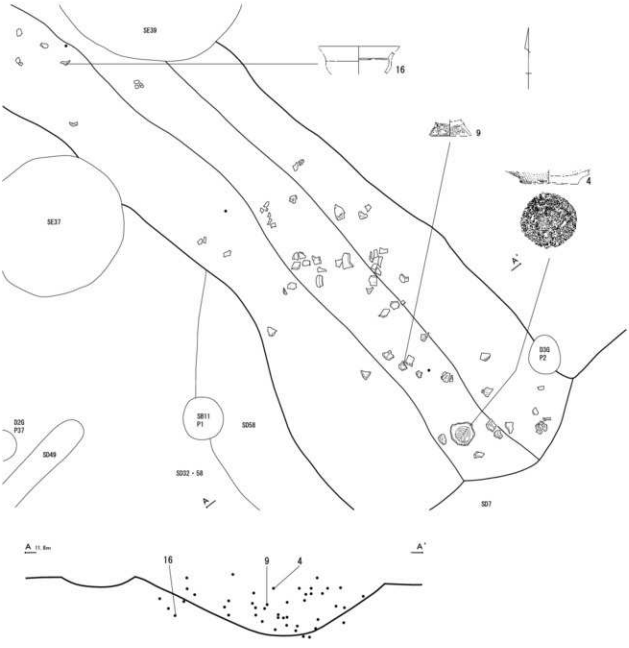
断面形は逆台形を呈し、覆土は黒灰色土を主体とする。第2層には壁面の崩落による褐色土ブロックが多量に混入していた。

出土遺物は土師器台付甕の脚部、ミニチュア土器が出土している。出土位置は、第113図1の台付甕の脚部が溝跡底面から18.3cm、2のミニチュア土器が16.3cmの位置から出土している。

他に土師器の小片が出土しているが図示出来なかった。総重量は168.6gである。



第110図　古墳時代の溝跡（1）



第111図　第32号溝跡遺物出土状況

第32号溝跡（第110・111図）

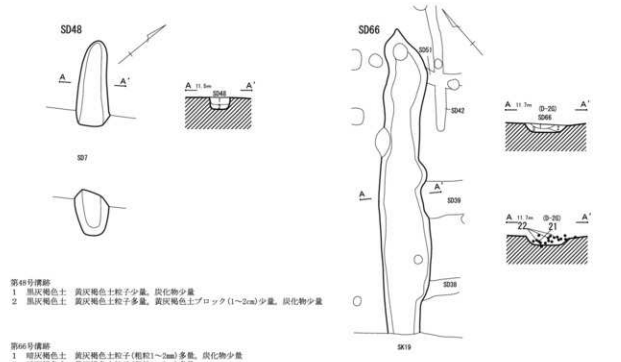
Ｃ－２、Ｄ－２・３、Ｅ－３グリッドから、Ｅ－４、Ｆ－４・５グリッドへと南北に延び、重複する第34号井戸跡よりも古い。他に第６号掘立柱建物跡Pit１、第10号掘立柱建物跡Pit１・２、第12号掘立柱建物跡Pit６、第27号土壙と重複している。

規模は、全長39.50m、幅は最大1.71m、最小1.16m、確認面からの深さは、最大0.40m、最小0.09mである。走行方位はN－45°－Wを指す。

断面形は台形が主体である。覆土は黒灰色土と灰色土の互層となっている。

遺物は主に遺物集中周辺で出土し、底面直上からの出土も多い。出土遺物は土師器壺、甕、甑、高坏、鉢である。

第113図３は口径の大きい甕で、頸部から口縁



第112図　古墳時代の溝跡（2）

部に掛けて横方向の刷毛調整を右回りに行っている。溝跡底面から7.7㎝と床面に近い場所での出土である。4～7は壺の底部である。4は底部に木葉痕が残る。出土した高さは溝跡底面から35.6㎝の位置である。5は外面に斜めの磨きの後に縦方向の磨き調整を行い、赤彩を施す。8～11は台付甕の脚部で、8は脚部作成後に内面に粘土を一度貼り付け、蓋をしている。出土した高さは底面から20.5㎝の位置である。12は甑で、底部の径は小さい。溝跡底面から3.6㎝の位置での出土である。13・14は高坏の脚部で、外面は磨き調整、内面は撫でである。15は長脚の高坏の脚部で、溝跡底面から9.0㎝の位置で出土した。16・17は鉢で、17は口縁部から体部にかけての破片である。外面は縦の刷毛調整の後に横方向の磨きを行っている。溝跡底面から22.8㎝の位置での出土である。

他に土師器小片が出土しているが、微細であるため図示出来なかった。総重量は2715.6g出土している。

第48号溝跡（第112図）

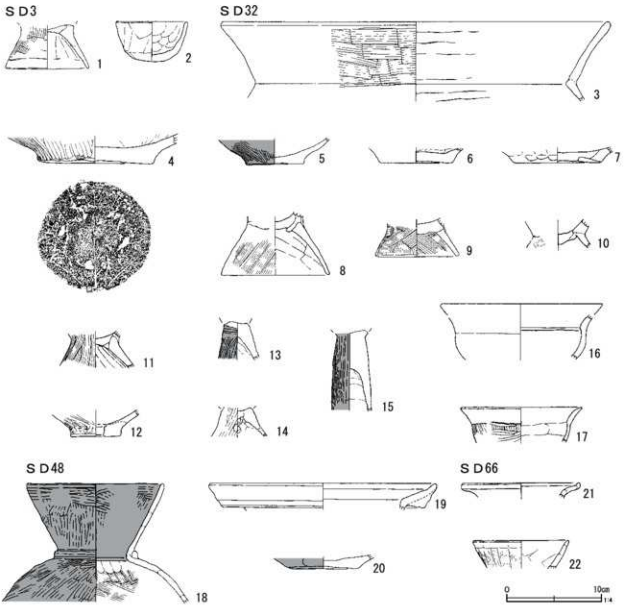
E－2グリッドに位置し、南北方向に延びている。土壙の可能性も残すが、遺構の形体から溝跡として報告する。重複する第7号溝跡よりも古い。

規模は、全長3.10m、幅は最大0.52m、最小0.33m、確認面からの深さは、最大0.19m、最小0.09mである。走行方位はN－50°－Wを指す。

断面形は箱型である。覆土は黒灰色土を主体とし、炭化物が少量だが混入していた。

出土遺物は土師器壺が出土している。

第113図18は頸部に突帯を持つ壺で20の壺底部片と同一個体の可能性があるが接合部位が存在しないため別々に図示した。18は体部に斜め方向の磨き調整を右回りに行い、頸部から口縁部にかけては縦方向に磨いた後に口縁部付近を横方向に磨く。内面は体部に斜めの刷毛調整を行い、その後



第113図　古墳時代の溝跡出土遺物

頸部を撫でによって接合している。出土位置は溝跡底面から1.5～4.0cmの高さである。20は溝跡底面から5.0cm以内で出土したものがほとんどである。19は折返し口縁の壺で、口縁部は外反する。粘土帯を貼り付けた後に横撫でを行っている。溝跡底面から2.0cmの位置で出土した。

第66号溝跡（第112図）

D－2グリッドから、D－1グリッドへと南北に延びる。第38・39・51号溝跡、第19号土壙と重複する。

規模は、全長4.86m、幅は最大0.77m、最小0.57m、確認面からの深さは、最大0.21m、最小0.13mである。走行方位はN－40°－Eを指す。

断面形は逆台形で、覆土は暗灰色土を主体とする。上層では黄灰色ブロックを多量に含む。

出土遺物は土師器壺、鉢が出土している。第113図21は壺の口縁部で、頸部から口縁部に向け

てテラス状に段を設け、その後垂直に立ち上がり口縁に至る。溝跡底面から6.5㎝の位置での出土である。22は鉢で、縦の刷毛調整を右回りに施し、口縁部を横方向に撫で調整しているものと思われる。内面はヘラ状工具による撫で調整が行われている。

第24表　古墳時代の溝跡出土遺物観察表（第113図）

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	SD3	土師器	台付甕	－	[4.6]	8.6	40	A・E・I	普通	明赤褐		51・1
2	SD3	土師器	ミニチュア	(7.2)	4.2	－	70	C・E・H・I・L	普通	橙		52・5
3	SD32	土師器	甕	(41.0)	[8.5]	－	10	A・C・E・H・I・L	普通	橙		
4	SD32	土師器	壺	－	[3.1]	12.1	80	E・L・H	普通	淡赤橙	底部木葉痕 外面黒斑	62・2
5	SD32	土師器	壺	－	[2.7]	6.2	60	E・G・H・I	普通	明赤褐	赤彩	
6	SD32	土師器	壺	－	[1.7]	7.9	80	G・H・I	普通	明赤褐		
7	SD32	土師器	壺	－	[1.7]	9.2	30	C・E・H・L	普通	橙		62・2
8	SD32	土師器	台付甕	－	[6.6]	11.3	20	E・G・H・I	普通	明赤褐		
9	SD32	土師器	台付甕	－	[4.0]	8.6	70	C・G・H・I	普通	明赤褐		51・3
10	SD32	土師器	台付甕	－	[3.3]	－	70	C・E・H・I・L	普通	赤		
11	SD32	土師器	台付甕	－	[3.8]	－	60	A・C・E・H・I	普通	赤		51・2
12	SD32	土師器	甑	－	[2.8]	5.0	40	C・E・H・L	普通	淡橙	外面黒斑	62・2
13	SD32	土師器	高坏	－	[3.9]	－	70	C・E・H・I	普通	橙	赤彩	
14	SD32	土師器	高坏	－	[3.0]	－	70	E・H・I	普通	橙	赤彩の痕跡	
15	SD32	土師器	高坏	－	[8.2]	－	70	A・C・E・H・I	普通	橙	赤彩	
16	SD32	土師器	鉢	－	[4.6]	－	10	C・E・G・H・I・L	普通	淡橙		
17	SD32	土師器	鉢	(12.6)	[3.7]	－	50	C・E・H・I	普通	淡橙		
18	SD48	土師器	壺	(14.2)	[12.6]	－	10	A・C・E・H・I	普通	淡橙	赤彩	
19	SD48	土師器	壺	(23.8)	[2.7]	－	20	A・C・E・H・I	普通	橙		
20	SD48	土師器	壺	－	[0.9]	6.8	90	A・C・E・H・I・L	普通	にぶい橙	赤彩	
21	SD66	土師器	壺	(12.2)	[1.7]	－	10	C・E・I	普通	淡橙		
22	SD66	土師器	鉢	(10.0)	[3.0]	－	40	C・E・H・I	普通	明赤褐		

（5）遺物集中

遺物集中（第114図）

D－3グリッドにおいて、表土掘削時に遺物がまとまって出土した。平面観察を行ったが遺構等は検出できず、遺物のみがまとまっている状態であった。

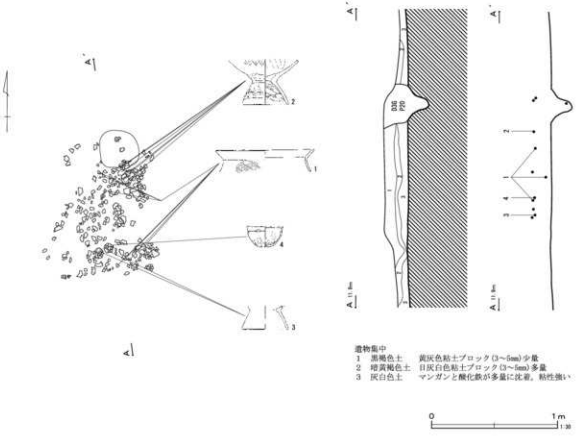
当初グリッド出土遺物として処理したが、遺物が集中している事から分布状況を把握するために出土地点を記録し、遺物集中と呼称した。

遺物は黒褐色土中から出土し、これは第Ⅴ層に相当するものと考えられる。

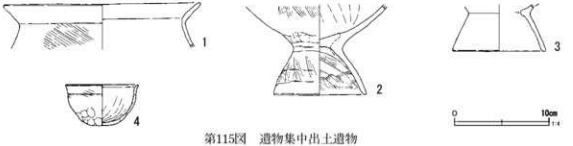
近隣の遺構は、同時期の第２・７号掘立柱建物跡に挟まれ、第32号溝跡が通る。この溝跡の遺物出土量が多い地点とは相似点があり、関連性が考えられる。

出土遺物は土師器甕、台付甕、ミニチュア土器が出土している。

第115図１は甕の口縁部で、斜めの刷毛調整が頸部から胴部にかけて続く。２は台付甕の脚部から胴部で、接合部にはナデ調整、胴部・脚部はやや縦に近い斜めの刷毛調整を施す。３は台付甕の脚部である。表面の風化が激しく、調整の方法は確認出来なかった。４は鉢形のミニチュア土器で、口縁部には刷毛目が僅かに残り、体部下端には指頭痕が明瞭に残る。



第114図　遺物集中遺物出土状況



第115図　遺物集中出土遺物

第25表　遺物集中出土遺物観察表（第115図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	(20.6)	[4.8]	―	10	C・E・G・H・I・K	普通	にぶい黄橙		
2	土師器	台付甕	―	[9.6]	9.7	20	C・E・H・I・L	普通	橙		51・5
3	土師器	台付甕	―	[5.0]	(9.6)	30	C・E・H・L	普通	橙		51・4
4	土師器	ミニチュア	7.6	4.3	3.0	50	C・E・G・L	普通	赤褐		52・6

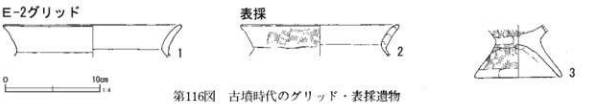
（6）その他の遺物

第116図に遺構外出土遺物（1・2）と平成17年度に実施された試掘調査の遺物（3）を一括した。なお、試掘調査における遺物は、事業地内から出土したものであるが、明確な出土地点や状況については不明である。

1は土師器甕の口縁部破片である。表面の風化が激しく、調整や製作工程を見ることが出来なかった。

2は調査区壁面の第Ⅴ層中から出土した土師器甕の口縁部破片である。外面の調整は、やや斜めの刷毛調整を右回りに施す。口縁部はやや外反するが、粘土紐を輪積みする段階で、外側に張り付けた事によるものと考えられる。頸部から口縁部にかけては、頸部まで粘土紐を巻き上げて器面の調整を行った後に、口縁部へ向けて粘土紐を巻き、そこを上方向から下方へ撫でて接合している。

3は試掘調査において出土した遺物である。土師器台付甕の脚部から胴部に掛けての破片である。やや斜めの刷毛調整を施している。脚部と体部を接合し、刷毛調整を加えた後に接合部を横方向に撫でている。内面中央には直径5.5㎜の穴が穿たれている。なお、穿たれた穴は貫通していない。



第116図　古墳時代のグリッド・表採遺物

第26表　古墳時代のグリッド・表採遺物観察表（第116図）

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	グリッド	土師器	甕	(18.6)	[3.5]	―	20	E・G・H・I	普通	にぶい橙	E-2 G	
2	表採	土師器	甕	(16.6)	[3.3]	―	10	C・E・G・H・I	普通	明赤褐	南東壁面	
3	表採	土師器	台付甕	―	[5.5]	(9.2)	60	E・G・H	普通	黒褐	試掘トレンチ	51・6

4．中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構は、掘立柱建物跡12棟、柱穴列2条、井戸跡49基、土壙52基、火葬土壙2基、溝跡55条を検出した。

第117図は、これらの遺構分布を示したものである。遺構は調査区全域に分布しているが、総じて西側で密に分布し、対して東側では遺構の分布は希薄である。

中・近世の遺構は大きく中世期と近世以降のものに二分される。中世に属す主な遺構は、第4・8号掘立柱建物跡、第14号井戸跡、第7号溝跡等がある。しかし、遺物の出土していない遺構も存在し、さらに平面観察から、第7号溝跡が第1号溝跡に接続していた事も考えられ、第1号溝跡の存続期間が長かった可能性があるなど、明確に時期の特定のできない遺構も多く、当該期に属す遺構は更に増えることが予想される。

その他の遺構は近世以降に属すと考えられるが、第1・2号溝跡と、第14号溝跡、第8号溝跡など、規模の大きい区画溝と考えられる溝跡が複数存在し、近世の中でも更に時期的な選地の変化が捉えられる。

第117図　中・近世遺構配置図

（1）掘立柱建物跡

12棟の掘立柱建物跡を検出した。ほとんどの建物跡が第1・2号溝跡を境として、それよりも西側に分布する。

それぞれの建物跡の主軸方向は概ね一致しているが、これは自然堤防の規制を受けていることによるものと考えられる。

遺構が密に分布する調査区西部の中でも、更に建物跡が集中する箇所がある。自然堤防の規制を受けているだけではなく、それぞれの時期に掘削されていた溝跡との関連性が考えられる。

遺構相互の掘形が直接重複しているものは少ないが、調査区西部の狭い範囲の中で、複数期に渡り建て替えを行いながら居住していたことが推測される。

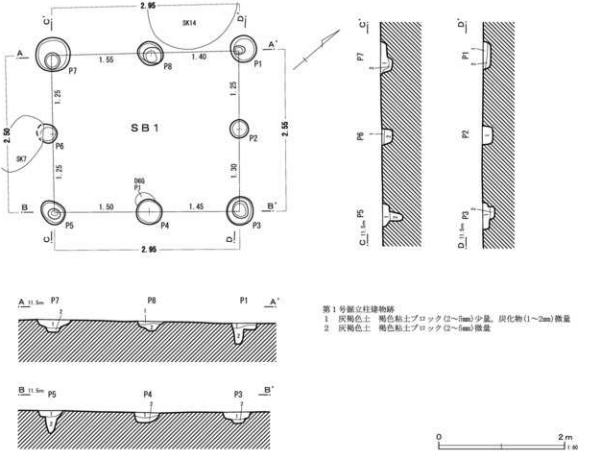
第1号掘立柱建物跡（第118図）

C・D－6グリッドに位置し、第7号土壙と重複する。

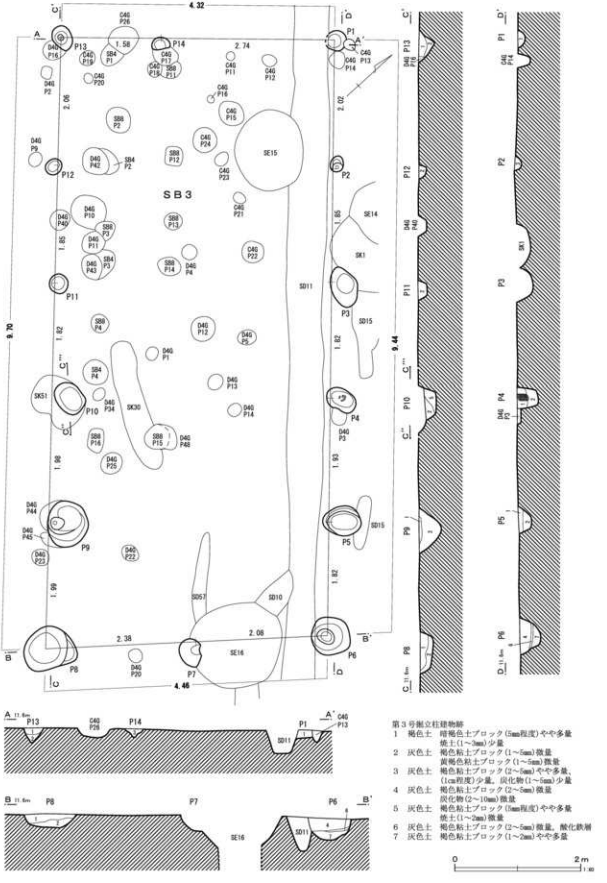
桁行2間、梁行2間、東西棟の側柱建物跡である。規模は桁行2.95m、梁行2.53m、平面積は7.46㎡である。柱間距離は桁行きPit 1 －Pit 2 間が1.25m、Pit 2 －Pit 3 間1.30m、Pit 5 －Pit 6 間1.25m、Pit 6 －Pit 7 間1.25m、梁行がPit 1 －Pit 8 間1.40m、Pit 7 －Pit 8 間1.55m、Pit 3 －Pit 4 間1.45m、Pit 4 －Pit 5 間1.50mである。柱間の平均は桁行1.47m、梁行1.26mを測る。

柱掘形は楕円形を呈し、長径54cm、短径30cm、確認面からの深さ23.5cmである。主軸の方位はN－39°－Eを指す。

覆土から近世以降の建物跡であると思われる。



第118図 第1号掘立柱建物跡



第119図　第３号掘立柱建物跡

第３号掘立柱建物跡（第119図）

Ｃ－４、Ｄ－４・５グリッドに位置し、第４・８号掘立柱建物跡、第15・16号井戸跡、第10・11・57号溝跡、第１・30号土壙と重複する。

桁行５間、梁行２間、南北棟の側柱建物跡である。規模は桁行9.57m、梁行4.39m、平面積は42.01㎡である。柱間距離は桁行Pit１－Pit２間2.02m、Pit２－Pit３間1.85m、Pit３－Pit４間1.82m、Pit４－Pit５間1.93m、Pit５－Pit６間1.82m、Pit８－Pit９間1.99m、Pit９－Pit10間1.98m、Pit10－Pit11間1.82m、Pit11－Pit12間1.85m、Pit12－Pit13間2.06m、梁行がPit１－Pit14間2.74m、Pit13－Pit14間1.58m、Pit６－Pit７間2.08m、Pit７－Pit８間2.38mである。柱間距離の平均は桁行1.91m、梁行2.19mを測る。

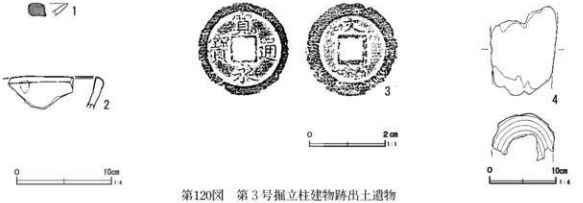
柱掘形は楕円形を呈し、長径42㎝、短径30㎝、確認面からの深さ23.5㎝である。主軸の方位はN－47°－Wを指す。

Pit４で柱材が出土しているが、他はいずれも抜き取りを受けており、柱痕跡は確認出来なかった。柱掘形の底面は、南側のPitが深く、対して北側に位置するPitは浅い。

出土遺物は陶器皿、鉢、銅銭、柱材が出土している。

第120図１はPit８からの出土で、瀬戸・美濃の志野陶器皿と考えられる。見込みに蘭竹文がある。２はPit４の出土で、在地産鉢の口縁部小片である。３はPit９からの出土で、寛永通寶である。４はPit４から出土した柱材で、炭化している。残存長は〔12.9〕㎝、直径9.7㎝である。また、Pit４・10から、かわらけの口縁部小片が出土しているが微細なため図示出来なかった。

遺構の時期は、出土遺物及び覆土から、近世以降と考えられる。



第120図　第３号掘立柱建物跡出土遺物

第27表　第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第120図）

番号	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考	図版
1	陶器	皿	瀬戸・美濃	5	－	－	[1.6]	灰白	良好	長石釉	轆轤		見込み:蘭竹文 鉄絵	16世紀末～17世紀初頭 志野	
2	瓦質土器	鉢	在地	5	－	－	[3.4]	灰白	不良	－	輪積			14世紀 胎土に片岩含む　風化著しい	

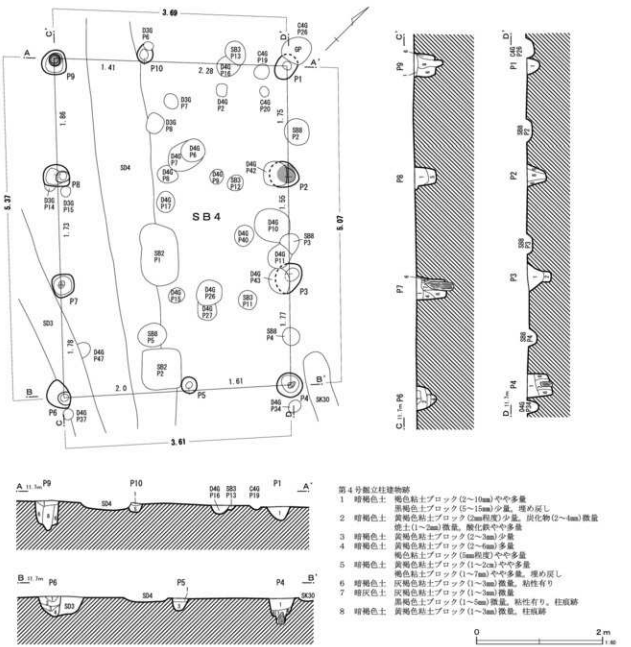
第28表　第3号掘立柱建物跡出土古銭観察表（第120図）

番号	種別	貨銭名	初鋳年	背面	銭径（mm）		銭厚（mm）	重量（g）	備考	図版
					縦	横				
3	銭	寛永通寶	1668	文	25.33	24.98	1.19	2.33	２期新寛永（文銭）	69 - 2

第４号掘立柱建物跡（第121図）

Ｃ－４、Ｄ－３・４グリッドに位置し、第２・３・８号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。第８号掘立柱建物跡と同位置で検出されたため、建て替えか、あるいは同一の建物跡であったことが考えられる。

桁行３間、梁行２間、東西棟の側柱建物跡と考えたが、Ｃ－４グリッドPit17、Ｄ－３グリッドPit11、Ｄ－４グリッドPit８・15・38、第８号掘立柱建物跡Pit12・14・15・16・17と合わせると、桁行き３間、梁行２間の身舎に床束を有し、東・西・南側に廂を持つ建物跡となる可能性がある。規模は、桁行5.22m、梁行3.65m、平面積は19.05㎡である。柱間距離は不揃いで、特に梁行において顕著である。柱間距離は、桁行Pit１－Pit２間



第121図　第４号掘立柱建物跡

1.75m、Pit 2 －Pit 3 間1.55m、Pit 3 －Pit 4 間1.77m、Pit 6 －Pit 7 間1.78m、Pit 7 －Pit 8 間1.73m、Pit 8 －Pit 9 間1.86m、梁行がPit 1 －Pit10間2.28m 、Pit 9 －Pit10間1.41m 、Pit 4 －Pit 5 間1.61m、Pit 5 －Pit 6 間2.00mである。柱間距離の平均は、桁行1.74m、梁行1.82mを測る。

柱掘形は楕円形を呈し、長径44㎝、短径23㎝、確認面からの深さ31.0㎝である。主軸の方位はN－45°－Wを指す。

掘形底面のレベルは一定ではなく、Pit 1 のように浅いものも存在する。梁行の間柱は北側・南側ともに深度が浅く、掘形の規模も小さい。

柱痕跡はPit 3 ・ 4 ・ 7 ・ 9 で認められ、掘形上方まで抜き取り穴を掘削し、切り取ったものと考えられ、切り取った後に埋め戻している。他の掘形は覆土の堆積状態を見る限り抜き取りを受けているものと推測される。

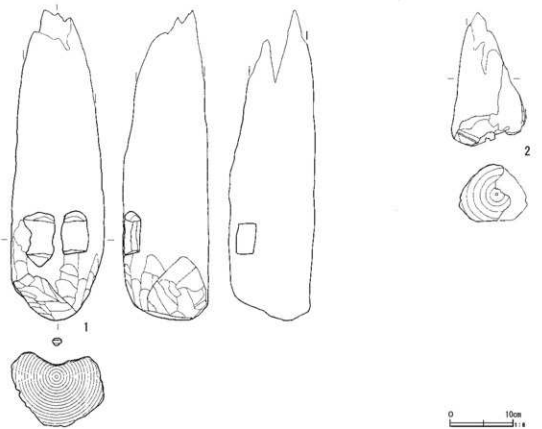
覆土は暗褐色土を主体とし、柱痕跡に該当する第 7 層は非常に粘性の高い土であった。

出土遺物はPit 4 ・ 7 から柱材が出土している。柱材は下方が12㎝程度底面に食い込んだ状態で出土しており、立柱の際に上方から打ち込んでいる可能性がある。

第122図 1 はPit 7 の出土で、柱材である。残存長は〔50.2〕㎝、直径〔14.8〕㎝である。この柱材には筏を組んで運搬をおこなうためのエツリ穴が存在し、施工範囲は、長辺21.2㎝、短辺11.5㎝、奥行き9.1㎝である。柱材の下方に、くり抜くように施工されていた。切断方法は金属製の刃物で全方向から斜めに切断されている。材質はクリ材である。 2 はPit 4 の出土で、残存長は〔21.2〕㎝、直径（10.9）㎝である。

他にPit 7 から礫が 2 点ほど出土している。

時期は覆土から中世に建てられたものと考えられる。



第122図　第 4 号掘立柱建物跡出土遺物

第５号掘立柱建物跡（第123図）

Ｅ－２・３グリッドに位置し、第38・39・61号溝跡　第28・42号土壙と重複する。

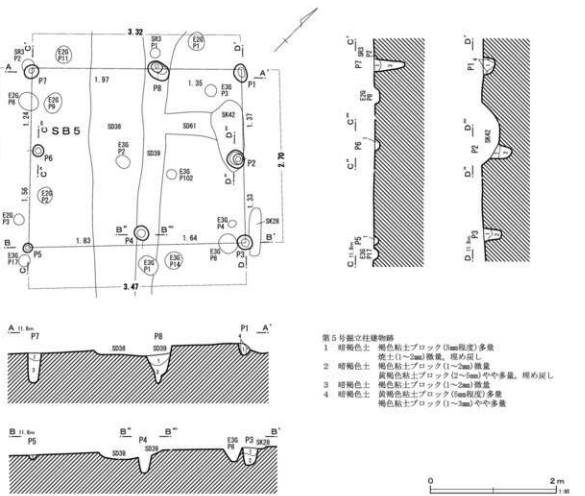
周辺に散在するPitに規則性が認められない中で、四隅のPitが揃い、その間に入るPitも等間隔に位置することから桁行２間、梁行２間、東西棟の側柱建物跡の可能性を考えた。

規模は、桁行3.39m、梁行2.75m、平面積は9.32㎡である。各間柱は柱筋の内側に入り込んでおり、柱筋は通らない。柱間距離は桁行Pit１－Pit２間が1.37m、Pit２－Pit３間が1.33m、Pit５－Pit６間1.56m、Pit６－Pit７間1.24m、梁行がPit１－Pit８間1.35m、Pit７－Pit８間1.97m、Pit３－Pit４間1.64m、Pit４－Pit５間1.83mである。柱間の平均は、桁行1.69m、梁行平均1.37mを測る。

柱掘形は楕円形を呈し、長径35㎝、短径15㎝、確認面からの深さ29.0㎝である。主軸の方位はN－45°－Eを指す。

いずれの柱掘形からも柱痕跡を確認することは出来なかった事から、抜き取りを受けているものと推定される。覆土は暗褐色土を主体とし、第１層は柱を抜き取った後の埋め戻しか、あるいは抜き取り後に放置され、壁面が崩落したことによる層と考えられる。

遺物の出土が無いため時期の特定が困難だが、覆土から中世に建てられたものと考えられる。



第123図　第５号掘立柱建物跡

第６号掘立柱建物跡（第124図）

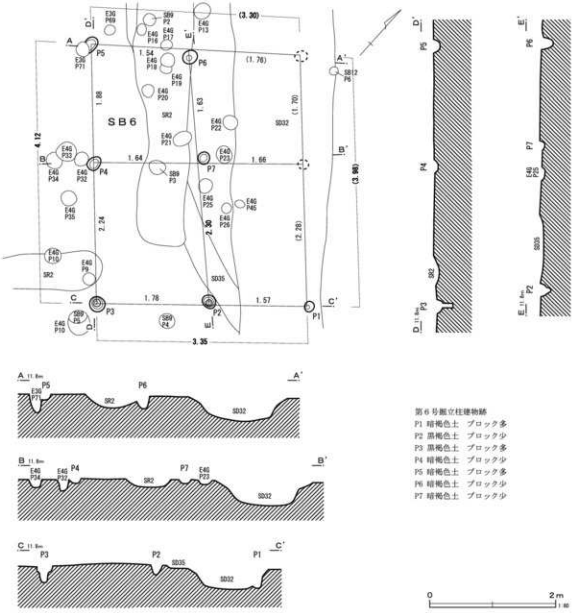
Ｅ－３・４グリッドに位置し、第32・35号溝跡、第９号掘立柱建物跡と重複する。

桁行２間、梁行２間、南北棟の総柱建物跡であると考えたが、東側の桁行では、南東隅柱のみの確認に留まる。また、Pit７の規模は小型であるため、床束の可能性がある。規模は桁行4.12m、梁行3.35m、平面積は（13.80）㎡である。柱間距離は桁行Pit３－Pit４間2.24m、Pit４－Pit５間1.88m、Pit２－Pit７間2.30m、Pit６－Pit７間1.63m、梁行がPit１－Pit２間1.57m、Pit２－Pit３間1.78m、Pit５－Pit６間1.54m、Pit４－Pit７間1.64mである。柱間距離の平均は桁行2.06m、梁行1.67mを測る。

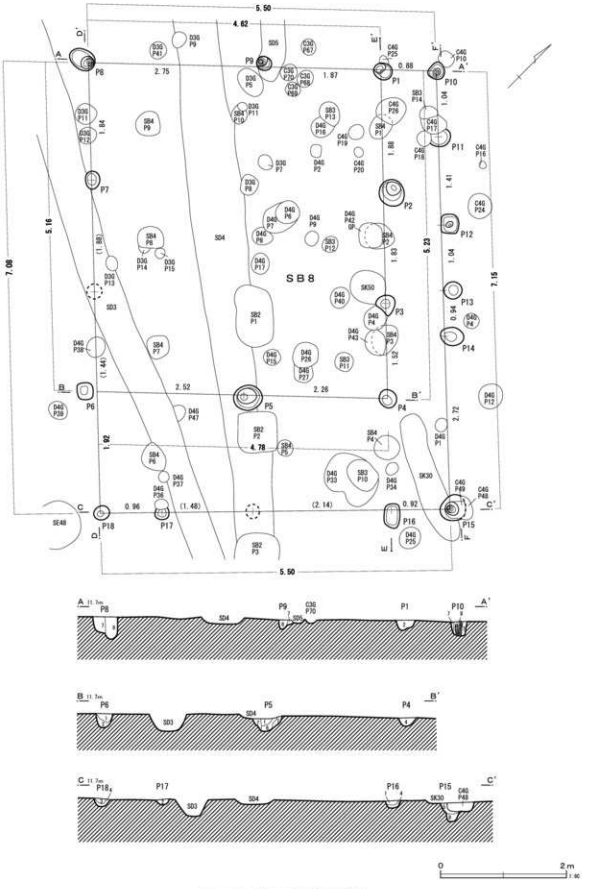
柱掘形は楕円形を呈し、長径25cm、短径15cm、確認面からの深さ17.5cmである。主軸の方位はN－44°－Wを指す。

掘形底面の深度は隅柱が深く、間柱は浅い。

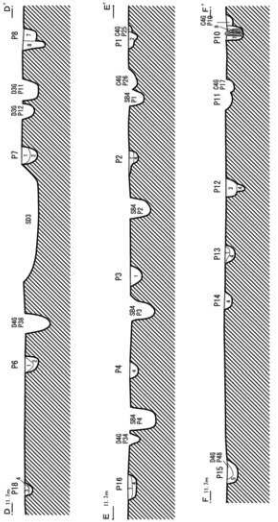
遺物は出土していない。



第124図　第６号掘立柱建物跡



第125図　第８号掘立柱建物跡



第８号掘立柱建物跡

1　灰色土　　褐色粘土ブロック（2～3mm）少量。焼土（1～2mm）微量
2　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック（1～5mm）少量。酸化鉄少量
3　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック（1～2mm）微量
4　暗褐色土　褐色粘土ブロック（2～7mm）やや多量。炭化物（1～2mm）微量
5　灰色土　　灰褐色粘土ブロック（1～2cm）やや多量
　　褐色粘土ブロック（1～5mm）やや多量。埋め戻し
6　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック（2～5mm）やや多量。抜き取り跡
7　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック（5～8mm）多量
　　褐色粘土ブロック（3～8mm）多量
8　灰色土　　褐色粘土ブロック（1～2mm）微量。柱痕跡
9　灰色土　　褐色粘土ブロック（1～5mm）少量。柱痕跡

0　2m
1:60

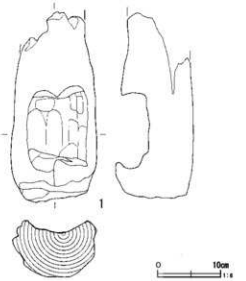
第８号掘立柱建物跡（第125図）

Ｃ－３・４、Ｄ－３・４グリッドに位置し、第２・４号掘立柱建物跡、第30・50号土壙、第３～５号溝跡と重複する。

重複する遺構の中で関連性が伺えるものとして、第４号掘立柱建物跡が身舎の桁行東側柱筋を共有しながら存在している。第４号掘立柱建物跡と直接切り合う掘形は存在しないため新旧関係は不明であるが、掘形内の覆土がほぼ同じ土である事から時期差はそれほど掛け離れたものではない事が推測される。また、同一の柱筋を使用している事など第４号掘立柱建物跡との関係は深いものと捉える事ができ、建て替えが行われた事が推測される。あるいは同一の建物跡であった可能性も考えられる。

桁行２間、梁行２間、東と南の二面に廂を持つ南北棟の建物跡である。規模は、桁行5.23m、梁行4.70m、平面積24.58㎡である。

柱間距離は不揃いで、柱筋も通らないものが多い。柱間距離は桁行Pit１－Pit２間1.88m、Pit２－Pit３間1.83m、Pit３－Pit４間1.52m、Pit７－Pit８



第126図　第８号掘立柱建物跡出土遺物

間1.84m、梁行がPit１－Pit９間1.87m、Pit８－Pit９間2.75m、Pit４－Pit５間2.26m、Pit５－Pit６間2.52mである。柱間の平均は桁行1.74m、梁行1.56mを測る。

身舎の柱筋から廂の柱筋までの距離は、東側でPit１－Pit10間0.88m、Pit15－Pit16間0.92m、南側でPit４－Pit16間1.80m、Pit６－Pit18間1.92mである。廂の柱間距離は桁行Pit10－Pit11間1.04m、Pit11－Pit12間が1.41m、Pit12－Pit14間1.98m、Pit14－Pit15間2.72m、梁行がPit17－Pit18間0.96mである。

廂の出の平均は南側1.92m、東側0.9m、廂柱間距離の平均は桁行1.74m、梁行1.56m、廂の総面積は15.41㎡である。

柱掘形は楕円形を呈し、長径48㎝、短径22㎝、確認面からの深さ23.0㎝である。主軸の方位はN－45°－Wを指す。

掘形底面の高さは総じて浅いが、一定の高さで揃う。覆土は暗褐色土を主体としており、その中に他の性質の土が認められる。

柱材の出土したPit10を除き、Pit12・15では柱痕跡が確認出来た。いずれも上層まで抜き取り穴を掘削して切り取られているものと推測される。その他のPitに関しては、抜き取られているものと考えられる。

遺物はPit10から柱材が出土している（第126図１）。残存長は30.1㎝、直径13.1㎝である。また、片側には長辺11.8㎝、短辺9.6㎝、深さ2.1㎝のエツリ穴が穿たれている。穴の上面に突部が認められることから、丸太を刳り貫くように施工しているものと考えられる。

出土遺物が無く、遺構が帰属する時期の判断は難しいが、覆土の状態から中世の建物跡であると推測する。

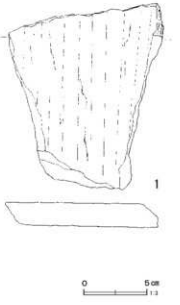
第９号掘立柱建物跡（第128図）

Ｅ－３・４、Ｆ－４グリッドに位置し、第６・15号掘立柱建物跡、第33～37・59・60号溝跡、第２号周溝状遺構と重複し、第35号溝跡よりも古い。

桁行３間、梁行２間、東西棟の側柱建物跡である。規模は、桁行6.53m、梁行2.80m、平面積は18.28㎡である。柱間距離は不揃いで、桁行西側及び梁行北側に顕著である。桁行Pit１－Pit２間が1.80m、Pit２－Pit３間が2.31m、Pit３－Pit４間2.45m、Pit６－Pit７間3.20m、Pit７－Pit８間が1.65m、Pit８－Pit９間1.65m、梁行がPit１－Pit10間1.51m、Pit９－Pit10間1.26m、Pit４－Pit５間1.40m、Pit５－Pit６間1.42mである。柱間距離の平均は桁行2.17m、梁行1.40mを測る。

柱掘形は楕円形を呈し、長径45㎝、短径16㎝、確認面からの深さ21.0㎝である。主軸の方位はN－45°－Wを指す。

Pit４・５・７では柱痕跡が認められ、柱の周囲をブロックを多く含む土で固めていたものと推

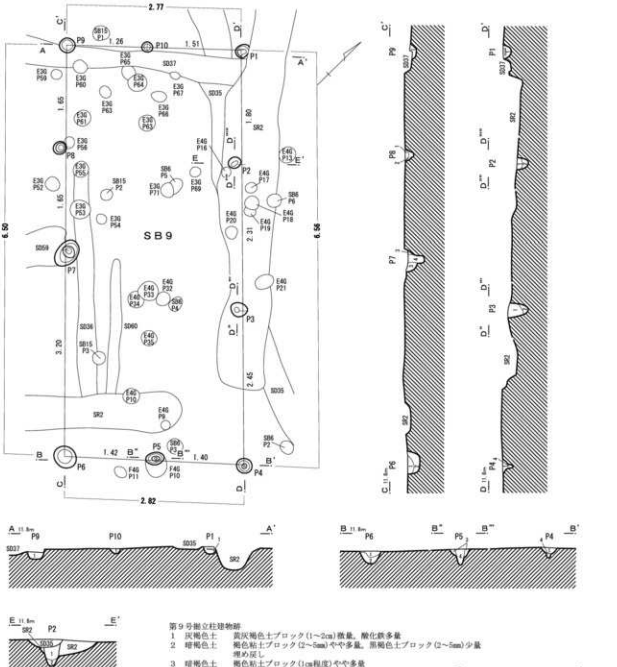


第127図　第９号掘立柱建物跡出土遺物

定される。Pit 4 は抜き取り穴を掘削して切り取られているものと考えられる。

Pit 1 からは沈下防止のための礎板石が出土している（第127図１）。礎板石は片面が摩耗しており、石材は緑泥片岩である。長さ14.8㎝、幅12.0㎝、厚さ1.9㎝、重さ519.3ｇである。摩耗面は下を向いた状態で出土した。

覆土の状態から中世以降の建物跡と考えられる。



第128図　第９号掘立柱建物跡

第10号掘立柱建物跡（第129図）

Ｄ・Ｅ－３グリッドに位置し、第32・35号溝跡、第２・３号周溝状遺構、第34・42号井戸跡、第27・36号土壙と重複する。北東隅柱は第42号井戸跡の中となってしまうため、検出出来なかった。柱筋は通らず、柱間も不揃いであるため、やや台形に近い平面形を呈している。

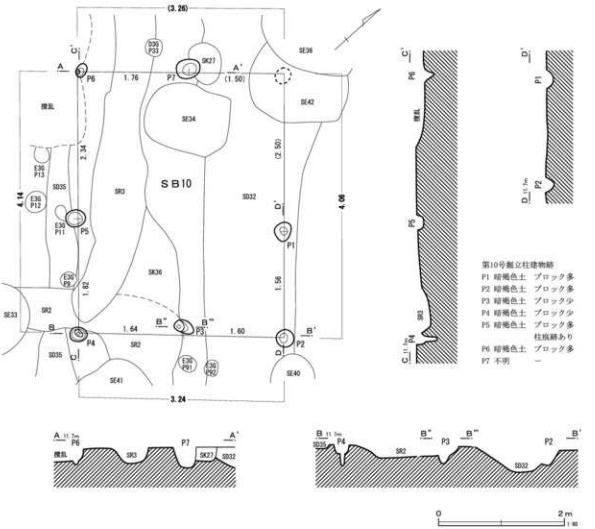
桁行２間、梁行２間、南北棟の側柱建物跡である。規模は、桁行4.10m、梁行3.24m、平面積は13.28㎡である。柱間距離は、桁行Pit１－Pit２間が1.56m、Pit４－Pit５間が1.82m、Pit５－Pit６間2.34m、梁行がPit２－Pit３間1.60m 、Pit３－Pit４間1.64m、Pit６－Pit７間1.76mである。柱間距離の平均は桁行2.05m、梁行1.62mを測る。

柱掘形は楕円形を呈し、長径36㎝、短径26㎝、確認面からの深さ26.1㎝である。主軸の方位はN－42°－Wを指す。

掘形底面の深度は一定であるが、Pit１・２・５は浅い。Pit３・４・６は柱痕跡と考えられ、打ち込まれているものと推測する。また、断面が下方に行くに従い細くなることから、柱の先は杭の様に尖らせていた可能性がある。

出土遺物は土師器細片が出土しているが微細なため図示出来なかった。総重量は10.3ｇである。

掘形の浅さから、中世以降の建物跡である可能性が考えられる。



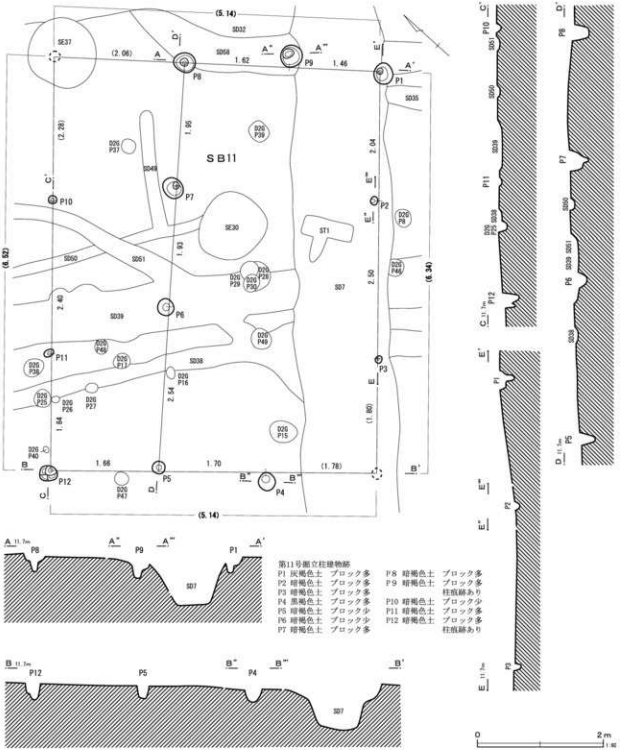
第129図　第10号掘立柱建物跡

第11号掘立柱建物跡（第130図）

D－2グリッドに位置し、第7・38・39・49～51・58号溝跡、第30・37号井戸跡、第1号火葬土壙と重複する。

桁行3間、梁行2間、北側に廂を持つ東西棟の建物跡と考えた。廂とした柱穴は、身舎の掘形よりも一回り小規模で、柱筋が身舎と揃うことから廂としたが、目隠し塀の可能性もある。

規模は、桁行6.58m、梁行5.12m、平面積は33.68㎡



第130図　第11号掘立柱建物跡

である。柱筋が通らず、柱間距離も不揃いである。桁行Pit１－Pit２間が2.04m、Pit２－Pit３間が2.50m、Pit５－Pit６間2.54m、Pit６－Pit７間1.93m、Pit７－Pit８間1.95m、梁行がPit１－Pit９間1.46m、Pit８－Pit９間1.62m、Pit４－Pit５間1.70mである。柱間距離の平均は桁行2.20m、梁行1.71mを測る。

廂の出は、Pit５－Pit12間1.66mである。廂の柱間距離は、Pit10－Pit11間が2.40m、Pit11－Pit12間が1.84mである。廂の出の平均は1.86m、廂の柱間距離の平均は2.12ｍ、廂の総面積は12.13㎡である。

柱掘形は楕円形を呈し、長径34㎝、短径12㎝、確認面からの深さ27.0㎝である。主軸の方位はN－52°－Eを指す。

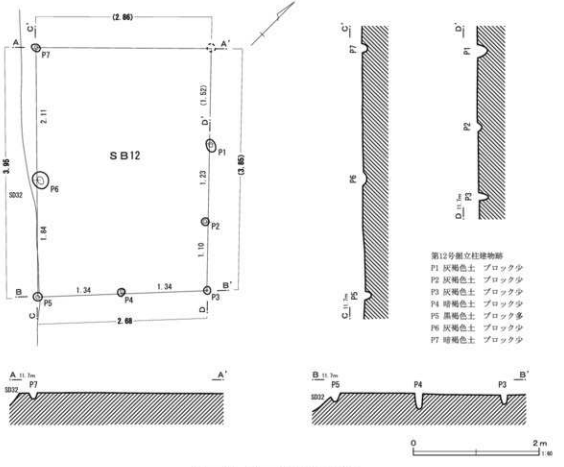
遺物は出土していない。

第12号掘立柱建物跡（第131図）

E－３・４グリッドに位置し、第32号溝跡と重複する。北東隅柱及び北側梁行きの間柱は精査作業を入念に行ったが発見することが出来なかった。掘形が浅いため、既に残存していないことが考えられる。

桁行（３）間、梁行２間、南北棟の側柱建物跡である。桁行の東側が３間、西側が２間とやや変則的である。規模は桁行3.90m、梁行2.77m、平面積は10.80㎡である。柱間距離は桁行Pit１－Pit２間が1.23m、Pit２－Pit３間が1.10m、Pit５－Pit６間1.84m、Pit６－Pit７間2.11m、梁行がPit３－Pit４間1.34m、Pit４－Pit５間1.34mである。柱間距離の平均は桁行東側で1.30m、西側で1.98m、梁行1.38mを測る。

柱掘形は楕円形を呈し、長径27㎝、短径12㎝、



第131図　第12号掘立柱建物跡

確認面からの深さ15.0㎝である。主軸の方位はN－43°－Wを指す。

遺物は出土していないが、中世以降の建物跡と考えられる。

第13号掘立柱建物跡（第132図）

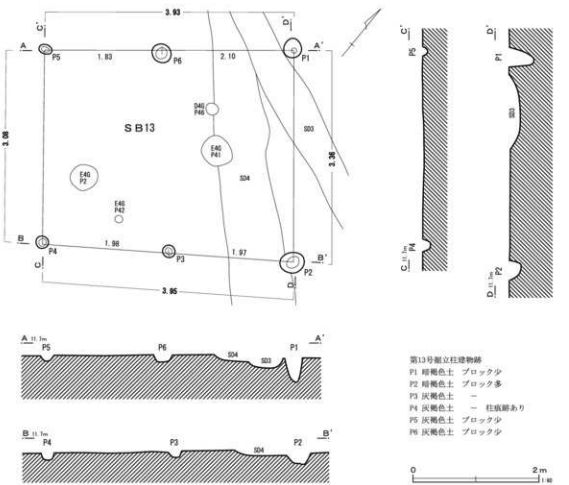
D－3、E－4・5グリッドに位置し、第3・4号溝跡と重複する。

桁行2間、梁行1間、東西棟の側柱建物跡である。規模は、桁行3.94m、梁行3.22m、平面積は12.68㎡である。柱間は等間隔であるが、柱筋は揃わない。柱間距離は桁行Pit 2－Pit 3間が1.97m、Pit 3－Pit 4間が1.98m、Pit 5－Pit 6間1.83m、Pit 1－Pit 6間2.10m、梁行がPit 1－Pit 2間3.36m、Pit 4－Pit 5間3.08mである。柱間距離の平均は桁行1.97m、梁行3.22mを測る。

柱掘形は楕円形を呈し、長径40㎝、短径20㎝、確認面からの深さ24.5㎝である。主軸の方位はN－53°－Eを指す。

Pit 1のみ深く掘削されているが、他のPitの掘形は浅く、底面のレベルも一定である。

遺物は出土していないが、中世以降の建物跡と考えられる。



第132図　第13号掘立柱建物跡

第15号掘立柱建物跡（第133図）

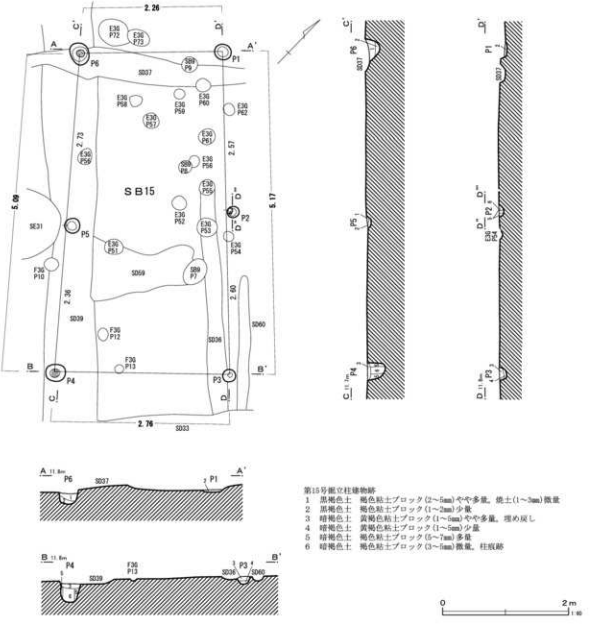
Ｅ－３、Ｆ－３・４グリッドに位置し、第36・37・39・59号溝跡と重複する。

桁行２間、梁行１間、南北棟の側柱建物跡である。平面形は梁行が揃わないため、台形である。規模は、桁行5.13m、梁行2.51m、平面積は12.87㎡である。柱間距離は桁行Pit１－Pit２間が2.57m、Pit２－Pit３間が2.60m、Pit４－Pit５間2.36m、Pit５－Pit６間2.73m、梁行がPit１－Pit６間2.26m、Pit３－Pit４間2.76mである。柱間距離の平均は桁行2.56m、梁行2.51mを測る。

柱掘形は楕円形を呈し、長径35㎝、短径20㎝、確認面からの深さ20.5㎝である。主軸の方位はＮ－43°－Ｗを指す。

Pit４では柱痕跡が認められた。抜き取り穴は第３層が該当し、そこで柱を切り取ったものと考えられる。

遺物は出土していないが、覆土から中世以降の建物跡と考えられる。



第133図　第15号掘立柱建物跡

（2）柱穴列

調査区西部において２条検出した。掘立柱建物跡に伴うように配置されているものもあり、区画や遮蔽をするような機能を持っていたものと推測される。

第１号柱穴列（第134図）

D－４グリッドに位置する。４本の柱穴が東西に並び、北側には第３号掘立柱建物跡が隣接する。軸方向は共通しており、目隠し塀の役割をしていた可能性がある。第11号溝跡と重複するが新旧関係は確認出来なかった。

検出長5.36m、柱間はほぼ等間で、Pit１－Pit２間1.85m、Pit２－Pit３間1.84m、Pit３－Pit４間1.67mである。掘形は円形を基調とし、直径は平均24cm、確認面からの深さは平均12cmを測る。主軸の方位はN－45°－Eを指す。柱痕跡は認められなかったが、Pit３が２段に掘り込まれていた。

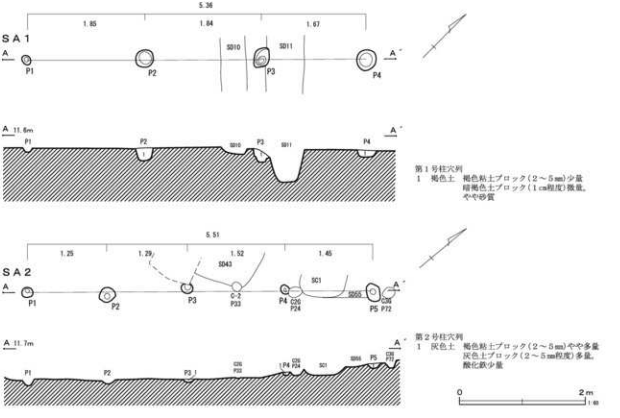
遺物は出土していない。

第2号柱穴列（第134図）

C－２・３グリッドに位置する。第53・55・56号溝跡と重複し、第53号溝跡よりも古い。

５本の柱穴が東西方向に伸びる。東側は調査区外に続き、西側にもPitがあることから、さらに西に延びる可能性がある。検出長5.51m、柱間はほぼ等間で、Pit１－Pit２間1.25m、Pit２－Pit３間1.29m、Pit３－Pit４間1.52mである。掘形は円形で、直径の20cm、確認面からの深さ６cmである。主軸の方位はN－41°－Wを指す。

遺物は出土していない。



第134図　柱穴列

（3）井戸跡

平沼一丁田遺跡では49基の井戸跡を検出した。掘削時の危険を回避するため、筒底を確認せずに調査を断念したものもある。しかし、遺構確認面が現地表面から1.5mと深く、確認段階ですでにある程度の深さまで掘削を行っている状態であった事、低地であるために水が湧きやすいという立地環境により、井戸の深さ自体が総じて浅いという事、これらの要因によって筒底までの調査が行えたものもある。

遺構の分布は調査区全域に分布するが、多くは調査区西部の建物跡群に近い位置に掘削されている。

これらの時期については、中世から近世の時期に掘削されたものと想定できる。また、古墳時代に属する井戸跡は、堆積している覆土を見る限り存在しないものと考えられる。

第１号井戸跡（第135図）

C－４グリッドに位置し、重複する第２号井戸跡よりも古い。

平面形は楕円形で、規模は長径1.60m、断面は筒状で、確認面からの深さ1.25mを測る。長軸の方位はN－30°－Eを指す。

やや斜めに掘り込んだ後に縦方向に掘り込んでいる。覆土は水の影響を受け、基本的に灰色が強く、粘土質である。第１層は水の影響を受けて酸化土を多く含んでいる。上層では明度が高く、下層では暗黄灰色となり、有機物を多量に含む。底面は検出できなかった。

出土遺物は陶器皿が出土している。

第142図１は瀬戸・美濃産の皿である。見込みには鉄釉で花弁が描かれている。

第２号井戸跡（第135図）

C－４グリッドに位置し、重複する第１号井戸跡よりも新しく、第１号溝跡とは重複するが新旧関係は不明である。

平面形は楕円形で、断面形は筒状を呈し、縦方向に掘り込まれている。規模は、長径1.77m、短径1.66mである。湧水と崩落の危険があった事から井戸底まで調査を行わなかったが、確認面から1.25mまで調査した。長軸の方位はN－30°－Eを指す。

覆土は自然堆積で、水の影響を受けて灰色が強く、粘土質である。下層では有機物を含む。

図示可能な出土遺物は、第142図２のかわらけが１点のみであった。体部は斜めに直線的に立ち上がり、外面には轆轤調整による凹凸が僅かに見られる。内面底部には煤が付着しており、灯明皿として利用されていた可能性がある。底部回転糸切り離しで、轆轤の回転方向は左回りである。他に陶器小片、焙烙の小片の他、貝殻が出土している。総重量は35.6ｇである。

第３号井戸跡（第135図）

B・C－４グリッドに位置し、重複する第１号溝跡よりも古い。

平面形は楕円形、断面形は筒型で、やや斜めに掘り込んだ後に急激に縦に掘り込む。長径1.52m、短径1.34m、底面は崩落のため調査出来なかったが、確認面からの深さ0.42mを測る。長軸の方位はN－24°－Wを指す。

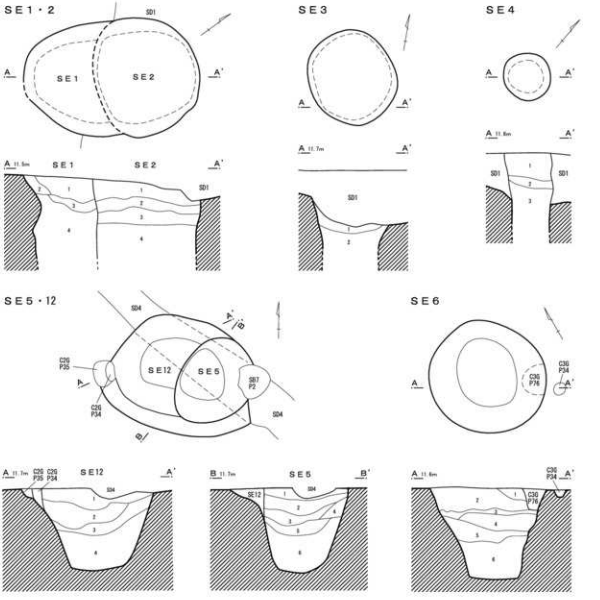
覆土は上層で崩落土と考えられる微細なブロックが多量に混入する層があり、下層では水の影響を受けて酸化土を多く含む。

遺物は出土していない。

第４号井戸跡（第135図）

D－５グリッドに位置し、重複する第１号井戸跡よりも新しい。

平面形は円形、断面形は筒型で、縦方向に急激に掘り込む。長径0.76m、短径0.74m、底面は湧



第1号井戸跡
1　褐灰色土　黄褐色粘土ブロック(3～5mm)，酸化鉄多量
2　黄灰色土　黄褐色粘土ブロック(3～5mm)
3　暗黄灰色土　灰白色粘土ブロック(3～5mm)少量，有機物含む
4　暗黄灰色土　黄灰色粘土ブロック(3～5mm)，全体に有機物多量に含む

第2号井戸跡
1　褐灰色土　黄褐色粘土ブロック(5～8mm)少量，炭化物(2～3mm)少量
2　暗黄灰色土　灰白色粘土ブロック(3～5mm)少量，炭化物(2～3mm)微量
3　暗黄灰色土　黄灰色粘土ブロック(3～5mm)少量
4　暗黄灰色土　黄灰色粘土ブロック(3～5mm)少量，有機物少量含む

第3号井戸跡
1　黄灰色土　灰白色粘土ブロック(3～5mm)多量
2　黄灰色土　暗褐色土ブロック(5mm程度)少量，酸化鉄やや多量

第4号井戸跡
1　褐灰色土　黄褐色粘土ブロック(2～8mm)やや多量，褐色粘土ブロック(1～2cm)少量，暗褐色土ブロック(2～5cm)微量，酸化鉄層状に堆積，灰の混入
2　暗黄灰色土　暗灰色粘土ブロック(2～5mm)少量，酸化鉄多量
3　暗黄灰色土　暗灰色粘土ブロック(2～5mm)少量，有機物含む，粘性やや有り

第5号井戸跡
1　暗褐色土　黄灰色粘土ブロック(5～20mm)微量，焼土(2～3mm)，炭化物(2～4mm)微量，酸化鉄やや多い
2　黒褐色土　黄灰色粘土ブロック(5～20mm)少量，褐色粘土ブロック(1cm程度)微量，酸化鉄少量
3　黒褐色土　黄灰色粘土ブロック(5～8mm)微量，褐色粘土ブロック(2～4mm)微量，酸化鉄多量
4　黒褐色土　黄灰色粘土ブロック(2～5mm)多量，(1～1.5cm)多量，酸化鉄多量
5　黒褐色土　灰褐色粘土ブロック(2～6mm)少量，(1～2cm)少量，褐色粘土ブロック(1～2cm)やや多量，粘性やや有り
6　暗灰色土　暗褐色粘土ブロック(3～5cm)少量，粘性有り

第6号井戸跡
1　灰褐色土　褐色粘土ブロック(2～15mm)多量，黒褐色土ブロック(2～4mm)やや多量，(1cm程度)微量
2　暗褐色土　褐色粘土ブロック(2～15mm)微量，酸化鉄少量
3　褐灰色土　酸化鉄多量
4　暗黄灰色土　暗黄灰色土ブロック(1～2cm)やや多量，酸化鉄少量，粘性やや有り
5　暗黄灰色土　暗灰色土ブロック(2～5cm)多量，酸化鉄少量，粘性有り
6　暗黄灰色土　暗灰色土ブロック(1cm程度)少量，粘性有り

第12号井戸跡
1　暗褐色土　褐色粘土ブロック(2～9mm)やや多量，灰褐色粘土ブロック(5mm程度)やや多量，酸化鉄やや多量
2　黒褐色土　褐色粘土ブロック(2～6mm)少量，酸化鉄少量
3　黒褐色土　褐色粘土ブロック(2～9mm)やや多量，黄褐色粘土ブロック(1～3cm)やや多量，酸化鉄やや多量
4　黒褐色土　黄灰色粘土ブロック(2～5mm)微量，(1cm程度)微量，粘性やや有り

0　2m
1:80

第135図　井戸跡（1）

水と崩落の危険から調査出来なかったが、確認面からの深さ1.49mを測る。長軸の方位はN－23°－Wを指す。

覆土は最上層が粘土ブロック、暗褐色土ブロックを多く含む埋め戻しの層で、鉄分が沈着した水性層と暗黄灰色土の薄い層が互層となったものである。下層は自然堆積と思われるが、第2層は水の影響を受けて酸化土を多量に含み、最下層は有機物が認められた。

出土遺物は陶器片が1点出土しているが図示出来なかった。

第5号井戸跡（第135図）

C－3グリッドに位置し、重複する第12号井戸跡より新しく、第4号溝跡よりも古い。

平面形は円形で、断面形は漏斗状を呈し、斜めに掘り込まれた後に窄まる。径は1.46m、確認面からの深さ1.33mを測る。主軸の方位はN－35°－Eを指す。

覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積で、第3層以下は水の影響を受けて酸化土を含み、粘性が強くなっている。また、第4層は崩落土である。

出土遺物は第142図3の須恵器甕片が出土している。内面に摩耗の痕跡が認められ、良く使用されている。硯に転用していた可能性が考えられる。南比企産である。他に土師器小片が1点ほど出土している。

第6号井戸跡（第135図）

C－3グリッドに位置し、C－3グリッドPit76と重複する。

平面形は円形で、断面形は漏斗状に斜めに掘り込まれている。長径1.86m、短径1.72m、確認面からの深さ1.44mを測る。長軸の方位はN－50°－Wを指す。

覆土は上層で明度が低く、下層で高くなっている。第3層は酸化土が沈着した層である。第4・5層は埋め戻しである。

遺物は出土していない。

第7号井戸跡（第136図）

B－3グリッドに位置する。

平面形は円形で、断面形は筒型を呈しており、縦方向に垂直に掘り込んでいた。長径0.73m、短径0.70m、底面まで調査することは出来なかったが、確認面からの深さ1.40mまで調査した。長軸の方位はN－37°－Eを指す。

覆土は、最上層を埋め戻している。第2層以下では酸化土を多く含み、粘性が高い。また、有機物の混入が多くなっており、自然堆積による埋没である。

遺物は出土していない。

第8号井戸跡（第136図）

C－5グリッドに位置し、重複する第1号溝跡との新旧関係は不明である。

平面形は楕円形で、断面形は筒型で垂直に掘り込まれている。長径1.02m、短径0.88m、確認面からの深さ0.57mを測る。長軸の方位はN－39°－Wを指す。

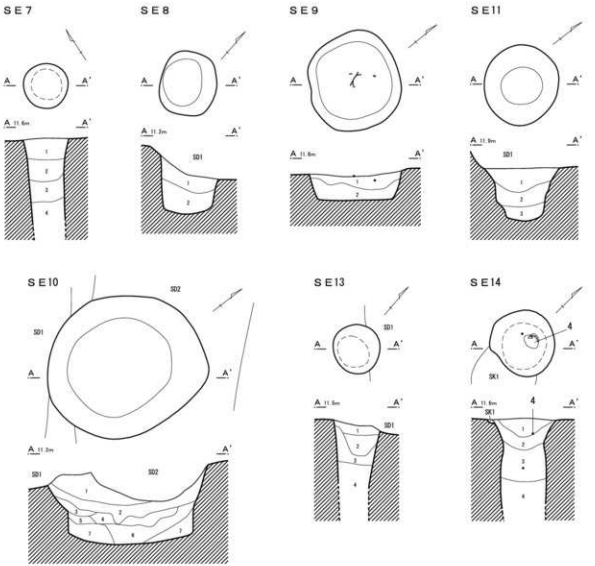
覆土は暗黄灰色土を主体とし、上層は微細なブロックを多く含む崩落による層と考えられる。下層は有機物を含む自然堆積である。

遺物は出土していない。

第9号井戸跡（第136図）

C－5グリッドに位置し、第1号溝跡と重複している。第1号溝跡の調査後に平面観察を行い、本遺構の調査を開始したため新旧関係は不明である。

平面形は円形で、断面形は漏斗状で斜めに掘り込まれている。長径1.64m、短径1.52m、確認面からの深さ0.46mを測る。長軸の方位はN－31°－Wを指す。



第7号井戸跡
1　褐色土　　黄褐色粘土ブロック(2～5cm)やや多量。酸化物(2～5mm)微量
2　暗灰色土　　暗黄灰色粘土ブロック(2～15mm)少量。酸化鉄多量。粘性有り
3　暗灰色土　　暗黄灰色粘土ブロック(2～5mm)やや多量。酸化鉄多量。有機物含む。粘性有り
4　暗灰色土　　褐色粘土ブロック(1cm程度)微量。有機物含む。砂質

第8号井戸跡
1　暗黄灰色土　　黄灰色粘土粒(1～2mm)多量。粘土質
2　暗灰色土　　有機物多量。シルト質

第9号井戸跡
1　暗黄灰色土　　黄灰色ブロック多量
2　暗黄灰色粘土　　暗黄灰色土ブロック含む

第10号井戸跡
1　淡緑灰色土粘土　　褐色粘土ブロック(1cm程度)やや多量
2　暗黄灰色土　　褐色粘土ブロック(3cm程度)少量
3　淡黄灰色土　　褐色粘土ブロック(1cm程度)少量。シルト質
4　暗黄灰色粘土　　淡黄灰色土ブロック(1cm程度)多量
5　暗黄灰色粘土　　淡黄灰色土ブロック(1cm程度)少量
6　暗黄灰色粘土　　淡黄灰色土ブロック少量
7　暗褐色粘土　　暗黄灰色粘土ブロックやや多量。淡黄灰色土ブロック少量。シルト質

第11号井戸跡
1　暗黄灰色土　　灰白色粘土ブロック(5～8mm)多量。有機物多量
2　暗黄灰色土　　灰白色粘土ブロック(5～8mm)多量
3　灰色粘土　　川砂含む

第13号井戸跡
1　褐灰色土　　黄褐色粘土ブロック(3～5mm)やや多量。酸化鉄多量。赤変している
2　黄灰色土　　黄褐色粘土ブロック(3～5mm)少量。酸化鉄やや多量
3　暗黄灰色土　　灰褐色粘土ブロック(3～5mm)少量。有機物含む
4　暗黄灰色土　　黄灰色粘土ブロック(3～5mm)やや多量。有機物多量に含む

第14号井戸跡
1　褐色土　　灰褐色粘土ブロック(1cm程度)多量。酸化鉄少量。埋め戻し
2　灰褐色土　　褐色粘土ブロック(1～5mm)少量。酸化鉄多量
3　暗黄灰色土　　褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量。有機物含む
4　暗黄灰色土　　青緑色粘土ブロック(1cm程度)少量。粘性有り

0　2m
1:40

第136図　井戸跡（2）

覆土は暗黄灰色土を主体とし、上層が崩落土を含む堆積層と考えられる。

遺物は木片が少量出土しているが、遺存状態が悪く図示出来なかった。

第10号井戸跡（第136図）

C－5グリッドに位置し、重複する第2号溝跡との新旧関係は不明である。

平面形は円形で、断面形は漏斗状で、斜めに掘り込まれた後に急激に垂直に掘り込む。長径2.49m、短径2.22m、確認面からの深さ1.25mを測る。長軸の方位はN－6°－Eを指す。

覆土は基本的に自然堆積である。第7層は崩落土である。

遺物は出土していない。

第11号井戸跡（第136図）

D－5グリッドに位置し、第1号溝跡と重複する。

平面形は円形で、断面形は漏斗状を呈し、西側は段差が激しい。足場確保の為のものである可能性がある。長径1.28m、短径1.16m、確認面からの深さ0.96mを測る。長軸の方位はN－45°－Wを指す。

覆土は埋め戻しによる堆積で、第1層は有機物、第3層は川砂を含む。

遺物は出土していない。

第12号井戸跡（第135図）

D－2・3グリッドに位置し、重複する第5号井戸跡、第4号溝跡よりも古い。

平面形は楕円形で、断面形は漏斗状で斜めに掘り込まれている。長径2.36m、短径1.79m、確認面からの深さ1.30mを測る。長軸の方位はN－51°－Wを指す。

覆土は埋め戻しによる堆積で、別の井戸を掘削した折に埋め戻された可能性が考えられる。第1～3層は水の影響を受けて酸化土を多く含む。

遺物は出土していない。

第13号井戸跡（第136図）

C－4グリッドに位置し、第1号溝跡と重複する。

平面形は円形で、断面形は筒型で急激に垂直に掘り込まれている。長径0.78m、短径0.72m、確認面からの深さ1.05mを測る。長軸の方位はN－44°－Wを指す。

覆土は第1層が埋め戻しである。水の影響により、酸化土を含む。第3・4層は自然堆積で、有機物を多量に含む。

遺物は出土していない。

第14号井戸跡（第136図）

C－4グリッドに位置し、第1号土壙と重複する。

平面形は円形で、断面形は筒型であるが、一度括れた後に広がりながら垂直方向に延びる。崩落が要因であろう。規模は、長径1.05m、短径1.02m、確認面からの深さ0.79mを測る。長軸の方位はN－45°－Eを指す。

覆土は、最上層を埋め戻している。第2層は水の影響を受けて酸化土が混入している。第3・4層は崩落土を含む自然堆積と考えられる。

出土遺物は覆土中から鉢、甕、曲物の底板が出土している。

第142図4～6・8は鉢である。4は在地産の片口鉢で、完形である。胎土は片岩を多量に含み、寄居町末野近隣で製作されたものであると思われる。5は常滑産の鉢で、外面に叩きを有する。6は鉢で、在地産である。胎土に主だった鉱物などの混入は認められない。9は曲物の底板で、数枚の板材を繋ぎ合わせて製作されていることから、蓋の可能性も考えられる。残存長は、長辺〔173〕cm、幅〔7.4〕cm、厚さ0.7cm、木取りは柾目であ

る。10は割材の杭である。先端を刃物で斜めに3～4回削ることにより尖らせている。残存長は〔52.1〕㎝、直径3.0㎝である。他に片岩を多量に含む瓦質土器が出土しているが図示出来なかった。

出土遺物から中世の掘削と考えられる。

第15号井戸跡（第137図）

C－4グリッドに位置し、重複する第11号溝跡より新しい。

平面形は円形、断面形は筒型で、斜めに掘り込み、急激に縦に掘削している。長径1.28m、短径1.09m、確認面からの深さ1.39mを測る。長軸の方位はN－40°－Wを指す。

覆土は第1・2層が埋め戻し又は崩落土である。3層は流れ込みないし崩落土である。第4・5層は自然堆積である。

出土遺物は第142図11のかわらけが出土している。体部は斜めに直線的に立ち上がり、口縁部に至り内側に屈曲する。底部回転糸切り、轆轤の回転方向は左回りである。胎土に角閃石と赤色粒子を多く含む。

第16号井戸跡（第137図）

D－4グリッドに位置し、重複する第10・57号溝跡より新しい。第3号掘立柱建物跡のPit 7との新旧関係は不明である。

平面形は楕円形で、断面形は筒型で、一度やや斜めに掘り進み、垂直方向に転換している。長径1.49m、短径1.26m、確認面からの深さ1.27mを測る。長軸の方位はN－13°－Eを指す。

覆土は概ね自然堆積で、水の影響により、酸化土を多く含む。

遺物は出土していない。

第17号井戸跡（第137図）

D－5グリッドに位置する。

平面形は円形、断面形は筒型で、斜めに掘り込んだ後に縦方向に掘削している。長径1.16m、短径1.12m、確認面からの深さ1.25mを測る。長軸の方位はN－15°－Wを指す。

覆土は、第1層が微細なブロックを多量に含む埋め戻しである。第2層以下は自然堆積であると考えられ、第4層では粘性の強い土の中に、有機物を含んでいた。

遺物は出土していない。

第18号井戸跡（第137図）

D－5グリッドに位置する。

平面形は円形を呈し、断面形は漏斗状で上半のやや斜めに傾斜している場所は、壁面の崩落によるものと推測される。垂直に掘り込んでいる。長径0.72m、短径0.68m、確認面からの深さ1.30mを測る。長軸の方位はN－9°－Wを指す。

覆土は自然堆積による埋没で、第1・2層は水の影響を受けて酸化した土を含んでいた。また、第2層は崩落土を含む自然堆積層と考えられる。第3層以下は水の影響によるものなのか粘性が強かった。

遺物は出土していない。

第19号井戸跡（第137図）

E－7グリッドに位置する。

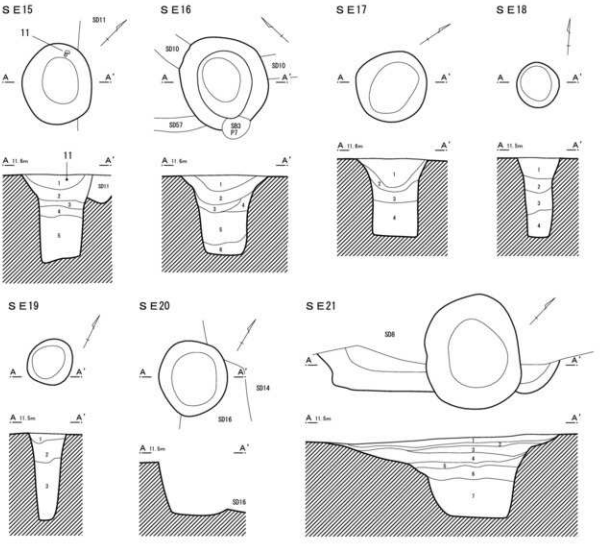
平面形は円形、断面形は筒型で、縦方向に掘り込む。長径0.78m、短径0.69m、確認面からの深さ1.37mを測る。長軸の方位はN－14°－Eを指す。

覆土は第2層が埋め戻しによる層である。また、その下層に位置する第3層もブロックを多量に含んでおり、埋め戻されている可能性が高い。他は自然堆積である。

遺物は出土していない。

第20号井戸跡（第137図）

E－7グリッドに位置し、第14・16号溝跡と重



第15号井戸跡
1　褐色土　黄褐色粘土ブロック(1cm程度)やや多量。褐色粘土ブロック(5mm程度)やや多量。酸化鉄少量
2　褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2cm)多量。褐色粘土ブロック(2～5mm多量。1～2cm多量)。酸化鉄やや多量
3　暗黄灰色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)多量。酸化鉄やや多量
4　暗黄灰色土　灰褐色粘土ブロック(5mm程度)少量
5　暗灰色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。灰褐色粘土ブロック(5mm)少量

第16号井戸跡
1　褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2mm)やや多量。酸化鉄やや多量
2　褐色土　黄褐色粘土ブロック(5～15mm)少量。酸化鉄やや多量
3　黄灰色土　暗灰色粘土ブロック(5～10mm)少量。酸化鉄少量
4　褐色土　黄褐色粘土ブロック(5～15mm)多量。酸化鉄やや多量
5　暗灰色土　灰褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。有機物含む。粘性あり
6　暗灰色土　灰褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。砂質

第17号井戸跡
1　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～3mm)やや多量。(1～2cm)少量。褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量。焼土粒子少量。埋め戻し
2　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(2mm程度)少量。褐色粘土ブロック(2～3mm)微量
3　暗灰色土　褐色粘土ブロック(2～5mm)少量
4　暗灰色土　灰褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。有機物含む。粘性有り

第18号井戸跡
1　褐色土　褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。酸化鉄多量
2　暗黄灰色土　褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量。酸化鉄多量
3　暗灰色土　灰色粘土ブロック(5mm程度)少量。
4　暗灰色土　灰色粘土ブロック(1cm程度)少量。粘性有り

第19号井戸跡
1　褐灰色土　褐色粘土ブロック(2mm程度)微量
2　褐灰色土　黄褐色粘土ブロック(1～5cm)やや多量。褐色粘土ブロック(1cm程度)多量。埋め戻し
3　褐灰色土　黄褐色粘土ブロック(5～15mm)やや多量。褐色粘土ブロック(5～15mm)やや多量

第21号井戸跡
1　褐色土　黄褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。酸化鉄やや多量。マンガン微量
2　褐色土　酸化鉄多量
3　褐色土　褐色粘土ブロック(5～8mm)少量。酸化鉄やや多量
4　褐色土　黄褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。暗灰色粘土ブロック(5mm程度)やや多量
5　灰褐色土　褐色粘土ブロック(5～15mm)やや多量
6　灰褐色土　灰褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。暗灰色粘土ブロック(5mm程度)少量。有機物含む。粘性有り
7　暗青灰色土　褐色粘土ブロック(5～9mm)微量。灰褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。粘性有り

0　2m
1:40

第137図　井戸跡（3）

複する。

平面形は円形で、断面形は漏斗状をなし、斜めに掘削した後に垂直方向に掘り込む。長径1.15m、短径1.06m、確認面からの深さ1.84mを測る。長軸の方位はN－31°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第21号井戸跡（第137図）

D・E－7グリッドに位置し、第8号溝跡と重複する。

平面形は楕円形で、井戸の掘形以外にテラスを持ち、井戸掘削時の掘方として井戸枠等を作成後に埋め戻された可能性が考えられる。しかし、土層観察では井戸枠等の痕跡は認められなかった。長径3.66m、短径1.44m、確認面からの深さ1.24mを測る。長軸の方位はN－45°－Wを指す。

覆土は褐色土を主体とし、第2層には水帯に起因する鉄分の沈着が認められた。第3～5層は埋め戻しによる堆積層で、第6・7層は自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

第22号井戸跡（第138図）

C－6グリッドに位置し、重複する第26号溝跡より新しい。

平面形は楕円形を呈し、断面形は筒型で、垂直方向に掘り込む。長径1.15m、短径0.96m、確認面からの深さ1.39mを測る。長軸の方位はN－22°－Eを指す。

覆土は褐灰色土を主体とし、壁の崩落もなく自然堆積であるが、第2層中には、砂が混入しており、この高さでの砂の混入は、他の井戸には認められていない。

出土遺物は第142図12に示した芯持ちの杭が出土している。先端のみの出土で、上部は発見出来なかった。先端部は、刃物を使用して複数面を数回にわたって削ることで尖らせている。直径は、胴部で5.5cm、先端部で3.6cm、残存長は〔35.7〕cmである。他に陶器小片が総重量41.5g出土している。

第23号井戸跡（第138図）

B－6グリッドに位置する。

平面形は円形で、断面の形状は筒型で、垂直に掘り込んでいた。長径0.88m、短径0.80m、確認面からの深さ1.22mを測る。長軸の方位はN－5°－Wを指す。

覆土は、第1～3層は埋め戻しによる層と考えられ、ブロックを多量に含む様々な土で埋め戻されたために互層となっている。その下層に位置する第4層は、壁の崩落が原因で堆積した層であると考えられる。

遺物は出土していない。

第25号井戸跡（第138図）

C－7グリッドに位置する。

平面形は楕円形で、断面形は筒型を呈す。長径1.66m、短径1.38mである。崩落の危険から筒底まで調査することが出来なかったが、確認面からの深さ1.43mまで調査を行った。長軸の方位はN－83°－Wを指す。

覆土は壁の崩落土を含む一括した埋め戻しと考えられ、井戸の機能を停止した後に、塵穴として利用されていた可能性がある。

出土遺物は磁器碗、陶器碗、皿、擂鉢、鉢、焙烙、砥石、漆器が出土している。

第142図13～17は磁器の碗である。13は外面に草花文が、14は外面に菊花文と、高台内に「福」の字が描かれている。19は瀬戸・美濃産の皿で、見込みに草花文を施す。22は信楽産の擂鉢である。擂り目は7本で、左回りに施文する。23は漆椀で、外面が黒色漆、内面が赤色漆である。外面の黒色漆は、上面に塗られた赤色漆が剥がれたことによって、下地の黒色漆のみが露出している可能性も

考えられる。残存率が悪く、口縁・底部ともに残っていない。残存長は器高〔3.5〕㎝である。24は砥石である。一面が欠損しているが、非常に使い込んでいる。他に磁器碗の小片、焼絡の小片が総重量275.7ｇ出土している。

第26号井戸跡（第138図）

Ｆ－４グリッドに位置し、第１号周溝状遺構と重複する。

平面形は円形で、断面形は漏斗状である。斜めに掘り込み、その後垂直に掘削している。径は1.34ｍ、確認面からの深さ1.31ｍを測る。主軸の方位はN－20°－Wを指す。

覆土は自然堆積と考えられ、第３層は鉄分の沈着した水性の層である。

出土遺物は、鉄製の鎌、棒状木製品が出土している。第143図25は芯持丸木の棒状木製品で、表面の皮を剥ぎ、中央部近くには目釘穴のような小規模な穴が開けられている。残存長〔30.7〕㎝で、直径1.9㎝である。26は鉄製の鎌で、先端は残存していない。刃先から緩やかな弧を描き、柄との接合部へと続く、接合部では柄の木片が一部残存していた。他に土師器の小片が２点ほど出土している。

第27号井戸跡（第138図）

Ｆ－４グリッドに位置し、重複する第１号周溝状遺構より新しい。

平面形は楕円形である。断面形は、片側が壁面の崩落に起因すると思われる漏斗状の形状を呈する。長径1.08ｍ、短径1.00ｍ、確認面からの深さ1.23ｍを測る。長軸の方位はN－31°－Wを指す。

覆土は明度の低い土を主体としている。その中で、第２層が崩落による堆積層と考えられる。第３・４層は自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

第28号井戸跡（第138図）

Ｅ－２グリッドに位置する。

平面形は円形で、断面形は筒型である。やや斜めに掘り込まれている。長径1.01ｍ、短径0.94ｍ、確認面からの深さ1.35ｍを測る。長軸の方位はN－０°を指す。

覆土は暗褐色土を主体とするが、他の性質のブロックが多量に混入し、壁の崩落土を含む埋め戻しにより形成されているものと考えられる。

遺物は出土していない。

第29号井戸跡（第138図）

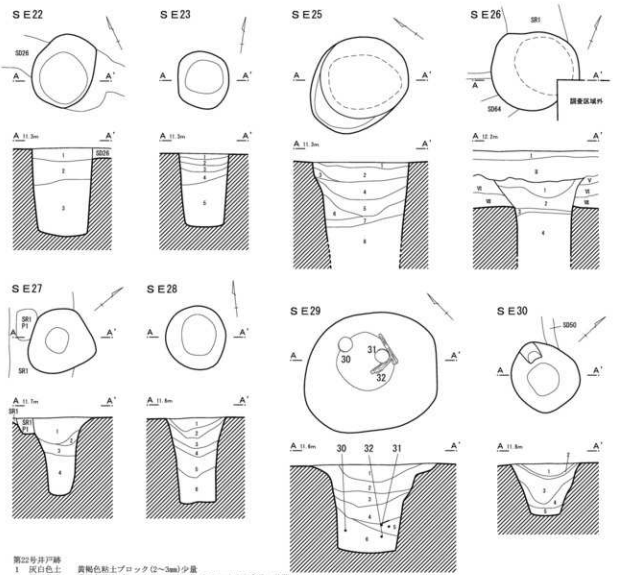
Ｆ－３グリッドに位置する。

平面形は楕円形で、断面形は漏斗状で片側に段を有する。長径2.20ｍ、短径1.92ｍ、確認面からの深さ1.39ｍを測る。長軸の方位はN－80°－Wを指す。

覆土は灰色を帯びた土を主体とし、下層に行くにしたがい暗い土となる。自然堆積で、第３層は鉄分が薄く沈着する水性層となっている。

出土遺物は鉢、焼絡、曲物の底板、板状木製品、編み台が出土している。

第143図27～29は鉢である。27は在地産の鉢で、指頭痕が明瞭に残る。30・31は曲物の底板である。30は表面に工具による削りが僅かに残存している。直径17.4㎝、厚さ1.2㎝、木取りは柾目である。31は工具による削り調整の痕跡が僅かに残る。直径18.6㎝、厚さ1.0㎝、木取りは板目である。32は端部に削り出しの凸部が存在する板状木製品である。推定形は楕円形をしており、浅い盆である可能性が考えられる。残存長は、長辺〔21.5〕㎝、短辺〔6.7〕㎝、厚さ〔2.5〕㎝、板目である。33は編み台である。一方の側面に凹凸を設け、そこに藁などを掛けて縄を編んでいたものと推定される。規模は、長辺53.7㎝、短辺5.8㎝、厚さ2.3㎝である。他に土師器高坏の脚部が１点出土している。



第22号井戸跡
1　灰白色土　黄褐色粘土ブロック(2～3mm)少量
2　褐灰色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)少量,(2～3cm)やや多量。砂質
3　褐灰色土　黄褐色粘土ブロック(2～8mm)少量。粘性有り

第23号井戸跡
1　灰褐色土　灰白色粘土ブロック(3～5mm)多量。酸化鉄多量に沈着。粘性強い
2　淡黄灰色土　灰白色粘土ブロック(1cm程度)多量。酸化鉄多量に沈着。粘性強い
3　淡褐灰色土　黄灰色粘土ブロック(5～8mm)多量。酸化鉄多量に沈着。粘性強い
4　褐灰色土　黄灰色粘土ブロック(2～3mm)多量。酸化鉄多量に沈着。粘性強い
5　暗褐灰色土　暗褐灰色土とシルトやや多量。粘土からシルトへの変換点

第25号井戸跡
1　暗黄灰色土　浅黄A含む。酸化鉄多量に沈着
2　緑灰色土　黄灰色粘土ブロック(1cm程度)多量。有機物を含む
3　褐灰色土　黄灰色粘土ブロック(1cm程度)多量。炭化物(5～8mm)多量
4　暗緑灰色土　黄灰色粘土ブロック(1cm程度)少量。炭化物(5～8mm)少量
5　暗緑灰色土　黄灰色粘土ブロック(1cm程度)少量。有機物多量
6　暗褐灰色土　暗黄灰色シルトブロック(1cm程度)多量
7　暗褐灰色土　暗黄灰色シルトブロック(2～3cm)多量。粘性強い
8　暗灰色土　青灰色粘土ブロック(1～3cm)やや多量。粘性強い

第26号井戸跡
1　暗褐灰色土　黄灰色粘土ブロック(1cm程度)少量。炭化物(2～3mm)少量
2　暗灰色土　黄灰色粘土ブロック(2～3cm)少量
3　暗褐色土　酸化鉄の沈着層
4　暗灰色土　灰色粘土ブロック(1～5cm)微量

第27号井戸跡
1　暗褐色土　褐色粘土ブロック(2～3mm)やや多量。焼土(1～2mm)微量
2　褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)多量
3　暗灰色土　褐色粘土ブロック(1cm程度)微量。酸化鉄やや多量
4　暗灰色土　灰褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。酸化鉄やや多量

第28号井戸跡
1　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2cm)やや多量。
褐色粘土ブロック(5mm程度)やや多量
2　褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2cm)多量。
褐色粘土ブロック(5～8mm)やや多量。埋め戻し
3　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(5mm程度)やや多量。
酸化鉄やや多量
4　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。酸化鉄やや多量
5　灰色土　灰褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量。
暗灰色土ブロック(1～5cm)微量
6　暗灰色土　灰褐色粘土ブロック(2～7mm)少量。粘性やや有り

第29号井戸跡
1　灰色土　褐色粘土ブロック(5～10mm)微量
2　灰色土　褐色粘土ブロック(5～10mm、2～3cm)やや多量
3　灰色土　酸化鉄多量。酸化鉄沈殿層
4　灰褐色土　暗灰色粘土ブロック(1cm程度)微量。粘性有り
5　暗灰色土　褐色粘土ブロック(1cm程度)少量。粘性有り
6　暗灰色土　褐色粘土ブロック(5mm程度)微量。粘性有り

第30号井戸跡
1　黒灰色土　褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。焼土粒子(1～2mm)微量
2　黒灰色土　焼土ブロック(2～4mm)多量。灰化物(2～5mm)やや多量。
酸化鉄が層状に堆積
3　黒灰色土　褐色粘土ブロック(2～6mm)少量。
黄褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。
4　黒灰色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)多量。(1～3cm)やや多量
5　黒灰色土　黄褐色粘土ブロック(1～4mm)やや多量。
黒色土ブロック(1cm程度)少量

0　2m
1:80

第138図　井戸跡（4）

第30号井戸跡（第138図）

D－2グリッドに位置し、重複する第50号溝跡より新しい。

平面形は円形で、断面形は漏斗状である。長径1.12m、短径1.03m、確認面からの深さ1.14mを測る。長軸の方位はN－75°－Wを指す。

覆土は自然堆積による埋没で、他の井戸跡とは異なり、黒色の土によって形成されている。第2層は、焼土ブロックと炭化物が多量に混入する。第3層との境界付近では、水帯に起因する鉄分の沈着が薄く層状に認められた。第5層は崩落土を含む層と考えられる。

遺物は出土していない。

第31号井戸跡（第139図）

E・F－3グリッドに位置し、第38・39号溝跡より新しく、F－3グリッドPit8・9と重複する。

平面形は円筒形で、断面形は円筒形である。長径1.19m、短径1.10m、確認面からの深さ1.35mを測る。長軸の方位はN－45°－Eを指す。

覆土は褐色土を主体とし、第2層は鉄分の沈着が認められる。また、第3層は壁面の崩落土と考えられる。

遺物は出土していない。

第32号井戸跡（第139図）

E－3グリッドに位置する。

平面形は円形で、断面形は円筒形である。片側は崩落のためか、漏斗状となっている。長径1.13m、短径1.03m、確認面からの深さ1.24mを測る。長軸の方位はN－4°－Eを指す。

覆土は暗褐色土を主体とし、全層において水の影響を受けたことによる酸化土が含まれていたが、特に第1・3層中に多く認められた。

出土遺物は土師器小片が出土しているが図示出来なかった。

第33号井戸跡（第139図）

E－3グリッドに位置し、重複する第2号周溝状遺構より新しい。

平面形は円形で、断面形は漏斗状である。長径1.17m、短径1.11m、確認面からの深さ1.36mを測る。長軸の方位はN－9°－Eを指す。

覆土は暗褐色土を主体とし、第1・3層は埋め戻し又は壁の崩落土である。下層は自然堆積で、有機物を含む。

出土遺物は第143図34の砥石が出土している。石材は緑泥片岩で、片面を使用している。

第34号井戸跡（第139図）

D－3グリッドに位置し、重複する第32号溝跡より新しい。

平面形は方形で、垂直に掘り込まれている。長径1.33m、短径1.07m、確認面からの深さ0.83mを測る。長軸の方位はN－57°－Eを指す。

覆土は暗褐色土を主体とし、崩落も見られない自然堆積である。

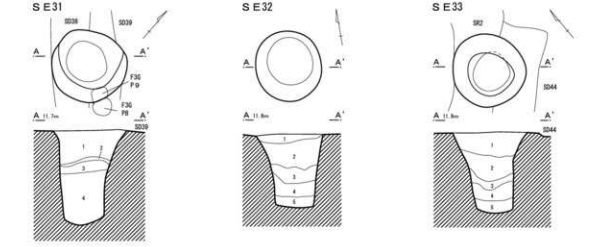
出土遺物は、土師器壺の小片が出土している。外面は斜めの刷毛調整後に磨き調整を行い、突帯を付着後に刻みを入れている。内面はやや横方向に近い斜めの刷毛調整である。他に器種不明の土師器小片が総重量38.9g出土している。第32号溝跡からの流れ込みであろう。

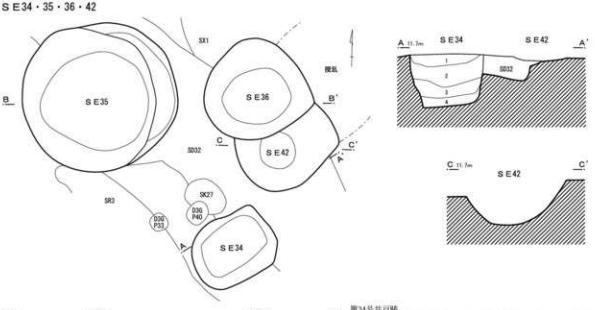
第35号井戸跡（第139図）

D－3グリッドに位置し、重複する第32号溝跡より新しい。

平面形は円形で、断面形は筒型である。テラスを有し、井戸枠設置後に埋め戻されたものと考えられる。長径2.46m、短径2.29m、確認面からの深さ1.47mを測る。長軸の方位はN－83°－Wを指す。

覆土は、第4・5・7～10層は井戸枠設置後の埋め戻し層と考えられ、第3・6層は壁の崩落





第31号井戸跡

1	褐色土	褐色粘土ブロック(5mm程度)少量
2	褐色土	酸化鉄多量
3	灰褐色土	褐色粘土ブロック(5mm程度)やや多量
4	灰褐色土	褐色粘土ブロック(2～5mm)微量。有機物含む

第32号井戸跡

1	暗褐色土	灰褐色土ブロック混入。黄褐色土ブロック(5cm程度)多量。酸化鉄多量
2	暗褐色土	黄褐色土ブロック(1～3cm)少量。酸化鉄少量
3	暗灰色土	褐色土ブロック状に混入。酸化鉄多量
4	暗灰色土	褐色土ブロックごく少量混入。酸化鉄少量
5	暗灰色土	砂混じり

第33号井戸跡

1	暗褐色土	黄褐色粘土ブロック(8～10mm)やや多量
2	暗褐色土	黄褐色粘土ブロック粒(3～5mm)まばらに含む
3	暗褐色土	黄褐色粘土ブロック(1cm)多量。埋め戻し
4	暗オリーブ灰色土	有機物多量。酸化鉄多量
5	暗オリーブ灰色土	有機物多量。酸化鉄多量。シルト質

第34号井戸跡

1	暗褐色土	褐色粘土ブロック(5mm程度)微量。焼土(2～5mm)微量
2	暗褐色土	褐色粘土ブロック(2mm～5mm)微量。焼土(2～7mm)微量 酸化鉄沪薄く沉殿
3	暗褐色土	褐色粘土ブロック(2～10mm)少量。黄褐色粘土ブロック(1cm程度)少量。炭化物(2～15mm)微量
4	暗灰色土	暗褐色土ブロック(1cm程度)微量

第35・36号井戸跡

1	暗褐色土	褐色粘土ブロック(3mm程度)微量
2	暗褐色土	褐色粘土ブロック(1～2cm)多量。黄褐色粘土ブロック(1～5cm)多量。埋め戻し
3	暗褐色土	褐色粘土ブロック(1cm程度)微量
4	褐色土	黄褐色粘土ブロック(2～5mm)多量。(1～2cm)多量 炭化物(2～5mm)微量。焼土(1～2mm)微量
5	褐色土	黄褐色粘土ブロック(1cm程度)微量。焼土(1～2mm)微量
6	暗褐色土	褐色粘土ブロック(2mm～2cm)微量 焦炭色土ブロック(1cm程度)やや多量
7	黒褐色土	褐色粘土ブロック(3mm程度)多量
8	黒褐色土	褐色粘土ブロック(1～2mm)多量。(5～10mm)微量
9	褐色土	黄褐色粘土ブロック(4～10cm)少量 黄色土ブロック(6～10mm)微量
10	褐色土	褐色粘土ブロック(3～10cm)少量。粘性やや有り
11	灰褐色土	褐色粘土ブロック(5～10mm)少量 黄褐色粘土ブロック(5～10mm)やや多量。酸化鉄多量
12	暗灰色土	暗緑色粘土ブロック(1～2cm)やや多量。粘性有り
13	暗緑色土	暗灰色土ブロック(1～4cm)少量。粘性有り
14	褐色土	褐色粘土ブロック。暗褐色粘土ブロック 褐色粘土ブロック(5～10cm)多量。埋め戻し
15	灰褐色土	暗灰色粘土ブロック。黄灰色粘土ブロック 青緑白色粘土ブロック(5～10cm)多量。粘性有り 埋め戻し

0　2m
1:40

第139図　井戸跡（5）

土、第11層は鉄分の沈着層、他は壁の崩落土を含む自然堆積と考えられる。

出土遺物はかわらけ、陶器皿が出土している。

第143図35はかわらけで、表面の風化が著しい。36は瀬戸・美濃産の陶器皿で、内面に灰釉が掛かり淡い緑色に発色している。他に土師器小片が出土している。総重量は10.7ｇである。

第36号井戸跡（第139図）

Ｄ－３グリッドに位置し、重複する第42号井戸跡・第32号溝跡より新しい。

平面形は円形で、断面形は筒型である。長径1.76ｍ、短径1.60ｍ、確認面からの深さ1.12ｍを測る。長軸の方位はＮ－84°－Ｗを指す。

覆土は一括で埋め戻されていた。

出土遺物は、磁器碗、平瓦が出土しているが図示出来なかった。総重量は930.1ｇである。

第37号井戸跡（第140図）

Ｄ－２グリッドに位置し、第32号溝跡と重複する。

平面形は円形、断面形は円筒状で、急激に垂直方向に掘削する。長径1.13ｍ、短径1.05ｍ、確認面からの深さ1.26ｍを測る。長軸の方位はＮ－14°－Ｅを指す。

遺物は出土していない。

第38号井戸跡（第140図）

Ｆ－５グリッドに位置し、第25号溝跡と重複する。

平面形は円形、断面は筒型で、垂直に掘り込んでいる。長径0.94ｍ、短径0.86ｍ、確認面からの深さ1.46ｍを測る。長軸の方位はＮ－45°－Ｗを指す。

覆土は褐色土を主体とし、その間に他の性質の土を挟む互層となっている。また、基本的にブロックの混入が多い。第２層は水帯に起因する鉄分の沈殿が認められた。

出土遺物は土師器小片が２点ほど出土している。

第39号井戸跡（第140図）

Ｃ・Ｄ－２グリッドに位置し、重複する第32号溝跡より新しい。

平面形は円形で、断面形は円筒状であるが片側はやや斜めに傾斜する。長径1.69ｍ、短径1.47ｍ、確認面からの深さ1.35ｍを測る。長軸の方位はＮ－32°－Ｗを指す。

覆土は暗灰色土を主体とするが、上層に行くに従い明度を増す。第２層は鉄分の沈着が認められ、第４・６層は崩落土による堆積である。

遺物は出土していない。

第40号井戸跡（第140図）

Ｅ－３グリッドに位置し、重複する第32号溝跡より新しい。

平面形は円形で、断面形は筒型である。長径0.76ｍ、短径0.69ｍ、確認面からの深さ1.15ｍを測る。長軸の方位はＮ－０°を指す。

覆土は暗褐色土を主体としている。第２層は壁面の崩落によるブロックが混入しているが、それも含めて自然に埋没したものと考えられる。

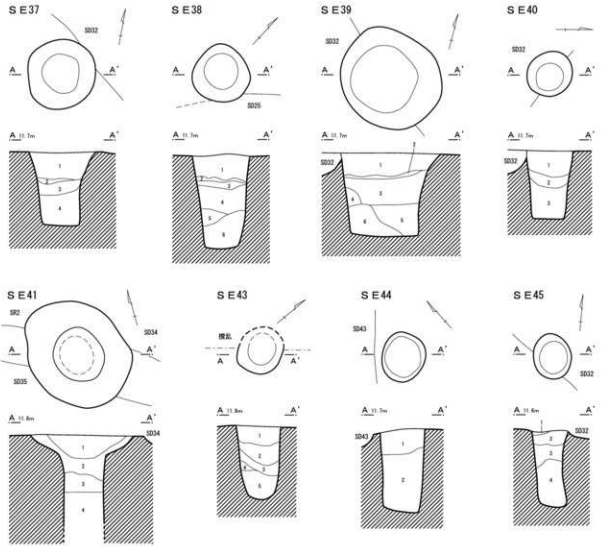
遺物は出土していない。

第41号井戸跡（第140図）

Ｅ－３グリッドに位置し、第35号溝跡より新しい。また、第２号陥溝状遺構とも重複している。

平面形は楕円形である。断面形は漏斗状を呈し、緩やかな傾斜でテラス状に掘り込み、その後に垂直方向に掘削する。形状から井戸枠が設けられていた可能性があるが、土層観察では確認できなかった。長径1.85ｍ、短径1.49ｍ、確認面からの深さ1.24ｍを測る。長軸の方位はＮ－27°－Ｗを指す。

出土遺物は、瓦質土器の小片が１点出土してい



第37号井戸跡
1　黒褐色土　褐色粘土ブロック(1～15mm)やや多量
2　黒褐色土　酸化鉄多量に沈着
3　黒褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～10mm)微量。酸化鉄少量
4　黒褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2mm)少量。有機物含む

第38号井戸跡
1　褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)少量
2　褐色土　酸化鉄の沈殿層
3　灰褐色土　褐色粘土ブロック(2～5mm)やや多量。酸化鉄多量
4　暗灰色土　褐色粘土ブロック(2～5mm)やや多量。酸化鉄やや多量
5　暗灰色土　灰褐色粘土ブロック(1～5mm)やや多量。粘性有り
6　褐色土　灰褐色粘土ブロック(10cm程度)やや多量
暗灰色土ブロック(5cm程度)やや多量

第39号井戸跡
1　褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～3cm)やや多量
炭化物(2～5mm)少量
2　褐色土　褐色粘土ブロック(2～5mm)多量、(1cm程度)やや多量
酸化鉄沈着層
3　暗灰色土　青灰色粘土ブロック(1～2cm)やや多量。粘性有り
4　暗灰色土　青灰色粘土ブロック(1～5cm)多量。粘性有り
粘土ブロックが斑点状に混入
5　暗灰色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。(1～2cm)少量。粘性有り
6　暗灰色土　青灰色粘土ブロック(5cm程度)多量
黄褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。粘性有り

第40号井戸跡
1　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(5mm程度)微量
粘土ブロック(2～5mm)微量
2　暗褐色土　灰褐色粘土ブロック(2～5mm)やや多量。粘性有り
3　暗灰色土　灰褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。粘性有り

第41号井戸跡
1　褐色土　黄褐色粘土ブロック(1cm程度)少量。炭化物(2mm程度)少量
2　褐色土　黄褐色粘土ブロック(2mm～1cm)やや多量
3　灰褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2cm)微量。灰褐色粘土ブロック
(1～2cm)少量。酸化鉄やや多量。粘性有り
4　灰褐色土　黄褐色粘土ブロック(2mm程度)微量。灰褐色粘土ブロック
(2～5mm)微量。粘性有り

第43号井戸跡
1　暗褐色土　褐色粘土ブロック(5～10mm)微量
2　暗褐色土　褐色粘土ブロック(2～3mm)やや多量
3　暗褐色土　褐色粘土ブロック(1～3mm)多量。(1～2cm)多量。埋め戻し
4　暗褐色土　褐色粘土ブロック(1～5mm)少量
5　暗灰色土　褐色粘土ブロック(1cm程度)少量。粘性有り

第44号井戸跡
1　褐灰色土　黄灰色粘土ブロック(5～8mm)少量
2　暗褐灰色土　緑灰色粘土ブロック(5～8mm)多量

第45号井戸跡
1　灰褐色土　褐色土粒子微量。砂粒多量
2　褐色土　褐色土ブロック多量。砂質ブロック少量。マンガン多量
酸化鉄多量
3　灰褐色土　褐色土ブロック(5cm程度)少量。酸化鉄多量
4　灰色土　酸化鉄少量。砂質

0　2m
1:80

第140図　井戸跡（6）

るが図示出来なかった。

第42号井戸跡（第139図）

D－3グリッドに位置し、重複する第32号溝跡より新しく、第36号井戸跡より古い。

平面形は楕円形で、断面形は椀形である。径は1.59m、確認面からの深さ0.68mを測る。主軸の方位はN－57°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第43号井戸跡（第140図）

E－3グリッドに位置する。

平面形は円形で、断面形は円筒状である。長径0.75m、短径0.67m、確認面からの深さ1.17mを測る。長軸の方位はN－14°－Eを指す。

覆土は暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。

第44号井戸跡（第140図）

D－1・2グリッドに位置する。

平面形は円形で、断面形は筒型である。長径0.79m、短径0.69m、確認面からの深さ1.31mを測る。長軸の方位はN－37°－Eを指す。

覆土は褐色土と暗褐灰色土の互層である。

出土遺物は、陶器碗、鉢、擂鉢、甕が出土している。

第143図37は肥前産の磁器碗で、外面の腰部には草花文が描かれている。38は甕で、外面には刻印がある。外面及び内面の口縁部には、鉄緑釉が掛けられている。39は瀬戸・美濃産の鉢で、口縁部は折り返しているため肥厚している。40は堺産の擂鉢である。擂り目は8本で右回りに施文している。他に陶器小片が1点出土している。

第45号井戸跡（第140図）

D－3グリッドに位置し、重複する第32号溝跡より新しい。

平面形は円形で、断面形は筒型である。長径0.73m、短径0.60m、確認面からの深さ1.19mを測る。長軸の方位はN－13°－Wを指す。

覆土は灰褐色土を主体とする自然堆積である。

出土遺物は土師器小片、擂鉢の底部小片が出土しているが図示出来なかった。

第48号井戸跡（第141図）

D－4グリッドに位置する。第2号掘立柱建物跡Pit4と重複しており、平面観察において本井戸跡の方が新しいことが確認出来た。

平面形は円形で、断面形は円筒形である。長径0.77m、短径0.69m、確認面からの深さ1.40mを測る。長軸の方位はN－22°－Eを指す。

覆土は暗灰色土と灰色土が主体である。全体的に鉄分を多く含む。第1・2層は、大きな2～5cm程のブロックを多く含み、一度に埋め戻された事が考えられる。

遺物は出土していない。

第49号井戸跡（第141図）

E－5グリッドに位置する。

平面形は円形で、断面形は緩い漏斗状である。長径0.81m、短径0.71m、確認面からの深さ1.27mを測る。長軸の方位はN－11°－Eを指す。

覆土は全体的に灰色をおびている。平らな堆積をしており、第1層が埋め戻しである他は、自然堆積である。

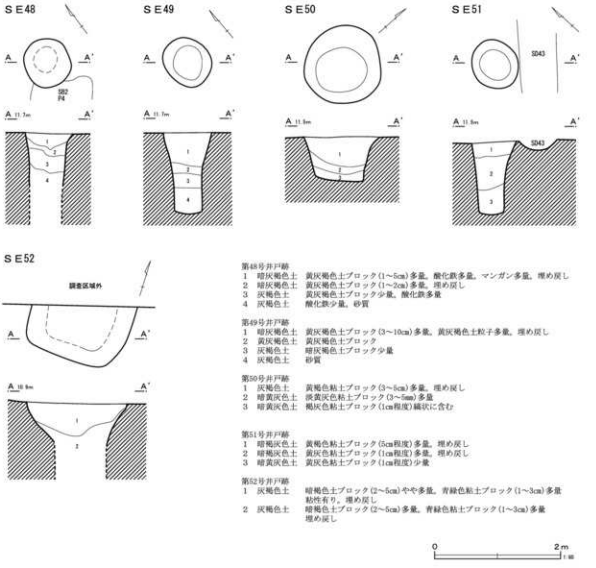
遺物は出土していない。

第50号井戸跡（第141図）

D－1グリッドに位置する。

平面形は円形で、断面形は緩い漏斗状である。長径1.27m、短径1.19m、確認面からの深さ0.75mを測る。長軸の方位はN－33°－Wを指す。

覆土は暗黄灰色土を主体とし、最上層を埋め戻している。



第141図　井戸跡（7）

遺物は出土していない。

第51号井戸跡（第141図）

D－1グリッドに位置する。

平面形は円形で、断面形は筒型である。長径0.81m、短径0.73m、確認面からの深さ1.15mを測る。長軸の方位はN－4°－Eを指す。

覆土は暗褐灰色土が主体である。

遺物は出土していない。

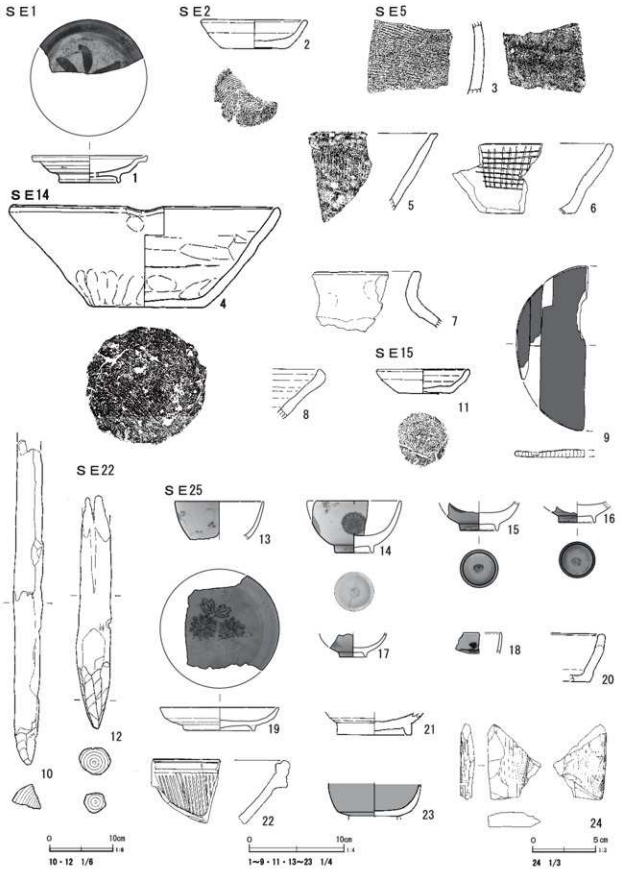
第52号井戸跡（第141図）

A－7グリッドに位置する。

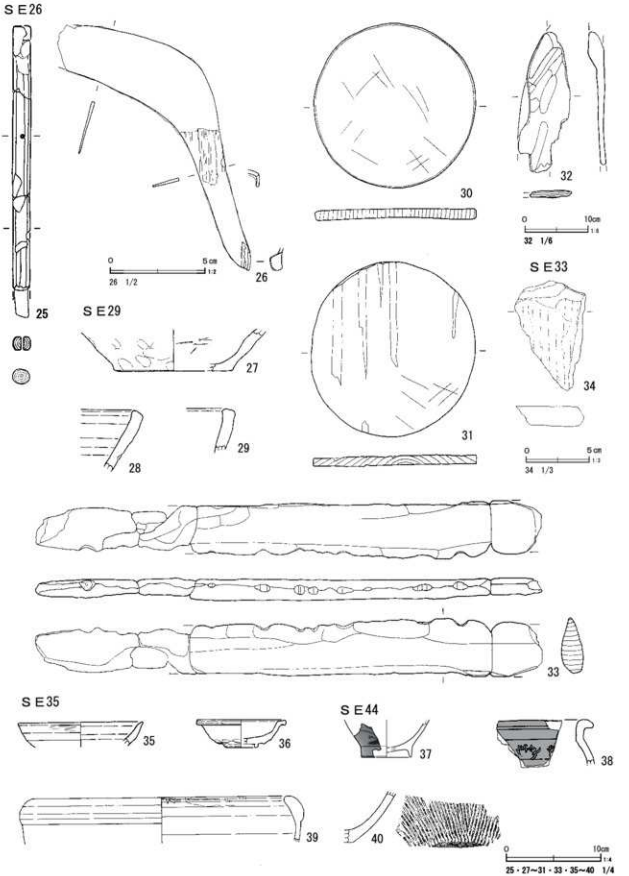
平面形は方形で、断面形は漏斗状である。長軸長は1.55m、確認面からの深さ0.97mを測る。主軸の方位はN－89°－Wを指す。

覆土はいずれも埋め戻しによる埋没と考えられる。

遺物は出土していない。



第142図　井戸跡出土遺物（1）



第143図　井戸跡出土遺物（2）

第29表　井戸跡出土遺物観察表（第142・143図）

番号	遺構名	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考	図版
1	1	陶器	皿	瀬戸美濃	35	(12.2)	6.6	2.9	灰黄	良好	長石釉	轆轤	貼り付け高台	見込み：鉄絵花卉 口縁：渦	17世紀前葉 見込み：高台跡 畳付：目跡 青磁碁　折縁皿	55・1
2	2	かわらけ	皿		30	(11.2)	6.4	[3.1]	にぶい黄橙	普通	―	轆轤		底部：回転糸切り	内面底部煤付着	53・1
3	5	須恵器	甕	南比企	5	縦[7.8]	横[8.4]	厚さ1.1	暗灰	良好	自然釉				転用硯か	60・1
4	14	陶器	鉢	在地	95	28.8	12.4	10.6	灰白	普通	焼締	輪積			14世紀 風化著しい	56・3
5	14	陶器	鉢	常滑	5	―	―	[8.1]	にぶい黄橙	良好	焼締	輪積				60・1
6	14	瓦質土器	片口鉢	在地	10	―	―	[7.3]	灰白	普通	―	輪積			14世紀後半	60・1
7	14	瓦質土器	甕	在地	5	―	―	[6.0]	黒褐	良好	―	輪積			二次的被熱 一部赤色化	
8	14	瓦質土器	片口鉢	在地	5	―	―	[5.2]	灰	普通	焼締	轆轤			14世紀　風化	60・1
11	15	かわらけ	皿		90	10.0	5.5	2.5	橙	良好	―	轆轤	底部：回転ヘラ削り		角閃石多	53・2
13	25	磁器	碗	肥前	20	(9.6)	―	[4.0]	灰白	良好	透明釉	轆轤		胴：草花文	18世紀中葉	60・1
14	25	磁器	碗	肥前	50	(9.5)	(3.8)	5.5	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台	高台脇：一重圏線 高台際：二重圏線 胴：菊花文 高台内：渦「福」	18世紀中葉～後葉 漆で修復か 畳付：砂粒 くらわんか碗	53・9
15	25	磁器	碗	肥前	10	―	―	[3.1]	灰色 緻密	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台	高台脇：一重圏線 高台際：一重圏線 胴：菊花文 高台内：渦「福」	18世紀中葉～後葉 畳付：砂粒 くらわんか碗	60・1
16	25	磁器	碗	肥前	70	―	3.8	[2.3]	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台	台脇：一重圏線 高台際：二重圏線 高台内：渦「福」	18世紀前葉～中葉 畳付：砂粒 くらわんか碗	60・1
17	25	磁器	碗	肥前	40	―	2.8	2.6	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台		18世紀代か 畳付：砂粒	
18	25	陶器	碗	京信楽か	5	―	―	[2.2]	灰白	普通	透明釉 鉄絵	轆轤		胴：草花文	18世紀中～後葉 貫入多	
19	25	陶器	皿	瀬戸美濃	70	(12.5)	7.5	2.5	淡黄	良好	灰釉 鉄釉	轆轤	貼り付け高台	見込み：草花文	17世紀末～18世紀中葉　貫入多 畳付：砂粒微量 掻絵皿	55・2
20	25	瓦質土器	焙烙		5	―	―	[5.0]	にぶい黄橙	普通	―	轆轤			内外面煤付着	
21	25	陶器	壺	瀬戸美濃	90	―	(7.8)	[2.3]	灰黄	良好	鉄釉	轆轤	貼り付け高台		19世紀前半 見込：砂粒　有耳壺	
22	25	陶器	擂鉢	堺か	5	―	―	[6.8]	赤褐	良好	焼締	轆轤	櫛目7本/条		18世紀中葉～後半 砥石に転用	60・1
24	25	石製品	砥石		長さ 6.00cm　幅 4.20cm　厚さ 1.15cm　重さ 28.0 g　粘板岩										硯の転用品か	
26	26	鉄製品	鎌		刃長[15.5]cm　刃幅 3.2cm　背厚 0.2cm　重さ 31.16 g										木質部分わずかに残る	69・3
27	29	瓦質土器	鉢	在地	30	―	(12.5)	[4.4]	褐灰	普通	―	輪積			14世紀　内面磨耗	
28	29	瓦質土器	鉢	在地	5	―	―	[6.5]	灰褐	良好	―	輪積			15世紀　風化著しい	
29	29	瓦質土器	鉢	在地	5	―	―	[4.5]	灰	普通	―	轆轤			15世紀　内外面煤付着	
34	33	石製品	砥石		長さ 8.7cm　幅 5.6cm　厚さ 1.6cm　重さ 109.7 g　緑泥片岩										板碑の転用品か	
35	35	かわらけ	皿		15	(13.0)	―	[2.5]	にぶい橙	普通	―	轆轤			油煙付着 灯明皿に転用	

番号	遺構名	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考	図版
36	35	陶器	皿	瀬戸美濃	30	(9.2)	(3.5)	2.9	灰	普通	灰釉	轆轤	貼り付け高台		17世紀代か 貫入多　折縁皿	55 - 3
37	44	磁器	碗	肥前	20	—	(5.2)	[4.0]	灰白緻密	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台	縁：草花文か 見込み：一重圏線銘か		
38	44	陶器	甕	不明	10	—	—	[4.9]	灰黄	普通	銅緑釉 鉄漿	轆轤		胴：刻印有		60 - 1
39	44	陶器	鉢	瀬戸美濃	15	(27.2)	—	[4.9]	にぶい黄橙	普通	灰釉	轆轤				60 - 1
40	44	陶器	擂鉢	堺	5	—	—	[5.4]	赤褐	普通	焼締	轆轤	卸目8本/条			60 - 1

（4）土壙

52基の土壙を検出した。遺物の出土が少ないため、明確な時期の判断は難しいが、覆土から当該期に属す遺構と判断した。

遺構は調査区全域から検出されているが、調査区中央部の建物跡群がある地域では希薄なあり方を示している。

第１号土壙（第144図）

C－４グリッドに位置する。

平面形は楕円形で、断面形は逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長径0.96m、短径0.89m、確認面からの深さ0.29mを測る。長軸の方位はN－43°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第２号土壙（第144図）

E－６グリッドに位置し、第19号溝跡よりも古い。

平面形は楕円形、断面形は逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長径0.87m、短径0.41m、確認面からの深さ0.24mを測る。長軸の方位はN－45°－Wを指す。

遺物は第149図１の肥前産の磁器碗が１点出土している。

第３号土壙（第145図）

C－６グリッドに位置し、第14号溝跡と重複する。甕の体部から下の部分が設置された状態で出土した。

平面形は隅丸方形で、断面形は漏斗状である。検出長は長軸長0.79m、短軸長0.75m、確認面からの深さ0.50mを測る。長軸の方位はN－80°－Wを指す。

甕の設置状況は、土壙を掘削した後に胴部下端を埋めて設置したものと推測される。甕は体部が細かく割れていたが、体部の破片はまとまって出土しており、破砕した後に埋め戻されたのでは無く、土圧により内側に崩れたものと考えられる。口縁部の破片は数点出土したに止まる。

設置されていた甕を第149図２に示した。常滑産の大甕で、体部下端に「中」の墨書が逆位に書かれている。

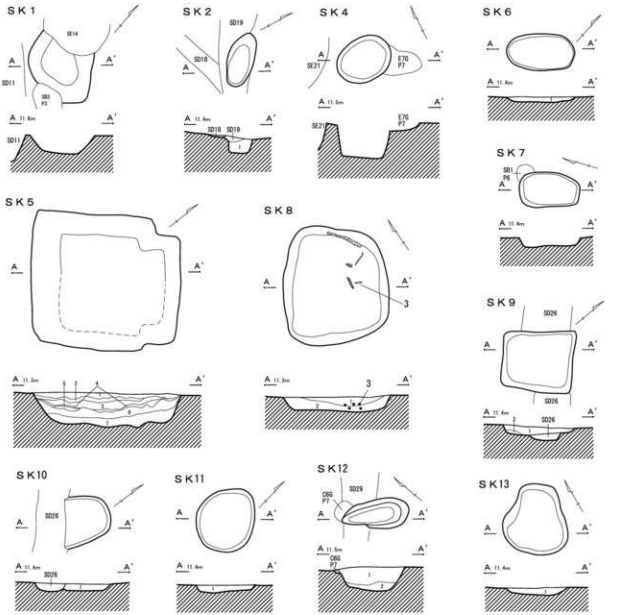
第４号土壙（第144図）

E－７グリッドに位置する。

平面形は楕円形、断面形はやや垂直に立ち上がる逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長径0.86m、短径0.68m、確認面からの深さ0.55mを測る。長軸の方位はN－69°－Eを指す。

遺物は出土していない。



第2号土壙
1　青灰色土　酸化鉄やや多量。粘性有り

第5号土壙
1　灰褐色土　黄灰色粘土ブロック(3～5mm)多量。酸化鉄多量に沈着。浅間A含む
2　暗黄灰色土　灰褐色土中に暗黄灰色粘土ブロック(5～8mm)多量。酸化鉄多量に沈着
3　暗黄灰色土　粘土層。泥土状の有機物少量
4　暗黄灰色土　泥土状の有機物多量。酸化鉄多量に沈着
5　明黄灰色粘土
6　灰白色粘土　泥土状の有機物少量
7　明褐灰色土　灰白色粘土ブロック(3～5mm)多量。シルト質

第6号土壙
1　灰褐色土　褐色粘土(5mm程度)やや多量。浅間Aやや多量

第8号土壙
1　灰褐色土　浅間A混入。酸化鉄多量
2　暗黄灰色土　灰褐色土ブロック(1～2mm)少量。有機物多量

第9号土壙
1　褐色土　褐色粘土(2～9mm)微量。焼土(1～2mm)微量。浅間Aやや多量
2　灰褐色土　褐色粘土(2～3mm)やや多量。白色粒子少量

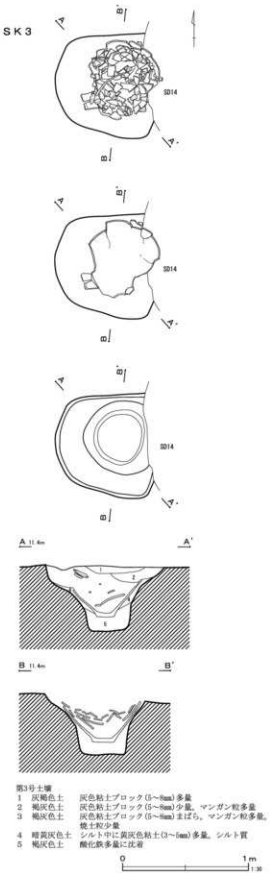
第10号土壙
1　褐色土　酸化鉄多量。浅間A少量

第11号土壙
1　灰褐色土　黄灰色粘土(1cm程度)少量。有機物少量。酸化鉄多量

第12号土壙
1　灰褐色土　黄灰色粘土(1cm程度)少量。浅間A少量。有機物少量
酸化鉄多量
2　灰褐色土　有機物微量。酸化鉄少量

第13号土壙
1　灰褐色土　黄灰色粘土ブロック(3～5mm)少量。浅間A含む

第144図　中・近世の土壙（1）



第145図　第３号土壙遺物出土状況

第５号土壙（第144図）

Ｂ－６グリッドに位置する。

平面形は不整形、断面形は逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長径2.36m、短径2.10m、確認面からの深さ0.52mを測る。長軸の方位はN－40°－Eを指す。

覆土は有機物を多量に含み、上層では鉄分の沈着が激しかった。また、第１層中には、多量に沈着している鉄分と伴に、浅間Ａ軽石の混入が認められた。

遺物は出土していない。

第６号土壙（第144図）

Ｄ－６グリッドに位置する。

平面形は楕円形、断面形は扁平な椀形で、底面は平坦である。

検出長は長径1.08m、短径0.58m、確認面からの深さ0.08mを測る。長軸の方位はN－48°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第７号土壙（第144図）

Ｄ－６グリッドに位置する。第１号掘立柱建物跡Pit６と重複するが新旧関係を確認することが出来なかった。

平面形は隅丸方形、断面形は逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長軸長0.96m、短軸長0.54m、確認面からの深さ0.14mを測る。長軸の方位はN－17°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第８号土壙（第144図）

Ｃ－６グリッドに位置する。

平面形は隅丸方形で、断面形は逆台形である。検出長は長軸長1.83m、短軸長1.63m、確認面から

の深さ0.25mを測る。長軸の方位はN－33°－Eを指す。

覆土は有機物を含み、鉄分の沈着が多い。最上層には浅間A軽石が認められた。

出土遺物は木製品が出土している。

第149図３は竹製のヘラ状製品で、側面を削っている。規模は長辺〔8.6〕㎝、短辺1.7㎝、厚さ0.3㎝である。

他に磁器の口縁部小片、焙烙の小片が出土しているが図示出来なかった。

第９号土壙（第144図）

Ｂ－６グリッドに位置する。重複する第26号溝跡よりも新しい。

平面形は方形、断面形は逆台形で、底面は東に向かい斜めに立ち上がる。

検出長は長軸長1.12m、短軸長0.90m、確認面からの深さ0.12mを測る。長軸の方位はN－41°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第10号土壙（第144図）

Ｂ－６グリッドに位置する。重複する第26号溝跡よりも古い。

平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈すると推測され、底面は平坦である。

検出長は長径0.74m、短径0.72m、確認面からの深さ0.10mを測る。長軸の方位はN－20°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第11号土壙（第144図）

Ｃ－６グリッドに位置する。

平面形は楕円形、断面形は扁平な逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長径1.05m、短径0.91m、確認面からの深さ0.13mを測る。長軸の方位はN－０°を指す。

出土遺物は、陶器碗が出土している。第149図４は瀬戸・美濃産の陶器皿である。高台部のみの出土で、見込みには目跡が残る。他に土師器小片、擂鉢小片が出土しているが図示出来なかった。総重量は41.4gである。

第12号土壙（第144図）

Ｃ－６グリッドに位置する。

平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、底面は東に向かい緩やかに傾斜する。

検出長は長径1.06m、短径0.44m、確認面からの深さ0.34mを測る。第29号溝跡と重複する。長軸の方位はN－52°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第13号土壙（第144図）

Ｃ－６・７グリッドに位置する。

平面形は不整形、断面形は扁平な椀形である。底面は平坦である。

検出長は長径1.10m、短径0.67m、確認面からの深さ0.12mを測る。長軸の方位はN－34°－Eを指す。

覆土は灰褐色土で、浅間A軽石の白色粒子を含んでいた。

出土遺物は磁器碗、陶器碗、擂鉢、焙烙が出土している。

第149図５は陶器碗の口縁部である。６は肥前系の磁器で外面に草文と思われる文様が描かれている。７は瀬戸・美濃産の擂鉢の口縁部小片で、擂り目を右回りに施文している。８は焙烙の小片である。他に磁器小片、陶器小片、焙烙の小片が出土しているが図示出来なかった。総重量は106.5gである。

第14号土壙（第146図）

Ｃ－６グリッドに位置する。

平面形は円形、断面形は箱型で垂直に立ち上が

る。

検出長は長径1.45m、短径1.33m、確認面からの深さ0.65mを測る。長軸の方位はN－0°を指す。

遺物は出土していない。

第18号土壙（第146図）

F－3グリッドに位置する。調査区外へと延びているため、全体を調査することは出来なかった。第1号周溝状遺構と重複する。

平面形は楕円形、断面形は逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長径1.71m、短径1.12m、確認面からの深さ0.41mを測る。長軸の方位はN－69°－Eを指す。

覆土は、褐色土を主体とする。第1層から第3層まではブロックを多く含むが、第1層が埋め戻し、第2・3層が壁面の崩落土を含む自然堆積である。第4・5層は自然堆積であると思われる。

遺物は出土していない。

第20号土壙（第146図）

E－8グリッドに位置する。

平面形は楕円形、断面形は箱型で、底面は平坦である。

検出長は長径1.16m、短径1.06m、確認面からの深さ0.20mを測る。長軸の方位はN－90°－Eを指す。

底面の直上には、水の影響のためか鉄分の沈着が各所に認められた。

出土遺物は骨片が出土している。

第21号土壙（第146図）

E－3グリッドに位置する。

平面形は不整形で、断面形は箱型を呈する。

検出長は長径0.91m、短径0.44m、確認面からの深さ0.09mを測る。長軸の方位はN－88°－Eを指す。

黒褐色土の覆土中には、焼土粒子が混入していた。

遺物は出土していない。

第22号土壙（第146図）

E－3グリッドに位置し、E－3グリッドPit77・78と重複する。

平面形は方形、断面形は扁平な逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長径1.14m、短径0.90m、確認面からの深さ0.06mを測る。長軸の方位はN－52°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第25号土壙（第146図）

D－4グリッドに位置する。

平面形は方形、断面形は逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長径0.90m、短径0.71m、確認面からの深さ0.52mを測る。長軸の方位はN－50°－Wを指す。

覆土は黒色土を主体とする。第1層はブロックを多量に含む埋め戻しの層である。第2層では炭化物粒子が多量に認められ、第3層中には焼土が少量混入していた。第4層は流れ込みによる層で、壁面の崩落土を多量に含む。

遺物は出土していない。

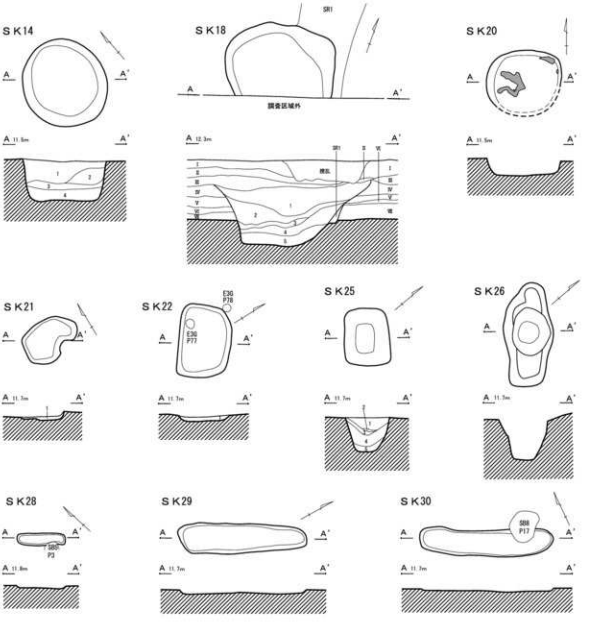
第26号土壙（第146図）

C－4グリッドに位置する。

平面形は不整方形に浅く掘り込み、さらに円形に掘削している。断面形は中部で段を有する逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長軸長0.76m、短軸長0.60m、確認面からの深さ0.60mを測る。第15号溝跡と重複する。長軸の方位はN－50°－Wを指す。

遺物は出土していない。



第14号土壙
1　褐色土　黄褐色粘土ブロック(1cm程度)やや多量。焼土(2mm程度)少量。酸化鉄やや多量
2　灰褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2cm)少量。酸化鉄やや多量
3　暗灰色土　灰色粘土ブロック(1～2cm)少量。粘性有り
4　灰褐色土　灰色粘土(1cm程度)やや多量。砂質

第18号土壙
1　褐色土　黄褐色粘土ブロック(5～10mm)多量。埋め戻し
2　褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)やや多量
3　褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)多量。暗褐色土ブロック(1cm程度)少量。酸化鉄多量
4　灰色土　褐色粘土ブロック(5mm程度)やや多量。黒褐色土ブロック(1～2mm)少量。焼土(2～5mm)少量。酸化鉄やや多量
5　黒褐色土　黄褐色粘土(1～2mm)やや多量。(1～3cm)少量

第21号土壙
1　黒褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～7mm)多量。焼土(1～2mm)微量

第22号土壙
1　黒褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～7mm)多量。焼土(1～2mm)微量

第25号土壙
1　黒褐色土　黄褐色粘土(1～5cm)やや多量。埋め戻し
2　黒色土　灰褐色粘土(1mm程度)やや多量。炭化物(1～2mm)多量
3　黒色土　灰褐色粘土(1～2mm)少量。(5～8mm)やや多量。焼土(1～3mm)
4　黒色土　黄褐色粘土(1～5mm)多量。褐色粘土(1～3mm)多量。焼土(1～3mm)少量。混れ込み
5　黒色土　灰褐色粘土(1～2mm)やや多量。(1～2cm)やや多量。褐色粘土(5mm程度)少量

0　2m
1:40

第146図　中・近世の土壙（2）

第28号土壙（第146図）

Ｅ－３グリッドに位置し、第５号掘立柱建物跡Pit3と重複する。

平面形は長方形、断面形は浅い逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長軸長0.76m、短軸長0.18m、確認面からの深さ0.04mを測る。長軸の方位はN－43°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第29号土壙（第146図）

Ｅ－４グリッドに位置する。

平面形は長方形、断面形は浅い逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長軸長2.00m、短軸長0.40m、確認面からの深さ0.07mを測る。長軸の方位はN－30°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第30号土壙（第146図）

Ｄ－４グリッドに位置し、第８号掘立柱建物跡Pit17と重複する。

平面形は歪な長方形を呈している。断面形は浅い逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長軸長2.10m、短軸長0.40m、確認面からの深さ0.04mを測る。長軸の方位はN－64°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第31号土壙（第147図）

Ｄ－８グリッドに位置する。

平面形は方形、断面形は椀型を呈し、底面はやや丸みをおびている。

検出長は長軸長1.33m、短軸長0.63m、確認面からの深さ0.15mを測る。長軸の方位はN－28°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第32号土壙（第147図）

Ｄ－７グリッドに位置し、Ｄ－７グリッドPit2と重複する。

平面形は長方形、断面形は箱型で、底面は平坦である。

検出長は長軸長0.80m、短軸長0.36m、確認面からの深さ0.09mを測る。長軸の方位はN－42°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第34号土壙（第147図）

Ｆ－４グリッドに位置し、第63・65号溝跡と重複する。

深度が遺構確認面まで達していないために表土掘削時に消失してしまっていたが、調査区南西に設定した拡張区において約半分のみ調査を行うことが出来た。

平面形は円形である。東側を第65号溝跡によって削平されているため、断面形の全体像は不明だが、箱型になるものと推定する。

検出長は長径0.91m、短径1.64m、確認面からの深さ0.39mを測る。長軸の方位はN－25°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第35号土壙（第147図）

Ｅ－１グリッドに位置する。

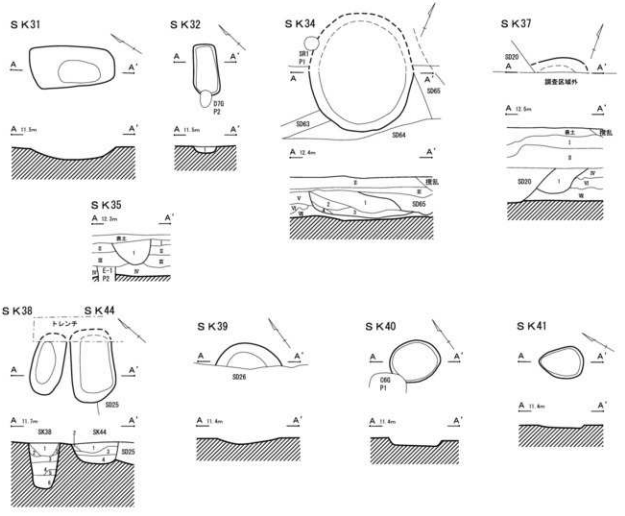
調査区壁面において確認し、遺構の深度が確認面まで達していなかったことから平面観察は行えなかった。規模、形状から土壙としたが、溝跡の可能性も残す。

検出長は長径0.60m、第1層及び2層からの深さは0.36mを測る。

遺物は出土していない。

第37号土壙（第147図）

Ｅ－７グリッドに位置する。



第37号土壙
1　明褐色土　黄灰色粘土ブロック(1cm程度)多量

第38号土壙
1　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2mm)少量。焼土(2mm程度)微量
2　暗褐色土　褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量
3　暗褐色土　灰褐色粘土ブロック(5～10mm)少量
4　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～10mm)微量
5　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。酸化鉄沈殿　粘性有り
6　暗青灰色土　褐色粘土ブロック(2～3mm)多量。酸化鉄多量

第44号土壙
1　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量。(1～2cm)少量。酸化鉄やや多量
2　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(5mm程度)やや多量。褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量
3　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～3mm)少量
4　黒褐色土　黄褐色粘土ブロック(2mm程度)少量。(1cm程度)微量

第32号土壙
1　灰褐色土　褐色粘土ブロック(1～2mm)少量

第34号土壙
1　明褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～3mm)黄褐色粘土粒子(1～2mm)多量
2　褐灰色土　黄褐色粘土ブロック(2～3mm)やや多量
3　暗灰色土　黄褐色粘土ブロック(5～8mm)をランダムに含む。埋め戻し
4　暗褐灰色土　黄褐色粘土粒子(1～3mm)少量

第35号土壙
1　灰褐色土　浅間Aを含む

0　2m
1:80

第147図　中・近世の土壙（3）

大部分が調査区外まで延び、さらに西側を第20号溝跡によって削平されているため、遺構の全体像は確認出来なかった。

検出長は長径0.82m、短径0.23m、確認面からの深さ0.39mを測る。長軸の方位はN－73°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第38号土壙（第147図）

E－5グリッドに位置する。

平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。

検出長は長径0.87m、短径0.48m、確認面からの深さ0.69mを測る。長軸の方位はN－64°－Wを指す。

覆土は暗褐色を主体とする明度の低い土による堆積である。第1層の中には、焼土が微量に含まれていた。第2層は壁面の崩落によるものと考えられる。また、第5層と第6層の間には、水の影響による鉄分の沈着が認められた。

遺物は出土していない。

第39号土壙（第147図）

C－6グリッドに位置し、第26号溝跡と重複する。

平面形は円形を呈するものと推定される。断面形は扁平な椀型で、底面はやや丸みを持つ。

検出長は長径1.04m、短径0.32m、確認面からの深さ0.08mを測る。長軸の方位はN－53°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第40号土壙（第147図）

C－6グリッドに位置し、C－6グリッドPit1と重複する。

平面形は楕円形、断面形は箱型を呈し、底部は平坦である。

検出長は長径0.80m、短径0.66m、確認面からの深さ0.08mを測る。長軸の方位はN－54°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第41号土壙（第147図）

C－6グリッドに位置する。

深度がほとんどないため平面形は不明であるが、現状では楕円形を呈している。断面形は扁平な逆台形、底面は南に向かい緩やかに傾斜する。

検出長は長径0.72m、短径0.48m、確認面からの深さ0.04mを測る。長軸の方位はN－30°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第42号土壙（第147図）

E－3グリッドに位置し、第5号掘立柱建物跡Pit2、第61号溝跡と重複する。

平面形は不整形、断面形は逆台形で、底面はやや丸みを持つ。

検出長は長径1.13m、短径0.45m、確認面からの深さ0.23mを測る。長軸の方位はN－49°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第43号土壙（第147図）

E－5グリッドに位置し、第9・10号溝跡と重複する。

平面形は不整形、断面形は逆台形で、底面は平坦である。

検出長は長径1.08m、短径0.54m、確認面からの深さ0.32mを測る。長軸の方位はN－51°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第44号土壙（第147図）

E－5グリッドに位置し、第25号溝跡を切って

掘削されている。

平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。

検出長は長径0.96m、短径0.67m、確認面からの深さ0.31mを測る。長軸の方位はN－51°－Eを指す。

覆土は暗褐色土を主体とする自然堆積である。第1層には、壁面の崩落土と考えられるブロックが多く混入していた。第2層は壁面の崩落土であると考えられる。第3・4層は壁面の崩落土を少量含む自然堆積である。

遺物は出土していない。

第45号土壙（第148図）

B－6グリッドに位置し、第26号溝跡と重複する。

平面形は不整形で、断面形は扁平な逆台形、底面は南に向かい緩やかに傾斜する。

検出長は長径0.58m、短径0.46m、確認面からの深さ0.17mを測る。長軸の方位はN－39°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第46号土壙（第148図）

C－3グリッドに位置し、第7号掘立柱建物跡Pit 1、第4号溝跡と重複する。覆土の詳細を確認することが出来なかったが、第7号掘立柱建物跡Pit 1を調査時に検出していることから、古墳時代に属す可能性がある。

平面形は不整形、断面形は逆台形で、底部は平坦である。

検出長は長径0.82m、短径0.26m、確認面からの深さ0.35mを測る。長軸の方位はN－44°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第47号土壙（第148図）

C－3グリッドに位置し、第46号溝跡と重複する。

平面形は不整形、断面形は逆台形で、底部は平坦である。

検出長は長径0.64m、短径0.22m、確認面からの深さ0.29mを測る。長軸の方位はN－45°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第48号土壙（第148図）

D－3グリッドに位置する。第7号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。

平面形は不整形で、断面形は逆台形になるものと推測される。底部は平坦である。

検出長は長径0.86m、短径0.39m、確認面からの深さ0.21mを測る。長軸の方位はN－41°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第49号土壙（第148図）

D－3グリッドに位置し、遺物集中及びD－3グリッドPit27と重複する。

平面形は不整形で、断面形は逆台形を呈し、底部は中央部で段を有し、そこから東に向かい緩やかに傾斜する。

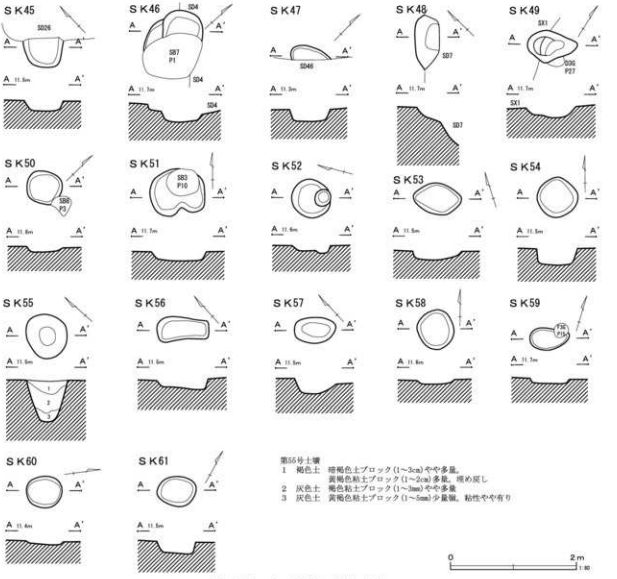
検出長は長径0.80m、短径0.50m、確認面からの深さ0.18mを測る。長軸の方位はN－34°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第50号土壙（第148図）

D－4グリッドに位置する。第8号掘立柱建物跡Pit 3と重複するが、前後関係を確認することは出来なかった。

平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈し、底部は平坦である。



第148図　中・近世の土壙（４）

検出長は長径0.56m、短径0.52m、確認面からの深さ0.09mを測る。長軸の方位はN－71°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第51号土壙（第148図）

D－4グリッドに位置し、第３号掘立柱建物跡Pit10と重複する。

平面形は不整形で、断面形は逆台形、底部は平坦である。

検出長は長径0.86m、短径0.18m、確認面からの深さ0.17mを測る。長軸の方位はN－90°を指す。

遺物は出土していない。

第52号土壙（第148図）

D－4グリッドに位置する。

平面形は円形、断面形は逆台形で、底部は平坦である。Pitが切り合うが、遺構にともなうものであるかは不明である。

検出長は長径0.62m、短径0.58m、確認面からの深さ0.13mを測る。長軸の方位はN－63°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第53号土壙（第148図）

D−6グリッドに位置する。

平面形は楕円形である。断面形は箱型を呈し、底部は西へ向かい緩やかに傾斜する。

検出長は長径0.65m、短径0.50m、確認面からの深さ0.16mを測る。長軸の方位はN−18°−Wを指す。

遺物は出土していない。

第54号土壙（第148図）

D−7グリッドに位置する。

平面形は楕円形である。断面形は箱型を呈し、底部は平坦である。

検出長は長径0.64m、短径0.64m、確認面からの深さ0.28mを測る。長軸の方位はN−0°を指す。

遺物は出土していない。

第55土壙（第148図）

E−2グリッドに位置する。

平面形は円形、断面形は逆台形で、底部は平坦である。

検出長は長径0.71m、短径0.63m、確認面からの深さ0.66mを測る。長軸の方位はN−63°−Eを指す。

覆土は褐色土と灰色土が主体である。第1層には埋め戻しの可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

第56号土壙（第148図）

E−7グリッドに位置する。

平面形は隅丸方形で、断面形は箱型を呈し、底部は平坦である。

検出長は長軸長0.82m、短軸長0.35m、確認面からの深さ0.15mを測る。長軸の方位はN−41°−Wを指す。

遺物は出土していない。

第57号土壙（第148図）

E−7グリッドに位置する。

平面形は楕円形で、断面形は逆台形で、底部は平坦であるが、東側に向かい緩やかに立ち上がる。

検出長は長径0.65m、短径0.41m、確認面からの深さ0.25mを測る。長軸の方位はN−44°−Wを指す。

遺物は出土していない。

第58号土壙（第148図）

F−3グリッドに位置する。

平面形は円形で、断面形は箱型を呈し、底部は平坦である。

検出長は長径0.64m、短径0.56m、確認面からの深さ0.08mを測る。長軸の方位はN−0°を指す。

遺物は出土していない。

第59号土壙（第148図）

F−3グリッドに位置し、F−3グリッドPit15と重複するが、新旧関係を確認することは出来なかった。

平面形は楕円形、断面形は箱型を呈し、底部は平坦である。

検出長は長径0.64m、短径0.35m、確認面からの深さ0.07mを測る。長軸の方位はN−40°−Eを指す。

遺物は出土していない。

第60号土壙（第148図）

D−1グリッドに位置する。

平面形は円形、断面形は箱型を呈し、底部は平坦である。

検出長は長径0.57m、短径0.49m、確認面からの深さ0.06mを測る。長軸の方位はN−68°−Eを指す。

遺物は出土していない。

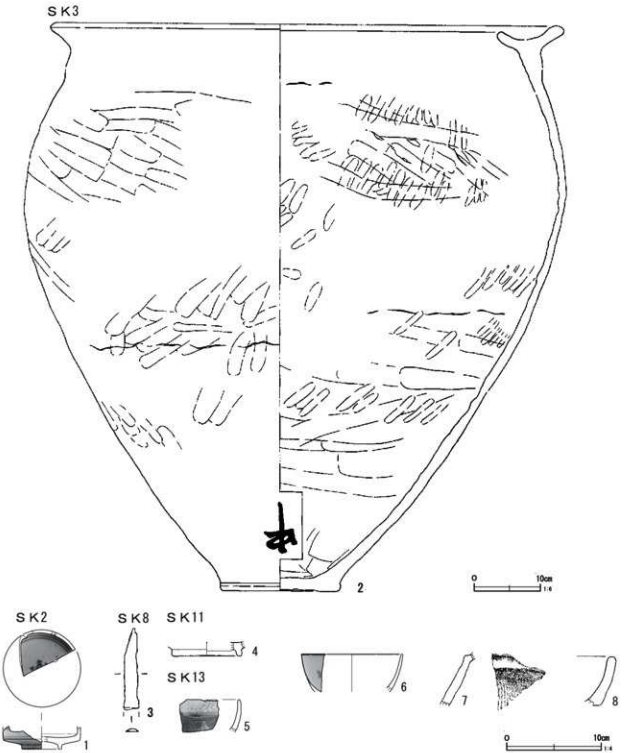
第61号土壙（第148図）

E−7グリッドに位置する。

平面形は楕円形、断面形は箱型を呈し、底部は平坦である。

検出長は長径0.62m、短径0.46m、確認面からの深さ0.19mを測る。長軸の方位はN−37°−Wを指す。

遺物は出土していない。



第149図　中・近世の土壙出土遺物

第30表　中・近世土壙出土遺物観察表（第149図）

番号	遺構名	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土色調	焼成	釉薬	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考	図版
1	2	磁器	碗	肥前	20	—	(4.2)	[2.4]	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台	高台縁：一重圏線 高台際：二重圏線 見込み：二重圏線 五弁花文	筒形碗	58・5
2	3	陶器	甕	常滑	60	(78.0)	18.0	(89.6)	明赤褐色	普通		輪積			体部上半黒褐色 外面下端墨書「中」	58・3・4
4	11	磁器	皿	瀬戸美濃	5	—	(7.4)	[1.5]	灰白	良好	灰釉	轆轤	削り出し高台		18世紀代か 見込：円錐ピン跡	
5	13	陶器	碗	瀬戸美濃	5	—	—	[3.5]	灰白	良好	灰釉 鉄釉	轆轤		胴：沈線	18世紀中頃～19世紀初頭 外面：上下掛け分け 貫入多	
6	13	磁器	碗	肥前	15	(10.8)	—	[4.0]	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤		胴：草文か	18世紀代か	58・5
7	13	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	5	—	—	[5.5]	灰白 緻密	良好	鉄釉	轆轤			18世紀代後半か 見込み：目跡	58・5
8	13	瓦質土器	焙烙		5	—	—	[5.2]	灰白	普通	—	轆轤			外面煤付着	

（5）火葬土壙

調査区西部で２基の火葬土壙を検出した。いずれも浅いため、上部構造までは分からなかった。建物跡などの多い地点での発見であるため、両者が併存していたとは考え難く時期的な隔たりがあるものと考えられる。

第１号火葬土壙（第150図）

Ｄ－２グリッドに位置し、平面観察により第７号溝跡を掘り込んで掘削されている。

平面形はT字型をなしており、中心部はやや窪む。規模は、長軸0.83m、短軸0.29m、確認面からの深さ0.15mを測る。長軸の方位はN－29°－Wを指す。煙道または送風口とみられる突出部が設けられている。規模は、長辺0.42m、深さ0.05mを測る。焼け方は一様ではなく、中央部とその南側では一部床面まで被熱により赤く焼き締まっていた。中央部よりも北側は焼けた痕跡を残していない。また、突出部周辺及び東側面が最も焼け締まっていた。

覆土は３層が確認された。最下層の第３層は炭化材層で、その上に流れ込みの第２層、第３層に乗るようにして第１層があり、上部の壁面が崩落したものと考えられる焼土粒子とともに、人骨片及び炭化材が確認された。

遺物は出土していない。

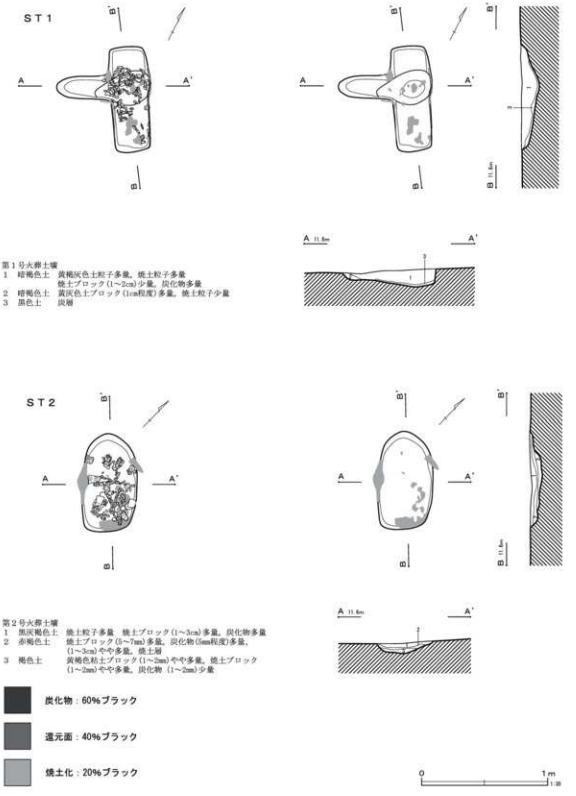
第２号火葬土壙（第150図）

Ｆ－３グリッドに位置する。煙道又は送風口と考えられる突出部を確認することは出来なかったが、南西部に一部被熱による焼き締まりが激しい場所があり、その場所に突出部が存在していた可能性があるものと推定される。

規模は、長軸長0.77m、短軸長0.44m、確認面からの深さ0.13mを測る。長軸の方位はN－42°－Wを指す。焼け方は南西部では床面まで焼けており、北側では焼けた痕跡は確認できなかった。南西壁面は強く焼けている。

覆土は３層が確認され、第３層の壁面の崩落による層の上に、焼土ブロックと炭化物を多量に含む第２層が乗る。人骨片と炭化材はこの第２層の上に乗り、第１層中にも含まれていた。

遺物は出土していない。



第1号火葬土壙
1　暗褐色土　黄褐灰色土粒子多量，焼土粒子多量
　　焼土ブロック(1～2cm)少量，炭化物多量
2　暗褐色土　黄灰色土ブロック(1cm程度)多量，焼土粒子少量
3　黒色土　炭層

第2号火葬土壙
1　黒灰褐色土　焼土粒子多量　焼土ブロック(1～3cm)多量，炭化物多量
2　赤褐色土　焼土ブロック(5～7mm)多量，炭化物(5mm程度)多量，
　　(1～3cm)やや多量，焼土層
3　褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2mm)やや多量，焼土ブロック
　　(1～2mm)やや多量，炭化物 (1～2mm)少量

第150図　第1・2号火葬土壙

（6）溝跡

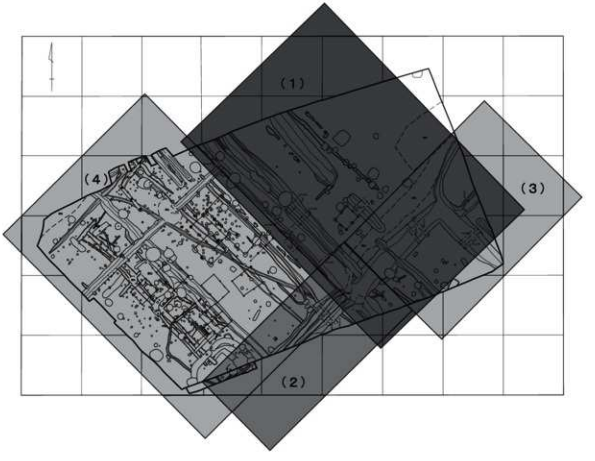
55条の溝跡を検出した。調査区のほぼ全域で認められるが、南北に縦断するように掘削されているものが多い。これらの方位はおおよそで一致しているため、自然堤防に軸方位の規制を受ける形で掘削されているものと推定される。また、馬の背状の自然堤防を横切る形で掘削されている溝跡は少ない。

遺構の時期は中世と近世に大きく分けられるが、そのほとんどが近世以降の掘削と考えられる。

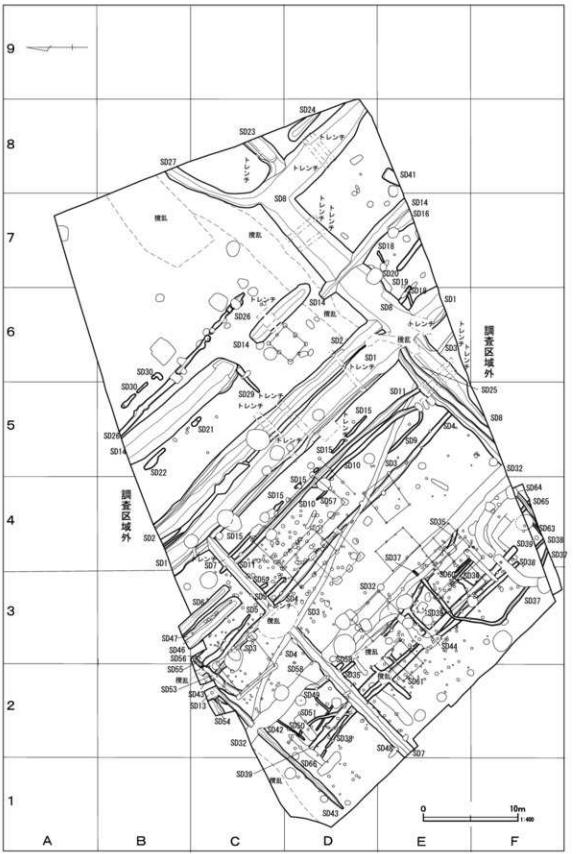
第１・２号溝跡や、第８号溝跡のように幅の広いものがあり、区画溝であった事が考えられる。

一部の溝跡は調査時間の短縮のために重機による掘削を行っている。また、発掘調査は東側から行っているため、遺構番号の掲載が順序通りとはなっていない。

出土した遺物は小片も多くあり、図示出来なかったものも多い。図示出来なかった遺物については、重量を計測し記載した。



第151図　中・近世溝跡全体図区割り図



第152図　中・近世溝跡全体図

第１号溝跡（第153図）

Ｂ－４、Ｃ－４・５、Ｄ－５・６グリッドから、Ｅ－６グリッドへと南北に延び、調査区外へと延びている。第２号溝跡よりも古く、第３号井戸跡よりも新しい。第１・２・４・8～11・13号井戸跡、第７・８・18・25号溝跡と重複する。

調査は作業の効率を加味し、上層土を重機で掘り下げてから行った。

規模は、全長39.34m、幅は最大で3.55m、最小で3.10m、確認面からの深さは、最大で0.92m、最小で0.60mである。走行方位はＮ－45°－Ｗを指す。断面形はほぼ逆台形である。第３層中には帯水の影響による鉄分の沈着が認められた。この第３層以上の層では壁面の崩落土とともに大型のブロックが多量に含まれており、埋め戻しを行っている事が考えられる。

出土遺物は、磁器碗、陶器皿、小型坏、焙烙、砥石、下駄、木製容器が出土している。

第155図１は肥前産の磁器碗で、口縁から体部にかけての破片である。外面に樹文を描く。２は瀬戸・美濃産の皿で、内外面に油煙が付着している。灯明皿に転用されていたことが推定される。３～７は瀬戸・美濃産の皿である。４は見込みに鉄釉によって三巴文が施文されている。８・９は瀬戸・美濃産の香炉である。９は断面に擦痕が認められ、砥石として転用している事が考えられる。10は瀬戸・美濃産の小型坏である。12・13は肥前唐津産の鉢である。12は内面に鉄緑釉が掛けられている。13は目跡の明瞭に残る内面に、三島手が施文されている。14～17は在地産の鉢である。16は二次的な被熱を受けて外面が赤色化している。18は在地産の甕である。19・20、第156図図21～23は焙烙で、器高は浅く、内耳は底面に接合されている。20には補修するための穴が穿たれていた。24～27は砥石である。28は下駄の歯部で、残存長の長辺10.3㎝、短辺8.6㎝、厚さ1.7㎝の板目である。狭端部中央には逆台形に接合用の臍が施されていた。29・30は木製容器であると考えられる。29の残存長は底径11.4㎝、器高〔2.6〕㎝、底部の厚さ1.9㎝、木取りは柾目である。内外面は黒色に焦げている。30は残存長している径が〔6.2〕㎝、厚さ1.3㎝で、木取りは柾目である。内面は外縁に沿って段を形成する。それに囲まれるようにして中心部には摘み状の突部がある。内外面は黒色漆が塗られ、その上に赤色漆が重ね塗りされている。

他に陶器片、焙烙の小片が出土しているが図示出来なかった。総重量は969.3ｇである。

第２号溝跡（第153図）

Ｂ－４、Ｃ－４・５、Ｄ－５グリッドから、Ｄ－６、Ｅ－６グリッドへと南北に延び、第８号溝跡に接続する様に消滅する。もう一方で、直接の重複を確認出来なかったが、第25号溝跡と接続して調査区内を西へＬ字に区画する溝となる可能性もある。いずれにしても敷地を区画する溝であろう。また、第１号溝跡よりも新しい事が土層観察により判明しており、埋没後に掘り直されたものと考えられる。近隣には第14号溝跡が並行する。他に、第10号井戸跡と重複するが、新旧関係は確認出来なかった。

調査は、作業効率を加味して上層を重機で掘り下げている。

規模は、全長32.48m、幅は最大で2.60m、最小で1.76m、確認面からの深さは、最大0.69m、最小0.50mである。走行方位はＮ－45°－Ｗを指す。

断面形は斜めに掘削した後に急激に垂直に掘るいわゆる箱薬研である。覆土は第１・２層で埋め戻しが行われており、４層は崩落土である。第２層中には水帯による鉄分の沈着が認められた。

出土遺物はかわらけ、磁器碗、陶器碗、皿、壺、鉢、擂鉢、焙烙、甕、砥石、煙管、小柄、漆器椀、下駄が出土している。

第157図31・32はかわらけである。31は深身で、

底部から直線的に立ち上がる。胎土には片岩を含む。底部は糸切りの後に指で撫で調整を施す。轆轤の回転方向は左回りである。33～36は肥前産の磁器碗である。34は外面に草文、35は草花文が描かれている。37・38は瀬戸・美濃産の陶器碗である。38は古瀬戸の碗で、側面に漆継ぎが認められる。茶器として伝世した可能性がある。39は肥前唐津産の天目茶碗である。40は瀬戸・美濃産の天目茶碗である。41は信楽産と思われる碗の口縁部である。42～48は瀬戸・美濃産の皿である。49・50は瀬戸・美濃産の壺である。49は有耳壺の可能性がある。51は肥前唐津産の鉢で、釉薬は流し掛けである。52は瀬戸・美濃産の小型碗で、口縁から胴部上半にかけて灰釉が掛かる。第157・158図53～61は擂鉢で、53が丹波産の可能性があり、54・55・58～61が信楽産、56が備前産、57が瀬戸・美濃産と思われる。54は卸目７本で、右回りに施文している。55は卸目７本で左回りに施文している。56は卸目７本で左回りに施文している。57は卸目10本で左回りに施文している。58は卸目11本で左回りに施文している。59は卸目7本で左回りに施文している。62～68は焙烙である。内耳は内面底部に接合する。69は山茶碗系の片口鉢と考えられる。擦痕が内外面に認められ、砥石に転用していた可能性がある。70は甕の胴部片で、「卅」の刻書がある。71・72は砥石である。73は片面に擦痕がある緑泥片岩である。74は連歯下駄であるが、後方は歯の取り付け口から折れているために残存していない。残存長は、長辺（21.9）㎝、幅7.7㎝、厚さ3.3㎝、木取りは柾目である。75は漆器椀である。内面赤色漆、外面黒色漆で３方向に桔梗の家紋が入る。器高〔7.1〕㎝である。76は小柄で、刃は柄の部分で折れ曲がっていた。77・78は煙管の雁首と吸い口である。

他に陶磁器破片、焙烙の小片、貝殻の破片が少量出土している。総重量1090.4ｇ出土している。

第４号溝跡（第171図）

Ｃ－２・３、Ｄ－３・４グリッドから、Ｅ－４・５グリッドへと南北に延びる。第２号掘立柱建物跡の桁行東側列、第５・12号井戸跡、第３・７・25・53号溝跡よりも新しく、第43号溝跡よりも古い。他に第４号掘立柱建物跡Pit10、第７号掘立柱建物跡Pit１・２、第８号掘立柱建物跡Pit５、第13号掘立柱建物跡Pit２、第46号土壙と重複する。

規模は、全長38.45m、幅は最大で1.02m、最小で0.57m、確認面からの深さは、最大で0.12m、最小で0.04mである。走行方位はN－45°－Wを指す。断面形は逆台形で総じて浅い。

出土遺物は第160図79に示した皿と思われる瀬戸・美濃産の陶器片が１点出土しているのみである。

第５号溝跡（第171図）

Ｃ－２・３グリッドから、Ｄ－３グリッドへと南北に延びる。第１号集石土壙、第７・53・55号溝跡と重複し、近隣には第６・46・47号溝跡が並行する。

規模は、全長12.85m、幅は最大で0.69m、最小で0.37m、確認面からの深さは、最大で0.08m、最小で0.02mである。走行方位はN－50°－Wを指す。

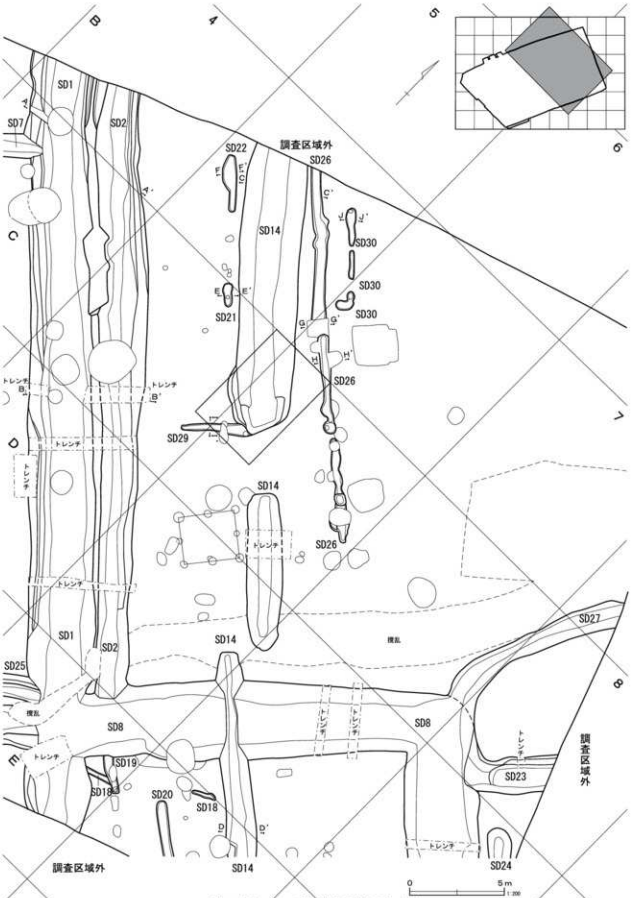
遺物は出土していない。

第６号溝跡（第171図）

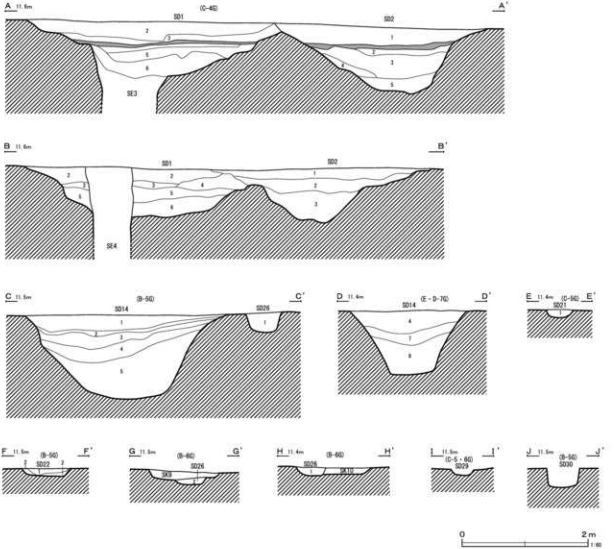
Ｂ－３グリッドから、Ｃ－３グリッドへと南北に延び、北は調査区外へ直行する第７号溝跡の手前で途切れる。また、Ｃ－３グリッドPit29・30と重複する。

規模は、全長6.99m、幅は最大で0.84m、最小0.79m、確認面からの深さは、最大で0.80m、最小0.71mを測る。走行方位はN－45°－Wを指す。

遺物は第160図80の瀬戸・美濃産の天目茶碗が



第153図　中・近世溝跡区割り図（1）



第1号溝跡
1　明褐色土　　黄灰色粘土ブロック(3～5mm)多量。黄褐色粘土ブロック(0.5～1mm)やや多量
2　明褐色土　　黄褐色粘土ブロック(5～8mm)含む
3　暗褐色土　　黄褐色粘土ブロック(1cm程度)多量
4　暗色土　　黄褐色粘土ブロック(2～3mm)やや多量
5　褐灰色土　　黄灰色粘土ブロック(2～3mm)多量
6　褐灰色土　　灰白色粘土ブロック(5～8mm)多量

第2号溝跡
1　褐灰色土　　灰白色粘土粒(1～2mm)多量
2　褐灰色土　　灰白色粘土ブロック(2～3mm)やや多量
3　暗黄灰色土　灰白色粘土ブロック(2～3mm)少量。炭化物少量
4　暗黄灰色土　灰白色粘土ブロック(3～5mm)多量。ややシルト質
5　暗黄灰色土　灰白色粘土ブロック(2～3mm)少量。シルト質

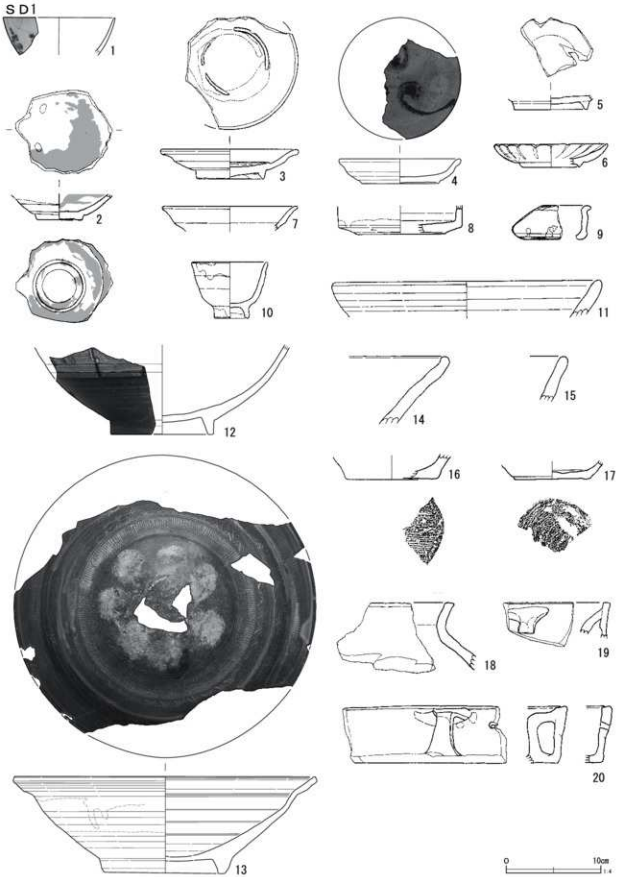
第14号溝跡
1　明褐色土　　黄褐色粘土粒子(0.5～1mm)多量
2　明褐色土　　黄褐色粘土ブロック(1～2cm)多量
3　明褐色土　　黄褐色粘土ブロック(3～8mm)多量
4　褐色土　　灰褐色粘土ブロック(1～3cm)多量。酸化鉄多量
5　褐色土　　灰褐色粘土ブロック(1cm程度)多量。酸化鉄多量。帯状に見える
6　灰褐色土　　褐色粘土ブロック(2～5cm)多量。有機物少量。酸化鉄多量
7　黄灰白土　　灰褐色粘土ブロック(5～10cm)少量。有機物層状に堆積。有機物少量
8　黄灰色土　　有機物多量
9　黄灰色土　　有機物少量。砂粒子多量

第21号溝跡
1　灰褐色土　　褐色土ブロック(1～2cm)少量。酸化鉄多量

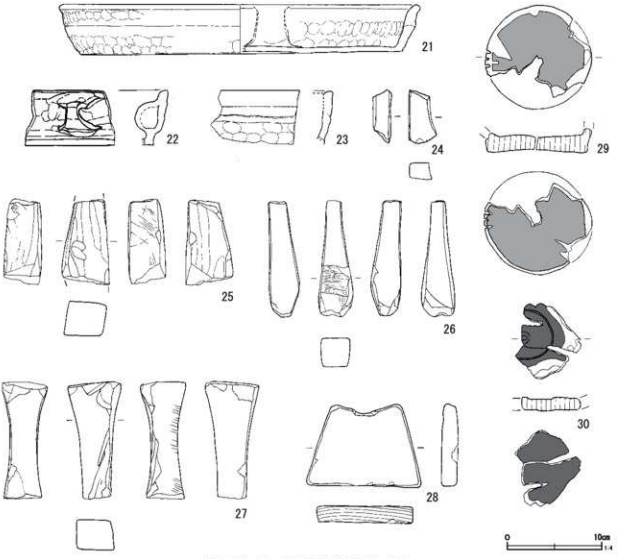
第22号溝跡
1　褐色土　　酸化鉄多量
2　灰褐色土　　褐色土ブロック(1～2cm)少量。酸化鉄多量

第26号溝跡
1　灰白色土　　黄褐色粘土ブロック(2～3mm)微量。
　　白色粒子(浅間A)混入
2　灰白色土　　黄褐色粘土ブロック(1～2cm)やや多量。
　　白色粒子(浅間A)混入

第154図　中・近世溝跡断面図（1）



第155図　中・近世溝跡出土遺物（1）



第156図　中・近世溝跡出土遺物（２）

出土している。

第７号溝跡（第171図）

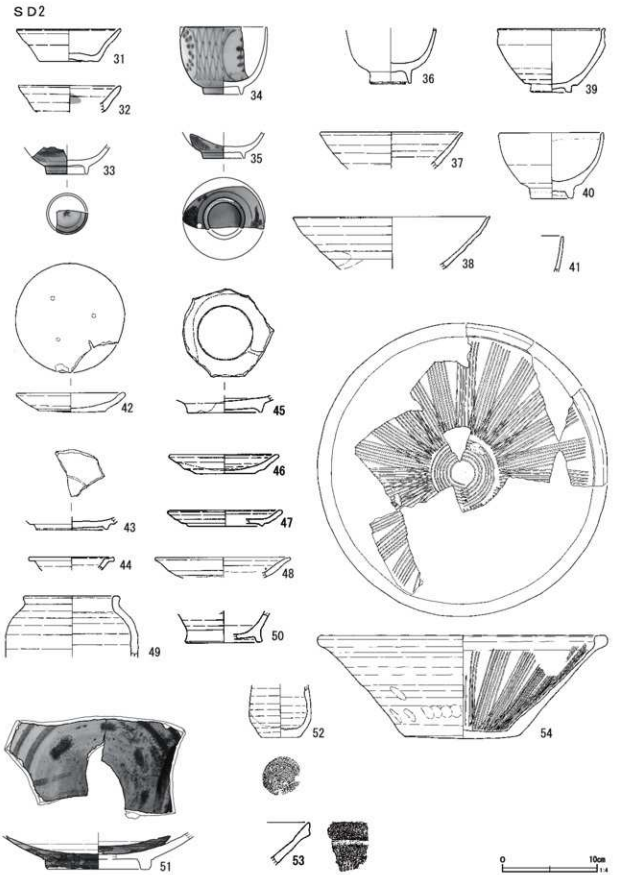
Ｃ－３・４、Ｄ－２・３グリッドから、Ｅ－２グリッドへと北東から南西に延びるが、北東は第１号溝跡に連結する様に途切れ、南西は調査区外へと続く。第１号溝跡の方が新しい事が調査時の平面観察において捉えられているが、第７号溝跡は西へは延びないことから、第１号溝跡がこの溝跡の時期にも存在し、後に掘り直されている可能性がある。他に第11号掘立柱建物跡Pit３・４・12、第48号土壙、遺物集中、第３～５・11・15・32・35・38・39・48・52・58号溝跡と重複し、第１号火葬土壙よりも古い。

規模は、全長30.52m、幅は最大1.44m、最小で1.24m、確認面からの深さは、最大で0.74m、最小0.65mである。走行方位はN－45°－Eを指す。

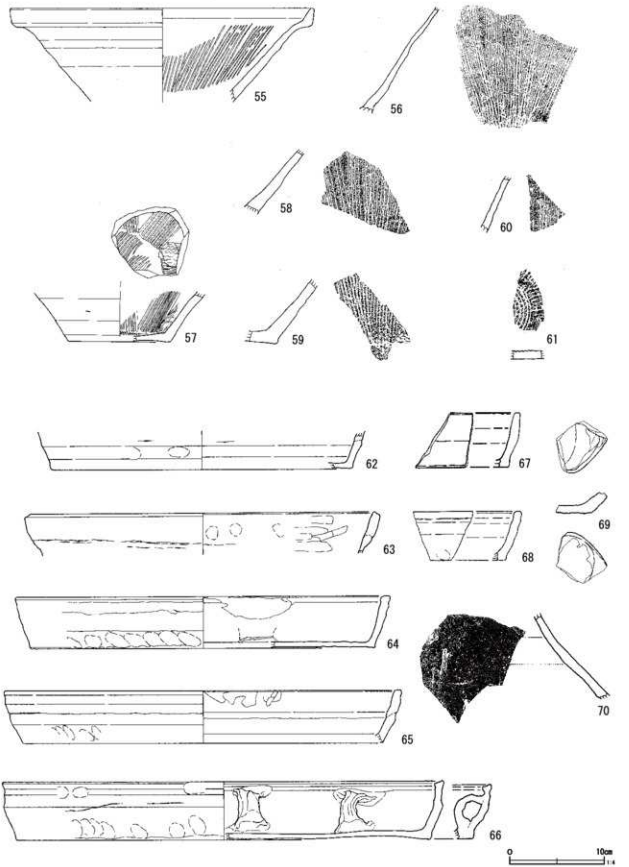
断面形は箱薬研で、一度テラスを設けて急傾斜で掘り込む。覆土は灰褐色土を主体とし、第１層は埋め戻しである。それよりも下層は自然堆積で、第３層は壁の崩落土であると考えられる。

出土遺物はかわらけ、陶器碗、皿、徳利、擂鉢、鉢が出土している。

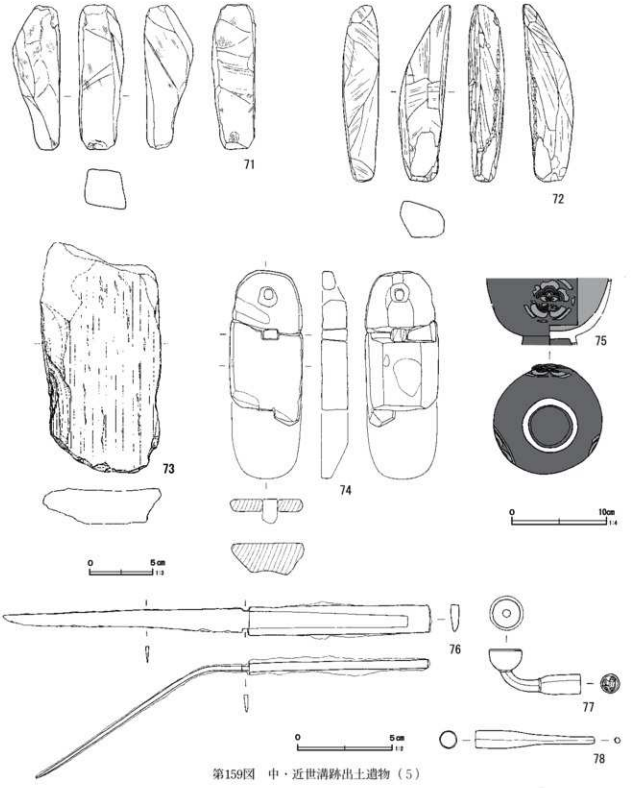
第160図81～83はかわらけである。81は大きく



第157図　中・近世溝跡出土遺物（3）



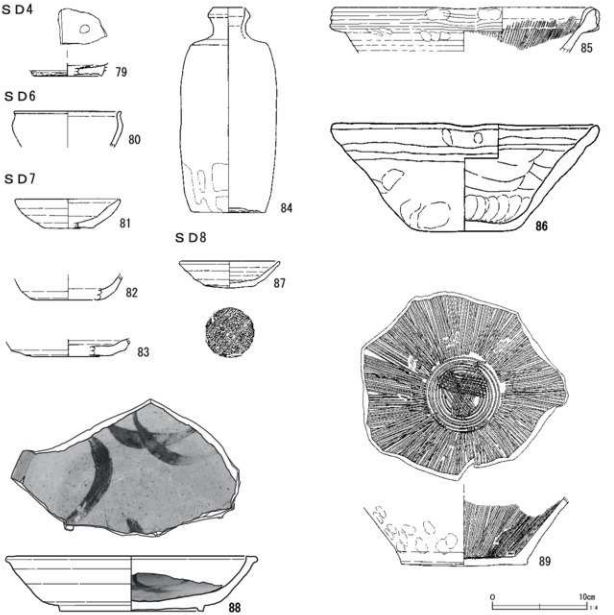
第158図　中・近世溝跡出土遺物（4）



第159図　中・近世溝跡出土遺物（5）

外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部は窄む。底部は指により撫で調整が行われている。胎土に赤色の粒子を多く含む。轆轤の回転方向は右回りである。84は瀬戸・美濃産の徳利である。これらは、いずれも上層からの出土であり、溝跡に伴うものであるかは不明である。86は在地産の片口鉢で、溝跡底面からの出土である。

他には陶磁器の小片及び土師器の小片が出土し



第160図　中・近世溝跡出土遺物（6）

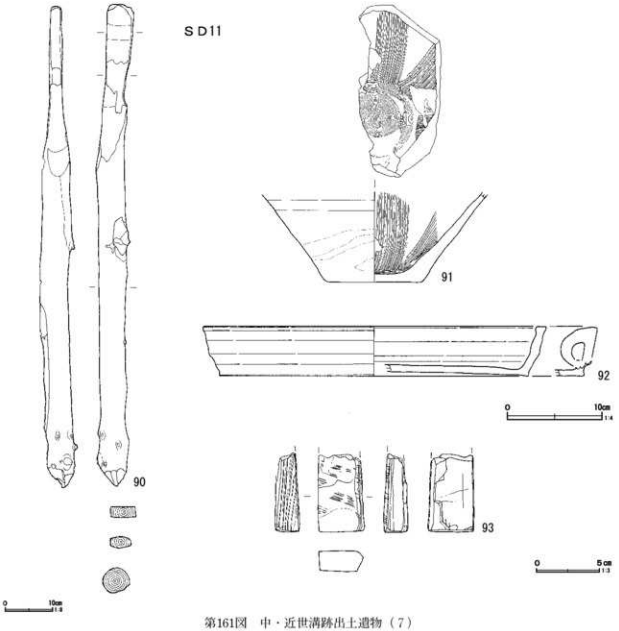
ている。総重量は129.4gである。

第8号溝跡（第167・168図）

C－7・8、D－6～8、E－5～7グリッドから、F－5グリッドに位置し、第1～3・14・19・23・25・27号溝跡、第21号井戸跡と重複する。東西方向からL字に屈曲して南側の調査区外へと延びる区画溝と考えられる。調査は作業の効率を加味し、上層土を重機で掘り下げている。そのため、掘削手順などの観察は出来なかった。

規模は、全長45.00m、幅は最大で3.90m、最小で2.00m、確認面からの深さは、最大0.93m、最小0.47mである。走行方位はN－45°－Eを指す。

断面形は逆台形で、底面は平坦である。覆土は第3層から上層が埋め戻されていた。第2層と3層の間には水帯に起因すると思われる鉄分の沈着が認められ、赤い層が帯状に薄く堆積していた。第4層は流れ込みの土と壁面の崩落土が混合され



第161図　中・近世溝跡出土遺物（7）

た層である。第5層は自然堆積である。以上の覆土は第6・7層を掘り込んでおり、掘り直しが行われていた可能性があるものと推定される。

出土遺物はかわらけ、陶器皿、擂鉢、杭が出土している。

第160図87はかわらけである。底部から斜め方向へ直線的に立ち上がる。底部糸切り後に削り調整が行われている。轆轤の回転方向は左回りである。88は瀬戸・美濃産の皿で、内面には鉄釉で草文が描かれている。89は信楽産の擂鉢で、卸目7本で左回りに施文している。底面の施文は一度に左回りで行っている。第161図90は建築材を転用した杭で、長さ101.9㎝、直径5.7㎝である。端部は刃物で複数方向から削られていた。逆側の端部は貫の様に長方形に整形されていた。その下方では側面が鍵の手状に削り取られており、ここに直行方向の臍が当たるものと推定される。この部分の幅は4.4㎝、厚さは2.4㎝である。

第９号溝跡（第171図）

Ｅ－５グリッドに位置し、南側で一度「く」の字に屈曲しながら南北に延びる。第３号溝跡、第43号土壙と重複する。

規模は、全長5.66m、幅は北側が最大で0.40m、最小で0.26m、確認面からの深さは、最大で0.07m、最小で0.05mである。走行方位はN－43°－Wを指す。

断面形は箱型を呈し、覆土は壁の崩落に伴う小ブロックを多く含む暗褐色土である。

遺物は出土していない。

第10号溝跡（第171図）

Ｄ－４・５グリッドから、Ｅ－５グリッドへと南北に延び、第11号溝跡に接続するように消滅する。第16号井戸跡よりも古く、第３号溝跡よりも新しい。第43号土壙との新旧関係は確認出来なかった。

規模は、全長12.54m、幅は最大で0.55m、最小で0.38m、確認面からの深さは、最大で0.21m、最小で0.08mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第11号溝跡（第171図）

Ｃ－３・４、Ｄ－４・５グリッドから、Ｅ－５グリッドへと南北に延びている。第25号溝跡に接続するのか、あるいは調査区外に続くのかは、調査区南面の壁で土層観察を行ったが、後世の攪乱が著しく、新旧関係を確認する事が出来なかった。第15号井戸跡よりも古く、第７号溝跡よりも新しい。他に第３号掘立柱建物跡Pit１・６、第１号柱穴列Pit２、第３・10号溝跡と重複するが新旧関係は確認出来なかった。

規模は、全長29.60m、幅は最大で0.89m、最小で0.36m、確認面からの深さは、最大で0.57m、最小で0.05mである。長軸の方位はN－45°－Wを指す。

出土遺物は陶器擂鉢、焙烙、砥石が出土している。

第161図91は瀬戸・美濃産の擂鉢で、底部回転糸切り、内面の擂目は14本で右回りに施文している。92は焙烙で、底部と体部の接合点を粘土を貼り付けた後に指で強く横撫で調整を行っている。93は砂岩の砥石である。

他に瓦質土器の小片及び焙烙の小片が出土している。総重量227.5ｇである。

第13号溝跡（第171図）

Ｃ－２グリッドに位置する。北側の調査区を拡張した際に検出した。第43号溝跡よりも古く、第54号溝跡よりも新しい。

規模は、全長0.99m、幅は1.35m、確認面からの深さは、0.22mである。走行方位はN－30°－Wを指す。

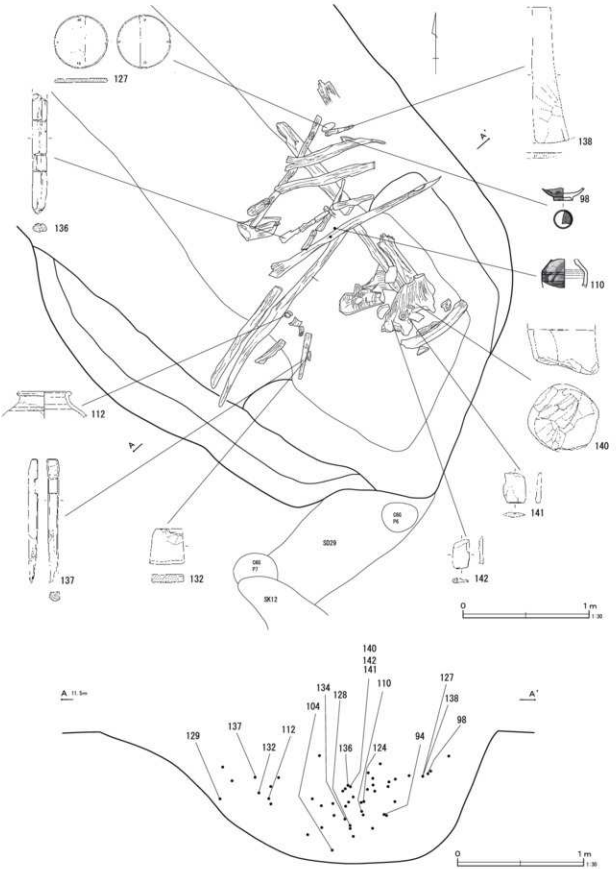
出土遺物は土師器破片が出土しているが図示出来なかった。総重量は49.6ｇである。

第14号溝跡（第153図）

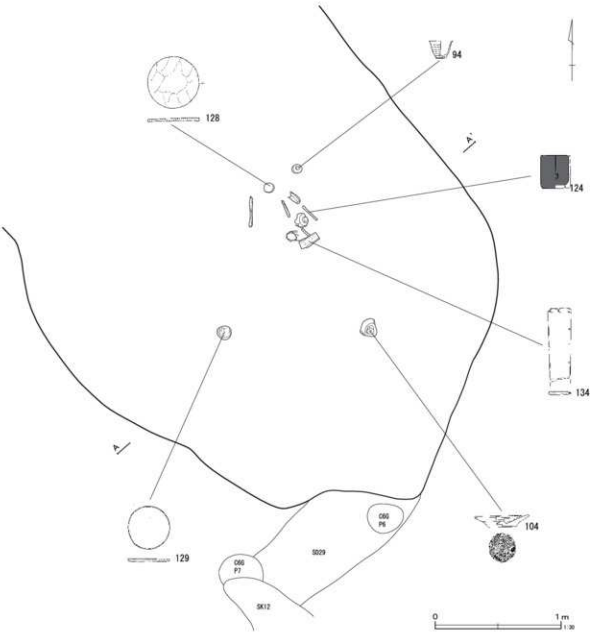
Ｂ－５、Ｃ－５・６、Ｄ－６グリッドから、Ｄ・Ｅ－７グリッドへと南北に延びる。途中Ｃ－６、Ｄ－６・７グリッドにおいて途切れるが、一連の掘削と考え同一の溝跡とした。調査は作業の効率を加味し、上層土を重機で掘り下げている。第16号溝跡よりも新しく、第20号井戸跡、第３号土壙、第８・29号溝跡との新旧関係は確認出来なかった。

規模は、全長39.68m、幅は最大で3.24m、最小で1.17m、確認面からの深さは、最大で1.35m、最小で0.94mである。走行方位はN－50°－Wを指す。

断面形は逆台形を呈し、覆土は上層が明褐色土、下層は黄灰色土を主体とする互層である。第２層～４層は埋め戻しと考えられる。第４・５層には



第162図　第14号溝跡遺物出土状況（1）



第163図　第14号溝跡遺物出土状況（２）

水帯の影響による鉄分の沈着が認められた。第７～９層は有機物を含む層で、特に第７層は層状に有機物の堆積が認められた。

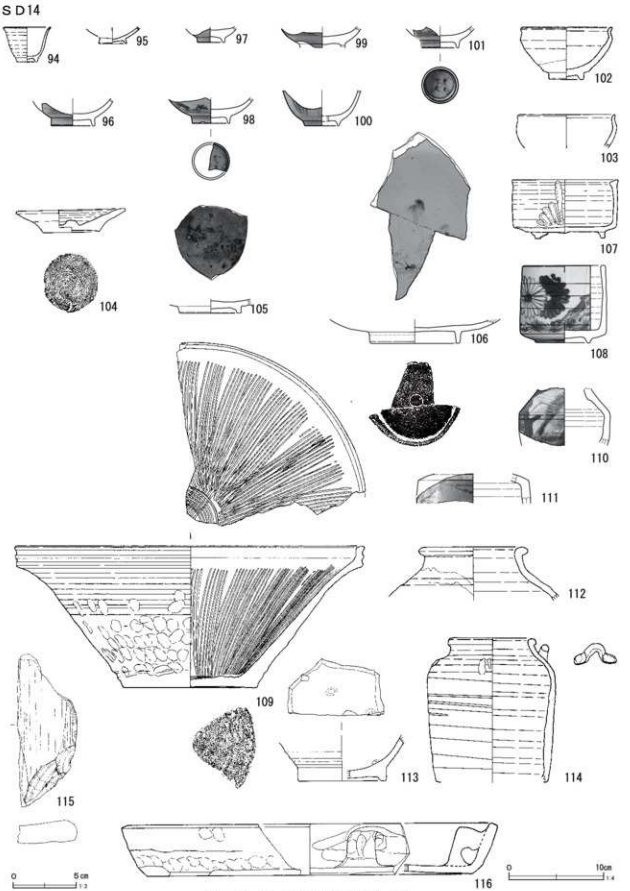
一度溝跡が途切れるC－６グリッドでは北側で多量の伐採木とともに、木製品と陶磁器が出土している。何れも中層から上層にかけての出土であり、下層が自然堆積によって埋没する過程で、廃棄されたものであると推定される。

出土遺物は磁器碗、陶器碗、香炉、皿、擂鉢、瓶、壺、焙烙、砥石、漆器椀、木製容器、曲物、下駄、折敷、杭、建築材、伐採木などが出土している。

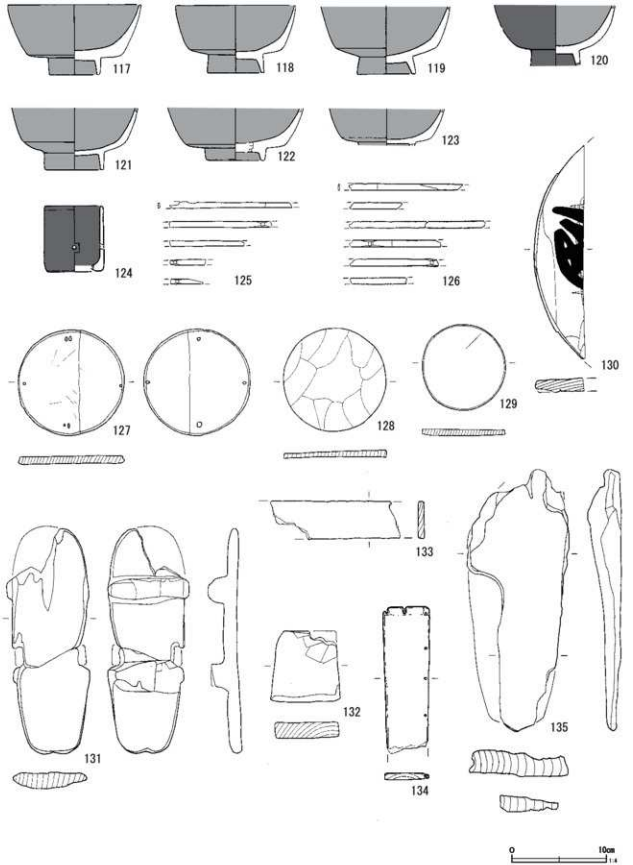
第164図94は肥前産の磁器小坏である。95～101は肥前産の磁器碗である。96は外面に草花文、98は底部に「大明□□」の字がある。101は底部高台内に「大明年製」の字がある。102・103は瀬戸・美濃産の天目茶碗で、釉薬が上半部に掛かる。104は瀬戸・美濃産の陶器蓋である。底部回転糸

切りで内面中心部に突部状の摘みが付く。105は瀬戸・美濃産の皿で、内面に草花文が描かれている。106は肥前産の磁器皿で、底部内面に窯元を示す押印がある。内面には楼閣山水の文様が施されている。107は瀬戸・美濃産の香炉で、外面に菊花文がある。108は肥前産の磁器香炉である。109は信楽産の擂鉢で、卸目６本、左回りに施文している。底部は回転糸切り後に削り調整を行っている。111は肥前産の瓶類である。外面には草文と思われる文様を施す。112は瀬戸・美濃産の陶器壺、114は瀬戸・美濃産の双耳壺で、耳の片側は製作時に外れてしまっているが、そのまま焼成されている。底部は打欠いており、曲物の底板をはめ込んでいたものと推測される。第165図117～123は漆器椀である。117は口径14.0㎝、底径5.2㎝、器高7.5㎝で、内外面赤色漆である。118は口径（12.6）㎝、底径5.9㎝、器高7.2㎝で、内外面赤色漆である。119は底径6.2㎝、器高〔7.2〕㎝で、内外面赤色漆である。120は器高〔6.6〕㎝で、外面黒色漆、内面赤色漆である。外面の黒色漆は、上面に塗られていた赤色漆が剥がれて、下地の黒色漆が露出した可能性が考えられる。121は底径（6.0）㎝、器高〔6.6〕㎝で、内外面赤色漆である。122は底径（6.0）㎝、器高〔5.5〕㎝で、内外面赤色漆である。123は器高〔3.9〕㎝、で内面赤色漆である。これらは120以外全て赤色漆であることから、ハレの場で使用されていたものと考えられる。124は竹製の容器で、口径（5.9）㎝、底径5.7㎝、器高6.9㎝、側面の厚さ0.5㎝である。節の部分から切断し、表面を面取り調整、口縁部を削り調整している。内外面は黒色漆によって着色している。また、胴部には穿孔が認められる。125・126は竹製の紐である。残存長は125が上から13.0㎝、10.9㎝、7.9㎝、3.8㎝、3.5㎝で、幅0.6㎝、厚さ0.2㎝である。126は残存長が、上から12.1㎝、5.6㎝、14.4㎝、9.7㎝、9.5㎝、6.1㎝で、幅0.7㎝、厚さ0.15㎝である。127は曲物の底板で、径が11.3㎝、厚さ0.8㎝、木取りは柾目である。円周にそって対角に４つの接合の為の臍穴がある。表面は削り調整で、工具痕が僅かに残る。128は曲物の底板である。径が10.9㎝、厚さ0.7㎝、木取りは柾目である。129は曲物の底板で、径が8.8㎝、厚さ0.7㎝、木取りは柾目である。130はやや大きな曲物の蓋と考えられ、残存長は、長径（22.8）㎝、厚さ1.4㎝、木取りは板目である。表面には字体不明の墨書がある。131は下駄で、残存長は、長径〔23.8〕㎝、短径8.7㎝、厚さ1.7㎝、高さ3.1㎝、木取りは柾目である。132は下駄の踵部で、残存長は、長径7.6㎝、短径6.7㎝、厚さ1.7㎝、板目である。133は折敷の側板と推定され、残存長は、長径〔12.8〕㎝、短径3.9㎝、厚さ0.7㎝、木取りは板目である。134は折敷の底板と推定され、残存長は、長径〔15.4〕㎝、短径4.7㎝、厚さ0.７㎝、木取りは板目である。取り付け用の臍穴が６ヶ所に認められ、同一工具によって開けられている。135は板状製品で、農具の一部である可能性がある。残存長は、長径〔25.7〕㎝、短径〔10.5〕㎝、厚さ2.5㎝、木取りは柾目である。第166図136は杭である。杭先は残存していなかった。残存長は、長さ〔38.7〕㎝、幅4.7㎝である。137は建築材と考えられ、残存長は、長さ〔40.0〕㎝、幅3.2㎝である。端部に貫との接合を行う為の加工を施している。仕口加工部の規模は長さ4.9㎝、幅3.4㎝、深さ0.9㎝である。138は木札で、残存長は長さ28.9㎝、幅4.9㎝、厚さ1.2㎝、木取りは柾目である。表面は削り調整の為の工具痕が僅かに残る。139・140は伐採木の伐採部である。幅４㎝程度を１単位として２～３方向より切断されている。141・142は伐採の際に出るチップで、141が長さ6.4㎝、幅4.7㎝、厚さ1.0㎝である。142が長さ5.9㎝、幅3.5㎝、厚さ1.0㎝である。

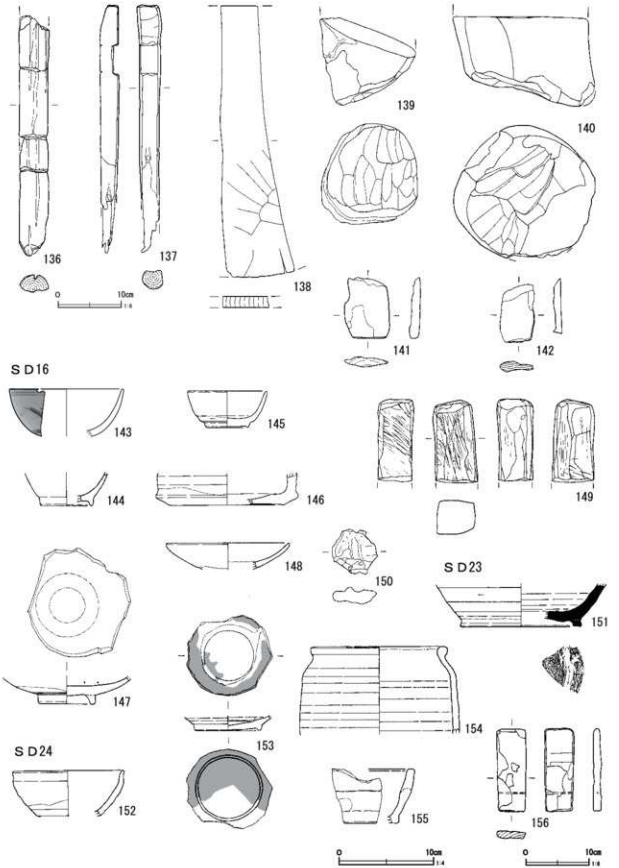
他に磁器小片、陶器小片、擂鉢小片、焙烙破片、貝殻が数個体分出土しているが図示出来なかった。総重量452.7ｇである。



第164図　中・近世溝跡出土遺物（8）



第165図　中・近世溝跡出土遺物（9）



第166図　中・近世溝跡出土遺物（10）

第15号溝跡（第171図）

C－4グリッドから、D－4・5グリッドへと南北に延びる。第7号溝跡、第1・26号土壙、第3号掘立柱建物跡Pit3・5と重複する。

規模は、全長20.99m、幅は最大で0.50m、最小で0.25m、確認面からの深さは、最大0.30m、最小で0.11mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第16号溝跡（第168図）

E－7グリッドに位置し、南北に延びるが南側は調査区外へと続く。第14号溝跡よりも古く、第20号井戸跡との新旧関係は確認出来なかった。

規模は、全長3.00m、幅は最大で1.18m、最小で1.10m、確認面からの深さは、最大で0.79m、最小で0.55mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

出土遺物は、磁器碗、陶器碗、皿、香炉、砥石、鉄滓が出土している。

第166図143・144は肥前産の磁器碗である。145は瀬戸・美濃産の天目茶碗、146は瀬戸・美濃産の香炉、147は瀬戸・美濃産の皿である。148は肥前産の白磁皿である。149は凝灰岩の砥石、150は椀形滓である。他に磁器碗の小片、陶器砕片が出土している。総重量240.9gである。

第18号溝跡（第168図）

E－7グリッドから、E－6グリッドへと東西に延び、第1・19号溝跡を掘り込んでいる。

規模は、全長2.46m、幅は最大で0.24m、最小で0.24m、確認面からの深さは、最大で0.04m、最小で0.03mである。走行方位はN－55°－Eを指す。

出土遺物は土師器砕片が1点出土している。

第19号溝跡（第167図）

E－6グリッドに位置し、南北に延びる。第8・18号溝跡よりも古く、第2号土壙と重複するが新旧関係は明らかに出来なかった。

規模は、全長2.04m、幅は最大で0.52m、最小で0.38m、確認面からの深さは、最大で0.09m、最小で0.04mである。走行方位はN－55°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第20号溝跡（第168図）

E－7グリッドに位置し、南北に延びながら調査区外へと続く。重複する第37号土壙よりも新しい。

規模は、全長3.88m、幅は最大で0.58m、最小で0.51m、確認面からの深さは、最大で0.18m、最小で0.17mである。走行方位はN－50°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第21号溝跡（第153図）

C－5グリッドに位置し、南北方向に延びる。第22号溝跡とは同一の溝跡である可能性がある。

規模は、全長1.23m、幅は北側で最大で0.50m、最小で0.39m、確認面からの深さは、最大で0.10m、最小で0.08mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第22号溝跡（第153図）

B－5グリッドに位置し、南北方向に延びる。第21号溝跡とは同一の溝跡である可能性がある。

規模は、全長2.98m、幅は最大で0.70m、最小で0.35m、確認面からの深さは、最大で0.12m、最小で0.10mである。走行方位はN－50°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第23号溝跡（第168図）

C－8グリッドから、D－8グリッドへと南西から北東方向に延び、調査区外へと続く。第8号溝跡と重複する。一度掘り直しを行っており、第1・2層が該当する。

規模は、全長4.56m、幅は最大で1.96m、最小で1.87m、確認面からの深さは、最大で1.07m、最小で0.48mである。走行方位はN－45°－Eを指す。

出土遺物は第166図151に図示した南比企産の須恵器長頸瓶の底部が出土している。内面に擦痕が認められ、硯等に転用された可能性がある。

第24号溝跡（第168図）

D－8グリッドに位置し、調査区外へと延びる。

規模は、全長4.36m、幅は最大で1.29m、最小で0.89m、確認面からの深さは、最大で1.06m、最小で0.98mである。走行方位はN－45°－Wを指す。

第1・2層は掘り直しが行われた後の埋没層の可能性がある。

出土遺物は陶器碗、皿、壺、焙烙、砥石が出土している。

第166図152は瀬戸・美濃産の天目茶碗である。153は瀬戸・美濃産の皿で、内外面に油煙が付着しており、灯明皿として使用していた可能性が考えられる。154は瀬戸・美濃産の壺である。155は焙烙である。156は桶と考えられ、残存長は長径13.1㎝、短径4.4㎝、厚さ1.2㎝、板目である。側面に板と板を繋いでいた目釘穴が穿孔されている。

第25号溝跡（第167図）

E－5・6グリッドから、F－5グリッドへと東西に延びる。第8号溝跡よりも古く、他に第38号井戸跡、第44号土壙、第1・3・4号溝跡と重複する。

規模は、全長15.40m、幅は最大で1.52m、最小で0.94m、確認面からの深さは、最大で0.73m、最小で0.66mである。走行方位はN－45°－Eを指す。

出土遺物はかわらけ、陶器皿、香炉、擂鉢、焙烙、瓦質土器、砥石が出土している。

第170図157は小型のかわらけである。体部はやや内湾しながら立ち上がる。底部回転糸切りで、轆轤の回転方向は右回りである。外面及び内面口縁部に煤が付着している。158・159は瀬戸・美濃産の皿である。160は瀬戸・美濃産の香炉である。161～163は瀬戸・美濃産の擂鉢である。161は擂り目が13本で右回りに施文している。162は擂り目が17本である。164・165は焙烙で、内耳は底面に接合されている。166～168は瓦質の不明土製品である。側面には粘土を貼り付け、陵を作り出している。169・170は片面ないし両面に擦痕の残る砥石である。他に焙烙と思われる瓦質土器の破片が出土しているが図示出来なかった。総重量619.0g出土している。

第26号溝跡（第153図）

B－5・6グリッドから、C－6グリッドへと南北に延びる溝跡で、北は調査区外へと続く。第22号井戸跡、第9号土壙よりも古く、第10号土壙よりも新しい。他に第39・40・45号土壙と重複する。

規模は、全長19.70m、幅は最大で0.78m、最小で0.44m、確認面からの深さは、最大で0.25m、最小で0.06mである。走行方位はN－50°－Wを指す。

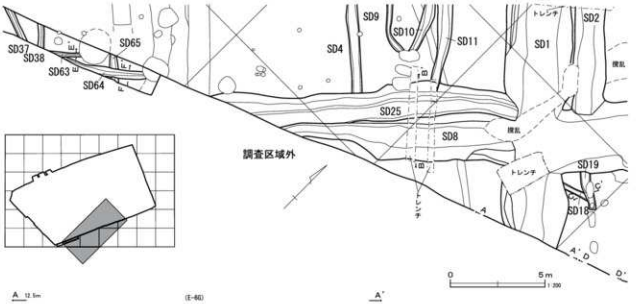
出土遺物は馬歯が出土しているが、遺存状態が悪く図示出来なかった。

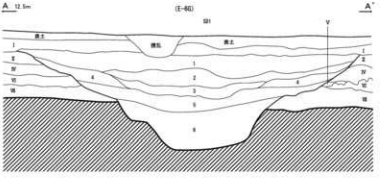
第27号溝跡（第168図）

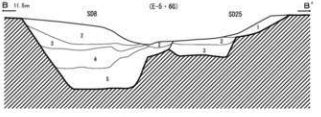
B－8グリッドから、C－7・8グリッドへと北東から屈曲しながら南西に延び、第8号溝跡に重なる。

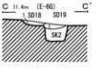
規模は、全長6.47m、幅は最大で1.69m、最小で0.89m、確認面からの深さは、最大で0.89m、最小で0.59mである。走行方位はN－20°－Eを指す。

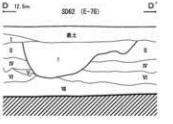
断面形は台形である。掘り直しを行っており、第1～4層が該当する。掘り直しを行っている溝跡は、埋め戻されているものと考えられる。掘り直す前の層は、第5・6・7層に当たり、壁面の











第1号溝跡
1　明褐色土　黄灰色粘土ブロック(3～5mm)多量。
　　黄褐色粘土ブロック(0.5～1mm)やや多量
2　明褐色土　黄褐色粘土ブロック(5～8mm)含む
3　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(1cm程度)多量
4　暗色土　黄褐色粘土ブロック(2～3mm)やや多量
5　褐灰色土　黄灰色粘土ブロック(2～3mm)多量
6　褐灰色土　灰白色粘土ブロック(5～8mm)多量

第8号溝跡
1　明褐色土　黄灰色粘土ブロック(3～5mm)多量
2　褐色土　褐色粘土ブロック(5～15mm)多量。黄褐色粘土ブロック(1cm程度)少量。
　　酸化鉄多量。帯状に堆積
3　灰褐色土　褐色粘土ブロック(2～8mm)やや多量。酸化鉄やや多量
4　黄灰色土　褐色粘土ブロック(1～1.5cm)少量。
　　有機物含む。酸化鉄やや多量。粘性有り
5　黄灰色土　黄褐色粘土ブロック(1mm程度)少量。有機物少量。砂粒子を帯状に含む。
　　粘性有り
6　灰褐色土　褐色粘土ブロック
7　灰褐色土　褐色粘土ブロック(1cm程度)多量。酸化鉄多量

第18号溝跡
1　褐色土　焼土ブロック(2mm程度)微量。炭化物(2mm程度)少量

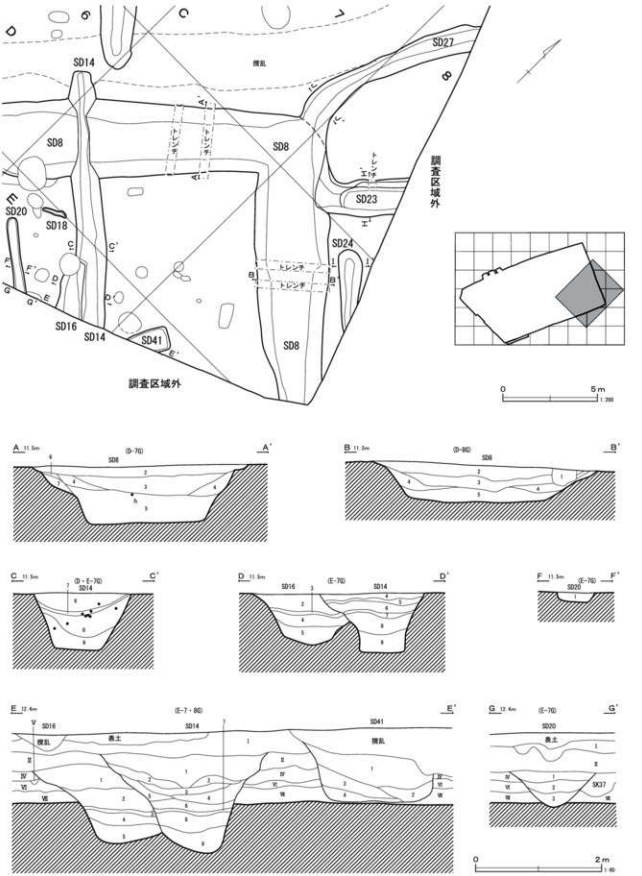
第19号溝跡
1　褐灰色土　褐色粘土ブロック(1cm程度)微量

第25号溝跡
1　明褐色土　黄褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量、(1～2cm)少量。
　　酸化鉄やや多量
2　暗灰色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)微量。酸化鉄やや多量。
　　焼土(2mm程度)微量。粘性やや有り
3　暗灰色土　灰褐色粘土ブロック(2～3mm)少量。暗褐色粘土
　　ブロック(2～7mm)微量。酸化鉄少量。粘性有り

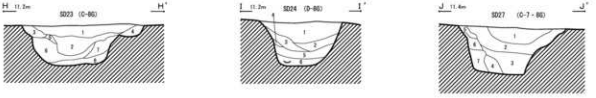
第62号溝跡
1　明褐色土　マンガン、酸化鉄が多量に沈着。浅間A少量

0　2m
1:80

第167図　中・近世溝跡区割り図・断面図（2）



第168図　中・近世溝跡区割り図・断面図（3）



第8号溝跡
1　明褐色土　黄灰色粘土ブロック(3～5mm)多量
2　褐色土　褐色粘土ブロック(5～15mm)多量。黄褐色粘土ブロック(1cm程度)少量。酸化鉄多量。帯状に堆積
3　灰褐色土　褐色粘土ブロック(2～5mm)やや多量。酸化鉄やや多量
4　黄灰色土　褐色粘土ブロック(1～1.5cm)少量。有機物含む。酸化鉄やや多量。粘性有り
5　黄灰色土　黄褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。有機物少量。砂粒子を帯状に含む。粘性有り
6　灰褐色土　褐色粘土ブロック
7　灰褐色土　褐色粘土ブロック(1cm程度)多量。酸化鉄多量

第14号溝跡
1　明褐色土　黄褐色粘土粒子(0.5～1mm)多量
2　明褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2cm)多量
3　明褐色土　黄褐色粘土ブロック(5～8mm)多量
4　褐色土　灰褐色粘土ブロック(1～3cm)多量。酸化鉄多量
5　褐色土　灰褐色粘土ブロック(1cm程度)多量。酸化鉄多量。帯状に見える
6　灰褐色土　褐色土粘土ブロック(2～5cm)多量。有機物少量。酸化鉄多量
7　黄灰白土　灰褐色粘土ブロック(5～10cm)少量。有機物帯状に堆積。層状堆積有機物少量
8　黄灰色土　有機物多量
9　黄灰色土　有機物少量。砂粒子多量

第16号溝跡
1　褐色土　黄灰色粘土ブロック(3～5mm)多量
2　黄灰色土　酸化鉄多量に比重。粘土層
3　褐色土　褐色粘土ブロック(5mm程度)多量。黄褐色粘土ブロック(2～8mm)多量。酸化鉄多量
4　暗黄灰色土　灰褐色粘土ブロック(1cm程度)やや多量。粘性有り
5　暗黄灰色土　灰色粘土ブロック(1cm程度)少量。粘性有り

第20号溝跡
1　明褐色土　黄褐色粘土粒子(0.5～1mm)少量。炭化物(3～5mm)少量
2　明褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～5mm)少量。炭(3～5mm)少量
3　暗黄灰色土　黄褐色粘土ブロック(2～3mm)少量

第23号溝跡
1　黄灰色土　礫等多量。酸化鉄多量
2　黄灰色土　灰色粘土ブロック(2～3cm)多量。酸化鉄多量
3　黄灰色土　淡黄灰色粘土ブロック(1cm程度)多量。酸化鉄多量
4　暗黄灰色土　淡黄灰色粘土粒子(0.5～1mm)多量。
5　淡黄灰色土　褐灰色粘土ブロック(3～5mm)多量
6　褐灰色土　緑灰色粘土ブロック(1cm程度)多量。埋め戻し
7　褐灰色土　緑灰色粘土ブロック(1cm程度)少量。埋め戻し
8　暗黄灰色土　緑灰色粘土ブロック(1cm程度)少量

第24号溝跡
1　褐灰色土　黄灰色粘土ブロック(1cm程度)ランダムに含む
2　黄灰色土　褐灰色粘土ブロック(3～5mm)多量
3　暗黄灰色土　褐灰色粘土ブロック(3～5mm)少量。炭化物(1cm程度)少量
4　明黄灰色土　明黄灰色粘土ブロックの層
5　黄灰色土　暗黄灰色粘土ブロック(2～3mm)少量。炭化物(3～8mm)少量
6　淡黄灰色土　褐灰色粘土ブロック(3～8mm)やや多量

第27号溝跡
1　灰色土　青灰色粘土ブロック(2～5cm)微量。暗褐色土ブロック(2～16mm)微量。マンガン多量。酸化鉄多量
2　灰色土　褐色粘土ブロック(1cm程度)多量。暗褐色土ブロック(1～5cm)やや多量。黄褐色粘土ブロック(2～10mm)少量。酸化鉄多量。埋め戻し
3　灰褐色土　黄灰色粘土ブロック(5mm程度)やや多量。暗灰色粘土ブロック(1cm程度)やや多量。粘性有り
4　灰褐色土　黄灰色粘土ブロック(2～5mm)少量。暗灰色粘土ブロック(5mm程度)少量。砂質
5　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(2mm程度)多量。(1cm程度)微量。褐色粘土ブロック(2mm程度)少量。酸化鉄やや多量
6　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)やや多量。褐色粘土ブロック(5mm程度)多量。灰色粘土ブロック層状に堆積。酸化鉄多量
7　暗灰色土　褐色粘土ブロック(2～3mm)やや多量。暗褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。粘性有り

第41号溝跡
1　明褐色土　砂、炭、有機物を含む
2　明褐色土　黄褐色粘土ブロック(1cm程度)少量
3　黄褐色土　粘土ブロック
4　明褐色土　黄褐色粘土ブロック(1cm程度)少量

0　2m
1:60

第169図　中・近世溝跡断面図（4）

崩落土を含んでいるが自然に埋没したものと推測される。

出土遺物は平瓦、陶器鉢が出土している。

第170図172は瀬戸・美濃産の鉢で、見込み及び畳付に目跡が残る。

第29号溝跡（第153図）

C－6グリッドから、C－5グリッドへと東西に延びる。第14号溝跡、第12号土壙と重複する。

規模は、全長3.35m、幅は最大で0.66m、最小で0.36m、確認面からの深さは、最大で0.10m、最小で0.07mである。走行方位はN－40°－Eを指す。

遺物は出土していない。

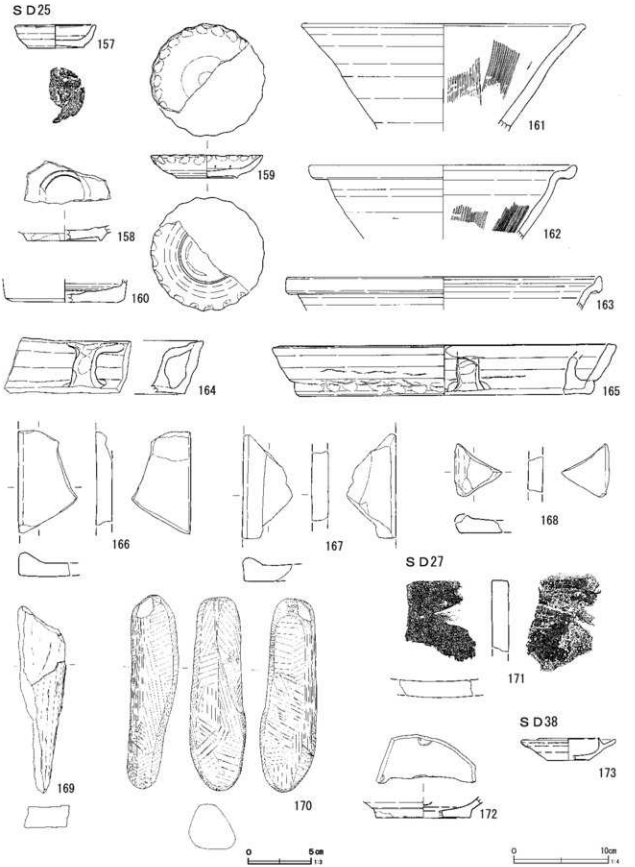
第30号溝跡（第153図）

B－5グリッドから、B－6グリッドへと南北に延びる。B－5グリッドPit5、B－6グリッドPit1と重複する。各所で溝が途切れるが一連のものであると考えた。南側は西に向かいL字に屈曲して、第21号溝跡の方向へと延びる。このことから、あるいは第21・22号溝跡と同一の溝跡であった可能性が推測できる。

規模は、全長5.33m、幅は最大で0.60m、最小で0.23m、確認面からの深さは、最大で0.31m、最小で0.16mである。走行方位はN－45°－Wを指す。

断面の形状は箱型で底面は平坦である。

遺物は出土していない。



第170図　中・近世溝跡出土遺物（11）

第35号溝跡（第171図）

D－２・３グリッドからE－３・４グリッドへと南北に延びる。第７・32・37・44号溝跡、第３号周溝状遺構、第41号井戸跡と重複し、第２号周溝状遺構及び第10号掘立柱建物跡Pit５よりも新しい。

規模は、全長19.98m、幅は最大で0.58m、最小で0.30m、確認面からの深さは、最大で0.22m、最小で0.05mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

出土遺物は土師器の小片が１点出土している。

第36号溝跡（第171図）

E－３・４グリッドからF－４グリッドへと南北に延びる。第９号掘立柱建物跡Pit７、第15号掘立柱建物跡Pit３、第33号溝跡と重複する。

規模は、全長3.44m、幅は最大で0.30m、最小で0.22m、確認面からの深さは、最大で0.02m、最小で0.02mである。走行方位はN－50°－Wを指す。

覆土は灰褐色土で、鉄分の沈着が多量に認められた。

遺物は出土していない。

第37号溝跡（第171図）

E－３、F－３グリッドから、F－４グリッドへと「コ」の字型に屈曲しながら、南は調査区外へと延びる。重複する第38号溝跡よりも新しい。他に第32・35・39号溝跡、第９号掘立柱建物跡Pit９・10、第15号掘立柱建物跡Pit６、第１・２号周溝状遺構と重複する。

規模は、全長20.60m、幅は最大で0.32m、最小で0.18m、確認面からの深さは、最大で0.18m、最小で0.10mである。走行方位はN－55°－Wを指す。

灰色の覆土中には鉄分を多く含んでいた。

遺物は出土していない。

第38号溝跡（第171図）

D－１・２、E－２・３グリッドから、F－３・４グリッドへと南北に延びる。第７・37・39・40・51・66号溝跡、第５号掘立柱建物跡Pit４、第１～３号周溝状遺構、第31号井戸跡と重複する。第37号溝跡よりも古く、第２・３号周溝状遺構、第39号溝跡よりも新しい。

規模は、全長33.20m、幅は最大で0.88m、最小で0.24m、確認面からの深さは、最大で0.12m、最小で0.09mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

出土遺物は第170図173の貫入の多い瀬戸・美濃産の灯明皿が出土している。他に瓦質土器の小片、瓦片、土師器の小片が出土しているが図示出来なかった。総重量109.9ｇである。

第39号溝跡（第171図）

D－２、E－２・３、F－３グリッドから、F－４グリッドへと南北に延びる。第７・37・38・40・44・51・59・61・66号溝跡、第31号井戸跡、第５号掘立柱建物跡Pit４・８、第11号掘立柱建物跡Pit７、第15号掘立柱建物跡Pit４～６、第１～３号周溝状遺構と重複し、第２・３号周溝状遺構よりも新しく、第38号溝跡よりも古い。

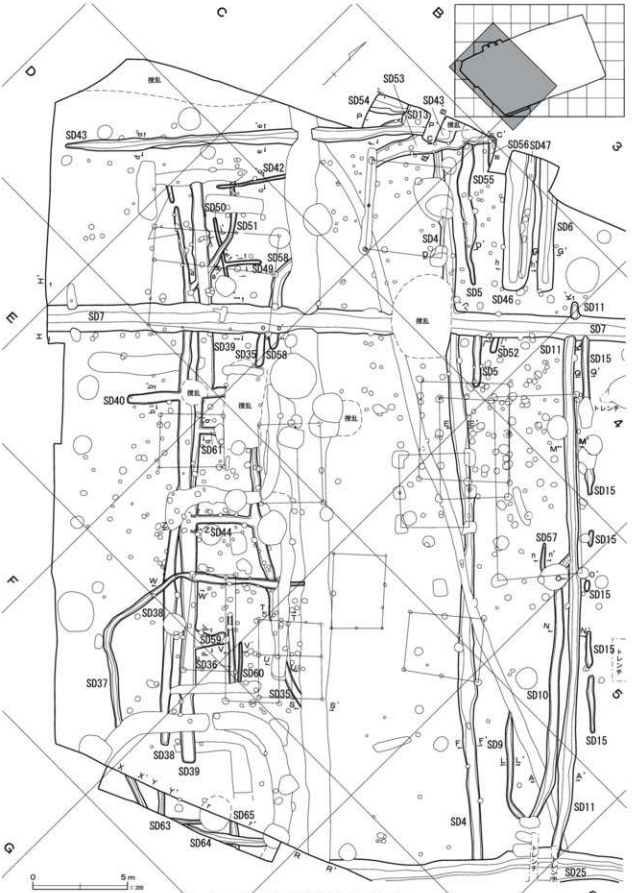
規模は、全長30.66m、幅は最大で0.85m、最小で0.50m、確認面からの深さは、最大で0.10m、最小で0.06mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

出土遺物は土師器の小片が45.0ｇ出土している。

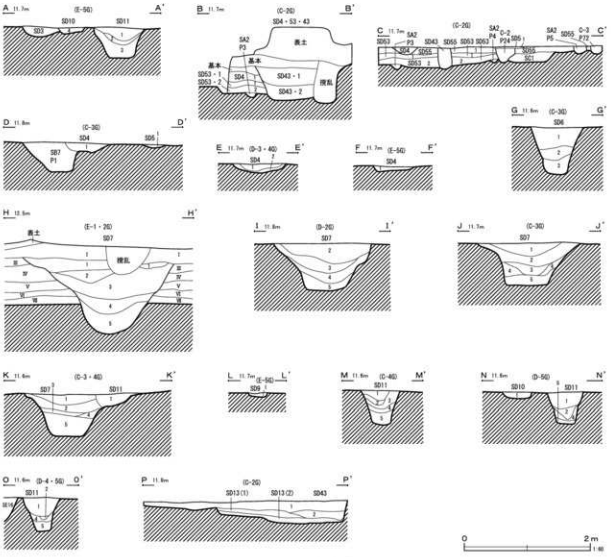
第40号溝跡（第171図）

D－２グリッドから、E－２グリッドへと東西に延び、東は攪乱によって破壊されている。第38・39号溝跡と重複するが新旧関係は確認出来なかった。

規模は全長5.11m、幅は最大で0.50m、最小で0.47m、確認面からの深さは、最大で0.06m、最小



第171図　中・近世溝跡区割り図（4）



第6号溝跡
1　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量。酸化鉄微量
2　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量。酸化鉄多量

第5号溝跡
1　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～3mm)多量。酸化鉄少量

第6号溝跡
1　褐色土　酸化鉄多量
2　灰色土　灰褐色粘土ブロック(2～5mm)少量。粘性やや有り
3　暗黄灰色土　黄灰色粘土ブロック(2～5mm)少量。(1cm程度)少量。酸化鉄多量。粘性有り

第7号溝跡
1　灰褐色土　黄褐色粘土ブロック(5～8mm)多量。(1～5cm)多量。褐色粘土ブロック(2～9mm)やや多量。暗褐色土ブロック(2～5mm)多量。酸化鉄やや多量。埋め戻し
2　灰褐色土　黄灰色粘土ブロック(2～5mm)微量。(4cm程度)微量。酸化鉄多量
3　灰褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)微量。褐色粘土ブロック(5mm程度)少量。酸化鉄多量
4　灰褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～3cm)やや多量。酸化鉄多量
5　暗灰色土　黄灰色粘土ブロック(5mm程度)やや多量。(1～2cm)少量。暗灰色粘土ブロック(5～10mm)少量。粘性有り

第9号溝跡
1　暗褐色土　褐色粘土ブロック(5mm程度)多量。黒色土ブロック(2～3mm)やや多量

第10号溝跡
1　褐色土　褐色粘土ブロック(2～6mm)やや多量。酸化鉄多量

第11号溝跡
1　褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2mm)少量。焼土粒子微量
2　灰褐色土　褐色粘土ブロック(1～3mm)少量。炭化物(1～5mm)微量
3　灰褐色土　褐色粘土ブロック(1～3mm)やや多量。焼土粒子微量。炭化物(2～5mm)少量。酸化鉄やや多量
4　灰褐色土　褐色粘土ブロック(2～5mm)やや多量。黄褐色粘土ブロック(2～5mm)やや多量。炭化物(1～2mm)やや多量。酸化鉄多量
5　暗灰色土　灰褐色粘土ブロック(3mm程度)やや多量。炭化物(2mm程度)微量。酸化鉄やや多量。粘性やや有り

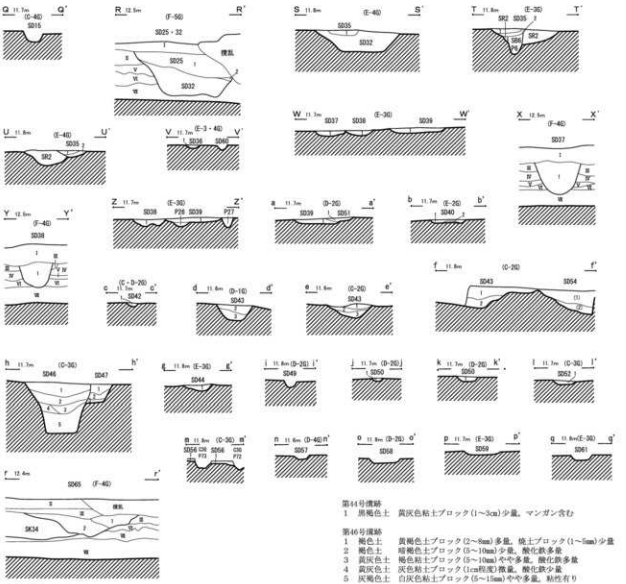
第13号溝跡
(1)黒灰色土　褐色粘土ブロック(2～4mm)少量。黒色土ブロック(5mm程度)微量
(2)黒灰色土　褐色粘土ブロック(2～7mm)多量。黒色土ブロック(5mm程度)微量

第43号溝跡
1　灰色土　灰褐色粘土ブロック(5mm程度)微量。酸化鉄やや多量
2　灰色土　灰褐色粘土ブロック(2～10mm)微量。褐色粘土ブロック(3～15mm)微量
3　灰色土　灰褐色粘土ブロック(1cm程度)やや多量。褐色粘土ブロック(1cm程度)やや多量。炭化物(5mm程度)微量

第53号溝跡
1　黒灰色土　黒褐色土ブロック(5～8mm)やや多量。褐色粘土ブロック(2～8mm)多量。埋め戻し
2　黒灰色土　褐色粘土ブロック(2mm程度)多量(1～1.5cm)多量。黄褐色粘土ブロック(2～4cm)やや多量

第55号溝跡
1　黒灰色土　褐色粘土ブロック(2～10mm)やや多量。焼土(1～2mm)少量。酸化鉄少量。炭化物(1～2mm)少量。礫少量

第172図　中・近世溝跡断面図（5）



第25号溝跡
1　明褐色土　　黄褐色粘土ブロック(2mm程度)やや多量、(1～2cm)少量。酸化鉄やや多量
2　暗灰色土　　黄褐色粘土ブロック(2～5mm)微量。酸化鉄やや多量。焼土(2mm程度)微量。粘性やや有り

第35号溝跡
1　灰色土　　酸化鉄多量。マンガン多量
2　褐色土　　黄灰褐色土ブロック多量。マンガン多量

第36号溝跡
1　灰褐色土　　黄灰褐色土ブロック(2～3cm)多量。酸化鉄多量

第37号溝跡
1　灰色土　　黄灰褐色土ブロック(2～3cm)少量。酸化鉄多量

第38号溝跡
1　暗灰褐色土　黄灰褐色土ブロック(3～4cm)少量。酸化鉄多量。炭化物少量

第39号溝跡
1　暗灰褐色土　黄灰褐色土ブロック少量。酸化鉄多量。炭化物少量

第40号溝跡
1　灰褐色土　　酸化鉄多量。マンガン少量
2　黄灰褐色土　酸化鉄多量

第42号溝跡
1　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2cm)少量

第43号溝跡
1　灰色土　　灰褐色粘土ブロック(5mm程度)微量。酸化鉄やや多量
2　灰色土　　灰褐色粘土ブロック(2～10mm)微量。褐色粘土ブロック(5～15mm)微量
3　灰色土　　灰褐色粘土ブロック(1cm程度)やや多量。褐色粘土ブロック(1cm程度)やや多量。灰色粘土ブロック(6mm程度)微量

第44号溝跡
1　黒褐色土　黄灰色粘土ブロック(1～3cm)少量。マンガン含む

第46号溝跡
1　褐色土　　黄褐色土ブロック(2～8mm)多量。焼土ブロック(1～5mm)少量
2　褐色土　　暗褐色土ブロック(5～10mm)少量。酸化鉄多量
3　黄灰色土　褐色粘土ブロック(5～10mm)やや多量。酸化鉄多量
4　黄灰色土　灰色粘土ブロック(1cm程度)微量。酸化鉄少量
5　灰褐色土　白灰色粘土ブロック(5～15mm)やや多量。粘性有り

第47号溝跡
1　暗褐色土　黄褐色土ブロック(1～3cm)多量。褐色粘土ブロック(2～5mm)やや多量。炭化物(1cm程度)微量
2　褐色土　　黄褐色土ブロック(2～6mm)少量。褐色粘土ブロック(2～3mm)少量
3　褐色土　　黄褐色土ブロック(2～5mm)やや多量

第50号溝跡
1　褐色土　褐色粘土ブロック(2～3mm)多量。焼土(1～2mm)微量

第51号溝跡
1　黒褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2mm)やや多量

第52号溝跡
1　灰褐色土　褐色粘土ブロック(5～8mm)やや多量

第54号溝跡
(1)　褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～2cm)少量
(2)　褐色土　黄褐色粘土ブロック(5～15mm)やや多量。酸化鉄多量

第56号溝跡
1　黒灰色土　黄褐色粘土ブロック(1～3mm)少量

第65号溝跡
1　褐灰色土　黄灰色粘土ブロック(2～3mm)多量
2　褐灰色土　黄灰色粘土ブロック(1～2mm)やや多量

0　2m
1:80

第173図　中・近世溝跡断面図（6）

で0.04mである。走行方位はN－45°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第41号溝跡（第168図）

E－8グリッドに位置し、東西に延びると推測される。土壙の可能性もあるが、遺構の形状から本項に記した。

規模は、全長1.50m、幅は最大で1.26m、最小で1.10m、確認面からの深さは、最大で0.21m、最小で0.14mである。走行方位はN－25°－Eを指す。

遺物は出土していないが、第Ⅰ層を掘り込むことから、近世以降の中でも、新しい時期に相当するものと考えられる。

第42号溝跡（第171図）

C－2グリッドから、D－2グリッドへと東西に延び、東は第32号溝跡に接続するように消滅する。しかし、第32号溝跡との関係については明らかに出来なかった。他に、第51号溝跡と重複する。

規模は、全長3.66m、幅は最大で0.18m、最小で0.14m、確認面からの深さは、最大で0.05m、最小で0.03mである。走行方位はN－55°－Eを指す。

覆土は暗褐色土を主体とする。

遺物の出土はないが、中世以前の可能性がある。

第43号溝跡（第171図）

C－2グリッドから、D－1グリッドへと南北に延びる。第3・13・32・53号溝跡と重複する。

規模は、全長20.52m、幅は最大で0.69m、最小で0.50m、確認面からの深さは、最大で0.27m、最小で0.12mである。走行方位はN－45°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第44号溝跡（第171図）

E－3グリッドに位置し、南西から北東に延び、北東側は第35号溝跡に、南西は第39号溝跡に接続するように消滅する。

規模は、全長2.90m、幅は最大で0.50m、最小で0.42m、確認面からの深さは、最大で0.06m、最小で0.04mである。走行方位はN－45°－Eを指す。

断面形は椀形で、覆土は黒褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。

第46号溝跡（第171図）

B－3グリッドから、C－3グリッドへと南北に延び、北は調査区外へと続き、南は直行する第7号溝跡の手前で途切れる。第47号溝跡と重複し新しい事が平面観察及び断面観察から分かっている。他には第47号土壙と重複するが前後関係を確認することが出来なかった。

規模は、全長7.37m、幅は最大で1.05m、最小で0.95m、確認面からの深さは、最大で0.78m、最小で0.41mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

断面形は逆台形を呈し、覆土は埋め戻されていた。

出土遺物は、土師器の小片1点である。

第47号溝跡（第171図）

B－3グリッドから、C－3グリッドへと南北に延び、北は調査区外へと続き、南は直行する第7号溝跡の手前で途切れる。重複する第46号溝跡よりも古い。

規模は、全長7.10m、幅は最大で0.70m、最小で0.43m、確認面からの深さは、最大で0.29m、最小で0.15mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第49号溝跡（第171図）

D－2グリッドに位置し、東西に延びながら第50号溝跡に接続する。

規模は、全長1.85m、幅は最大で0.23m、最小で0.22m、確認面からの深さは、最大で0.10m、最小で0.08mである。走行方位はN－40°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第50号溝跡（第171図）

D－2グリッドに位置し、南北方向に延びている。第49・51号溝跡、第30号井戸跡と重複している。

規模は、全長3.11m、幅は最大で0.19m、最小で0.17m、確認面からの深さは、最大で0.08m、最小で0.05mである。走行方位はN－60°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第51号溝跡（第171図）

D－2グリッドに位置し、やや湾曲しながら南北に延びる。第39号溝跡よりも新しく、他に第23号土壙、第38・42・50・66号溝跡と重複する。

規模は、全長5.00m、幅は最大で0.40m、最小で0.29m、確認面からの深さは、最大で0.09m、最小で0.06mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

出土遺物は土師器の小片が1点出土している。

第52号溝跡（第171図）

C－3グリッドに位置し、南北に延びる。第7号溝跡と重複する。土壙の可能性もあるが、平面形態から溝跡とした。

規模は、全長0.84m、幅は最大で0.32m、最小で0.28m、確認面からの深さは、最大で0.03m、最小で0.02mである。走行方位はN－35°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第53号溝跡（第171図）

C－3グリッドから、C－2グリッドへと東西に延びる。東側は撹乱に削平されており、調査出来なかった。重複する第4・43号溝跡よりも古く、第1号集石土壙よりも新しい。他に第2号柱穴列、第5・55・56号溝跡と重複する。

規模は、全長5.83m、幅は最大で0.95m、最小で0.76m、確認面からの深さは、最大で0.28m、最小で0.17mである。走行方位はN－30°－Eを指す。

遺物は、土師器の細片が20.0g出土している。

第54号溝跡（第171図）

C－2グリッドに位置し、東西に延び、東は撹乱に削平され、西は調査区外へと延びる。第13・43号溝跡よりも古い。

規模は、全長1.85m、幅は最大で1.04m、最小で0.57m、確認面からの深さは、最大で0.36mである。走行方位はN－65°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第55号溝跡（第171図）

C－3グリッドから、C－2グリッドへと延びる。東は調査区外へと延びている。第56号溝跡よりも古く、第1号集石土壙よりも新しい。他に第5号溝跡と重複するが前後関係は確認できなかった。

規模は、全長1.19m、幅は0.41m、確認面からの深さは、0.07mである。走行方位はN－50°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第56号溝跡（第171図）

C－3グリッドに位置し、南北に延びる溝跡である。北は調査区外へと続き、南は遺構の深度が確認面にまで及んでいないため調査出来なかった。第55号溝跡よりも新しい。他に第2号柱穴列と重複するが新旧関係を確認することは出来なかった。

規模は、全長1.36m、幅は0.39m、確認面からの深さは、最大で0.06m、最小で0.03mを測る。走行方位はN－45°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第57号溝跡（第171図）

D－4グリッドに位置し、南北に延びる。近隣には第11号溝跡が並行し、第16号井戸跡とは重複

関係にある。

深さが浅いため、ほとんど遺存していなかったが、検出した規模は、全長1.36m、幅は最大で0.22m、最小で0.18m、確認面からの深さは、最大で0.06m、最小で0.05mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第58号溝跡（第171図）

D－2グリッドから、D－3グリッドへと南北に延び、第11号掘立柱建物跡Pit 1～3、第7・32号溝跡と重複する。

規模は、全長4.68m、幅は最大で0.58m、最小で0.48m、確認面からの深さは、最大で0.05m、最小で0.04mである。走行方位はN－40°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第59号溝跡（第171図）

E・F－3グリッドに位置し、東西に延びる。第39号溝跡、第9号掘立柱建物跡Pit 7と重複する。

規模は、全長1.60m、幅は最大で1.02m、最小で0.64m、確認面からの深さは、最大で0.07m、最小で0.03mである。走行方位はN－60°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第60号溝跡（第171図）

E－3グリッドから、E－4グリッドへと南北に延びる。第2号屈溝状遺構と重複する。

規模は、全長2.18m、幅は最大で0.14m、最小で0.12m、確認面からの深さは、最大で0.11m、最小で0.03mである。走行方位はN－45°－Wを指す。

遺物は出土していない。

第61号溝跡（第171図）

E－3グリッドに位置し、第42号土壙、第39号溝跡と重複する。

規模は、全長0.77m、幅は最大で0.40m、最小で0.33m、確認面からの深さは、最大で0.12m、最小で0.07mである。走行方位はN－45°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第62号溝跡（第167図）

E－7グリッドに位置する。深度が浅く、確認面での平面観察が行えなかったが、調査区南壁面において検出した。土壙である可能性もあるが、規模と断面の形状から溝跡として記している。

規模は、幅1.80m、掘り込み面からの深さ0.56mである。

遺物は出土していない。

第63号溝跡（第167図）

F－4グリッドに位置し、東西方向に延びる。調査区を拡張した際に検出した。深度が浅いため、遺構確認面における平面観察は行えなかった。西側は調査区外へと続いている。第64号溝跡、第34号土壙と重複する。

規模は、全長1.24m、幅は最大で0.26m、最小で0.22m、確認面からの深さは、最大で0.11m、最小で0.07mである。走行方位はN－43°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第64号溝跡（第168図）

F－4グリッドに位置し、東西に延びる。調査区を拡張した際に平面観察を行った。第26号井戸跡、第63・65号溝跡と重複する。

規模は、全長4.14m、幅は最大で0.52m、最小で0.38m、確認面からの深さは、最大で0.16m、最小で0.13mである。走行方位はN－45°－Eを指す。

遺物は出土していない。

第65号溝跡（第171図）

F－4グリッドに位置し、調査区を拡張した際に検出した。南北に延び、第36号溝跡とは同一の溝跡である可能性がある。他に第64号溝跡と重複

する。

規模は、全長0.76m、幅は最大で0.46m、最小で0.32m、確認面からの深さは、最大で0.08m、最小で0.06mである。走行方位はN−50°−Wを指す。

遺物は出土していない。

第31表　中・近世溝跡出土遺物観察表（第155～161・166・177図）

番号	遺構名	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考	図版
1	1	磁器	碗	肥前か	10	(11.8)	—	4.0	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤		胴：樹文か	18世紀前半か	60 - 2
2	1	陶器	皿	瀬戸 美濃	80	—	4.8	[2.8]	灰白	良好	灰釉	轆轤	削り出し高台		15世紀中頃　貫入多 内外面油煙付着 見込み：目跡 灯明皿に転用	58 - 2
3	1	陶器	皿	瀬戸 美濃	50	(14.6)	7.2	3.1	灰白	良好	灰釉	轆轤	削り出し高台	高台内：蛇の目釉剥ぎ	17世紀後半　貫入多 見込み：高台跡	55 - 4
4	1	陶器	皿	瀬戸 美濃	40	(12.8)	8.0	2.6	灰白	良好	長石釉	轆轤	削り出し高台	見込み：三巴文　鉄絵	17世紀後半　貫入多 見込：高台内に円錐ピン跡 志野	55 - 5
5	1	陶器	皿	瀬戸 美濃	30	—	(7.8)	[1.5]	灰白	普通	灰釉	轆轤	削り出し高台	見込み：蛇の目釉剥ぎ	17世紀中頃か 貫入有 見込み：高台跡	
6	1	陶器	皿	瀬戸 美濃	20	(12.0)	(5.8)	2.5	灰白	良好	長石釉	轆轤	削り出し型打	高台	16世紀後半～17世紀前半 優：焼台跡 見込み：目跡 畳付：砂粒 丸ノミ削ぎか 菊皿	55 - 6
7	1	陶器	皿	瀬戸 美濃	5	(14.1)	—	[2.6]	灰白	良好	灰釉	轆轤			貫入多	60 - 2
8	1	陶器	香炉	瀬戸 美濃	25	—	(9.6)	[3.0]	淡黄	普通	鉄釉	轆轤	削り出し高台		18世紀中頃	60 - 2
9	1	陶器	香炉	瀬戸 美濃	10	—	—	—	灰白	良好	鉄釉	轆轤			18世紀前葉 砥石に転用	60 - 2
10	1	陶器	小坏	瀬戸 美濃	95	8.0	3.7	6.0	黄灰	良好	灰釉	轆轤	高台貼り付けか		17世紀代か 貫入多　畳付：砂粒	54 - 2
11	1	瓦質土器	鉢		15	(28.6)	—	[3.9]	灰白	普通	—	轆轤			14世紀 片岩を含む	
12	1	陶器	鉢	肥前 唐津	25	—	(10.8)	[9.5]	淡褐	良好	鉄釉 銅緑釉 白化粧土	轆轤	削り出し高台		17世紀末～18世紀前半か 釉薬内外流しかけ 見込み：砂粒	60 - 2
13	1	陶器	鉢	肥前 唐津	75	32.0	12.8	10.2	赤褐	良好	透明釉 鉄釉 白化粧土	轆轤	削り出し高台	三島手	17世紀末～18世紀前葉 見込み：砂目跡7ヶ所	56 - 5
14	1	瓦質土器	鉢	在地	5	—	—	[6.9]	灰白	不良	—	輪積			14世紀	
15	1	瓦質土器	鉢	在地	5	—	—	[4.8]	灰白	普通	—	轆轤			14世紀 片岩を含む	
16	1	瓦質土器	鉢	在地	5	—	(10.0)	[2.5]	黄灰	普通	—	轆轤		底部：静止糸切り	二次的被熱 外面赤色化	60 - 2
17	1	瓦質土器	鉢	在地	20	—	(8.0)	[1.8]	黄灰	普通	—	轆轤		底部：回転糸切り		
18	1	瓦質土器	甕	在地	10	—	—	[7.4]	灰黄褐	普通	—	輪積か			15世紀 二次的被熱 黒・赤色化	60 - 2
19	1	瓦質土器	焙烙		5	—	—	[3.8]	褐灰	普通	—	輪積			口縁部～内面煤付着	

番号	遺構名	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土色調	焼成	釉薬施釉	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考	図版
20	1	瓦質土器	焙烙		5	—	—	[6.0]	灰	普通	—	輪積			外面煤付着 補修孔有り	60・2
21	1	瓦質土器	焙烙		40	38.4	34.3	5.3	黒褐	普通	—	輪積			内外面煤付着	57・4
22	1	瓦質土器	焙烙		5	—	—	6.8	黒灰	普通	—	輪積			外面煤付着	
23	1	土師質土器	焙烙	在地	5	—	—	[5.6]	灰褐	普通	—	輪積			外面煤付着	
24	1	石製品	砥石			長さ[4.1cm]	幅2.2cm	厚さ[1.3cm]	重さ 17.8 g	砂岩						69・1
25	1	石製品	砥石			長さ[6.6cm]	幅3.7cm	厚さ 2.8cm	重さ 107.4 g	凝灰岩						69・1
26	1	石製品	砥石			長さ 9.1cm	幅2.6cm	厚さ 2.3cm	重さ 64.6 g	凝灰岩						69・1
27	1	石製品	砥石			長さ[9.0cm]	幅4.1cm	厚さ 3.5cm	重さ 132.0 g	凝灰岩						69・1
31	2	かわらけ	皿		50	(11.0)	(6.0)	3.5	灰黄	普通	—	轆轤	底部調整不明		16世紀後半 風化著しい 片岩を含む	53・3
32	2	かわらけ	皿		10	(10.6)	—	[2.8]	灰黄	普通	—	轆轤			内外面油煙付着 灯明皿に転用か	
33	2	磁器	碗	肥前	25	—	(4.4)	[3.2]	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台	高台脇・高台内：一重圏線 高台内：銘 高台際：三重圏線 腰：草花文	17世紀後半か 貫入多 畳付：砂粒	61・1
34	2	磁器	碗	肥前	40	(9.8)	4.0	7.2	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台	表口縁・高台脇・高台際：一重圏線　胴：一重網目文・草文	17世紀中頃か 見込み・高台内：砂粒	54・1
35	2	磁器	碗	肥前	40	—	4.4	[2.7]	灰白	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台	高台脇・高台内：一重圏線 高台際：二重圏線 腰：草花文	18世紀前半	
36	2	磁器	碗	肥前	80	—	4.5	[5.8]	灰白 緻密	良好	青磁	轆轤	削り出し高台		16世紀か　貫入多 見込み・畳付け：砂粒	
37	2	陶器	碗	瀬戸美濃	10	(15.0)	—	[3.9]	灰白	普通	灰釉	轆轤			16世紀後半か 貫入多　平碗	
38	2	陶器	碗	瀬戸美濃	10	(20.8)	—	[5.0]	褐灰	良好	灰釉	轆轤			15世紀　貫入多 漆継ぎの痕跡 茶器として伝世か 平碗　古瀬戸	54・6
39	2	陶器	碗	肥前唐津	60	(11.2)	4.4	5.7	灰白	良好	鉄釉	轆轤	削り出し高台 高台内輪		17世紀前半　貫入有 見込み：擦痕 天目茶碗	54・3
40	2	陶器	碗	瀬戸美濃	70	(10.8)	4.5	6.9	灰白 緻密	良好	灰釉 鉄釉	轆轤	削り出し高台		17世紀中葉か 貫入多 見込み：砂跡 天目茶碗	54・4
41	2	陶器	碗	京信楽	5	—	—	[3.8]	灰白	良好	透明釉	轆轤			18世紀後半か 貫入多	
42	2	磁器	皿	瀬戸美濃	90	11.5	7.0	2.1	灰白	普通	白磁 長石釉	轆轤	削り出し高台		17世紀前葉　貫入多 見込み・高台内：円錐ピン跡3ヶ所 志野織部か	55・7
43	2	陶器	皿	瀬戸美濃	25	—	(7.4)	[1.3]	灰白	良好	灰釉	轆轤	削り出し高台		17世紀後半　貫入多 見込み：輪目跡 高台内：目跡 油煙付着	
44	2	陶器	皿	瀬戸美濃	10	(9.1)	—	[1.4]	灰	良好	灰釉	轆轤			17世紀代か 折縁皿	61・1

番号	遺構名	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考	図版
45	2	陶器	皿	瀬戸美濃	80	—	7.8	[1.8]	灰白	良好	灰釉	轆轤	貼り付け高台	見込み：蛇の目釉剥ぎ	18世紀代か 見込み：砂粒	61 - 1
46	2	陶器	皿	瀬戸美濃	70	11.6	6.3	2.0	灰白	善通	長石釉		轆轤	底部：回転ヘラ削り	17世紀前葉　貫入多 一部黒色化 志野	55 - 8
47	2	陶器	皿	瀬戸美濃	15	(12.2)	(7.9)	1.7	灰白	善通	長石釉	轆轤	削り出し高台		17世紀前葉 見込み：円錐ピン跡1ヵ所 気泡有 志野	55 - 9
48	2	陶器	皿	瀬戸美濃	10	(14.4)	—	[2.2]	灰白	良好	長石釉	轆轤		見込み：蛇の目釉剥ぎ	17世紀中葉　貫入多 気泡有	61 - 1
49	2	陶器	壺	瀬戸美濃	20	(10.2)	—	[6.5]	灰白	良好	鉄釉	轆轤			18世紀前半から中葉 口唇部釉無 有耳壺か	61 - 1
50	2	陶器	壺	瀬戸美濃	15	—	(8.2)	[3.3]	灰白	良好	鉄釉	轆轤	貼り付け高台		18世紀か　畳付：ごく部分的に釉付着	
51	2	陶器	鉢	肥前唐津	45	—	10.8	[3.9]	淡褐色	良好	透明釉 灰釉 鉄釉 白化粧土	轆轤	削り出し高台	見込み：二重圏線 流しかけ	17世紀末～18世紀前半か 見込み：砂目跡 畳付：胎土目跡	60 - 3
52	2	陶器	茶入れ	瀬戸美濃	70	—	4.0	[5.5]	灰白	良好	鉄釉	轆轤		底部：回転糸切り	17世紀中～末葉	53 - 7
53	2	陶器	擂鉢	丹波か	5	—	—	[4.5]	にぶい橙	善通	焼締	輪積	卸目7本/条		17世紀後～18世紀前か	
54	2	陶器	擂鉢	信楽	45	(29.9)	10.9	12.2	褐灰	善通	焼締	轆轤	卸目7本/条		17世紀後半～18世紀前半 見込み：目跡	56 - 6
55	2	陶器	擂鉢	信楽	10	(32.0)	—	[10.0]	黄灰	良好	鉄釉	轆轤	卸目7本/条		17世紀後半	60 - 3
56	2	陶器	擂鉢	備前	10	—	—	[11.0]	黒褐	善通	焼締か	輪積	卸目7本/条		18世紀前半か 見込み：重積跡	60 - 3
57	2	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	20	—	(11.0)	[5.3]	灰黄	良好	鉄釉	轆轤	底部：回転ヘラケズリ 卸目11本/条		16世紀 底部：目跡	
58	2	陶器	擂鉢	信楽か	5	—	—	[7.0]	灰黄	良好	鉄釉か	輪積	卸目7本/条		17世紀代か	60 - 3
59	2	陶器	擂鉢	信楽か	5	—	—	[6.9]	橙	良好	焼締	輪積	卸目7本/条		17世紀代か	
60	2	陶器	擂鉢	信楽か	5	—	—	[6.3]	灰黄	良好	鉄釉か	轆轤			17世紀代か	
61	2	陶器	擂鉢	信楽	5	—	—	[0.9]	灰黄	良好	鉄釉か	輪積	卸目9本/条		18世紀代 卸目やや磨滅	60 - 3
62	2	瓦質土器	焙烙		5	—	(32.0)	[4.0]	灰白	善通	—	輪積			外面煤付着	
63	2	瓦質土器	焙烙		25	(37.6)	—	[4.5]	灰	善通	—	輪積			外面煤付着	
64	2	瓦質土器	焙烙		15	(38.8)	(36.8)	5.4	灰白	善通	—	輪積			外面煤付着	
65	2	瓦質土器	焙烙		40	(42.0)	(28.2)	[5.6]	褐灰	善通	—	輪積			外面煤付着	
66	2	瓦質土器	焙烙		20	(46.7)	(44.0)	[6.2]	暗灰	善通	—	輪積			外面煤付着	57 - 5
67	2	瓦質土器	焙烙		5	—	—	[5.7]	暗灰	良好	—	輪積			外面煤付着	
68	2	瓦質土器	焙烙		5	—	—	[5.2]	灰	善通	—	輪積			外面煤付着	
69	2	山茶碗系	片口鉢	在地	10	—	—	—	灰	良好	—	轆轤			14世紀 転用砥石	
70	2	陶器	甕	常滑	10	—	—	[8.6]	灰	良好	自然釉			外面に櫛目	15世紀代か	61 - 1
71	2	石製品	砥石			長さ 11.5cm　幅 3.8cm　厚さ 3.6cm　重さ197.2 g　凝灰岩										69 - 1
72	2	石製品	砥石			長さ 14.0cm　幅 3.5cm　厚さ 2.8cm　重さ157.8 g　凝灰岩										69 - 1
73	2	石製品	砥石か			長さ 18.0cm　幅 9.7cm　厚さ 2.9cm　重さ801.5 g　緑泥片岩									板碑の転用品か	
76	2	鉄製品	小柄			長さ 22.7cm　刃長12.6cm　刃幅1.2cm　背厚0.25cm　重さ37.44 g										69 - 3
77	2	鉄製品	煙管			長さ　4.9cm　火皿径1.7cm　径1.0cm　重さ9.60 g									雁首	69 - 3
78	2	鉄製品	煙管			長さ　6.3cm　径1.0cm　重さ4.71 g									吸い口	69 - 3
79	4	陶器	皿か	瀬戸美濃	25	—	(7.4)	[1.4]	灰	良好	灰釉	轆轤	貼り付け高台		17世紀後半か 見込み：円錐ピン跡	
80	6	陶器	碗	瀬戸美濃	10	(11.3)	—	[3.8]	灰白	良好	鉄釉	轆轤			17世紀後半 天目茶碗	61 - 1
81	7	かわらけ	皿		20	(11.2)	(5.4)	[3.1]	橙	善通		轆轤			16世紀後半 風化著しい	

番号	遺構名	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土色調	焼成	釉薬施釉	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考	図版
82	7	かわらけ	皿		10	—	(8.0)	[2.8]	橙	普通		輪轆か			16世紀後半 風化著しい	
83	7	かわらけ	皿		10	—	(7.6)	[1.8]	橙	普通		輪轆			16世紀後半 風化著しく調整不明	
84	7	陶器	徳利	瀬戸 美濃	100	3.4	7.8	21.7	灰黄褐	良好	黄釉か 灰釉流 しか	輪轆	貼り付け 高台か 胴：窯道 具跡		19世紀前半 高台内：指頭痕 五合高田徳利	57 - 3
85	7	陶器	擂鉢	堺か	25	(27.2)	—	[4.8]	にぶい 赤褐	良好	焼締	輪轆	櫛目12本/条		19世紀前葉	
86	7	陶器	鉢		95	28.5	10.0	11.4	褐灰	普通	—				14世紀 摩耗著しい	56 - 4
87	8	かわらけ	皿		70	(10.8)	5.4	2.8	橙	普通	—	輪轆	底部： 回転糸切り			53 - 4
88	8	陶器	皿	瀬戸 美濃	25	(26.4)	15.0	[5.8]	灰	良好	灰釉	輪轆	貼り付け 高台	見込み：草文 か　鉄絵	17世紀前半か 見込み・高台内：目跡	
89	8	陶器	擂鉢	信楽	60	—	13.3	[7.4]	橙	良好	鉄釉	輪積	櫛目7本/条		18世紀代か	57 - 1
91	11	陶器	擂鉢	瀬戸 美濃	10	—	(10.0)	[9.5]	淡黄	良好	鉄釉	輪轆	底部： 回転糸切り		16世紀	
92	11	瓦質土器	焙烙		30	(36.4)	(32.8)	5.3	褐灰	普通	—	輪積			外面煤付着	57 - 6
93	11	石製品	砥石		長さ[6.1cm]　幅3.7cm　厚さ1.6cm　重さ65.5 g　砂岩											69 - 1
94	14	磁器	小坏	肥前	100	5.1	3.6	2.1	白灰	良好	白磁	輪轆	削り出し 高台		17世紀後半～18世紀前葉	53 - 6
95	14	磁器	坏	肥前	50	—	3.0	[1.8]	灰白 緻密	良好	白磁	輪轆	削り出し 高台		18世紀代か 畳付：砂粒　漆継ぎ	
96	14	磁器	碗	肥前	40	—	4.6	[3.0]	灰白 緻密	良好	透明釉	輪轆	削り出し 高台	高台脇・高台 内：一重圏線 高台際：二重 圏線 腰：草花文	18世紀前半～中葉か 見込み・畳付：砂粒	61 - 2
97	14	磁器	碗	肥前	80	—	3.0	[1.5]	灰白 緻密	良好	透明釉	輪轆	削り出し 高台	高台脇・高台 際：一重圏線	18世紀代か 畳付：砂粒	
98	14	磁器	碗	肥前	30	—	(3.9)	[2.7]	灰白 緻密	良好	透明釉	輪轆	削り出し 高台	高台脇：一重 圏線　高台 際：二重圏線 腰：草花文 高台内：一重 圏線崩れ 「大明□□」	18世紀中葉～後葉 畳付：砂粒	
99	14	磁器	碗	肥前	80	—	—	[2.3]	灰白 緻密	良好	透明釉	輪轆	削り出し 高台	高台脇：一重 圏線　高台 際：二重圏線 腰：草花文	18世紀中葉～後半 見込み：砂粒 発泡有	61 - 2
100	14	磁器	碗	肥前	20	—	(3.6)	[3.8]	灰白 緻密	良好	透明釉	輪轆	削り出し 高台	高台脇：一重 圏線　高台 際：二重圏線	18世紀代 畳付：砂粒	61 - 2
101	14	磁器	碗	肥前	70	—	3.8	[2.3]	灰白 緻密	良好	透明釉	輪轆	削り出し 高台	高台脇：一重 圏線　高台 際：二重圏線 高台内：一重 圏線崩れ 「大明年製」	18世紀前半～中葉 見込み・畳付：砂粒	61 - 2
102	14	陶器	碗	瀬戸 美濃	70	(9.2)	3.7	5.5	灰白	良好	鉄釉	輪轆	削り出し 高台		18世紀後半 見込み：擦痕少 天目茶碗	54 - 5
103	14	陶器	碗	瀬戸 美濃	5	(10.2)	—	[3.5]	灰白	良好	鉄釉	輪轆			17世紀後半 天目茶碗	61 - 2

番号	遺構名	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考	図版
104	14	陶器	甕	瀬戸 美濃	70	(11.6)	6.0	2.3	灰白	良好	鉄釉	轆轤	底部：回転糸切り		見込み：目跡 口縁外：目跡1ヶ所 尾呂	56 - 1
105	14	陶器	皿	瀬戸 美濃	90	—	6.5	[1.5]	灰	良好	灰釉	轆轤	貼り付け高台	見込み：草花文	17世紀後半～18世紀前半 貫入多 見込み：目跡 畳付：砂粒・釉 擂絵皿	61 - 2
106	14	磁器	皿	肥前	20	—	(9.4)	[2.5]	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台	見込み：楼閣山水文 高台内：刻印	18世紀後半 貫入多	61 - 2
107	14	陶器	香炉	瀬戸 美濃	30	(11.2)	8.4	6.2	灰白	良好	鉄釉	轆轤		胴：菊花文 丸ノミ削ぎ文	18世紀後半　三足 見込み：目跡	54 - 8
108	14	磁器	香炉	肥前	90	8.7	5.8	8.2	灰白	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台	高台際・内・口縁：二重圏線 腰：菊,松,梅文	17世紀前半　貫入多 畳付：砂粒	54 - 7
109	14	陶器	擂鉢	信楽	20	(37.2)	(14.2)	14.9	褐	良好	鉄鞣	轆轤・輪積	卸目6本/条		18世紀 上半轆轤下半輪積か 見込み：目跡か	57 - 2
110	14	陶器	瓶	肥前 唐津	30	—	—	[6.0]	にぶい橙	良好	外：貫・胴掻き	轆轤			17世紀代か	61 - 2
111	14	陶器	瓶	肥前 唐津	15	—	—	[3.2]	灰白	良好	透明釉	轆轤		胴：草文か	17世紀後半	
112	14	陶器	壺	瀬戸 美濃	20	(11.6)	—	[5.7]	にぶい黄橙	良好	鉄釉	轆轤			18世紀中葉～後半 口唇部：釉剥落 有耳壺	61 - 2
113	14	陶器	鉢か	瀬戸 美濃	40	—	(9.4)	[4.8]	灰オリーブ 緻密	良好	灰釉	轆轤	削り出し高台		19世紀前半か 貫入多　見込み：目跡 円錐ピンか2ヵ所	61 - 2
114	14	陶器	壺	瀬戸 美濃	80	8.4	—	[15.3]	灰白 緻密	良好	鉄釉	轆轤	肩部に窯道具跡		18世紀中葉か 内面油煙付着 尾呂　双耳壺	56 - 2
115	14	石製品	砥石か			長さ12.1cm　幅4.6cm　厚さ1.9cm　重さ145.6ｇ　緑泥片岩									板碑の転用品か	
116	14	瓦質土器	焙烙		20	(39.8)	(34.4)	5.4	灰	普通	—	輪積			外面煤付着	58 - 1
143	16	磁器	碗	肥前	20	(11.9)	—	[5.0]	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤		外口縁：二重圏線　高台 腰：一重圏線 腰：草花文	18世紀前半	61 - 3
144	16	磁器	碗	肥前	20	—	(5.5)	[3.5]	灰白	良好	白磁	轆轤	削り出し高台		17世紀代か 貫入有　畳付：砂粒	
145	16	陶器	碗	瀬戸 美濃	65	(8.4)	4.4	3.8	浅黄	普通	長石釉	轆轤	削り出し高台		17世紀中葉～後葉 貫入多 見込：円錐ピン跡	53 - 8
146	16	陶器	香炉	瀬戸 美濃	15	—	(12.0)	[3.4]	灰白	普通	鉄釉	轆轤	削り出し高台		18世紀中頃	61 - 3
147	16	陶器	皿	瀬戸 美濃	75	—	5.8	[3.0]	灰白	良好	灰釉	轆轤	削り出し高台	見込み：蛇の目釉剥ぎ	17世紀後半　貫入多	61 - 3
148	16	磁器	皿	肥前	10	(13.0)	—	[2.8]	灰白 緻密	良好	白磁	轆轤		見込み：蛇の目釉剥ぎ	17世紀代か	
149	16	石製品	砥石			長さ[6.5cm]　幅3.3cm　厚さ2.7cm　重さ109.6ｇ　凝灰岩										69 - 1
150	16	鉄滓	椀形滓			長さ　3.5cm　幅3.5cm　厚さ1.2cm　重さ20.6ｇ										69 - 3
151	23	須恵器	長頸瓶	南比企	10	—	(12.9)	[4.6]	灰	良好	—	轆轤	貼り付け高台		転用硯	61 - 3
152	24	陶器	碗	瀬戸 美濃	10	(11.6)	—	[4.9]	灰白 緻密	良好	鉄釉	轆轤			17世紀後半 天目茶碗	61 - 3

番号	遺構名	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土色調	焼成	釉薬其他	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考	図版
153	24	陶器	皿	瀬戸美濃	95	—	7.0	[1.6]	灰白	良好	灰釉	轆轤	削り出し高台	見込み：蛇の目釉剥ぎ	17世紀後半　貫入多 見込み：高台跡 内外面：油煙付着 灯明皿	58 - 2
154	24	陶器	壺	瀬戸美濃	10	(14.4)	—	[9.2]	灰白	普通	鉄釉	轆轤			18世紀後半～19世紀中葉 有耳壺か	61 - 3
155	24	瓦質土器	焙烙		5	—	—	[5.7]	にぶい黄橙	普通	—	輪積			内外面煤付着	
157	25	かわらけ	皿		40	(8.6)	6.0	2.4	にぶい橙	普通	—	轆轤	底部：回転糸切り		灯明皿　油煙付着	53 - 5
158	25	陶器	皿	瀬戸美濃	35	—	(8.0)	[1.6]	灰白	普通	灰釉	轆轤	削り出し高台		17世紀前半　貫入多 見込み：高台跡	62 - 1
159	25	陶器	皿	瀬戸美濃	50	(11.8)	(6.4)	2.8	灰白	良好	鉄釉	轆轤	削り出し高台	高台内：蛇の目釉剥ぎ	16世紀後半か 高台内：輪目跡 輪花皿	55 - 10
160	25	陶器	香炉	瀬戸美濃	40	—	(11.2)	[2.5]	にぶい黄橙	良好	鉄釉	轆轤	底部：回転へラ削り		18世紀後半～19世紀中葉か　底部砂粒有	
161	25	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	5	(30.0)	—	[11.4]	灰白	普通	鉄釉	轆轤	卸目13本/条		16世紀 卸目は磨滅著しい	62 - 1
162	25	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	20	(27.8)	—	[7.8]	灰色	良好	鉄釉	轆轤	卸目17本/条		16世紀	62 - 1
163	25	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	15	(33.0)	—	[3.5]	灰白	普通	鉄釉	轆轤			17世紀後葉	62 - 1
164	25	瓦質土器	焙烙		10	—	—	[5.5]	黄灰	普通	—	輪積			外面煤付着	62 - 1
165	25	瓦質土器	焙烙		20	(36.6)	(31.0)	5.3	にぶい黄橙	普通	—	輪積				62 - 1
166	25	瓦質土器	不明		5	長さ [10.8]	幅 [6.2]	厚さ 2.4	にぶい黄橙	普通	—				重さ129.5 g　瓦か	
167	25	瓦質土器	不明		5	長さ [10.8]	幅 [5.2]	厚さ 2.5	黄橙	普通	—				重さ106.3g　瓦か	
168	25	瓦質土器	不明		5	長さ [5.5]	幅 [5.0]	厚さ 1.8	黄橙	普通	—				重さ30.0g　瓦か	
169	25	石製品	砥石か			長さ14.8cm　幅3.7cm　厚さ1.9cm　重さ125.0 g　緑泥片岩									板碑の転用品か	
170	25	石製品	砥石			長さ15.2cm　幅4.5cm　厚さ3.8cm　重さ405.2 g　砂岩										
171	27	瓦	平瓦			長さ [8.7]	幅 [8.0]	厚さ 1.7								
172	27	陶器	鉢か	瀬戸美濃	30	—	(10.0)	[2.3]	灰白	良好	灰釉	轆轤	削り出し高台		18世紀代か 見込み・畳付：目跡	
173	38	陶器	灯明皿	瀬戸美濃	15	(10.0)	(4.5)	2.1	黄灰	良好	灰釉	轆轤	底部：回転へラ削り		18世紀後半 貫入多	

（7）ピット

ピットは合計518基の多くを数え、調査区全域から検出されている。ピット番号はグリッドごとに1番から付している。新たに掘立柱建物跡や柱穴列に編入されたものや調査時の欠番については、新たな番号を付さずに欠番のままとしている。

ピット番号はピット区割図（第178～181図）に記載した。また、規模等のデータは第33表のピット一覧に示した。

ピットの平面形体は、円形もしくは楕円形のものが主体を占めている。規模は直径8～54㎝、確認面からの深さ2.7～56.1㎝と一様ではなく、埋土に柱痕跡が確認されたものは少ない。

分布状況は、調査区中央部のD－3・4グリッド以北、調査区西部のE－3・4グリッド周辺と、掘立柱建物跡が密集する調査区中央から西部に掛けて集中する傾向が窺われた。

掘立柱建物跡や柱穴列としたもの以外には、配列や埋土の状態に規則性の認められるものはなかったが、建物跡周辺に分布する状況から、これらの中に建物跡が含まれている可能性は高いものと推測される。

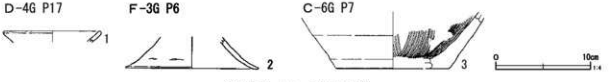
出土遺物は極めて少なく、時期を判定することが難しい。しかし、埋土の状態などから、ほとんどのピットが中・近世に属すと考えられる。

なお、中・近世を中心とするものが大半を占めている中に、古墳時代のものを少量含んでいるものと推測される。

ピット出土遺物（第174図）

遺物はほとんど出土しておらず、図示出来たものは、僅かにD－4グリッドPit17出土のかわらけの口縁部破片（第174図1）、F－3グリッドPit6出土の土師器高坏の脚部と思われる小片（第174図2）、C－6グリッドPit7出土の擂鉢の底部から胴部に掛けての小片（第174図3）のみである。3の擂鉢は瀬戸・美濃産と考えられ、擂り目は12本で右回りに施文している。

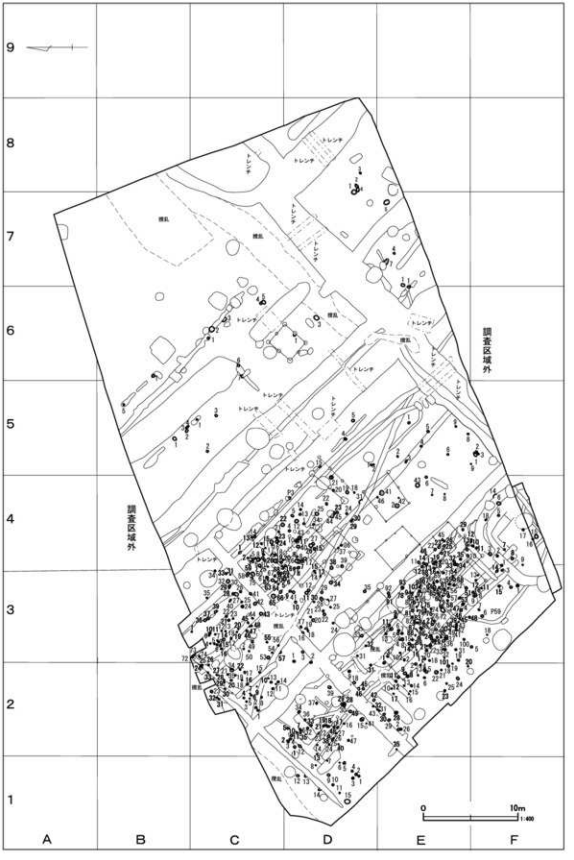
他にD－2グリッドPit10、D－4グリッドPit11、E－3グリッドPit30から、それぞれ土師器の小片が出土しているが微細なために図示出来なかった。



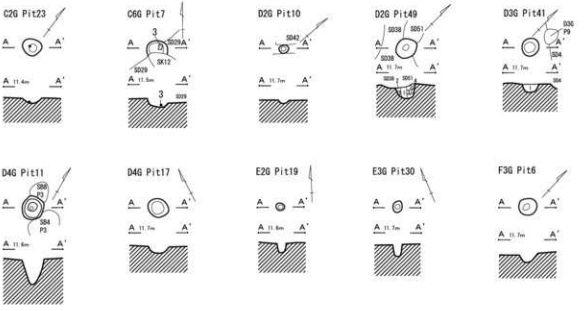
第174図　ピット出土遺物

第32表　ピット出土遺物観察表（第174図）

番号	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の特徴	文様	出土位置・備考	図版
1	かわらけ	皿		5	(10.4)	－	[1.2]	橙	普通		轆轤			D4G-P17	
2	土師器	高坏		10	－	14.0	[3.3]	橙	普通			脚土 A・C・E・L		F3G-P6　風化激しい	
3	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	20	－	(12.2)	[6.0]	淡黄	良好	鉄釉	轆轤	底部：回転糸切り 擂目12本/条		C6G-P7 16世紀 見込み：目跡 擂目磨耗	62・3



第175図　ピット全体図

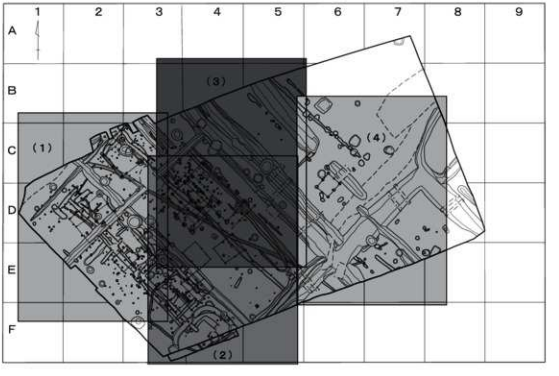


D2G Pit49
1　明褐色土　黄褐色粘土ブロック(5～8cm)少量。柱痕跡
2　黄褐色土　暗灰色土ブロック (5mm程度)多量
3　暗灰色土　黄褐色粘土粒子微量
4　黄褐色土　暗灰色土ブロック(2～5cm)多量

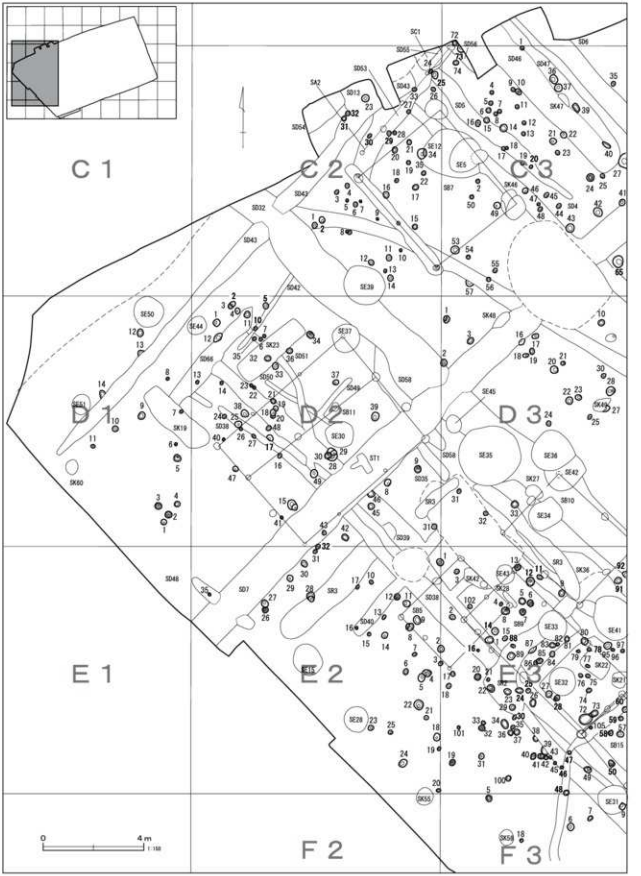
D3G Pit41
1　暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(1～5cm)少量。酸化鉄少量

0　2m

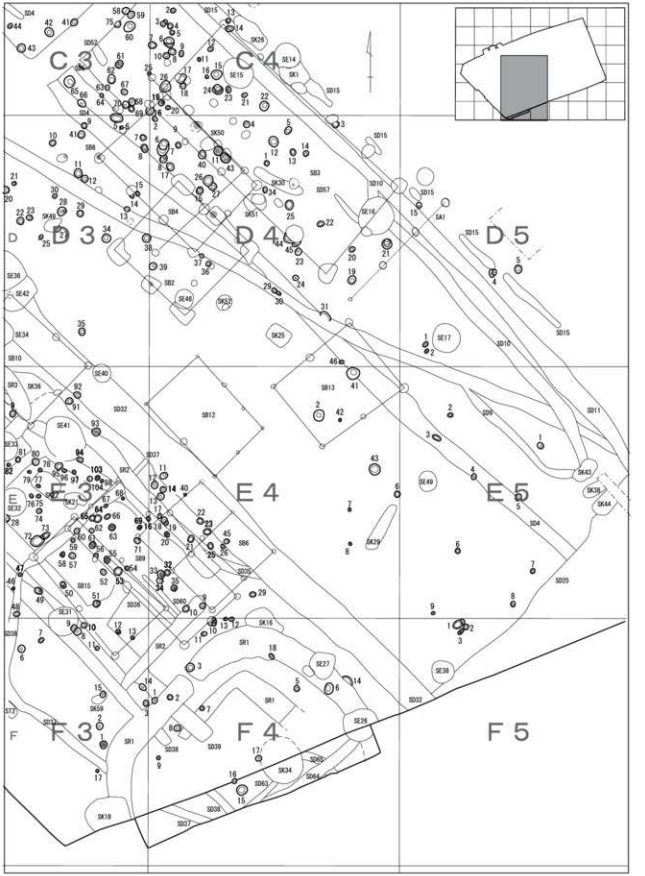
第176図　ピット



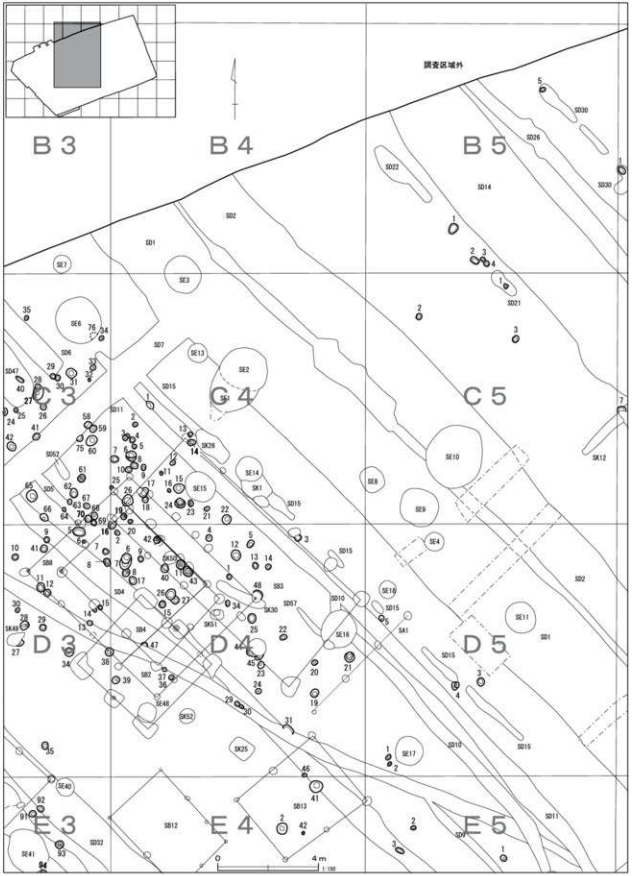
第177図　ピット全体図区割り図



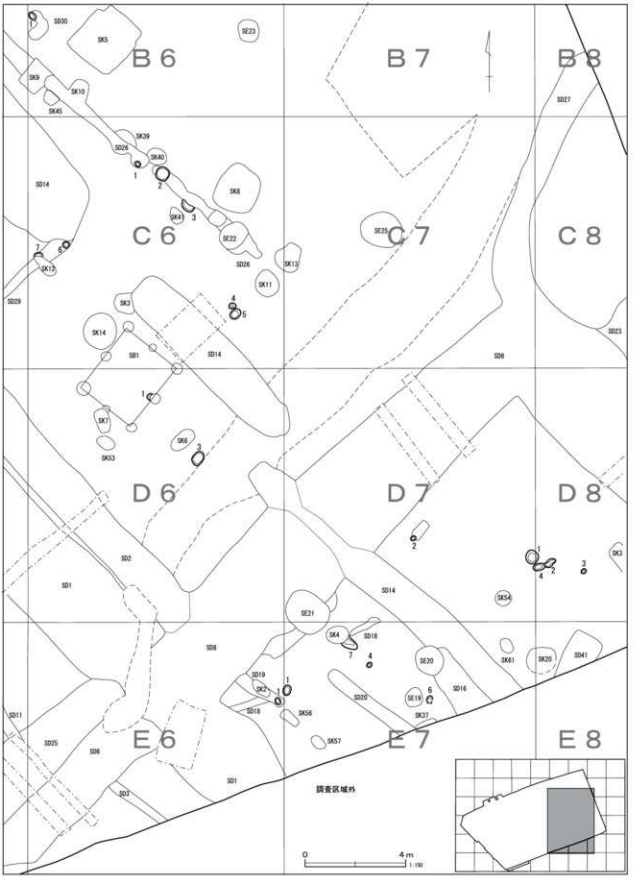
第178図　ピット区割り図（1）



第179図　ピット区割り図（2）



第180図　ピット区割り図（3）



第181図　ピット区割り図（4）

第33表　ピット一覧表

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物備考
B-5	1	C1	46	33	9.7	
	2	C1	36	24	11	
	3	C1	30	16	4.9	
	4	E1	22	21	9.8	
	5	—	23	18	34	
B-6	1	—	35	24	7.9	
	2	欠番				SK45へ変更
C-2	1	A1	21	20	17.5	
	2	A1	23	20	3.2	
	3	A1	18	16	5.5	
	4	A1	17	16	8	
	5	A2	16	16	22.5	
	6	A1	21	20	18.2	
	7	A2	14	12	27.8	
	8	A2	24	20	11.5	
	9	A1	11	11	20	
	10	A2	12	12	7	
	11	A2	25	22	7.5	
	12	A1	22	21	9	
	13	A2	13	13	12.8	
	14	A1	20	20	7.3	
	15	A1	22	22	12.3	
	16	A1	28	[24]	12	柱痕跡
	17	A2	26	24	9	
	18	A2	16	14	10.6	
	19	C1	18	17	5	
	20	B1	25	21	4	
	21	E2	20	19	6.5	
	22	A2	18	16	8.6	
	23	—	30	27	6	土師器高坏
	24	—	[23]	[17]	6.1	
	25	—	30	23	15.7	
	26	—	21	20	14.8	
	27	—	[18]	14	6	
	28	—	19	15	6.9	
	29	—	[22]	[19]	6.9	
	30	—	17	13	5.9	
	31	—	[24]	[20]	7.8	
	32	—	[20]	[18]	6.9	
	33	—	16	14	6	
	34	—	[30]	[14]	22	
	35	—	[40]	[19]	14.5	
C-3	1	—	18	15	8	
	2	A2	13	13	8.9	
	3	欠番				SK46へ変更
	4	A2	18	18	14.3	柱痕跡
	5	A2	22	20	18.1	
	6	—	22	20	11.5	
	7	A1	17	16	5.1	
	8	A1	18	16	4.5	
	9	A2	16	14	10.4	
	10	A2	24	22	29.1	
C-3	11	—	16	16	6.1	
	12	A2	14	13	7.2	
	13	A1	18	12	6.7	
	14	A2	34	[32]	7.7	
	15	—	[27]	23	35	
	16	A2	27	18	19.4	柱痕跡
	17	A2	[16]	[15]	19.2	
	18	A2	[12]	10	10.4	
	19	E1	[14]	[13]	20.7	
	20	E1	12	11	6	
	21	A2	24	23	33.5	
	22	A2	27	[21]	18.2	
	23	A2	18	16	8	
	24	A2	30	29	17.6	柱痕跡
	25	A2	18	16	14.3	
	26	C2	24	20	15	
	27	C2	[44]	30	16.1	
	28	A1	[30]	24	28.4	
	29	A2	23	[19]	28.2	
	30	A1	23	[18]	19.1	
	31	C2	41	38	17.9	
	32	A2	10	9	8.2	
	33	A1	21	20	10.5	
	34	C2	21	18	10.9	
	35	A1	20	16	12.5	柱痕跡
	36	—	36	[28]	14.6	
	37	—	33	27	17.4	
	38	欠番				SK47へ変更
	39	—	36	21	12.6	
	40	—	[38]	[14]	19	
	41	A1	[28]	[23]	34.9	
	42	A1	34	31	26	
	43	A2	[34]	[32]	21.4	炭化物少
	44	A2	20	18	10.4	
	45	A1	20	19	9.3	
	46	A1	[22]	[18]	18.7	
	47	A2	[8]	[8]	17.8	
	48	A2	18	18	11.5	
	49	C2	29	26	14.5	
	50	A2	15	14	8	
	51	欠番				
	52	欠番				
	53	A1	32	30	12.7	
	54	A2	16	14	9.9	
	55	C2	19	18	10.6	
	56	A1	[19]	[18]	30.8	
	57	C1	33	[18]	9	
	58	A1	[29]	[26]	23.2	
	59	A1	28	26	33.1	埋戻し
	60	A1	42	38	21.5	柱痕跡
	61	—	31	28	44.6	
	62	—	35	28	15	
C-3	63	—	[21]	19	20.2	
	64	A1	[14]	[13]	9.4	
	65	—	46	42	24.5	
	66	—	[36]	[28]	20.4	
	67	A1	26	22	14.8	炭化物有
	68	A1	28	24	4.9	
	69	A1	23	22	5.6	
	70	A2	28	25	16.4	
	71	欠番				SB8P11へ変更
	72	—	20	17	10.2	
	73	—	33	[18]	9.2	
	74	—	24	21	9.3	
	75	—	[28]	[21]	6.5	
	76	—	[38]	—	[32]	SE6の中
C-4	1	A1	[38]	[22]	17.2	
	2	A2	18	18	14.2	炭化物有
	3	A2	28	20	30.4	炭化物有 焼土粒
	4	A2	23	22	13.4	炭化物有 焼土粒
	5	A1	18	18	15.4	炭化物有
	6	A2	42	38	21.5	
	7	A1	30	26	20.5	柱痕跡
	8	C1	28	24	8.8	
	9	A1	21	17	14.6	
	10	A1	26	[23]	19.4	
	11	A1	15	13	10	
	12	A1	22	19	16.8	
	13	—	[20]	[17]	17.2	
	14	—	28	21	22.8	
	15	A2	44	38	15.8	
	16	A1	12	10	2.4	
	17	—	39	[27]	40.5	
	18	—	[24]	24	6	
	19	A2	26	23	24.9	
	20	A2	16	14	6.7	
	21	C1	21	17	11.5	
	22	C2	36	34	11	
	23	A1	26	18	21.6	
	24	A2	40	37	21	
	25	—	[15]	14	5.6	
	26	C1	[44]	41	13.2	
C-5	1	—	20	14	7	
	2	E1	23	22	5	
	3	E1	28	24	10	
C-6	1	—	24	22	4.7	
	2	—	[51]	[50]	19.8	
	3	—	54	[28]	8	
	4	—	17	13	6.5	
	5	—	44	36	8.8	
	6	—	[16]	[15]	8.1	
	7	—	[32]	[18]	13.7	陶器搬入 SK12と重複
D-1	1	B1	24	23	24.1	

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物 備考
D-1	2	B1	27	24	15.1	柱痕跡
	3	B1	27	24	14.8	
	4	B1	24	24	23.2	
	5	B1	28	26	30.8	
	6	B1	12	11	3.7	
	7	B2	[12]	[12]	15.1	
	8	B1	15	13	4.6	
	9	B1	29	25	28.8	
	10	B1	24	21	23.2	
	11	B1	17	11	7	
	12	E2	26	24	5.1	
	13	E2	24	[15]	6	
	14	A1	[23]	22	6	
	15	欠番				SK60へ変更
D-2	1	B2	27	24	41.4	
	2	A1	20	[18]	9.2	
	3	A2	20	[14]	14.2	
	4	B2	23	19	16	
	5	B2	24	[21]	18.4	
	6	—	[18]	16	9	
	7	A2	14	13	4.6	
	8	A1	29	25	15.4	
	9	A1	26	24	40.5	
	10	—	16	[12]	10.5	
	11	—	27	23	9.5	
	12	—	48	26	16	
	13	B1	13	13	4.8	
	14	A2	15	13	7.4	
	15	B1	45	23	39.1	
	16	A2	19	14	14.5	
	17	A2	28	22	10.7	柱痕跡
	18	A1	28	22	22.3	
	19	A1	24	[21]	14.9	
	20	A1	20	[12]	10	
	21	—	[29]	[13]	11	
	22	—	[12]	[8]	6.4	
	23	—	[10]	[7]	6	
	24	—	17	17	17.1	
	25	A1	26	26	20.4	
	26	—	12	[10]	4	
	27	—	20	[14]	3.9	
	28	D1	38	[19]	27	
	29	D1	[38]	[21]	25	
	30	B1	28	24	34	
	31	A1	18	18	18.5	
	32	B1	22	21	13	
	33	A1	25	24	20.5	
	34	A2	26	23	23.9	
	35	—	19	16	11	
	36	A2	22	[19]	16.3	
	37	A2	22	21	22	
	38	A1	34	27	29.3	
	39	A1	32	18	30.6	

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物 備考
D-2	40	A1	10	8	8	
	41	B1	14	12	6	
	42	A1	28	24	33.5	
	43	A1	16	14	11.5	
	44	欠番				SB11P3へ変更
	45	A1	26	23	6.6	
	46	A2	[28]	[24]	2.7	
	47	—	22	20	18.5	
	48	—	24	21	3.2	
	49	—	35	30	24.4	
D-3	1	B2	27	24	12	
	2	B2	28	26	23.5	柱痕跡
	3	A1	26	22	9	
	4	欠番				SK48へ変更
	5	A1	48	33	24.5	柱痕跡
	6	C1	16	[14]	21	
	7	A1	24	22	6.5	
	8	A1	30	26	24.5	
	9	A2	28	22	17.5	
	10	A1	22	21	8	
	11	A1	32	31	26	
	12	A1	28	26	20	
	13	A1	25	18	13.6	
	14	—	18	[8]	7	
	15	A2	17	16	10	
	16	B1	30	[20]	14.5	
	17	A2	26	18	20.3	
	18	B1	21	16	6	
	19	C	24	18	6.5	
	20	—	30	28	43.5	
	21	A2	18	14	7	
	22	A2	28	26	15.5	炭化物有
	23	A2	24	20	24	炭化物有
	24	E2	18	18	16	
	25	A2	18	14	6.5	炭化物有
	26	欠番				SK49へ変更
	27	A1	28	[13]	6	炭化物有
	28	A1	36	32	33	柱痕跡
	29	A2	32	23	11.5	柱痕跡
	30	A	18	16	7	
	31	E1	16	15	24.5	
	32	A1	17	15	12.5	
	33	A1	28	26	27.8	柱痕跡
	34	A2	34	33	24.4	炭化物少
	35	A2	28	27	21	
	36	欠番				
	37	欠番				
	38	欠番				
	39	欠番				
	40	欠番				SB10P7へ変更
	41	A1	29	26	13.5	SB8P10より変更
D-4	1	—	22	18	13.5	
	2	A	20	16	37.3	柱痕跡

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物 備考
D-4	3	—	[24]	24	5.8	
	4	A1	24	24	15.8	柱痕跡
	5	A1	30	24	9.3	柱痕跡
	6	A2	38	36	23.8	
	7	E1	[20]	42	15.5	
	8	A2	32	28	24.5	
	9	A1	24	20	26.9	
	10	欠番				SK50へ変更
	11	A1	38	32	37.3	
	12	A1	40	38	33.4	
	13	A2	26	22	8.1	
	14	A1	22	20	9	
	15	A2	28	26	20.1	
	16	—	[28]	30	15.9	
	17	E1	32	28	9.4	かわらけ
	18	欠番				SA1へ変更
	19	A1	32	32	11.7	
	20	—	24	20	12	
	21	C1	40	36	26.3	
	22	A2	28	24	15.2	
	23	A2	38	26	15.5	
	24	A2	24	20	10.7	
	25	A2	38	32	15.5	
	26	A1	44	40	26.7	石あり
	27	A2	30	[24]	16.9	
	28	—	14	14	19.8	
	29	—	[22]	16	4.8	
	30	—	18	10	7.7	
	31	B1	[48]	[24]	13.9	
	32	欠番				
	33	欠番				SK51へ変更
	34	A1	22	18	19	
	35	欠番				SK52へ変更
	36	A2	22	16	8.7	SB8P19より旧
	37	—	18	16	15	
	38	A2	32	30	39.8	柱痕跡
	39	A1	30	26	28.2	
	40	A2	34	30	13.4	
	41	欠番				
	42	—	40	36	48.2	
	43	—	42	32	56.1	
	44	—	[52]	[14]	11.1	
	45	—	[16]	24	12.9	
	46	—	18	12	7.3	
	47	—	22	[20]	6	SB8P6より変更
	48	—	43	38	17.4	
	49	欠番				
D-5	1	A2	23	15.5	11.6	
	2	E	19.5	13.5	7.1	
	3	E	31.5	28	14.6	
	4	—	36	27	10	
	5	—	21.5	19.5	10.5	
D-6	1	—	[25.5]	[13.5]	12.2	

グリッド	彩引	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物備考
D-6	2	欠番				SK53へ変更
	3	—	54	41	7.5	
D-7	1	欠番				SK54へ変更
	2	E1	26	18	11.6	
D-8	1	C1	54	50	41.3	
	2	C1	52	26	5.7	
	3	E1	22	18	4.9	
	4	C1	[44]	24	4.1	
E-1	1	E	[34]	—	[42]	南西壁面
	2	A	[26]	—	[50]	南西壁面　柱痕跡
E-2	1	A2	28	26	20.3	
	2	A2	25	23	32.4	柱痕跡
	3	A2	17	16	14.1	
	4	A2	36	28	23.3	
	5	A1	30	28	22.3	
	6	A2	20	19	5	
	7	A2	17	12	9.2	柱痕跡
	8	A1	32	28	12.7	
	9	A1	32	26	15.2	
	10	C1	17	14	9.1	
	11	A2	28	26	16.3	
	12	A1	26	24	25.9	柱痕跡
	13	A1	18	13	11	
	14	C2	24	23	17.2	柱痕跡
	15	C2	14	13	5.4	
	16	A2	12	11	14.8	
	17	A1	14	14	7.8	
	18	A1	28	27	21.6	
	19	A1	13	12	15.1	
	20	A2	15	14	7.1	
	21	A2	17	15	16.1	
	22	A1	35	34	41.2	
	23	A1	21	20	18.7	
	24	A1	34	26	10.5	
	25	A2	18	17	7.2	
	26	A1	24	23	29	
	27	A1	30	25	38.8	
	28	A2	38	25	36.3	
	29	A1	24	23	26.7	
	30	A1	26	21	13.8	
	31	A1	26	14	7.1	
	32	A1	17	15	26.1	
	33	欠番				SK55へ変更
	34	—	[61]	—	[18]	南西壁面
	35	—	10	10	10.7	
E-3	1	A	31	18	36.7	
	2	—	22	18	10.8	
	3	A2	18	16	13.4	
	4	A1	13	10	1.3	
	5	C1	26	25	10.8	
	6	C1	26	22	44.8	
	7	C1	22	22	37.9	
	8	A1	31	26	21.2	

グリッド	彩引	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物備考
E-3	9	—	26	23	9.5	
	10	欠番				SB10 P5へ変更
	11	A2	26	[16]	27.4	柱痕跡
	12	A2	34	33	30.3	
	13	E1	[25]	24	30.5	
	14	A1	29	26	40.9	
	15	C2	20	17	11.1	
	16	—	10	9	13.4	
	17	A2	20	18	31	柱痕跡
	18	A2	21	18	14.6	
	19	A2	25	22	15.4	柱痕跡
	20	A1	27	24	20.6	
	21	B1	14	13	8.3	
	22	A2	32	26	26.5	
	23	B1	26	24	17.4	
	24	D	30	21	3.2	
	25	A1	17	16	16.5	
	26	E	31	22	7.5	
	27	A1	26	24	15.1	
	28	A1	22	20	27.6	
	29	B1	22	22	8.1	
	30	A1	9	7	18.3	
	31	A2	21	20	11.5	
	32	A2	24	23	15.5	柱痕跡
	33	A2	14	14	59.8	
	34	E	38	24	7	
	35	—	16	15	5.8	
	36	A2	23	21	19	
	37	A2	24	23	27.1	
	38	E1	24	[14]	6.6	
	39	A1	34	[20]	6.2	
	40	C2	24	20	14.6	
	41	A1	26	22	17.7	
	42	A1	15	14	8.5	
	43	E1	14	11	4.1	
	44	欠番				SB10 P4へ変更
	45	E1	12	10	3.7	
	46	A1	13	10	3.1	
	47	C2	15	13	15.2	
	48	A2	23	20	20.7	
	49	A1	30	24	22.1	
	50	A1	27	20	20.8	
	51	A2	31	24	24	
	52	A2	23	22	16.3	
	53	A1	34	30	17	
	54	—	18	16	14.2	
	55	A2	26	24	39.1	柱痕跡
	56	A2	18	17	9.2	
	57	A2	26	24	17.4	
	58	A1	21	20	31.9	
	59	A1	17	16	9.7	
	60	A1	22	21	17.6	
	61	—	26	25	17.4	

グリッド	彩引	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物備考
E-3	62	B1	19	18	13.9	
	63	A2	26	26	15.3	
	64	C2	28	28	12.3	
	65	C1	[20]	20	14.2	
	66	B1	25	17	7.9	
	67	A1	16	12	12.4	
	68	B2	11	10	9.8	
	69	A2	18	18	16	
	70	欠番				SB9 P5へ変更
	71	A1	24	20	28.5	
	72	C1	[46]	41	9.5	
	73	C1	36	24	26.9	
	74	A2	22	17	13.1	
	75	A1	16	16	5.8	
	76	A1	17	14	12.4	
	77	A1	16	12	9	
	78	A1	14	12	7.1	
	79	A2	12	12	9.1	
	80	C1	27	26	10.2	
	81	A2	20	19	16.8	石あり
	82	A2	[14]	12	7.4	
	83	A1	26	20	8.8	柱痕跡
	84	A1	24	21	13	
	85	A1	25	19	20.2	柱痕跡
	86	C2	13	9	9.6	
	87	B1	40	[18]	20.8	
	88	A2	16	13	7.8	
	89	B1	30	27	41.7	
	90	欠番				SB10 P3へ変更
	91	C2	30	25	13.5	
	92	B1	25	22	14.8	
	93	A2	32	30	25.2	柱痕跡
	94	A2	16	16	11.9	
	95	A1	30	26	41.2	
	96	A2	13	11	12	
	97	A1	14	13	11.9	
	98	A2	14	10	10.4	
	99	欠番				SB12 P7へ変更
	100	A1	20	20	8.7	
	101	A1	10	10	6.8	
	102	A1	16	16	15	
	103	—	20	17	22.2	
	104	—	20	20	17.3	
	105	—	14	10	7.1	
E-4	1	欠番				SB12 P1へ変更
	2	E	42	39	22.6	
	3	欠番				SB13 P3へ変更
	4	欠番				SB13 P4へ変更
	5	欠番				SB12 P6へ変更
	6	E	12	12	9.2	
	7	B2	14	10	20.9	
	8	B2	14	10	15.7	
	9	A2	24	21	43.1	

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物 備考
E-4	10	—	25	23	26.8	
	11	B1	30	26	16.3	
	12	A2	27	24	8.8	
	13	B2	26	26	40.8	
	14	A1	24	21	12.8	
	15	欠番				SB9 P6へ変更
	16	B1	19	19	18.8	
	17	B1	19	16	6.7	
	18	B1	[23]	24	14.4	
	19	B1	18	[12]	16.2	
	20	A2	21	19	24.5	
	21	B1	31	21	21.5	
	22	A1	23	21	9.2	
	23	B1	27	23	7.5	
	24	欠番				SB9 P7へ変更
	25	B1	24	22	7.8	
	26	B2	16	16	11.7	
	27	欠番				SB9 P2へ変更
	28	欠番				SB9 P3へ変更
	29	A1	24	20	12.5	
	30	欠番				SB9 P1へ変更
	31	欠番				SB9 P4へ変更
	32	C2	22	21	18.1	
	33	A1	33	30	18.5	
	34	A2	25	[20]	11.6	
	35	B1	25	24	23.9	
	36	欠番				SB12 P3へ変更
	37	欠番				SB12 P2へ変更
	38	欠番				SB12 P5へ変更
	39	欠番				SB12 P6へ変更
	40	A1	13	9	15	
	41	B1	50	46	10	

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物 備考
E-4	42	A2	13	12	6.4	
	43	E2	43	42	16.1	
	44	欠番				SB13 P5へ変更
	45	—	22	17	10	
E-5	1	E	23	22	35.4	
	2	D	20	17	7.8	
	3	E	37	19	8.7	
	4	A1	22	17	27.4	
	5	E	29	22	17.2	
	6	A1	20	19	13	
	7	B1	20	17	14.4	
	8	B1	20	18	18.9	
	9	A1	14	14	14.4	
E-6	1	B2	28	23	11.9	
	2	B	[18.5]	—	[9.01]	南西壁面
	3	B	[32.01]	—	[13.01]	南西壁面
	4	B	[25.01]	—	[8.5]	南西壁面
E-7	1	C1	40	32	23.3	
	2	欠番				SK56へ変更
	3	欠番				SK57へ変更
	4	C1	19.5	19.5	7.9	
	5	欠番				SK61へ変更
	6	—	[25.01]	[20.01]	31.5	
	7	—	[50.01]	37	12.5	
F-3	1	A1	30.5	29	23.4	
	2	A1	27	26.5	10.6	
	3	B2	25	21	28.5	
	4	欠番				SK58へ変更
	5	A1	28	25	41	柱痕跡
	6	B1	31	28.5	14.8	不明品(歯牙か)
	7	A1	23	18	27.3	
	8	B2	[31.01]	29	8	

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物 備考
F-3	9	B1	27	[20.5]	18.3	
	10	B1	24	21.5	11.9	
	11	A1	20	15	6	
	12	A1	22	17	11.7	
	13	A1	14	13	7.7	
	14	B1	28.5	20.5	19.6	
	15	A1	24.5	20	8	SK59と重複
	16	欠番				SK59へ変更
	17	B1	16.5	13.5	8.5	
	18	A1	18	14	12.3	
	19	—	[20.01]	—	[38.01]	面整備　柱根跡か
F-4	1	—	28	[20.01]	33.1	
	2	—	22.5	21	15.1	
	3	—	34	29	13.8	
	4	欠番				SR1 P1に変更
	5	A2	23	21.5	13.1	柱痕跡
	6	—	45	33	9	
	7	A1	20	19	9.4	
	8	A1	26.5	25	39.2	
	9	A1	14	14	5.7	
	10	B1	36	[22.5]	28.8	SB6 P5と重複
	11	B1	22.5	16.5	8.7	
	12	B1	21	18	3.6	
	13	A1	14.5	12.5	5.5	
	14	—	[50.01]	[15.5]	8.4	
	15	—	44	40	11.8	
	16	D	20	18	40	
	17	A1	25	22.5	39.3	SR1 P1より変更
	18	—	[27.01]	[16.01]	16	
F-5	1	A1	51	33	10.7	
	2	E	23.5	20.5	9	
	3	E	27	13	5.3	

A：暗褐色　B：黒褐色　C：褐色　D：黄褐色　E：灰褐色
1：ブロック多量　2：ブロック少量

（8）その他の遺物

遺構外で発見し、明確に帰属する遺構が判別出来なかった遺物、第182図（1～5）と、平成18年の試掘調査時及び表土掘削時に出土した遺物（6～14）を一括して掲載した。

グリッド出土遺物

第182図1はC－3グリッドで出土した肥前産の磁器碗である。外面に二重圏線、高台脇に一重圏線、高台の際に二重圏線が引かれ、腰部には花草文と推測される文様が描かれている。

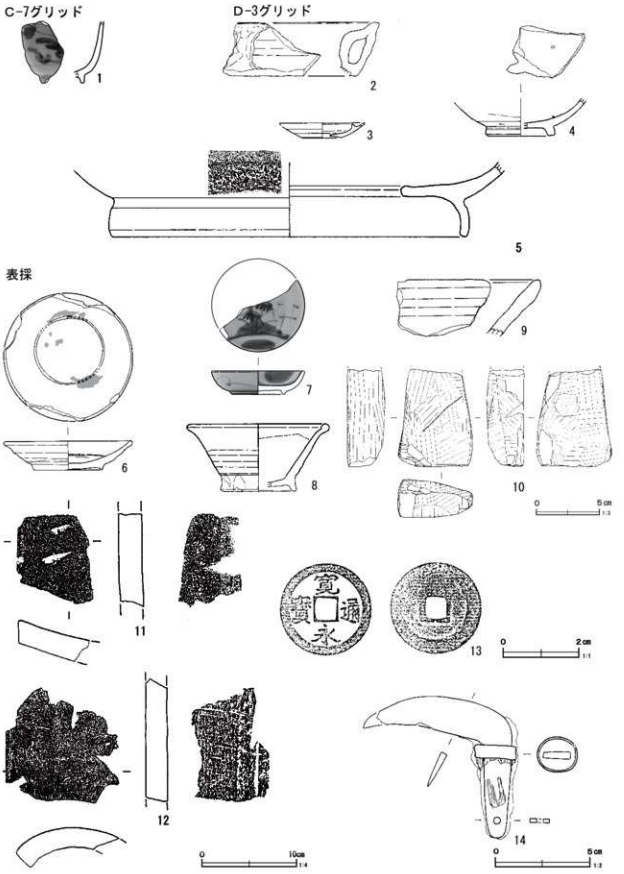
2～4はD－3グリッドから出土した。

2は焙烙の小片である。内耳と体部の一部が出土した。底部は残存していないが、内面に僅かに痕跡が残る。内耳は底部接続するものと推定される。

3は瀬戸・美濃産の陶器灯明皿である。貫入が多く、外面には煤が付着している。

4は瀬戸・美濃産の陶器鉢かと思われる。見込みに円錐ピンによるものかと推測される目跡が残る。

5は瓦質の火鉢で、その大きさから養蚕用に使用した養蚕火鉢と考えられる。



第182図　中・近世のグリッド表採遺物

試掘・表採遺物

第182図６は瀬戸・美濃産の陶器皿で、見込みに油煙が付着しているため、灯明皿として使用されていた事が推定される。また、見込みには重ね焼き時の高台跡が残る。

７は肥前産の磁器皿で、外面に唐草文、見込みに草花文が描かれている。

８は煙硝擂で、見込みに重積跡が残る。瀬戸・美濃産である。

９は鉢の口縁部片である。

10は砥石である。四周ともよく使用されている。

11・12は平瓦、丸瓦である。

13は寛永通寶である。穴は正方形で、裏面に文字は無い。

14は鉄製の鎌である。刃先は欠けている。取り付け部には一部木製の柄が残存していた。

第34表　中・近世のグリッド・表採遺物観察表（第182図）

番号	遺構名	種別	器種	産地	残存率	口径	底径	器高	胎土	焼成	釉薬	成型技法	器種・器形の特徴	文様	出土位置・備考	図版
1	C7 G	磁器	碗	肥前	10	—	—	[6.5]	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤		外口縁：二重圏線 高台脇：一重圏線 高台際：二重圏線 腰：草花文か	17世紀後～18世紀前半か	62 - 3
2	D3 G	瓦質土器	焙烙		10	—	—	[5.8]	黒褐	普通	—	輪積			外面煤付着	
3	D3 G	陶器	灯明受皿	瀬戸 美濃	15	—	(4.1)	[1.5]	灰白	良好	灰釉	轆轤	底部：回転ヘラ削り		18世紀後～19世紀中葉 貫入多 外面煤付着	
4	D3 G	陶器	鉢	瀬戸 美濃	20	—	(7.4)	[4.0]	灰白	普通	灰釉	轆轤	削り出し高台		18世紀後半か 片口鉢か 見込み：目跡 円錐ピン跡か	62 - 3
5	D3 G	瓦質土器	火鉢	大沼焼か	10	—	[37.8]	7.8	黒灰	普通	—	轆轤	貼り付け高台		黄瀞火鉢か	
6	表採	陶器	皿	瀬戸 美濃	90	13.5	7.2	3.1	灰	良好	灰釉	轆轤	削り出し高台		17世紀後半 貫入多 見込み：高台跡 露胎：黒色 油煙付着	
7	表採	磁器	皿	肥前	45	(9.5)	(5.6)	2.5	灰白 緻密	良好	透明釉	轆轤	削り出し高台	胴：唐草文 見込み：草花文	18世紀後半か	62 - 3
8	表採	陶器	煙硝擂	瀬戸 美濃	30	(14.0)	(7.4)	7.1	黄灰	良好	鉄釉	轆轤	貼り付け高台		17世紀後葉 見込み：重積跡	
9	表採	瓦質土器	鉢	在地	5	—	—	[6.0]	黄灰	普通	—	輪積			14世紀	
10	表採	石製品	砥石		長さ7.7cm　幅5.9cm　厚さ3.0cm　重さ193.5 g　凝灰岩											
11	表採	瓦	平瓦		長さ [8.0]	幅 [6.2]	厚さ 2.0		灰	良好					重さ109.9g	62 - 3
12	表採	瓦	丸瓦		縦 [10.2]	横 [8.5]	厚さ 1.8		暗灰	普通					重さ166.96g	62 - 3
14	表採	鉄製品	小鎌		刀長[7.3cm]　刃幅1.9cm　背厚0.35cm　重さ34.70 g										柄の木質部分わずかに残る	69 - 3

第35表　中・近世のグリッド・表採遺物古銭観察表（第182図）

番号	種別	貨銭名	初鋳年	背面	銭径（mm）		銭厚（mm）	重量（g）	備考	図版
					縦	横				
13	銭	寛永通寶	—	—	24.83	24.19	1.18	3.52	３期新寛永	69 - 2

5．自然科学分析・保存処理

平沼一丁田遺跡では、多数の木製品が出土している。

遺跡の時期は縄文時代から近世に至るまでの様々な時期があり、特に古墳時代前期、中・近世において集落の画期がある。

木製品を検出した遺構は井戸跡・溝跡があり、掘立柱建物跡からは、柱材や礎板などの構造材が出土している。

また、近世の溝跡からは陶磁器とともに、多くの伐採木と木製品が出土している。

これらを多角的な視点から捉え、より多くの知見を得るために自然科学分析を行った。

樹種同定では、遺跡出土資料全てを分析することによって、周辺の環境や樹種選択の検討を行う。また、それらを時期的な変遷の中で捉えることにより、各時代での周辺地域の植生や、環境を考察することを目的とする。

同様に種実同定を行い、集落に居住していた人々の食生活の一端を探る。

一方、遺跡からは多数の掘立柱建物跡が検出されている。この遺構で特に認められる特徴として出土遺物の少なさがあり、帰属する時期の特定を難しくしている要因となっている。そこで、古墳時代前期及び中世と推定される建物跡出土の柱材・礎板について放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）を行い、帰属年代を特定する一助とした。

近世の溝跡からは漆器が出土しており、水に漬けて保存していたが、漆膜の剥離や腐食が進行しており、遺物のこれ以上の劣化を防ぎ、良好な状態で保存するために、保存処理を行った。

（１）出土木材の樹種

能城修一（森林総合研究所木材特性研究領域）
佐々木由香（株式会社パレオ・ラボ）
村上由美子（総合地球環境学研究所）

１．はじめに

埼玉県比企郡川島町に位置する平沼一丁田遺跡から出土した古墳時代前期の木製品類５点、中世の木製品類４点、中・近世の木製品類７点と自然木・樹皮３点、近世の木製品類75点と自然木14点の計89点の樹種を報告する。木製品類には、漆塗椀や曲物を中心とした容器類をはじめとして、鋤鍬といった農工具類、下駄や箱といった道具類、柱や礎板をはじめとする建築材、板や割材といった加工材、杭が含まれていた。なお、樹種同定された４点を用いて放射性炭素年代測定が行われている（年代測定の項を参照）。

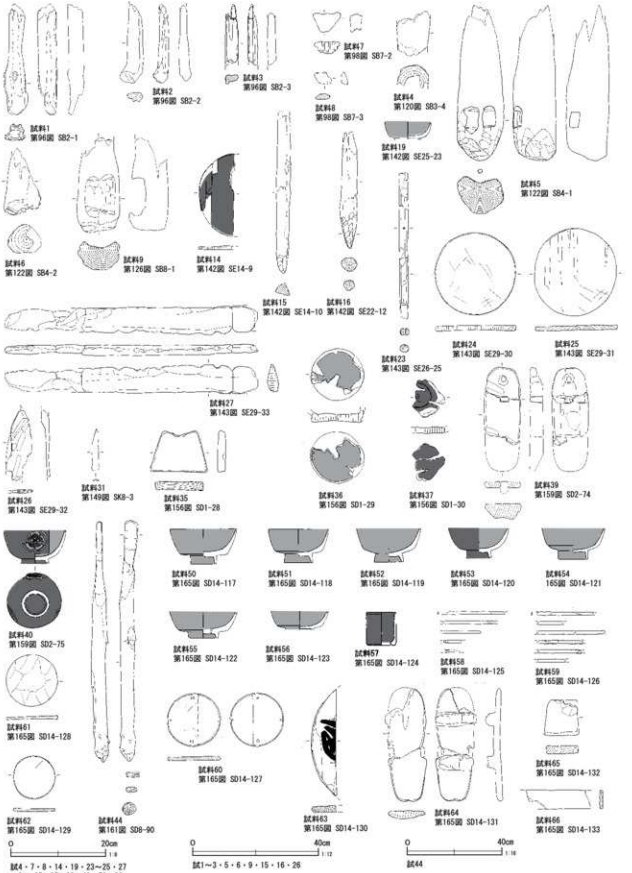
２．試料と方法

樹種同定は、木取りを観察して大きさを計測後、遺物から直接、片刃カミソリをもちいて横断面、接線断面、放射断面の切片を切り取り、それをガムクロラール（抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入しておこなった。各プレパラートにはST2-616～ST2-763の番号を付して標本番号とした。番号は連続ではなく東松山市の反町・城敷遺跡等の試料番号が途中に含まれている。標本は森林総合研究所に保管されている。

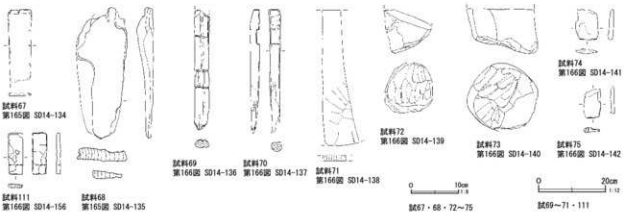
第36表　平沼一丁田遺跡出土木材樹種同定試料

試料番号	樹図番号		prep no.	樹種	遺構	製品群	器種	木取り	長さ(cm)	直径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	時期	備考
1	96	1	ST2-758	コナラ属クヌギ節	SB2 P2	礎板	礎板	みかん割り	[35.6]		6.7	5.4	古墳前期	放射性炭素年代測定試料
2	96	2	ST2-675	コナラ属クヌギ節	SB2 P5	礎板	礎板	割材	[24.7]		4.8	2.9	古墳前期	放射性炭素年代測定試料
3	96	3	ST2-676	コナラ属クヌギ節	SB2 P5	礎板	礎板	芯なしみかん割り材	[18.8]		4.1	2.9	古墳前期	
4	120	4	ST2-756	クリ	SB3 P4	柱	柱材	芯持丸木	[12.9]	9.7			近世	
5	122	1	ST2-672	クリ	SB4 P7	柱	柱材	芯持丸木	[50.2]	14.8			中世	放射性炭素年代測定試料
6	122	2	ST2-759	クリ	SB4 P4	柱	柱材	みかん割り	[21.2]	(10.9)			中世	
7	98	2	ST2-617	コナラ属コナラ節	SB7 P6	柱	柱材	柾目	[3.9]		[5.4]	[2.6]	古墳前期	放射性炭素年代測定試料
8	98	3	ST2-616	コナラ属コナラ節	SB7 P5	柱	柱材	柾目	[2.6]		[3.1]	[1.2]	古墳前期	
9	126	1	ST2-753	カヤ	SB8 P10	柱	柱材	芯持丸木	[30.1]	13.1			中世	
10			ST2-734	スギ	SE5	曲物	曲物側板	柾目	16.2		[2.5]	0.4	中・近世	
11			ST2-760	クリ	SE7	杭	杭	みかん割り	[28.0]		[6.3]		中・近世	
12			ST2-721	竹笹類	SE9	樹皮	樹皮	―					中・近世	
13			ST2-722	アスナロ	SE9	木片	チップ	―	[4.0]		[2.0]	[0.3]	中・近世	
14	142	9	ST2-619	ヒノキ	SE14	曲物	曲物底板	柾目		[17.3]	[7.4]	0.7	中世	片面黒色漆　全体の1/4残存　釘痕じ　穿孔あり
15	142	10	ST2-661	アスナロ	SE14	杭	杭	割材	[52.1]	[3.0]	3.8		中世	
16	142	12	ST2-677	クリ	SE22	杭	杭	芯持丸木	[35.7]	5.5			近世	杭先幅3.6cm　杭先厚さ3.3cm
17			ST2-656	同定不能	SE22	杭	杭	芯持丸木	[48.8]	3.5			近世	
18			ST2-678	アスナロ	SE22	板状製品	板状木製品	板目	[8.3]		[4.4]	1.1	近世	
19	142	23	ST2-705	ブナ属	SE25	漆椀	漆椀	横木取り				器高[3.5]	近世	20と接合
20	142	23	ST2-713	ブナ属	SE25	漆椀	漆椀	横木取り					近世	19と接合
21			ST2-750	ハンノキ属ハンノキ節	SE25	板	板材	追柾目	[12.3]		[4.0]		近世	
22			ST2-751	スギ	SE25	板	板材	板目	[28.3]		3.9	1.1	近世	
23	143	25	ST2-720	モモ	SE26	不明木製品	棒状製品	芯持丸木	[30.7]	1.9			中・近世	端部炭化　中央に0.4cmの穿孔有り
24	143	30	ST2-625	ヒノキ	SE29	曲物	曲物底板	柾目		17.4		1.2	中世	釘綴じ
25	143	31	ST2-624	ヒノキ	SE29	曲物	曲物底板	板目		18.6		1	中世	
26	143	32	ST2-719	クリ	SE29	板	板材	板目	[21.5]		[6.7]	[2.5]	中世	
27	143	33	ST2-663	コナラ属クヌギ節	SE29	織具	目盛板(編み台)	みかん割り	53.7		5.8	2.3	中世	
28			ST2-664	アスナロ	SE29	板	板材	板目	[40.5]		[7.0]	1.9	中世	表面劣化
29			ST2-733	コナラ属クヌギ節	SE29	板	板材	みかん割り	[13.8]		5.6	2.0	中世	
30			ST2-749	スギ	SE36	板	板材	板目	[16.8]		[6.0]	0.9	近世	
31	149	3	ST2-646	竹笹類	SK8	竹製品	竹べら状製品	割裂き	[8.6]		[1.7]	0.3	中・近世	先端加工
32			ST2-647	アスナロ	SK8	自然木	自然木	芯持丸木	[19.7]	2.5			中・近世	
33			ST2-723	同定不能	SK8	縄	縄	―	[19.6]		最大幅0.5	1単位1.2	中・近世	3本縒り
34			ST2-724	コナラ属アカガシ亜属トネリコ属シオジ節	SK8	鋤柄	農具の破片	柾目	[7.8]		[1.2]	[1.4]	中・近世	
35	156	28	ST2-727	キリ	SD1	下駄	下駄	板目	10.3		8.6	1.7	近世	鼻部
36	156	29	ST2-626	キリ	SD1	容器	容器	芯持丸木		11.4	底部の厚さ1.9	器高[2.6]	近世	9年輪　内面焦げ　1年輪1.5cm
37	156	30	ST2-628	トネリコ属シオジ節	SD1	漆器	漆ぬり容器	芯持丸木	[6.2]			器高1.3	近世	黒色漆の上に赤色漆
38			ST2-728	アスナロ	SD1	棒	棒	芯持丸木	[16.8]		4.4	2.3	近世	
39	159	74	ST2-629	トネリコ属シオジ節	SD2	下駄	連歯下駄	追柾目	[21.9]		7.7	最大3.5最小1.3	近世	
40	159	75	ST2-709	ブナ属	SD2	漆椀	漆椀	横木取り				器高[7.1]	近世	
41			ST2-660	カマツカ	SD2	棒	棒	芯持丸木	[20.5]	1.4			近世	
42			ST2-711	ブナ属	SD2	漆椀	漆椀	横木取り				器高[1.8]	近世	
43			ST2-742	アスナロ	SD2	自然木	自然木	板目					近世	
44	161	90	ST2-762	アスナロ	SD8	杭	杭	芯持丸木	101.9		5.7	5.3	近世	樹皮付き
45			ST2-627	トウヒ属	SD8	割材	角材	柾目	[29.6]		4.2	2.5	近世	
46			ST2-715	ブナ属	SD8	不明	不明	不明					近世	
47			ST2-701	ブナ属	SD11	漆椀	漆椀	横木取り				器高[2.2]	中・近世	
48			ST2-752	ハンノキ属ハンノキ節	SD11	自然木	自然木	芯持丸木					中・近世	樹皮付き
49			ST2-702	ブナ属	SD11	漆椀	漆椀	横木取り				器高[0.7]	中・近世	
50	165	117	ST2-717	ブナ属	SD14	漆椀	漆椀	横木取り		口径14.0	底径5.2	器高7.5	近世	
51	165	118	ST2-716	トチノキ	SD14	漆椀	漆椀	横木取り		口径12.6	底径5.9	器高7.2	近世	
52	165	119	ST2-718	ブナ属	SD14	漆椀	漆椀	横木取り			底径6.2	器高[7.2]	近世	
53	165	120	ST2-707	ブナ属	SD14	漆椀	漆椀	横木取り				器高[6.6]	近世	

試料番号	挿図番号	prep no.	樹種	遺構	製品群	器種	木取り	長さ (cm)	直径 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	時期	備考
54	165	121	ST2-708	ブナ属	SD14	漆椀	漆椀	構木取り		底径 (6.0)	器高 [6.6]	近世	
55	165	122	ST2-710	トチノキ	SD14	漆椀	漆椀	構木取り		底径 (6.0)	器高 [5.5]	近世	
56	165	123	ST2-704	トチノキ	SD14	漆椀	漆椀	構木取り			器高 [3.9]	近世	
57	165	124	ST2-654	竹笹類	SD14	竹製品	容器			口径 (5.9)	底径 5.7	近世	内外面黒色漆　穿孔あり 表面面取り　モウソウチク
58	165	125	ST2-657	竹笹類	SD14	竹製品	竹製品	割裂き	[39.9]		器高6.9 0.6	0.2	近世	側面両端加工 マダケ 残存長13.0 -10.9 -7.9 -3.8 -3.5cm
59	165	126	ST2-658	竹笹類	SD14	竹製品	竹製品	割裂き	[57.4]		0.7	0.15	近世	側面両端加工 マダケ 残存長12.1-5.6 -14.4 -9.7 -9.5 -6.1cm
60	165	127	ST2-622	ヒノキ	SD14	曲物	曲物底板	柾目		11.3		0.8	近世	神鏡し　木釘
61	165	128	ST2-618	ヒノキ	SD14	曲物	曲物底板	柾目		10.9		0.7	近世	
62	165	129	ST2-623	ヒノキ	SD14	曲物	曲物底あり蓋	柾目		8.8		0.7	近世	綴じ方不明
63	165	130	ST2-620	スギ	SD14	曲物	曲物底板	追柾目		(22.8)		1.4	近世	墨書　釘の接合部
64	165	131	ST2-630	ヤナギ属	SD14	下駄	下駄	板目	[23.8]		8.7	1.7	近世	高さ3.1cm　鼻部高さ2.1cm
65	165	132	ST2-730	ヒノキ	SD14	下駄	下駄	板目	7.6		6.7	1.2	近世	歯部
66	165	133	ST2-621	トウヒ属	SD14	箱	折敷の側板	板目	[12.8]		3.9	0.7	近世	
67	165	134	ST2-671	アスナロ	SD14	箱	折敷の底板か	板目	[15.4]	4.7			近世	
68	165	135	ST2-666	スギ	SD14	板状製品	板状木製品	柾目	[25.7]		[10.5]	2.5	近世	農具か
69	166	136	ST2-747	ハンノキ属 ハンノキ節	SD14	杭	杭	芯持丸木	[38.7]		4.6	2.7	近世	
70	166	137	ST2-732	アスナロ	SD14	建築材	建築材	芯持丸木	[40.0]		3.2	2.8	近世	
71	166	138	ST2-745	スギ	SD14	木札	木札	柾目	28.9		4.9	1.2	近世	
72	166	139	ST2-655	ケヤキ	SD14	自然木	伐採痕材	芯持丸木	[9.3]		[10.1]	9.5	近世	端面加工　樹皮付き
73	166	140	ST2-667	ケヤキ	SD14	自然木	伐採痕材	芯持丸木	9.4		14.6	7.7	近世	
74	166	141	ST2-669	ケヤキ	SD14	木片	チップ	板目	6.4		4.7	1	近世	
75	166	142	ST2-668	ケヤキ	SD14	木片	チップ	板目	5.9		3.5	1	近世	
76			ST2-648	コナラ属 コナラ節	SD14	自然木	自然木	芯持丸木		[15.5]			近世	
77			ST2-662	ケヤキ	SD14	自然木	伐採痕材	芯持丸木		11			近世	端面伐採　樹皮付き
78			ST2-670	ハンノキ属 ハンノキ節	SD14	杭	杭	芯持丸木	[78.0]	2.9			近世	
79			ST2-673	ハンノキ属 ハンノキ節	SD14	割材	割材	板目	[107.7]		4.9	2.4	近世	
80			ST2-674	アスナロ	SD14	板	板材	板目	[53.3]		6	1.5	近世	
81			ST2-706	ブナ属	SD14	漆椀	漆椀	構木取り				器高 [2.3]	近世	
82			ST2-725	アスナロ	SD14	板状製品	板状木製品	追柾目	[14.9]		3.5	0.9	近世	
83			ST2-729	ケヤキ	SD14	自然木	不明	芯持丸木					近世	
84			ST2-731	ケヤキ	SD14	自然木	伐採痕材	芯持丸木	[7.5]	[7.8]			近世	
85			ST2-735	アカマツ	SD14	自然木か	自然木か	芯持丸木					近世	
86			ST2-736	スギ	SD14	木片	チップ	板目					近世	
87			ST2-737	竹笹類	SD14	竹製品	竹	丸木	[2.5]		[2.5]	0.9	近世	端部加工　モウソウチク
88			ST2-738	クリ	SD14	先端加工木	先端加工木	芯持丸木	[21.0]	4.3			近世	
89			ST2-739	ハンノキ属 ハンノキ節	SD14	自然木	自然木	芯持丸木					近世	
90			ST2-740	ハンノキ属 ハンノキ節	SD14	自然木	自然木	芯持丸木					近世	
91			ST2-741	ケヤキ	SD14	自然木	自然木	芯持丸木					近世	
92			ST2-743	アカザ？	SD14	自然木	自然木	芯持丸木					近世	
93			ST2-744	ヒノキ	SD14	曲物	曲物側板	柾目	[16.5]		[1.8]	0.3	近世	
94			ST2-748	サワラ	SD14	板	板材	追柾目	[11.7]		[1.8]	0.8	近世	
95			ST2-754	アスナロ	SD14	杭	杭	芯持丸木	[7.0]	[5.5]			近世	
96			ST2-755	アスナロ	SD14	杭	杭	芯持丸木	[34.5]	[6.0]			近世	
97			ST2-757	ハンノキ属 ハンノキ節	SD14	自然木	自然木	芯持丸木					近世	
98			ST2-761	ハンノキ属 ハンノキ節	SD14	割材	丸材	みかん割り (芯ぬき)	[28.0]		[6.3]		近世	
99			ST2-763	クリ	SD14	自然木	自然木	芯持丸木					近世	
100			ST2-649	スギ	SD14	板	板材	板目	[13.8]		4.7	0.7	近世	
101			ST2-650	サワラ	SD14	板状製品	板状木製品	柾目			3.2	0.9	近世	側面に穿孔あり
102			ST2-651	クリ	SD14	板	板材	板目	[20.5]		[4.5]	1.4	近世	
103			ST2-652	アカマツ	SD14	加工木	加工木か	芯持丸木		4.1			近世	
104			ST2-653	ハンノキ属 ハンノキ節	SD14	自然木	自然木	芯持丸木	[15.8]	3.2			近世	
105			ST2-665	同定不能	SD14	板	板材	板目	[28.4]		[5.4]	1	近世	
106			ST2-712	ブナ属	SD14	漆椀	漆椀	構木取り					近世	測定不能
107			ST2-659	アスナロ	SD14	先端加工木	先端加工木	芯持丸木	[51.3]	4.3			近世	
108			ST2-703	ブナ属	SD14	漆椀	漆椀	構木取り					近世	測定不能
109			ST2-714	ブナ属	SD14	漆椀	漆椀	構木取り					近世	測定不能
110			ST2-726	ヒノキ	SD14	曲物	曲物側板	柾目	[19.3]		[2.0]	0.4	近世	
111	166	156	ST2-746	スギ	SD24	桶	桶	板目	[13.1]		[4.4]	1.2	近世	側板



第183図　樹種同定試料（1）



第184図　樹種同定試料（2）

3．結果

試料108点中には、カヤ、トウヒ属、アカマツ、スギ、ヒノキ、サワラ、アスナロの針葉樹7分類群と、ヤナギ属、ハンノキ属ハンノキ節、クリ、ブナ属、コナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節、コナラ属アカガシ亜属、ケヤキ、モモ、カマツカ、トチノキ、トネリコ属シオジ節、キリの広葉樹13分類群、アカザ？の草本1分類群、竹笹類の単子葉1分類群の計22分類群が認められた（第36表）。コナラ属コナラ節では枝・幹材のほか根材が認められた。古墳時代前期にはコナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節の2分類群、中世にはカヤ、ヒノキ、アスナロ、クリの4分類群、中・近世にはカヤを除く21分類群が認められた。

以下には各分類群の木材解剖学的な記載をおこない、代表的な標本の光学顕微鏡写真を載せて同定の根拠を示す。

1．カヤ　Torreya nucifera (L.) Siebold et Zucc.　イチイ科　第185図：1a-1c（枝・幹材、試料9）

樹脂道と樹脂細胞を欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材は少ない。仮道管の内壁には2～3本ずつ走るらせん肥厚がある。

2．トウヒ属　Picea　マツ科　第185図：2a-2c（枝・幹材、試料66）

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材はやや多い。放射柔細胞には単壁孔が著しく、垂直壁は結節状。放射仮道管の有縁壁孔対は孔口が狭く、縁は角張る。

3．アカマツ　Pinus densiflora Siebold et Zucc.　マツ科　第185図：3a-3c（枝・幹材、試料103）

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材はごく多い。放射仮道管の上下壁は著しい鋸歯状。分野壁孔は大型の窓状で、1分野に普通1個。

4．スギ　Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don　スギ科　第185図：4a-4c（枝・幹材、試料71）

樹脂道を欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材は多い。樹脂細胞が年輪の後半に散在する。分野壁孔は孔口が水平に開く大型のスギ型で普通1分野に2個。

5．ヒノキ　Chamaecyparis obtusa (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　第185図：5a-5c（枝・幹材、試料14）

樹脂道を欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材は少ない。樹脂細胞が年輪の後半に散在する。分野壁孔は孔口が垂直にちかく開く中型のトウヒ型で普通1分野に2個。

6．サワラ　Chamaecyparis pisifera (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　第185・186図：6a-6c（枝・幹材、試料94）

樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材は少ない。樹脂細胞が年輪の

後半に散在する。分野壁孔は孔口が斜めに開く中型のヒノキ型で普通１分野に２個。

７．アスナロ　Thujopsis dolabrata (L.f) Siebold et Zucc.　ヒノキ科　第186図：7a-7c（枝・幹材、試料107）

樹脂道を欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材は少ない。樹脂細胞が年輪の後半に散在する。放射柔細胞には普通樹脂が詰まっており、分野壁孔は小型のスギ型で、普通１分野に２～４個。

８．ヤナギ属　Salix　ヤナギ科　第186図：8a-8c（枝・幹材、試料64）

小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に２～３個複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は密で大きい。

９．ハンノキ属ハンノキ節　Alnus sect. Gymnothyrsus　カバノキ科　第186図：9a-9c（枝・幹材、試料69）

小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に２～３個複合して密に散在して帯をなす放射孔材。道管の穿孔は30本ほどの横棒をもつ階段状。木部柔組織は短接線状。放射組織は同性で、単列の小型のものと、大型の集合状のものとを持つ。

10．クリ　Castanea crenata Siebold et Zucc.　ブナ科　第186図：10a-10c（枝・幹材、試料88）

大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに３列ほど集合し、晩材では小型で薄壁の孤立道管が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

11．ブナ属　Fagus　ブナ科　第186図：11a-11c（枝・幹材、試料50）

小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2個複合して密に散在する散孔材。道管の径は年輪内で徐々に減少する。道管の穿孔は単一、ときに階段状。放射組織は同性で、単列のものから20細胞幅以上の大型のものまである。

12．コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　第187図：12a-12c（枝・幹材、試料３）

大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに1～2列ほど集合し、晩材では小型で厚壁の孤立道管が放射状に配列する環孔材。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列のものと複合状のものを持つ。

13．コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　第187図：13a-13c（枝・幹材、試料７）、4a-14c（根材、試料76）

大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに１～２列ほど集合し、晩材では小型で薄壁の孤立道管が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列のものと複合状のものを持つ。

根材は早材道管の径が小さく半環孔材となる。

14．コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　第187図：15a-15b（枝・幹材、試料34）

中型で厚壁の丸い孤立道管が放射方向に１～３列に配列する放射孔材。木部柔組織はいびつで幅の狭い帯状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列の小型のものと大型の複合状のものとからなる。反町遺跡や城敷遺跡で見いだされたイチイガシは当遺跡では出土していない。

15．ケヤキ　Zelkova serrata (Thunb.) Makino　ニレ科　第187図：16a-16c（枝・幹材、試料75）

大型で丸い道管が年輪のはじめに１（～２）列に配列し、晩材では小型の道管が接線方向の帯をなす環孔材。道管の穿孔は単一、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で８細胞幅くらい、上下端には大型の結晶をもつ。

16．アカザ？　Chenopodium album L. var. centrorubrum Makino？　アカザ科　第187図：17a・17b（茎、試料92）

同心円状に材内篩部が形成される木材。道管は単独あるいは放射方向に２～３個複合し、放射方

第37表　平沼1丁田遺跡出土木材の樹種（1）

分類群	古墳前期			中世							中・近世										
	礎板	柱	計	曲物	織具	柱	板	杭	計	漆塗板	曲物	櫛歯	耳状脚	竹脚	杭	木片	鋤	自然木	樹皮	計
カヤ						1			1											
スギ											1									1
ヒノキ				3					3											
アスナロ							1	1	2							1		1		2
ハンノキ属ハンノキ節																		1		1
クリ						2	1		3						1					1
ブナ属										2										2
コナラ属クヌギ節	3		3		1		1		2											
コナラ属コナラ節		2	2																	
コナラ属アカガシ亜属												1								1
モモ													1							1
竹笹類														1					1	2
計	3	2	5	3	1	3	3	1	11	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	12

向に連なる傾向をみせて散在する。放射組織は直立細胞からなり6細胞幅くらい。

17. モモ　Amygdalus persica L.　バラ科　第188図：18a-18c（枝・幹材、試料23）

やや小型で丸い道管がほぼ単独で年輪のはじめに3列ほど配列し、晩材では小型で丸い道管が放射方向に2～3個複合し、放射方向に連なる傾向をみせて散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で3細胞幅くらい。

18. カマツカ　Pourthiaea villosa (Thunb.) Decne. var. villosa　バラ科　第188図：19a-19c（枝・幹材、試料41）

小型で丸い孤立道管が密に均一に散在する散孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で4細胞幅くらい。

19. トチノキ　Aesculus turbinata Blume　トチノキ科　第188図：20a-20c（枝・幹材、試料56）

小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2個複合してやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で、層階状に配列する。

20. トネリコ属シオジ節　Fraxinus sect. Fraxinaster　モクセイ科　第188図：21a-21c（枝・幹材、試料35）

大型で丸い道管が単独ときに2個複合して年輪のはじめに1～2列配列し、晩材では小型で厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して疎らに散在する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材で翼状～連合翼状。放射組織は同性で2～3細胞幅。

21. キリ　Paulownia tomentosa (Thunb.) Steud.　ノウゼンカズラ科　第188図：22a-22c（枝・幹材、試料36）

やや大型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して年輪のはじめに配列し、晩材ではそれが徐々に小型化して疎らに散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材で翼状～連合翼状。放射組織は同性で3～4細胞幅。

22. 竹笹類　Subfam. Bambusoideae　イネ科　第188図：23a（稈、試料87）、第189図：1-6（稈、試料31・58・87・57）

中心にある一対の道管と、それと直交する原生木部間隙と篩部を囲んで厚膜組織が維管束鞘を形成し、それが散在する。木材組織では竹笹類まで同定で、種までの同定はできないが、稈の節の形態観察で種まで同定できる場合がある。第189図で示した1重の節はモウソウチク、2重の節はマダケと同定し、形態観察による同定結果は第36表の備考欄に記載した。

4．考察

平沼一丁田遺跡で出土した木製品の素材は、概ね古墳時代から近世の関東地方の木材利用にそぐ

第38表　平沼1丁目遺跡出土木材の樹種（2）

分類群	近世																					
	漆塗椀	漆器	容器	桶	曲物	箱	下駄	棒	木札	板状製品	竹製品	建築材	柱	板	割材	杭	加工木	不明	木片	自然木	計
トウヒ属						1									1						2
アカマツ																	1			1	2
スギ				1	1				1	1				3					1		8
ヒノキ					5		1														6
サワラ										1				1							2
アスナロ						1		1		2		1		1		3	1			1	11
ヤナギ属							1														1
ハンノキ属ハンノキ節														1	2	2				4	9
クリ													1	1		1	1			1	5
ブナ属	12																	1			13
コナラ属コナラ節																				1	1
ケヤキ																			2	6	8
アカザ？																				1	1
カマツカ								1													1
トチノキ	3																				3
トネリコ属シオジ節		1					2														3
キリ			1																		1
竹笹類											4										4
計	15	1	1	1	6	2	4	2	1	4	4	1	1	8	3	7	3	1	3	15	83

ったものである（山田、1993）。たとえば、中・近世のブナ属と近世のトチノキの漆塗椀や、中・近世のスギとヒノキの曲物、中・近世のクリと古墳時代前期のコナラ属コナラ節の柱、古墳時代前期のコナラ属クヌギ節の礎板は、この地域で普通の樹種選択である（第37・38表）。しかしブナ属やトウヒ属の生育する標高域は当遺跡よりも高い冷温帯であり、これらの製品は秩父山地などかなり離れた場所で伐採されて加工されたものが製品としてもたらされた可能性が高い。

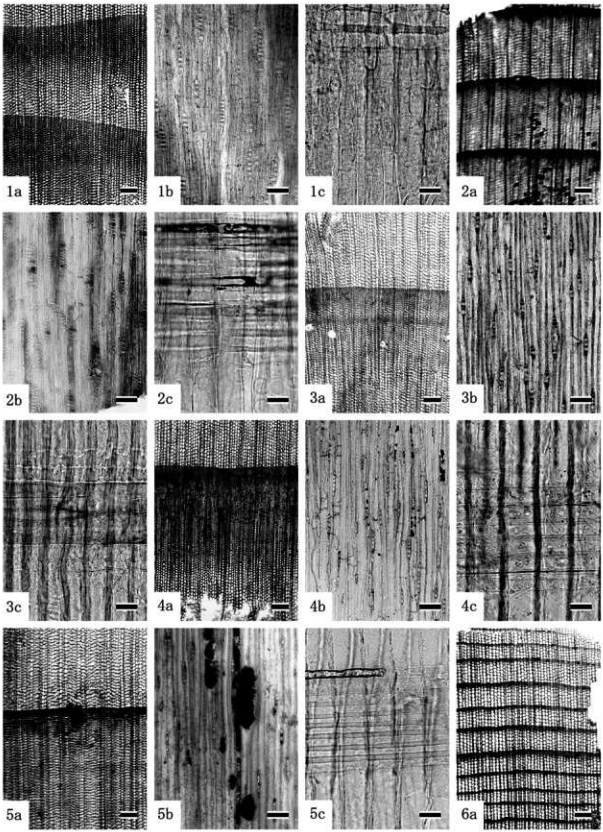
その他にやや変わった樹種選択としては、近世のキリの容器、ヤナギ属の下駄があげられる。いずれも軽くて木目の粗い軟らかい樹種であり、特別の用途があった可能性もある。キリは中国からもたらされた栽培植物で縄文時代早期から見いだされているが、縄文時代から中世には特定の用途は見いだされておらず、近世になって琴や下駄の素材として重用されるようになった。また自然木の中に見いだされたアカザ？は、現時点では同定に至っていないが、おそらく日本国内では初めての報告である。棒状製品として使われていたモモは、中・近世の遺構で核が出土しており、これと対応するものである（種実同定の報告参照）。当遺跡では、東松山市反町遺跡で見いだされたイチイガシの木材が出土していないが（能城ほか、2008）、これは当遺跡では農具類があまり検出されていないためか、あるいは当遺跡のある荒川低地寄りにはイチイガシが生育していなかったためと考えられる。

当遺跡の樹種選択の特徴として、近世の杭の樹種がアカマツ、アスナロ、ハンノキ属ハンノキ節、クリに限られていることがある。使用されている木材はほとんど芯持ちの丸木であり、当遺跡のごく近傍から持ってこられたと思われる。しかし遺跡周辺には、自然木を見ても分かるように、もっと多様な樹種が生育していたはずであり、樹種が限定されているのは特有の目的をもって樹種を選択したことが考えられる。

引用文献

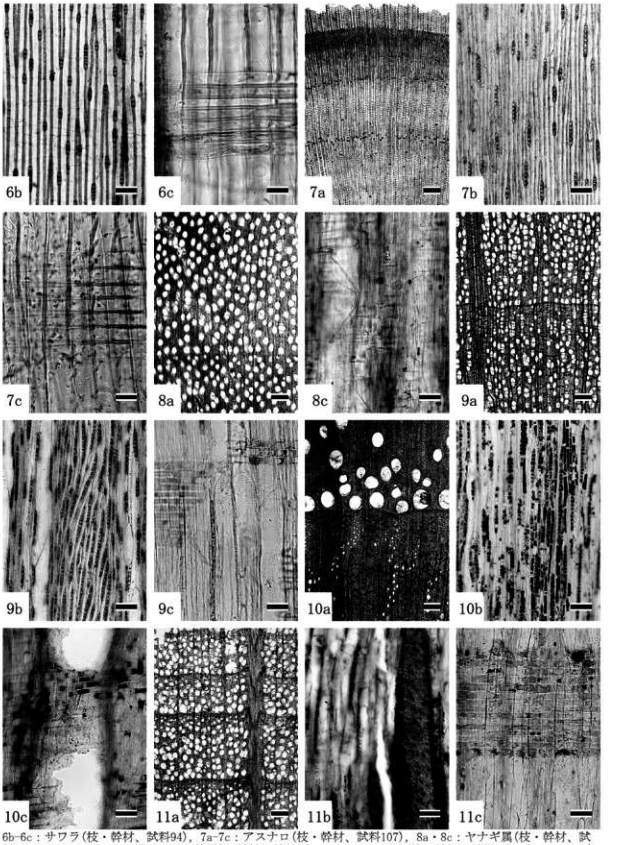
能城修一・佐々木由香・村上由美子　2008　「反町遺跡出土木材の樹種」『反町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第361集　315341p.

山田昌久　1993　「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成―用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第1号　1-242p.



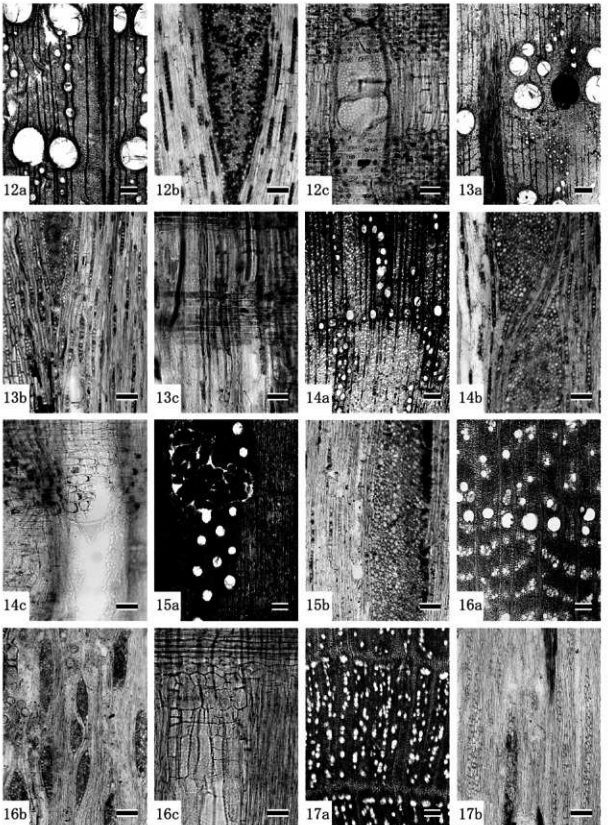
1a-1c：カヤ(枝・幹材、試料９)，2a-2c：トウヒ属(枝・幹材、試料66)，3a-3c：アカマツ(枝・幹材、試料103)，4a-4c：スギ(枝・幹材、試料71)，5a-5c：ヒノキ(枝・幹材、試料14)，6a：サワラ(枝・幹材、試料94)
a：横断面（スケール＝200μm），b：接線断面（スケール＝100μm），c：放射断面（スケール＝25μm）

第185図　平沼一丁田遺跡出土木材の顕微鏡写真（１）



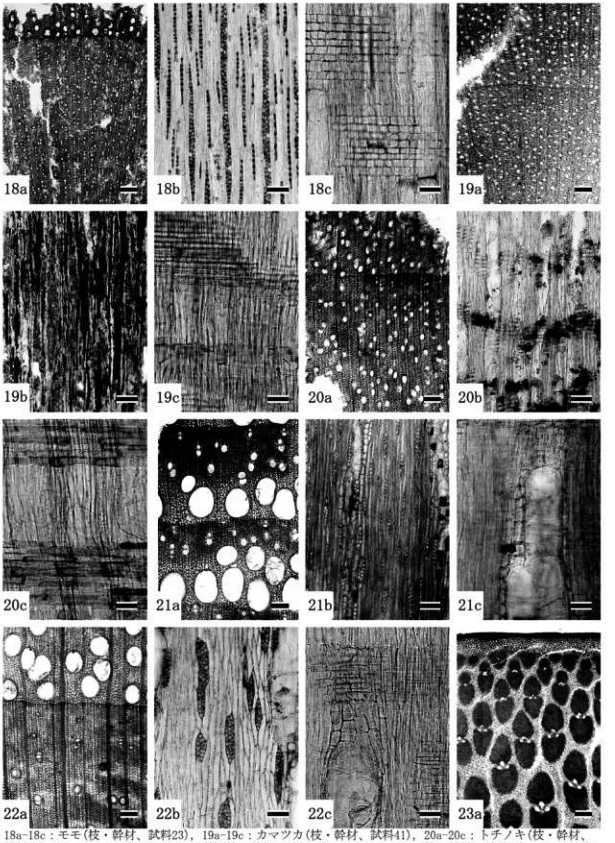
6b–6c：サワラ（枝・幹材、試料94），7a–7c：アスナロ（枝・幹材、試料107），8a・8c：ヤナギ属（枝・幹材、試料64），9a–9c：ハンノキ属ハンノキ節（枝・幹材、試料69），10a–10c：クリ（枝・幹材、試料88），11a–11c：ブナ属（枝・幹材、試料50）　a：横断面（スケール＝200μm），b：接線断面（スケール＝100μm），c：放射断面（スケール＝25μm（6c，7c），50μm（8c・9c・10c・11c））

第186図　平沼一丁田遺跡出土木材の顕微鏡写真（2）



12a–12c：コナラ属クヌギ節(枝・幹材、試料３)，13a–13c：コナラ属コナラ節(枝・幹材、試料７)，14a–14b：コナラ属コナラ節(根材、試料76)，15a–15b：コナラ属アカガシ亜属(枝・幹材、試料34)，16a–16c：ケヤキ(枝・幹材、試料75)，17a–17b：アカザ？(茎、試料92)
a：横断面（スケール＝200μm），b：接線断面（スケール＝100μm），c：放射断面（スケール＝50μm）

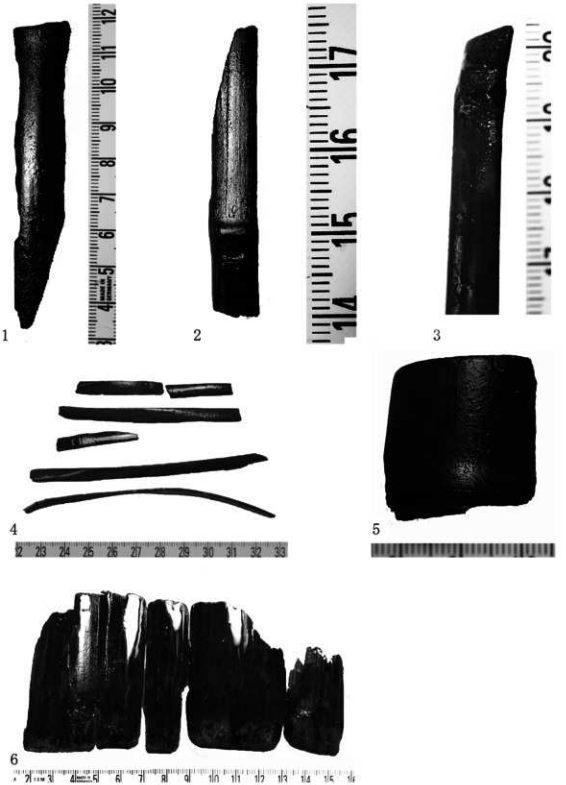
第187図　平沼一丁田遺跡出土木材の顕微鏡写真（３）



18a–18c：モモ（枝・幹材、試料23），19a–19c：カマツカ（枝・幹材、試料41），20a–20c：トチノキ（枝・幹材、試料56），21a–21c：トネリコ属シオジ節（枝・幹材、試料35），22a–22c：キリ（枝・幹材、試料36），23a：竹笹類（試料87）

a：横断面（スケール＝200μm），b：接線断面（スケール＝100μm），c：放射断面（スケール＝50μm）

第188図　平沼一丁田遺跡出土木材の顕微鏡写真（4）



1：マダケ（試料31、竹べら状製品），2-4：マダケ（試料58（一部）、竹製品），5：モウソウチク（試料87、竹），6：モウソウチク（試料57、容器）

第189図　平沼一丁田遺跡出土の竹管類

（2）溝跡出土の種実同定

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

はじめに

平沼一丁田遺跡は埼玉県北企郡川島町に位置する、縄文時代、古墳時代、中・近世の複合遺跡である。遺跡は荒川右岸の狭い自然堤防上に立地する。ここでは中・近世の溝跡から取り上げられた種実を同定し、利用植物あるいは植生について検討した。

試料と方法

試料は、現場で取り上げられた種実５点である。第１号溝跡から４点と第14号溝跡から１点出土した。

大型植物遺体の同定は、肉眼で行った。同定された試料は乾燥保存し、埼玉県教育委員会で保管されている。

結果および考察

現場取り上げ試料５点の同定の結果、木本植物のモモ核完形４点、半割１点が産出した。同定結果および試料の詳細は第39表に示す。遺構別にみると、第１号溝跡から完形３点と半割１点、第14号溝跡から完形１点が確認された。半割１点はほぼ半割だが、一部分を鋭利に欠損し、また一部分は縫合線を越えて残っていたことから自然による割れではなく、人間や動物によって核の中の仁を利用するために割られたことが推察される。

モモは食用可能な栽培植物である。完形の核は、果実利用後の残渣か遺構周辺に生育していた果実が何らかの要因で遺構内に堆積し、核の部分のみが遺存したことが考えられる。あるいは祭祀的な行為の結果、堆積した可能性もある。ただし、出土した点数が少なかったため、具体的な検討はできなかった。取り上げられた種実は大きい種実のみであったが、今後、微細な種実を検討するために遺構の堆積物を洗浄することによって、遺跡の古植生や利用植物を検討できると思われる。

以下に形態を記載し、第190図に写真を掲載して同定の根拠とする。

（1）モモ　*Prunus persica* (L.) Batsch.　核　バラ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖り、下端に大きな着点がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。表面に特徴的な不規則な深い皺がある。長さ25.9～31.1㎜、幅19.9～24.8㎜、厚さ15.9～19.2㎜。

第39表　種実同定結果（()は破片数を示す）

試料番号	出土遺構	分類群	部位	産出数	大きさ（単位：mm）			想定年代	備考
					長さ	幅	厚さ		
1	SD１	モモ	核	(1)	25.9	―	―	中・近世	ほぼ半割
2	SD14	モモ	核	1	29.6	19.9	15.9	中・近世	
3	SD１	モモ	核	1	28.1	22.9	18.9	中・近世	
4	SD１	モモ	核	1	31.1	24.8	19.2	中・近世	
5	SD１	モモ	核	1	30.8	23.6	19.0	中・近世	

第190図　平沼一丁田遺跡出土種実

（３）出土材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤茂・佐々木由香・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫
小林紘一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani

はじめに

埼玉県比企郡川島町に位置する平沼一丁田遺跡より検出された柱材と礎板について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。試料の観察および採取は佐々木、試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtatidze、Jorjolianiが、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は伊藤、佐々木が作成した。

試料と方法

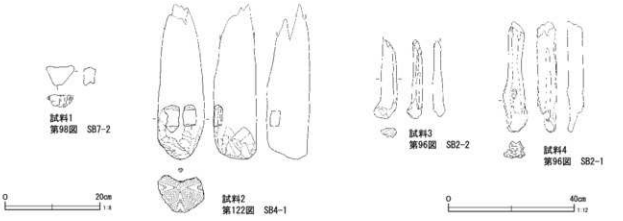
測定試料の情報、調製データは第43表のとおりである。試料は第２・４・７号掘立柱建物跡の柱穴から出土した柱材または礎板４点である。想定年代は第２・７号掘立柱建物跡が古墳時代前期（４世紀後半；五領式期）、第４号掘立柱建物跡が中世（14世紀代）と考えられている。

測定試料はいずれも伐採年代を示す樹皮または最外年輪が残存していなかったが、より外側の年輪から数年の年輪を含む試料を採取した。第２・７号掘立柱建物跡から出土した柱材または礎板は遺存が悪く、残存部は材の心材部であった。第４号掘立柱建物跡から出土した柱材は比較的残りが良く、樹皮により近い部分と判断された（樹種は樹種同定報告参照）。

試料は調製した後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

第40表　測定試料及び処理

試料番号	測定番号	遺跡データ	試料データ	想定年代	前処理
1	PLD-11320	遺構：SB7 Pit6 取り上げNo.：1 挿図番号：第98図2	試料の種類：生材(柱材：2年輪) 樹種：コナラ属コナラ節 試料の性状：心材 状態：wet	古墳時代前期 (4世紀後半)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス
2	PLD-11321	遺構：SB4 Pit7 取り上げNo.：1 挿図番号：第122図1	試料の種類：生材(柱材：2年輪) 樹種：クリ 試料の性状：最外年輪以外樹皮に近い部分 状態：wet	中世 (14世紀代)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス
3	PLD-11322	遺構：SB2 Pit5 取り上げNo.：なし 挿図番号：第96図2	試料の種類：生材(礎板：3年輪) 樹種：コナラ属クヌギ節 試料の性状：心材 状態：wet	古墳時代前期 (4世紀後半)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス
4	PLD-11323	遺構：SB2 Pit2 取り上げNo.：なし 挿図番号：第96図1	試料の種類：生材(礎板：3年輪) 樹種：コナラ属クヌギ節 試料の性状：心材 状態：wet	古墳時代前期 (4世紀後半)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス



第191図　放射性炭素年代測定試料

結果

第44表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第192図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

第41表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

試料番号	測定番号	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP±1σ）	^{14}C 年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
1	PLD-11320 (SB7 Pit6)	−29.68±0.23	1899±23	1900±25	80AD(68.2%)126AD	32AD(0.5%)37AD 52AD(90.7%)140AD 149AD(2.4%)171AD 195AD(1.8%)210AD
2	PLD-11321 (SB4 Pit7)	−27.32±0.14	602±24	600±25	1308AD(27.0%)1331AD 1338AD(28.3%)1362AD 1386AD(12.9%)1397AD	1298AD(73.2%)1370AD 1380AD(22.2%)1406AD
3	PLD-11322 (SB2 Pit5)	−29.90±0.22	1779±23	1780±25	221AD(39.4%)260AD 284AD(28.8%)323AD	138AD(13.1%)199AD 207AD(46.3%)265AD 273AD(36.0%)335AD
4	PLD-11323 (SB2 Pit2)	−30.80±0.10	1876±24	1875±25	78AD(59.9%)139AD 160AD(2.4%)165AD 197AD(5.8%)208AD	74AD(95.4%)216AD

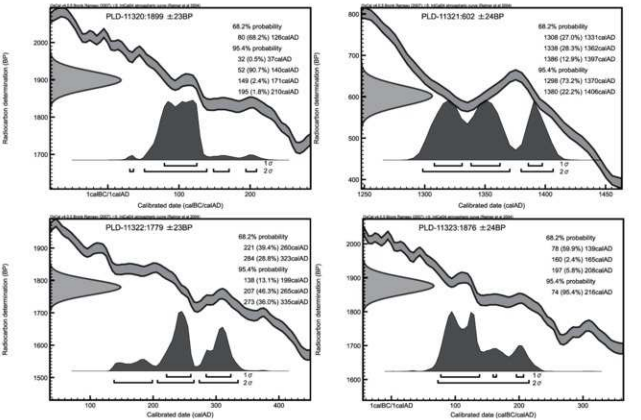
考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

2σの暦年較正年代で遺構別に得られた結果を検討する。第2号掘立柱建物跡のPit 5から出土した礎板（試料3）は207-265 calAD（46.3%）、273-335 calAD（36.0%）、138-199 calAD（13.1%）で、確率が低い範囲を含めると、2世紀前半から4世紀前半の年代範囲であった。同じくPit 2から出土した礎板（試料4）は74-216 calAD（95.4%）で、1世紀後半から3世紀前半の年代範囲であった。

第7号掘立柱建物跡のPit 6から出土した柱材（試料1）は52-140 calAD（90.7%）、149-171 calAD（2.4%）、195-210 calAD（1.8%）、32-37 calAD（0.5%）で、確率が高い範囲では、1世紀中頃から2世紀前半の年代範囲で、全体では1世紀前半から3世紀初頭の年代範囲であった。

以上2棟の掘立柱建物跡は考古学的な所見から古墳時代前期、4世紀後半と想定されていたが、いずれの年代範囲も古かった。ただし、測定試料は遺存が悪く、木材の中心付近の心材であったため、伐採年代より古い年輪部分の年代値が得られていることを考慮する必要がある。特に、第7号掘立柱建物の試料は放射方向（年輪形成方向）が約3㎝の小さい破片であったため、古木効果により伐採年より古い年代となっていることが推定される。ただし、3点ともに木材組織の観察からは残存部分から樹皮までは多く見積もって100年以



第192図　放射性炭素年代及び暦年較正の結果

上離れていないことが推定されるため、古木効果があったとしてもさほど古くはならないことが推察された。そのため、試料の元々の年代が想定年代より古い可能性もある。当地域において古墳時代前期にあたる五領式期の年代測定試料は少ないため、今後年代観が判明している土器付着炭化物などの試料を測定していくことによって、比較可能になると思われる。

第４号掘立柱建物跡のPit７から出土した柱材（試料２）は1298-1370 calAD（73.2%）、1380-1406 calAD（22.2%）で、高い確率の年代範囲では13世紀末から14世紀後半、確率が低い範囲を含めると、13世紀末から15世紀初頭の年代範囲であった。この年代は、想定年代の14世紀代と整合的であった。樹皮に近い年輪部分から測定試料を採取できたため、年代値は材の伐採年代に近い年代範囲を示していることが考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C.　1995　Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C.　2001　Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫　2000　放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の^{14}C年代. 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E.　2004　IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

（4）漆器の保存処理

株式会社　吉田生物研所

処理方法

高級アルコール法（特許取得済）

対象試料

1　第２号溝跡　漆器椀（第159図75）
2　第14号溝跡　漆器椀（第165図117）
3　第14号溝跡　漆器椀（第165図119）

保存処理工程

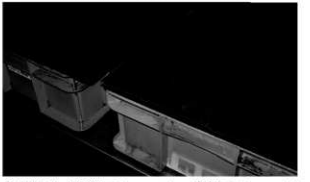
水洗い
↓
処理前調査
↓
写真撮影
↓
低級アルコール浸漬（30%溶液～50%～100%）
↓
高級アルコール浸漬（30%溶液～50%～10）
↓
冷却(室温)
↓
表面洗浄
↓
接合
↓
樹脂部補彩
↓
処理後写真記録

使用材料

低級アルコール（メチルアルコール）
高級アルコール（オクタデカノール）
接着剤（アルタインＭＨ／アクリル系）
着色料（アクリラ／ホルベイン）

水洗い

脱水（水→低級アルコール）


含浸処理（低級アルコール→高級アルコール）

接合

樹脂部補彩

処理上の注意点

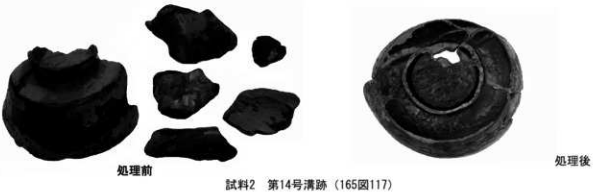
取扱いには細心の注意をはらって工程を進め、特に洗浄から低級アルコール及び高級アルコールの置換までは慎重に作業を行った。

また、接合可能な箇所は接合し、破断面が明瞭でない箇所は未接合である。

樹脂部分が目立つ箇所のみ着色した。

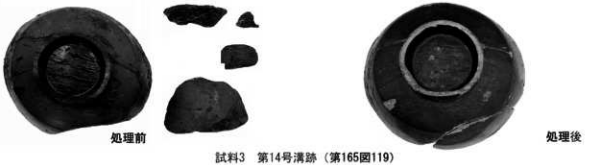
処理前　　処理後

試料1　第２号溝跡（第159図75）



処理前　　処理後

試料2　第14号溝跡（165図117）



処理前　　処理後

試料3　第14号溝跡（第165図119）

6．調査のまとめ

（1）平沼一丁田遺跡の変遷過程

川島町内では、自然堤防が複雑に切り合いながら形成されている。その中で平沼一丁田遺跡は、町域中央にある縄文時代中期に形成されたと考えられている自然堤防上に立地する。

今回の調査では、縄文時代中期・古墳時代前期・中・近世の遺構・遺物を検出した。遺跡の乗る自然堤防は幅約100mと狭いもので、今回の調査は自然堤防を横切る形で調査区が設定されている。

検出された遺構は複雑に重複しているため、それぞれの時代に属する遺構の整理を行う必要がある。ここでは、各時代の遺構を抽出し、時期的変遷を考えてみたい。

なお、本報告では遺物の出土量が少なく、遺物の出土した遺構のみからの推測だけでは時期を捉えられない。そのため、覆土のデータを中心に時期の選別を行った遺構がある。このことから、あくまで変遷の試案であることをご了承いただきたい。

掘立柱建物跡については、出土遺物が少ないという性格が時期の決定を難しくしている。しかし、同時期に存在していた建物跡はある程度方位の一致を見ることが予想されることから、方位による分類を試みたい。今回の調査で検出された掘立柱建物跡は14棟である。

14棟の建物跡はほぼ同一の方位で一致し、大きくずれるものは無く、地形的な規制を受けていることが理解される。

おおよその方位が一致する建物跡であるが、軸の振れ幅の中で、N－45°－W前後を向くもの（第４～６・８～10号掘立柱建物跡）、N－40°－W前後を向くもの（第１・３・12・15号掘立柱建物跡）、N－52°－W前後を向くもの（第11・13号掘立柱建物跡）の概ね３つのグループに分けることが出来る。それぞれの時期において、溝跡などによってさらに規制されているためと推測される。

これらの建物跡の中で、遺物の出土しているものは第３号掘立柱建物跡のみである。かわらけ、陶器碗の小片、鉢の小片、寛永通寶が出土し、17世紀の建物跡と考えられる。また、第２・４・７号掘立柱建物跡は放射性炭素年代測定により実年代を割り出した。第２・７号掘立柱建物跡が古墳時代前期以前、第４号掘立柱建物跡が14世紀という結果が出ている（第41表）。

以上の事柄と、重複関係等を加味して平沼一丁田遺跡の時期的な変遷について整理してみたい。

縄文時代の遺構（第193図）

縄文時代に属す遺構は第27号土壙及び第１号集石土壙である。第27号土壙からは縄文時代中期加曽利ＥⅠ式新段階の深鉢が出土している。第１号集石土壙からは、石皿の他、中期勝坂式の土器が出土している。調査区内で住居跡を発見することは出来なかったが、周辺に存在している可能性が想定できる。

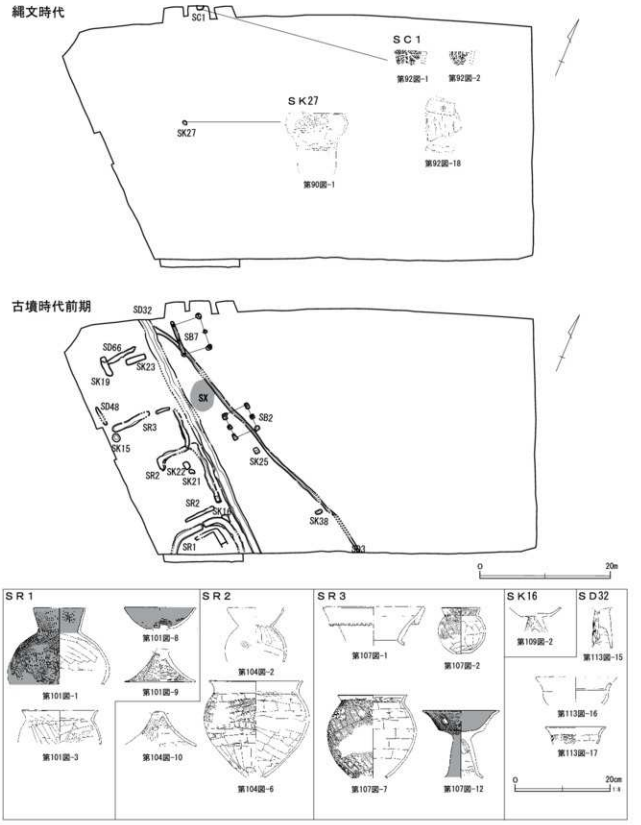
川島町内では、同一の自然堤防の対岸に位置する白井沼遺跡において加曽利Ｅⅰ式初頭期の深鉢が出土している。

平沼一丁田遺跡で時期差のある遺物が出土していることは、この自然堤防の利用がある程度継続していたことを示しており、遺跡の乗る自然堤防の利用が該期に開始し、断続的に利用されていた状況が捉えられる。

古墳時代の遺構（第193図）

古墳時代前期の遺構は、第２・７号掘立柱建物跡、第１～３号周溝状遺構、第15・16・19・23・36号土壙、第３・32・48・66号溝跡があり、これに同一の覆土と考えられる第21・22・25・38号土壙が加わる可能性がある。

調査区西側に第32号溝跡が調査区内を北から南



第193図　平沼一丁田遺跡の集落変遷（1）

へと縦断している。溝跡の東側に掘立柱建物跡、西側に周溝状遺構が配置されており、それぞれの遺構の機能に違いがあったことが考えられる。

建物跡と切り合うようにして第３号溝跡がある。新旧関係は第７号掘立柱建物跡→第３号溝跡で、他の遺構と軸を揃えていないことから、集落とは別時期に存在していた可能性がある。

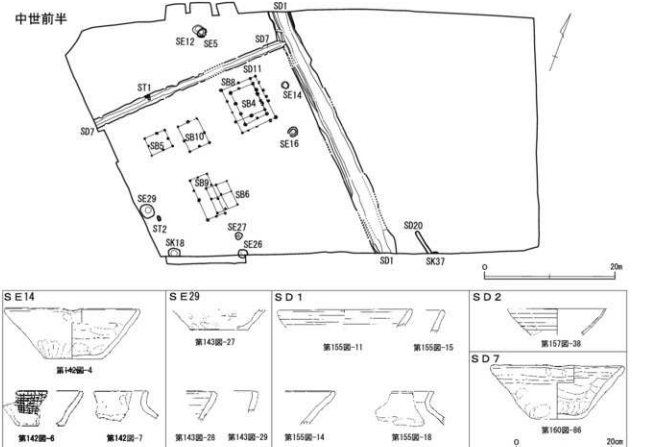
周溝状遺構は、近年、低地遺跡の発掘事例に伴って検出されており、町域での発見例としては尾崎遺跡・白井沼遺跡・元宿遺跡・富田後遺跡などがある。福田聖氏はこれらの遺構について、周溝を持つ建物跡であるとし、方形周溝墓とは異なるものであるとしている（福田1999・2004）。

周溝状遺構は、第１号周溝状遺構を除き、西側に開口部を設けている。遺構相互は一部重複が認められるが、基本的には切り合わないため、３基が同時に存在していた可能性がある。

出土遺物は、第１・２号周溝状遺構から元屋敷系の稜が弱く脚部が大きく開く高坏が出土し、第32号溝跡からは柱状脚の高坏脚部が出土している。廻間Ⅲ式期、埼玉県上尾市稲荷台遺跡の第３段階に並行するものと考えられる（書上1994）。これと前後する時期の遺構は無く、極めて短期間に営まれた集落と言え、自然堤防の対岸に位置する白井沼遺跡と同様の傾向を認めることが出来る。

中世前半の遺構（第194図）

平沼一丁田遺跡に次に集落が営まれるのは中世に入ってからである。遺構の時期は大きく２時期に分けることができ、前半が14世紀を中心として15世紀まで、後半が16世紀後半から近世に至る時期である。



第194図　平沼一丁田遺跡の集落変遷（２）

前半期の遺構は、第４・８号掘立柱建物跡、第14・29号井戸跡、第７号溝跡がある。これに第５・６・９・10号掘立柱建物跡、第５・12・16・26・27号井戸跡、第18号土壙などが加わる可能性がある。中心となる建物跡は第４・８号掘立柱建物跡で、第４号掘立柱建物跡は規模が大きくなる可能性がある。仮にそうだとすると、両建物跡の重複関係は第４号掘立柱建物跡→第８号掘立柱建物跡となる。

両建物跡からは柱部材が出土しており、筏を組んで河川を運搬するためのエツリ穴が穿たれている（奈良文化財研究所2004）。柱部材の樹種には、第４号掘立柱建物跡にクリ材が、第８号掘立柱建物跡にカヤ材が使用されている。

これらの建物跡の北側には第７号溝跡があり、溝跡の底面からは14世紀代の片口鉢が出土している。

第７号溝跡と直行する溝跡に第１号溝跡がある。出土した遺物は近世のものが多いが、14～16世紀の遺物も混入している。また、第７号溝跡がこの溝跡を越えて東側に延びないことから、第７号溝跡は第１号溝跡に接続するものと考えられる。この２条の溝跡に囲まれた範囲を仮に区画１とする。

第４・８号掘立柱建物跡の東側には、第14号井戸跡が掘削されている。覆土中からは、14世紀の完形に近い片口鉢が出土している。第６・９号建物跡の南側には、第26・27号井戸跡が掘削されている。遺物は無いが、調査区壁面の土層観察から中世と考えた。第29号井戸跡からは14・15世紀と考えられる鉢の底部と口縁部が出土している。

中世前半の遺構の広がりは、14世紀の遺物を中心としながらも一部の遺構については15世紀まで継続した可能性がある。

遺構配置は区画１の中に掘立柱建物跡・井戸跡が付属している状況から、この時期は集落というよりは、屋敷的な性格に近いと推測される。

なお、中世前半期から後半期にかけては遺構の希薄な空白期が存在する。火葬土壙はこの時期の所産かもしれない。

また、この期間は調査区の外に遺構が存在することが予想され、今後調査が行われれば自然堤防の延びる方向に建物跡や井戸跡、溝跡などから構成される遺跡の様相を捉えられるだろう。

中世後半から近世前半の遺構（第195図）

空白期を挟んで遺構の増加を見るのは16世紀後半以降である。

当該期の掘立柱建物跡は明確にしえないが、第11・13号掘立柱建物跡などが該当する可能性がある。第１号溝跡は存続し、当該期のかわらけが出土したことから、第７号溝跡も存続していた可能性がある。区画１の中には新たに第25号溝跡が掘削され、区画の規模が縮小する。また、瀬戸の大窯製品と考えられる擂鉢が出土した第11号溝跡が区画１東側に掘削される。

この時期から近世にかけて遺構数は増加し、集落が終焉を迎える18世紀以降まで連綿と続く。

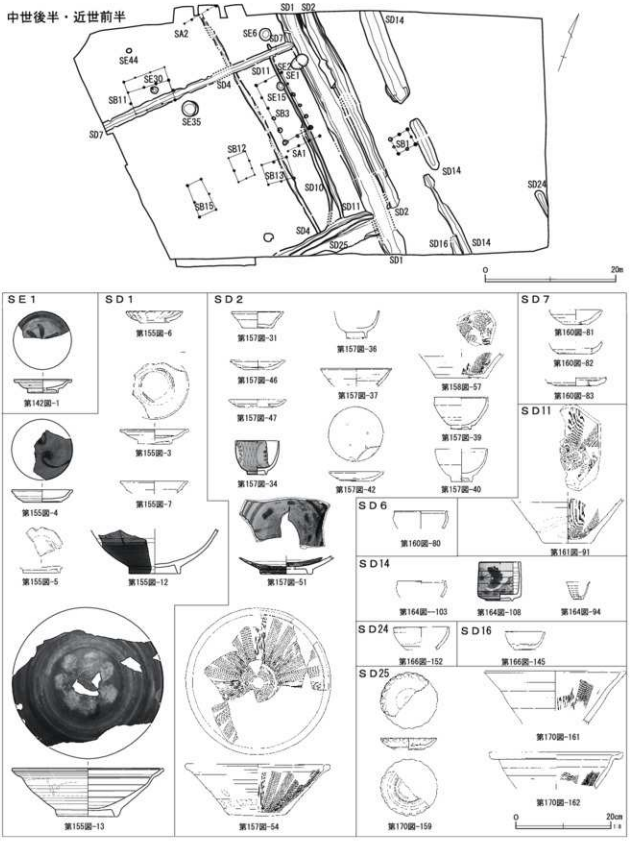
17世紀前半、第７・11号溝跡は完全に埋没し、第25号溝跡は存続していたと考えられる。
また、新たに第４・16号溝跡が調査区を南北に縦断し、第１号溝跡から第２号溝跡へと掘り直されるのはこの頃と推定される。

第１・２号溝跡と、第25号溝跡からなる区画を区画２とする。

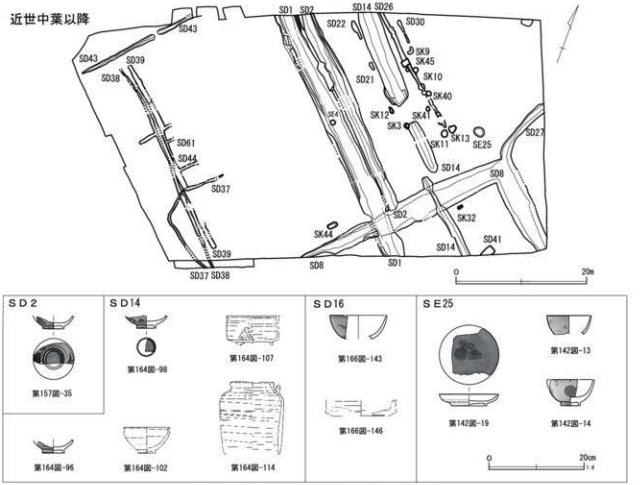
区画２の中には、第１・２号溝跡の西側に第３号掘立柱建物跡が建てられ、東側に第１号井戸跡が掘削された。井戸跡内からは、瀬戸・美濃産の折縁皿が出土している。

17世紀後半、第１・２号溝跡の東側に土橋を持つ第14号溝跡が掘削される。

区画２には第３号掘立柱建物跡が存続したと考えられる。第14号溝跡の土橋の延長線上に第３号掘立柱建物跡と第１号柱穴列の端が位置することから、土橋は区画２内の建物跡を意識して作られ



第195図　平沼一丁田遺跡の集落変遷（3）



第196図　平沼一丁田遺跡の集落変遷（4）

たと推測される。この他第1・12号掘立柱建物跡が当該期に属する可能性がある。

これら建物群に付属する井戸跡の存在は明確に出来ない。

近世中葉以降の遺構（第196図）

この時期は平沼一丁田遺跡の最終段階で、18世紀以降である。掘立柱建物跡は検出されていないが、遺構確認面が現地表から約1～1.5mと深く、削平されたのかもしれない。

18～19世紀以降の遺物が確認されているため、数時期の変遷が考えられる。

18世紀前半では、大きな変化はなく、第1・2・14・25号溝跡の様な主要な遺構は存続するものと考えられる。

掘立柱建物跡は、第1号掘立柱建物跡は当期の可能性もあるが、他の掘立柱建物跡は捉えきれない。

第14号溝跡の西側には、土橋と切り合う第3号土壙が位置する。第3号土壙からは、18世紀前半と考えられる常滑産の大甕が出土している。第14号溝跡は、出土遺物から17世紀後半に掘削されたことが推測されるため、第14号溝跡は部分的に埋め戻され、土橋の機能はすでに失われていた可能性がある。

18世紀後半になると、第1・2号溝跡や第25号溝跡は姿を消し、区画2は終焉を迎える。変わって調査区南側に新たに第8号溝跡が掘削され、別の区画が形成される。これを仮に区画3とする。区画3の内側はほぼ調査区外にあるため、全容は把握出来ず、僅かに第19・20号井戸跡が認められる。

第14号溝跡は、調査区南側が第８号溝跡との位置関係から埋没していた可能性があり、調査区北側に残るのみとなる。ここからは、漆器・曲物といった木製品、伐採された自然木が出土し、さらに碗や皿などの18世紀後半の陶磁器が出土している。

第４号井戸跡が第１号溝跡の存在した位置に掘削され、継続して調査区内を縦断していた溝跡の最後の段階を物語る。

第８号溝跡北側の第26・43・38・39号溝跡は、軸方向が一致しており、同時併存していた可能性がある。その場合、区画３とは別の区画が存在したことになる。第38号溝跡から18世紀後半の瀬戸・美濃産陶器皿が出土している。

以上、平沼一丁田遺跡の変遷について概観した。

今回の調査では、縄文時代中期の土壙・集石土壙を検出し、自然堤防の形成期に関わる時期が判明するとともに、時期差のある土器の出土によって、自然堤防が継続的に利用されていたことが確認された。

古墳時代前期では周溝状遺構・掘立柱建物跡を第32号溝跡を挟んで左右に機能別に配置している状況が認められ、短期間に営まれた集落の様相を見ることが出来た。

中・近世は、区画１→区画２→区画３へと変遷し、さらに別区画の存在も想定出来た。

区画内には、掘立柱建物跡や井戸跡が配置されており、屋敷的な性格が考えられる。

15世紀に遺構が希薄となる時期を挟みつつも16世紀になって再び居住が開始される。この変化は、徳川家康の関東入国以降の農地整備と村の編成に連動したものかもしれない。

平沼一丁田遺跡周辺は、『新編武蔵国風土記稿』に「小田原役帳ニ二十五貫文。比企郡平沼印検地。小机衆三郎殿トアレバ。御入国前所領の人推テ知ルベシ。天正十八年。前田筑前守利家ヨリ与ヘシ制札ニモ平沼ヲ載セタリ」とあり、近世以前からこの地区に開墾された土地があり、そこには平沼村が存在していたことが推測される。

中・近世の平沼一丁田遺跡に屋敷を構えた人々は、こうした農業に従事していたのであろう。

本調査で行った調査面積は3500㎡と決して広いとは言えず、遺跡の範囲を全て調査出来たわけではないが、幅の狭い自然堤防を巧みに利用して生活が営まれた状況を、重なり合う遺構の中に認めることが出来る。

（２）古墳時代前期の掘立柱建物跡について

今回の調査では、古墳時代前期に建てられたと考えられる２棟の掘立柱建物跡を検出した。

近年、低地遺跡の発掘調査事例の増加とともに、掘立柱建物跡の検出例が増加してきているが、類例の少なさから、遺構の広がりや弥生時代との継続性など不明な点が多い。ここでは、平沼一丁田遺跡で検出された掘立柱建物跡について、県内で検出されている他遺跡の掘立柱建物跡とともに若干の検討をおこない、問題点について触れてみたい。また、本報告の第７号掘立柱建物跡は、桁行の片側を布掘りする特徴を有している。この基礎工事を行った例としては県内最古であり、県内の同時期の掘立柱建物跡に類例が認められないことから、県外に類例を求め、問題点について述べてみたい。

平沼一丁田遺跡検出の掘立柱建物跡（第197図）

平沼一丁田遺跡で検出された掘立柱建物跡２棟は、桁行２間、梁行１間の構造で、比較的小規模な建物跡である。第２号掘立柱建物跡の柱掘形には礎板が、第７号掘立柱建物跡の桁行片側には布掘りが施されており、双方とも沈下防止の処置や、地盤改良を行ってから建物を建設している。

県内で検出された古墳時代前期の掘立柱建物跡

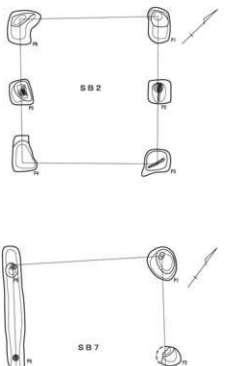
県内で検出された古墳時代前期と考えられる掘立柱建物跡について概観し、その広がりを整理してみたい。（第198・199図）

本庄市今井条理遺跡（岩田1998）

複数面の調査が行われ、第４遺構面で古墳時代前期の水田と集落が発見されている。水田跡の傍らには２軒の竪穴住居跡とともに２×１間、１×１間の掘立柱建物跡が検出されている。

熊谷市古宮遺跡（鈴木2004）

二面に渡る調査が行われ、二面目から弥生時代中期から古墳時代中期に至るまでの竪穴住居跡や土壙、溝跡などが検出された。掘立柱建物跡は、弥生時代中期の独立棟持柱を持つ建物跡と、古墳時代前期の４×１間の建物跡２棟、２×２間と２×１間の建物跡が１棟ずつ検出されている。



第197図　平沼一丁田遺跡検出の掘立柱建物跡

行田市小敷田遺跡（吉田1991）

自然堤防上を南北1.3kmに渡って調査された遺跡で、弥生時代から平安時代に至る遺構、遺物や河川跡などが検出された。調査区は１～６区と区分されており、３区で方形周溝墓や住居跡などが検出され、その中に１×１間の第４号掘立柱建物跡と、２×１間の第５号掘立柱建物跡が検出されている。ただし、第４号掘立柱建物跡は方形周溝墓の内法において検出されているため、厳密には周溝を持つ建物跡の柱掘形である可能性もある。

熊谷市天神東遺跡（栗岡1999）

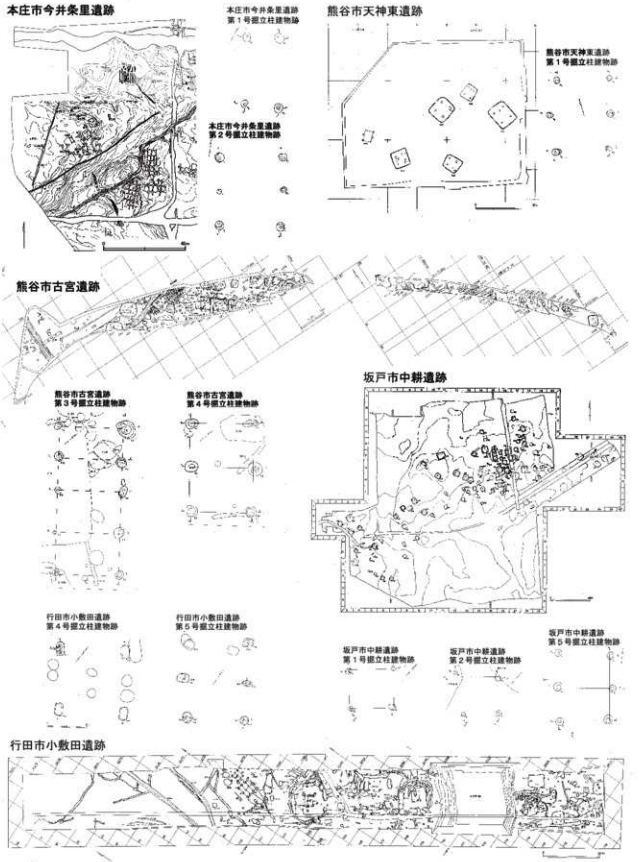
利根川とその支流によって形成された自然堤防が、洪水や地盤の沈降によって埋没した位置に立地する遺跡である。住居跡５軒と、掘立柱建物跡１棟が検出されている。古墳時代前期の遺構からなる遺跡で、一括性が高い。

坂戸市中耕遺跡（杉崎1993）

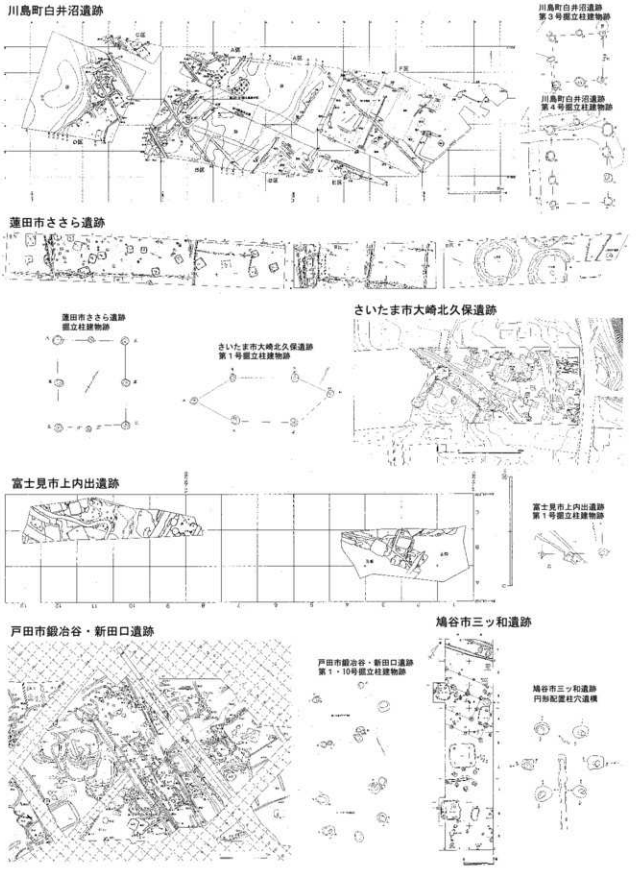
越辺川によって形成された沖積地の後背湿地に位置し、縄文時代の遺構と、古墳時代前期の竪穴住居跡・方形周溝墓・土壙・溝跡とともに掘立柱建物跡が７棟検出されている。掘立柱建物跡は、１×１間が３棟、２×１間が３棟、２×２間が１棟検出されている。

川島町白井沼遺跡（中山2005・栗岡2007）

荒川低地に形成された複雑に切り合う自然堤防の中でも小規模な自然堤防上に位置する。三次に渡る調査がおこなわれ、縄文時代の土壙と周溝遺構、掘立柱建物跡が検出されている。掘立柱建物跡は５棟検出され、２×２間が２棟、３×1間が２棟だが、このうちの１棟は片側の梁行に独立した棟持柱が存在する。同様に、規模は不明だが桁行２間以上の建物跡にも独立棟持柱がある。白井沼遺跡では、在地の土器とともに多くの東海産の土器が発見されている。特に静岡県東部の大廓式土器が数多く出土していることは、東海地方との関りを考える上で注目される。



第198図　埼玉県内の掘立柱建物跡検出遺跡（１）



第199図　埼玉県内の掘立柱建物跡検出遺跡（２）

第42表　埼玉県内の古墳時代前期掘立柱建物跡

遺構名・調査年次	方位	分類	間数		規模(m)		平面積	柱間寸法(m)		掘形			時期	備考
			桁	梁	桁行	梁行	(㎡)	桁行	梁行	規模(cm)	形態			
川島町　平沼一丁田遺跡														
第2号掘立柱建物跡	N-44°-W	側柱	2	1	3.98	3.75	14.92	1.99	1.87	64～97	隅丸方形		古墳前期後半	
第7号掘立柱建物跡	N-39°-W	側柱	2	1	5.00	4.05	20.25	2.46	4.05	15～93	円形		古墳前期後半	
本庄市　今井条理遺跡（岩田1998）														
第1号掘立柱建物跡	N-8°-W	側柱	2	1	3.35	3.1	10.39	1.68	3.1	50	円形		古墳前期後半	
第2号掘立柱建物跡	N-27°-W	側柱	1	1	3.4	1.7	5.78	3.4	1.7	40～47	円形		古墳前期後半	
熊谷市　古宮遺跡　第1～3次（鈴木2004）														
第1号掘立柱建物跡	N-45°-W	側柱	4	1	11.5	4.7	52.41	2.79	4.7	53～95	円・方形		古墳前期	
第2号掘立柱建物跡	N-34°-E	側柱	(2)	1	(5.95)	4.37	(26)	2.98	4.37	26～60	円・方形		古墳前期	
第3号掘立柱建物跡	N-49°-W	側柱	4	1	8.45	3.55	30	2.11	3.55	20～95	円形		古墳前期	
第4号掘立柱建物跡	N-39°-W	側柱	2	1	5	3.5	17.5	2.5	3.5	37～80	円・隅丸方形		古墳前期	
熊谷市　天神東遺跡（栗岡1999）														
第1号掘立柱建物跡	N-15°-E	側柱	2	1	3.6	2.7	9.7	1.8	2.7	25～30	円形		古墳前期後半	
熊谷・行田市　小敷田遺跡4区（吉田1991）														
第4号掘立柱建物跡	N-40°-W	側柱	1	1	3.3	3.2	10.56	3.3	3.2	40～70	方形		古墳前期後半	
第5号掘立柱建物跡	N-35°-W	側柱	2	1	3.8	3	11.4	1.9	3	45～50	方形		古墳前期後半	
第6号掘立柱建物跡	—	側柱	1	1	3	3	9	3	3	40～80	方形		古墳前期後半	
坂戸市　中耕遺跡（杉崎1993）														
第1号掘立柱建物跡	N-45°-E	側柱	1	1	2.7	2.46	6.64	2.7	2.5	30～45	円形		古墳前期前半	
第2号掘立柱建物跡	N-45°-E	側柱	1	1	2.4	2.28	5.47	2.4	2.28	30～45	円形		古墳前期前半	
第3号掘立柱建物跡	N-35°-W	側柱	2	1	3.12	2.54	7.92	1.56	2.54	21～30	円形		古墳前期前半	
第4号掘立柱建物跡	N-52°-W	側柱	2	1	3.42	2.87	9.82	1.71	2.87	30～45	円形		古墳前期前半	
第5号掘立柱建物跡	N-5°-W	側柱	2	1	4.26	3.24	13.8	2.13	3.24	42～60	円形		古墳前期前半	
第6号掘立柱建物跡	N-8°-W	総柱？	2	2	5.22	3.72	19.42	2.61	1.86	24～54	円形		古墳前期前半	
第7号掘立柱建物跡	N-30°-W	側柱	1	1	3.06	2.64	8.09	3.06	2.64	30～48	円形		古墳前期前半	
川島町　白井沼遺跡 第1次（福岡・中山2005）														
第1号掘立柱建物跡	N-12°-E	側柱	2	2	3.35	3.92	13.13	1.68	1.96	32～63	円・隅丸方形		古墳前期	
川島町　白井沼遺跡 第2・3次（栗岡2007）														
第1号掘立柱建物跡	N-40°-W	側柱	3	1	7.15	3.34	23.88	2.38	3.34	47～121	方形		古墳前期後半	
第2号掘立柱建物跡	N-42°-W	側柱	(2)	1	(4.67)	3.43	(16.01)	—	3.43	32～112	円形		古墳前期後半	
第3号掘立柱建物跡	N-40°-W	側柱	2	2	3.28	2.95	9.68	1.64	1.48	22～69	円形		古墳前期後半	独立棟持柱建物
第4号掘立柱建物跡	N-30°-W	側柱	3	1	4.7	3.46	16.26	1.57	3.46	37～84	方形		古墳前期後半	独立棟持柱建物
蓮田市　ささら遺跡（鈴木他1983）														
第1号掘立柱建物跡	N-32°-W	側柱	2	2	4.35	3.4	14.79	2.18	1.7	27～51	円形		古墳前期前半	桁行平均値
さいたま市　大崎北久保遺跡　第2次（山田他1996）														
第1号掘立柱建物跡	—	側柱	1	1	3.06	2.25	6.89	3.06	2.25	40	円形		古墳前期	独立棟持柱建物
富士見市　上内手遺跡（橋本1995）														
第1号掘立柱建物跡	N-9°-E	側柱？	2	—	3.1	—	—	1.55	—	18～48	円・隅丸方形		古墳前期後半	南側？間分のみ検出
戸田市　鍛冶谷・新田口遺跡（西口1996）														
第1号掘立柱建物跡	N-5°-E	側柱	1	1	2.3	1.8	4.14	2.3	1.8	25～40	円形		古墳前期	
第2号掘立柱建物跡	N-80°-W	側柱	1	1	2.8	1.7	4.76	2.8	1.7	45～68	円形		古墳前期	
鳩ヶ谷市　三ツ和遺跡　第2次（浅野1984）														
円形配置柱穴遺構	N-50°-E	側柱	1	1	3.18	2.07	6.58	—	—	52～90	円・方形		古墳前期後半	独立棟持柱建物

第43表　埼玉県内の弥生時代掘立柱建物跡

遺構名・調査年次	方位	分類	間数		規模(m)		平面積	柱間寸法(m)		掘形			時期	備考
			桁	梁	桁行	梁行	(㎡)	桁行	梁行	規模(cm)	形態			
熊谷市　古宮遺跡　第1～3次（鈴木2004）														
第5号掘立柱建物跡	N-28°-E	側柱	(2)	1	(3.2)	3	(9.6)	1.6	3	35～52	円・隅丸方形		弥生中期	独立棟持柱建物
熊谷市　北島遺跡Ⅵ　19地点（吉田2003）														
第60号掘立柱建物跡	N-34°-W	側柱	4	2	8.25	4.45	36.71	2.06	2.23	45～105	円形		弥生中期後半	独立棟持柱建物
朝霞市　泉水山遺跡（中山1983）														
第1号掘立柱建物跡	N-58°-W	側柱	2	1	5.15	3.8	19.57	2.58	3.8	48～69	円形		弥生後期末	
和光市　白子宿上遺跡　第2～4次（鈴木他1995・2001）														
第1号掘立柱建物跡	N-18°-E	側柱	2	1	4.94	3.3	16.3	2.47	3.3	30～48	円形		弥生後期末	
第2号掘立柱建物跡	N-29°-W	側柱	1	1	2.57	2.38	6.12	2.57	2.38	45～48	円形		弥生後期末	
第3号掘立柱建物跡	N-84°-W	側柱	2	1	4.8	2.6	12.48	2.4	2.6	45～60	円形		弥生後期末	
第4号掘立柱建物跡	—	側柱	1	1	3.88	3.41	13.23	3.88	3.41	38～58	円形		弥生後期末	

蓮田市ささら遺跡（鈴木他1983）

大宮台地の東側に位置する。縄文時代の遺構と弥生末～古墳時代初頭の遺構が検出されている。Ⅰ～Ⅳ区の調査区があり、掘立柱建物跡はⅡ区で見つかっている。2×2間の建物跡で、竪穴住居跡の存在しない空閑地に位置する。なお、このⅡ区北端は台地の縁辺に位置している。

さいたま市大崎北久保遺跡（山田他1996）

大宮台地の縁辺に位置し、縄文時代・古墳時代・近世の遺構が発見されている。1×1間の平面形態で、梁行には独立棟持柱がある。

富士見市上内出遺跡（橋本1995）

荒川低地に位置し、新河岸川に沿って南北に延びる自然堤防上に立地する。古墳時代前期・平安時代・中世の遺構・遺物が発見されている。掘立柱建物跡は1棟検出されているが、大部分が攪乱によって削平されており、規模等は不明である。

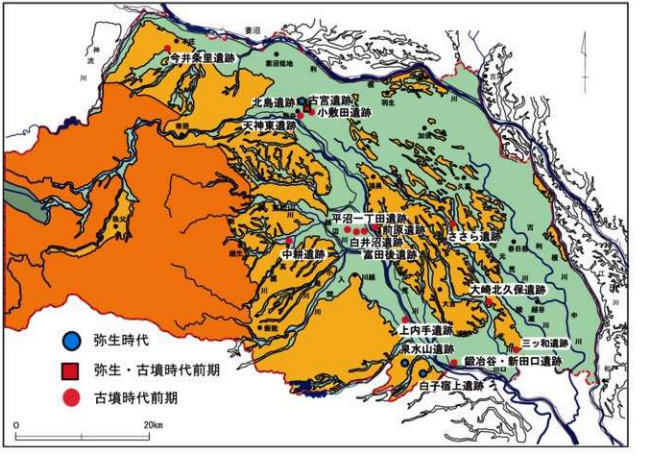
戸田市鍛冶谷・新田口遺跡（西口1986）

荒川左岸に形成されている自然堤防上に位置している。調査区は自然堤防の両岸を通して行われているため、調査区内に谷を挟む。弥生時代から古墳時代前期にかけて多くの遺構が発見されている。方形周溝墓と周溝遺構が混在し、その中に竪穴住居跡、掘立柱建物跡が存在する。掘立柱建物跡は2棟検出され、2棟とも2×1間で長辺の片側に独立棟持柱を有している。

鳩ケ谷市三ツ和遺跡（浅野1984）

大宮台地の鳩ヶ谷支台南端から500m離れた位置に形成された自然堤防上に立地し、古墳時代前期・平安時代・中世の遺構・遺物が発見されている。掘立柱建物跡は、円形配置柱穴遺構として報告されている。1×1間の建物跡で、長辺に独立した棟持柱を持つ。

この他未報告のものでは川島町富田後遺跡で7



第200図　掘立柱建物跡分布図

棟、樋川市前原遺跡で３棟検出されている。これに平沼一丁田遺跡検出のものも含めると、県内の古墳時代前期と考えられる掘立柱建物跡は、14遺跡から約40棟が検出されていることになる。

なお、古墳時代前期の掘立柱建物跡との連続性を考える上では、弥生時代の掘立柱建物跡を捉える必要がある。弥生時代と考えられる検出例は、上記の熊谷市古宮遺跡で弥生時代中期の掘立柱建物跡が１棟、同じく熊谷市の北島遺跡で４×２間で独立棟持柱を持つものが１棟（吉田2003）、朝霞市泉水山遺跡で弥生時代後期と思われる２×１間のものが１棟（中山1983）、和光市白子宿上遺跡で弥生時代後期末から古墳時代初頭頃と思われる２×１間の掘立柱建物跡が２棟、１×１間が２棟の計４棟が検出されている（鈴木他1995・2001）。

これらの分布を示したものが第200図である。古墳時代前期は、低地部に多くの遺跡が展開する。県北部の妻沼低地と、県中央部の荒川低地に集中しており、平沼一丁田遺跡は荒川低地に位置している。県域中央部に遺跡が集中していることは、調査の多さにもよるところが大きいと考えられるため、今後の調査により、荒川低地に連綿と掘立柱建物跡を有する遺跡が並ぶ可能性も考えられる。

この時期は低地部にも多くの集落が営まれ、新田開発の可能性が指摘されている（川島町2008）。平沼一丁田遺跡もそのような遺跡の中の一つとして考えられよう。

掘立柱建物跡の種類と平面形態・平面積

平面的な様相を捉えるために、遺構の形による分類と、規模による比較を行いたい。

本遺跡で検出された掘立柱建物跡の平面形態は２棟とも２×１間の側柱建物跡であるが、これを第201図の中にあてはめると、弥生時代にも認められる建物跡で、小さい建物跡の部類に入ることがわかる。

県内で発見されている建物跡には、側柱の他に梁行片側に独立棟持柱を持つ建物跡、両側に独立棟持柱を持つ建物跡がある。独立棟持柱を持つ建物跡はすでに弥生時代から存在し、古墳時代前期にも認めることができる。このような平面の形態に見られる違いは、上部構造の違いに反映されるものと推測される。

なお、諏訪木遺跡・北島遺跡では、建築部材として壁板材が出土している。山本靖氏は、壁板材の詳細な検討とともに、建物跡の復元案を試みている。県内の発掘調査で現在までに壁板材と掘立柱建物跡の両方が同時に検出された遺跡は無いが、今後の調査例の増加とともに注目される案である（山本2008）。

平面形態と規模については第43・44表にまとめた。１×１間・２×１間・２×２間・３×１間・４×１間の建物跡が確認出来る。桁行２間以下の建物跡が全体の80%以上を占め、桁行３間以上の建物跡は全体の14%と、桁行２間以下の建物跡が主体をなす状況が認められる。また、梁行に間柱

第44表　掘立柱建物跡の平面形態

平面形態

遺跡名	1×1	2×1	2×2	3×1	4×1	合計
平沼一丁田遺跡		2				2
今井条里遺跡	1	1				2
古宮遺跡		2			2	4
小敷田遺跡	2	1				3
天神東遺跡		1				1
中耕遺跡	3	3	1			7
白井沼遺跡			2	2		4
ささら遺跡			1			1
大崎北久保遺跡	1					1
三ツ和遺跡	1					1
鍛冶谷・新田口遺跡	2					2
合計	10	10	4	2	2	28

第45表　掘立柱建物跡の平面積

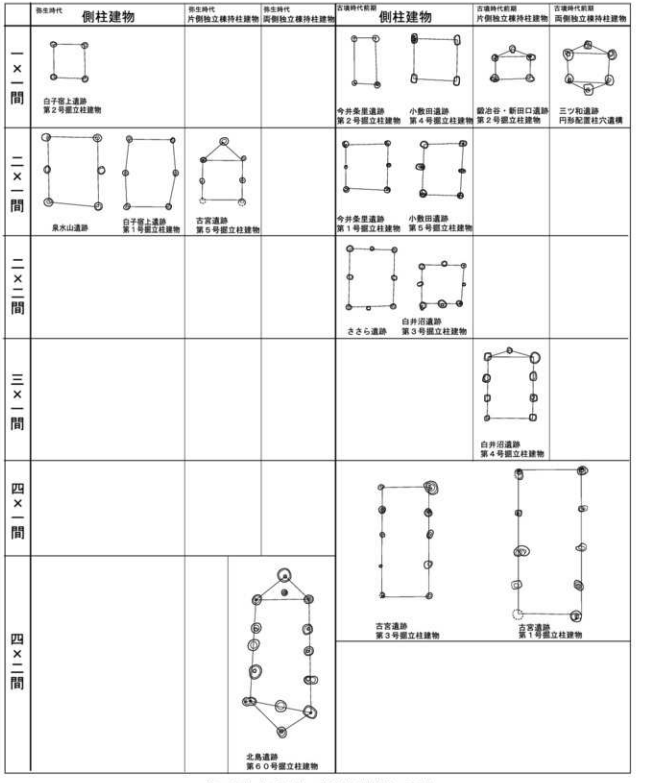
平面積（㎡）

10未満	10～20未満	20～30未満	30～40未満	40～50未満	50～60未満	合計
	1	1				2
1	1					2
	1	1	1		1	4
1	2					3
1						1
5	2					7
1	2	1				4
	1					1
1						1
1						1
2						2
13	10	3	1		1	28

を持たない建物跡が大多数であることが当該期の特徴と言える。

桁行３間を越えるものは非常に少なく、古墳時代前期で白井沼遺跡、古宮遺跡で確認されているのみである。

平面積を見ていくと、20㎡未満の建物跡が全体の80％以上を占めている。逆に規模の大きい30～60㎡未満の建物跡は、僅か8％という結果となる



第201図　埼玉県内の掘立柱建物跡の類型

（第45・46表）。

以上のことから、地域が違っても主体となる掘立柱建物跡の規模は変わらないため、同様な目的の元に建てられている可能性がある。

大規模な建物跡については、小規模な建物跡とは異なる性格の基に建てられていることが考えられる。これらに関しては遺跡の性格と、遺構の性格が関連するものと推測される。

平沼一丁田遺跡検出の掘立柱建物跡の性格

松井一明氏は、弥生時代の掘立柱建物跡と集落について、静岡県を中心として、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の数量の割合から性格について言及している（松井2002）。それによると、集落のタイプには掘立柱建物跡の多い集落と、住居跡に対して掘立柱建物跡の少ないものに分かれるとされる。前者は倉庫の他に、平地式の建物や居住の施設を含む機能を、後者には竪穴住居跡や周溝を持つ建物跡に対して掘立柱建物跡が10～20%の割合を示し高床の倉庫跡の可能性を想定している。

また、宮本長二朗氏は弥生時代の掘立柱建物跡に対して、桁行２間以下の建物跡は、平地式の住居跡を含むが、大部分が高床の倉庫跡となる可能性を指摘している（宮本1991）。

平沼一丁田遺跡の建物跡は、２×１間で面積は10～20㎡前後である。周溝状遺構を居住施設と仮定すると、住居跡と掘立柱建物跡との割合は66.7%となる。割合のみを見ると高い比率であるが、今井条里遺跡の様な住居跡に付属している規模の小さな掘立柱建物跡と考えると、建物跡の機能を倉庫とは考えられないだろうか。また、県内の建物跡に２×１間や１×１間のものが主体を占める状況も示唆的である。ただし、上部構造については検討の余地があるため、今後の課題としたい。

布掘りについて

次に、布掘りについて触れてみたい。本遺跡から検出された古墳時代前半の布掘り工法は、現段階では県内に類例がない。そのため、県外に類例を探し、事例を見ていく中で若干の問題点について触れてみたい。

本遺跡で検出された布掘り建物跡は、桁行きの片側を布掘りし、片側を壺掘りしている。布掘りは溝を幅50㎝、深さ50㎝程度に掘削し、その中に立柱してから埋め戻しを行っている。

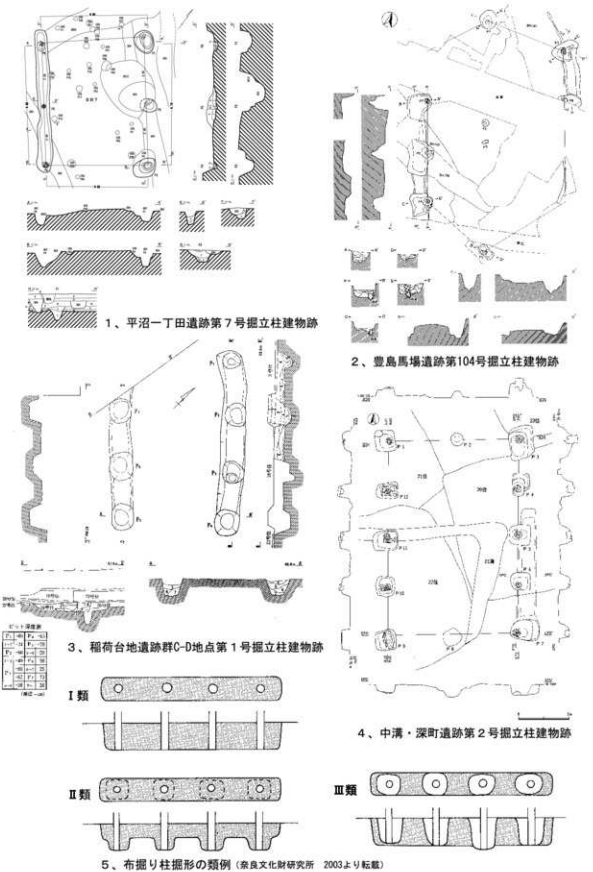
布掘り建物自体がいつからあるのかは不明であるが、少なくとも弥生時代には存在した。弥生時代の布掘り建物は北陸地方と東海地方を中心として検出例が多い（第203図）。

その文化が関東地方に入ってくるのは、古墳時代前期になってからのことである。関東地方での類例は東京都豊島番場遺跡（中島他1999）、群馬県中溝・深町遺跡（福嶋他2000）、神奈川県稲荷台地遺跡（戸田他1996）で認められる（第202図・第47表）。

東京都豊島番場遺跡は、荒川低地に位置する遺跡である。３×１間で梁行の両側に独立棟持柱を持つ布掘り建物跡が１棟確認されている。掘形は布掘り部よりも深く掘削され、掘形の土層観察では溝部分は確認出来ない。

神奈川県稲荷台地遺跡は稲荷台地上に立地している。３×１間の建物跡と推定される建物跡が１棟検出されている。桁行両側が布掘りされている。溝は、幅90～100㎝、深さ20～40㎝で、土層断面を見ると、溝を掘った際に掘削しているものと溝を埋め戻してから掘削しているものがある。後者は抜き取りの痕跡かもしれない。

群馬県中溝・深町遺跡は、新田東部遺跡群の中に位置し台地縁辺と、低地部の調査が行われた遺跡である。遺構は台地部の溝跡によって区画された範囲の中に第２・３号掘立柱建物跡の２棟の布掘り建物跡が検出されている。第２号掘立柱建物跡は、４×２間で、桁行片側を布掘りしている。現状保存のために完掘はされていないが、溝幅は



第202図　関東地方の布掘り建物跡検出遺跡

70㎝である。土層観察により、掘形の方が後から掘削されている。

第３号掘立柱建物跡は、桁行・梁行ともに片側のみ確認されている。４×２間の建物跡になると推定される。布掘りの溝幅69㎝、深さ約５～20㎝である。溝掘削後に掘形を掘り、立柱した後に溝と掘形を埋め戻している可能性がある。

これらの類例と平沼一丁田遺跡とを比較してみたい。

山中敏司氏は、この工法の立柱方法について奈良・平安時代の例を中心にⅠ～Ⅲ類に分類している（山中2003）。古代の建物跡の工法に古墳時代前期の建物跡を当てはめるのには無理があるが、布掘りの基本的な立柱方法には類似点が認められるため、この分類に沿ってみたい（第202図５）。

Ⅰ類は更にＡ・Ｂ類に２分類される。

ⅠＡ類：布掘りして柱を立てるもので、地中梁や長い礎板、腕木の設置を兼ねたものも含まれる。

ⅠＢ類：壁立建物の壁体の細い間柱や、木舞などを狭い間隔で立てる口の字型の工法。

Ⅱ類：布掘りした後に、溝底面から柱位置をさらに壺掘りして柱を立てるもので、帯状に長く掘られるものは、弥生時代からの伝統的な工法を受け継いだものとされる。また、ⅠＡ類と同様に、地中梁や地覆などの据え付けを兼ねていたものが含まれていた可能性がある。

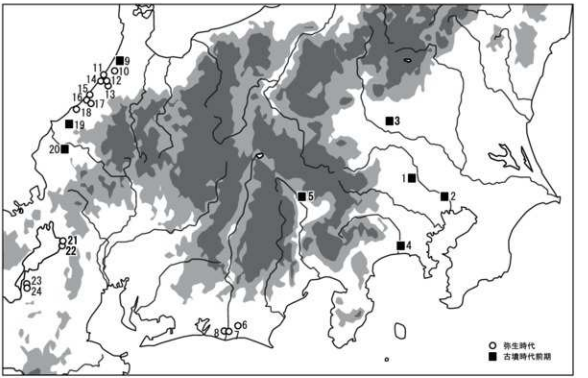
Ⅲ類：布掘りして一端埋め戻し、その上から柱位置を壺掘りするものである。

平沼一丁田遺跡はⅠＡ類又はⅡ類となることが考えられる。神奈川県稲荷台地遺跡と群馬県中溝・深町遺跡３号掘立柱建物跡がⅡ類、豊島番場遺跡と群馬県中溝・深町遺跡２号掘立柱建物跡がⅢ類と推測される。これらの立柱方法の違いは何に起因するのだろうか。山中氏は布掘りについて布掘り掘形を埋め戻すのは柱位置の地盤を固める意図を持っていたとしつつも、Ⅲ類などは固めた地盤を壺掘りしてしまうので、実質的な意味については不詳としている。平沼一丁田遺跡の布掘り建物跡は、土層観察で地中梁や礎板を確認出来なかった。柱位置の地盤を固める目的と考えたいが、地盤改良についても何故片側だけなのか疑問である。調査事例の増加を待って再考したい。

関東地方の例を見ても布掘りの事例は希少である。さらに弥生時代の例は無く、この技術が当地方で発生したものとは考えにくい。文化の流入については、北陸ないしは東海地方から関東地方へともたらされた可能性が考えられないだろうか。その場合に想定されるルートは北陸地方から群馬県などを経るルート、東海地方から海上と河川を利用して来るルートが考えられる。どちらのルートを使用したのか、あるいは別のルートがあるのか、不明な点は多い。一つの手掛りとなるのが、

第46表　関東地方の布掘り建物跡

都道府県 市町村	遺跡名	方位	分類	間数		規模(m)		平面積(㎡)	柱間寸法(m)		掘形			時期	備考
				桁	梁	桁行	梁行		桁行	梁行	規模(cm)	形態			
東京都 北区	**豊島馬場遺跡Ⅱ**														
第104号掘立柱建物跡		S-15°-E	側柱	3	1	6.00	5.4	32.4	2.00	5.4	40～130	円・方形		弥生末～ 古墳前期初頭	独立棟持柱建物 柱材出土
群馬県太田市 (旧新田町)	**新田東部遺跡群Ⅱ　中溝・深町遺跡**														
第２号掘立柱建物跡		N-1°-E	側柱	4	2	7.68	5.12	39.32	1.92	2.56	50～130	方形		古墳前期後半	礎板出土
第３号掘立柱建物跡		N-3°-E	側柱	4	—	7.36	—	—	1.84	—	75～128	方形		古墳前期後半	柱材出土
神奈川県 藤沢市	**稲荷台地遺跡**														
第１号掘立柱建物跡		N-3°-E	側柱	3	1	7.35	5.4	39.69	2.45	5.4	62～106	円形		弥生末～ 古墳前期初頭	



埼玉県
■ 1 川島町平沼一丁田遺跡

東京都
■ 2 北区豊島馬場遺跡

群馬県
■ 3 新田町中溝・深町東遺跡

神奈川県
■ 4 藤沢市稲荷台地遺跡

山梨県
■ 5 韮崎市宿尻第二遺跡

静岡県
○ 6 掛川市溝ノ口遺跡
○ 7 磐田市勾坂中下遺跡
○ 8 浜松市天王中野遺跡

石川県
■ 9 津幡市刈安野々宮遺跡
○ 10 金沢市塚崎遺跡
○ 11 金沢市下安原遺跡
○ 12 野々市御経塚シンデン遺跡
○ 13 野々市押野タチナカ遺跡
○ 14 松任市倉部出戸遺跡
○ 15 小松市高堂遺跡
○ 16 小松市漆町遺跡
○ 17 小松市八幡遺跡
○ 18 加賀市猫橋遺跡

福井県
■ 19 金津町茱山崎遺跡
■ 20 松岡町葵遺跡

滋賀県
○ 21 長浜市大塚遺跡
○ 22 近江町黒田遺跡
○ 23 守山市下長遺跡
○ 24 栗東町下鈎遺跡

第203図　布掘り建物跡分布図

約1㎞東に立地する白井沼遺跡の存在である。この遺跡は平沼一丁田遺跡とほぼ同時期に存在する。静岡県東部駿河地方で生産された大廓式土器の大型壺や複合口縁壺・大型甕・高坏・鉢等が多数出土しており、他地域との関連が強い遺跡である。土器の移動については多々問題点を抱えるが、いずれにしても平沼一丁田遺跡と何らかの関わりがあった可能性が考えられる。

以上、平沼一丁田遺跡で検出された掘立柱建物跡について同時期の掘立柱建物跡との比較を行い、低地に位置する開拓村の倉庫跡の可能性を考えた。さらに、布掘り建物跡については、そのルーツを北陸ないし東海地方に求めた。

小宮恒雄氏は、東日本の弥生時代末から古墳時代初頭の掘立柱建物跡について、梁行1間の建物跡が倉庫である可能性を指摘し、次いで東日本では竪穴住居跡に対して極端に検出数が少ないことから、倉庫を「世帯集団」あるいは「世帯共同体」が所有していたものとしている（小宮1991）。平沼一丁田遺跡のように突然集落の開始を見て、短期間で終焉を迎えるような遺跡の中で、掘立柱建物跡の所有と管理はどの様に行われてきたのか、他遺跡の様相とともに今後の課題とし、稿を閉じたい。

引用・参考文献

青木義脩・山田尚友　1996『大崎東新井遺跡（第２次）、大崎北久保遺跡（第１次、第２次）鶴巻西遺跡（第２次）発掘調査報告』浦和市遺跡調査会報告書第216集

赤塚次郎　1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

浅野信英　1984『鳩ヶ谷市三ツ和遺跡―第２次調査報告―』鳩ヶ谷市教育委員会報告書第3集

浅野晴樹　1991「東国における中世在地系土器について－主に関東を中心にして－」『国立歴史民族博物館研究報告』第31集　国立歴史民族博物館

磯崎　一・中山浩彦　2005『白井沼遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第315集

井村広已　2000『溝ノ口遺跡』掛川市教育委員会

岩田明広　1998『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集

関間俊明　2004『宿尻第二遺跡』蕨崎市教育委員会

江戸遺跡研究会　2001『図説江戸考古学研究事典』

大橋康二　2006「肥前磁器の歴史」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

小原貴樹　1991「山除の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物―本編―』第29回研究埋蔵文化財研究会

書上元博　1994『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集

金子直行・馬橋泰雄　2002『尾崎遺跡』川島町教育委員会第１集

金山弘明　1992『倉部出戸遺跡』松任市教育委員会

川島町　2006『川島町史』通史編　上巻

栗岡　潤　1999『天神東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第240集

栗岡　潤　2007『白井沼遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第328集

小宮恒雄　1991「東海・関東・甲信の掘立柱建物－港北の遺跡を中心として－」『弥生時代の掘立柱建物―本編―』第29回研究埋蔵文化財研究会

佐口節司・室内美香　1995『梵天古墳群・匂坂中下４遺跡』磐田市教育委員会

鈴木一郎他　1995『白子宿上遺跡（第２次・第３次）』和光市埋蔵文化財報告書第17集

鈴木一郎他　2001『城山南遺跡（第３次）　白子宿上遺跡（第４次）』和光市埋蔵文化財報告書第25集

鈴木孝之　2004『古宮／中条条里／上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第298集

鈴木敏昭　1983『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集

鈴木正行　1997『天王中野遺跡２』浜松市文化協会

瀬戸市　1994『瀬戸市史』陶磁史編　4

田嶋明人　1988『漆町遺跡Ⅱ』石川県埋蔵文化財センター

茶谷　満・家塚英詞　2008『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告３　建築部材（資料編）』鳥取県埋蔵文化財センター

中世を歩く会・埼玉県立歴史資料館　2002『在地土器検討会資料集　－北武蔵のカワラケ－』

戸澗幹夫　1984『宮永遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

戸澗幹夫・鴇尻修平　1990『高堂遺跡』石川県埋蔵文化財センター

戸田哲也他　1996『稲荷台地遺跡群（C・D地点　F地点　S地点）』稲荷台地遺跡群発掘調査団

中島広顕　1999『豊島馬場遺跡Ⅱ』北区埋蔵文化財報告第25集

中山清隆　1983『泉水山・下ノ原遺跡Ⅰ』韓國市泉水山・下ノ原遺跡調査会

長佐古真也　2006「流通②関東・江戸」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

奈良文化財研究所　2003『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』

奈良文化財研究所2004『古代の官衙遺跡　Ⅱ遺物・遺跡編』

西口正純　1986『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集

西野秀和　1988『刈安野々宮遺跡』石川県埋蔵文化財センター

橋本　勉　1995『上内手遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第160集
浜崎悟司他　1998『八幡遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財保存協会
伴野幸一　2001『下長遺跡発掘調査報告　Ⅸ』守山市教育委員会
福嶋正史　2000『新田東部遺跡群Ⅱ　中溝・深町遺跡　中溝Ⅱ遺跡』新田町教育委員会
福田　聖　1999「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（1）－周溝墓とは何かを探るための試み－」埼玉考古第34号　埼玉考古学会
福田　聖　2002「方形周溝墓・周溝の覆土と出土状況―鍛冶屋・新田口遺跡－」埼玉考古学会50周年記念論文集『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古第41号　埼玉考古学会
福田　聖　2004「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（7）－さいたま市・川島町・吉見町の低地遺跡について－」埼玉考古第39号　埼玉考古学会
藤沢良祐　2006「瀬戸・美濃登窯製品の生産と流通」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
本田秀生　2002『猫橋遺跡』石川県埋蔵文化財センター
本田秀生　2004『戸水B遺跡（10・12・13）次』石川県教育委員会
松井一明　2002「竪穴住居と掘立柱建物　－静岡県下における低地集落の建物構造とイメージ－」『静岡県における弥生時代集落の変遷』静岡県考古学会
宮崎幹也　1994『黒田遺跡3』近江町文化財調査報告書第17集
宮本長二郎　1991「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物―本編―』第29回研究　埋蔵文化財研究会
山本　靖　2008『綴じ合わせ構造をもつ樋部倉矧壁板の意義』『研究紀要』第23号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉田　淳・横山貴広　2001『御経塚シンデン遺跡　御経塚シンデン古墳群』野々市町教育委員会
吉田　稔　1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
吉田　稔　2003『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集

第47表　遺構番号新旧対応表

周溝状遺構

新遺構番号	旧遺構番号
第２号周溝状遺構	第33号溝跡
	第34号溝跡
第１号周溝状遺構P１	F-４G　P４

掘立柱建物跡

新遺構番号	旧遺構番号
第６号掘立柱建物跡	第９号掘立柱建物跡
第９号掘立柱建物跡	第６号掘立柱建物跡
第８号掘立柱建物跡P11	C-３G　P71
第９号掘立柱建物跡P１	E-４G　P30
第９号掘立柱建物跡P２	E-４G　P27
第９号掘立柱建物跡P３	E-４G　P28
第９号掘立柱建物跡P４	E-４G　P31
第９号掘立柱建物跡P５	E-３G　P70
第９号掘立柱建物跡P６	E-４G　P15
第９号掘立柱建物跡P７	E-４G　P24
第10号掘立柱建物跡P３	E-３G　P90
第10号掘立柱建物跡P４	E-３G　P44
第10号掘立柱建物跡P５	E-３G　P10
第10号掘立柱建物跡P７	D-３G　P40
第11号掘立柱建物跡P３	D-２G　P44
第12号掘立柱建物跡P１	E-４G　P１
第12号掘立柱建物跡P２	E-４G　P37
第12号掘立柱建物跡P３	E-４G　P36
第12号掘立柱建物跡P４	E-４G　P５
第12号掘立柱建物跡P５	E-４G　P38
第12号掘立柱建物跡P６	E-４G　P39
第12号掘立柱建物跡P７	E-３G　P99
第13号掘立柱建物跡P３	E-４G　P３
第13号掘立柱建物跡P４	E-４G　P４
第13号掘立柱建物跡P５	E-４G　P44

柱穴列

新遺構番号	旧遺構番号
第１号柱穴列P１	D-４G　P18

土壙

新遺構番号	旧遺構番号
第27号土壙	第40号土壙
第32号土壙	第17号溝跡
第38号土壙	第２号遺物集中
第42号土壙	第45号溝跡
第44号土壙	第28号溝跡
第45号土壙	B-６G　P２
第46号土壙	C-３G　P３
第47号土壙	C-３G　P38
第48号土壙	D-３G　P４
第49号土壙	D-３G　P26
第50号土壙	D-４G　P10
第51号土壙	D-４G　P33
第52号土壙	D-４G　P35
第53号土壙	D-６G　P２
第54号土壙	D-７G　P１
第55号土壙	E-２G　P33
第56号土壙	E-７G　P２
第57号土壙	E-７G　P３
第58号土壙	F-３G　P４
第59号土壙	F-３G　P16
第60号土壙	D-１G　P15
第61号土壙	E-７G　P５

溝跡

新遺構番号	旧遺構番号
第48号溝跡	第４号周溝状遺構
第66号溝跡	第４号周溝状遺構

グリッドピット

新遺構番号	旧遺構番号
D-３G　P41	第８号掘立柱建物跡P10
D-４G　P47	第８号掘立柱建物跡P６
F-４G　P17	第１号周溝状遺構P１

第48表　掘立柱建物跡一覧表

番号	方位	間数		桁行	梁行	平面積	柱間寸法		廂			握方		重複	備考
		桁	梁	(m)	(m)	(㎡)	桁行	梁行	桁方向	梁方向	廂面積	規模(㎝)	深さ(㎝)		
1	N−39°−E	2	2	2.95	2.53	7.46	1.47	1.26	—	—	—	30〜54	23.5	SK7(P6と重複)	
2	N−44°−W	2	1	3.98	3.75	14.92	1.99	1.87	—	—	—	64〜97	51.5	SB4・8 SE48 SD3・4	
3	N−47°−W	5	2	9.57	4.39	42.01	1.91	2.19	—	—	—	30〜42	23.5	SB4・8 SE15・16 SD10・11・15・57 SK1・30・51	
4	N−45°−W	3	2	5.22	3.65	19.05	1.74	1.82	—	—	—	23〜44	31.0	SB2・8 SD3・4	
5	N−45°−E	2	2	3.39	2.75	9.32	1.69	1.37	—	—	—	15〜35	29.0	SD38・39・61 SK42・28(P3と重複)	
6	N−44°−W	2	2	4.12	3.35	(13.8)	2.06	1.67	—	—	—	18〜25	17.5	SB9 SR2 SD32・35	
7	N−39°−W	2	1	5.00	4.05	20.25	2.46	4.05	—	—	—	15〜93	56.5	SE5・12 SD3・4・53	
8	N−45°−W	2	2	5.23	4.70	24.58	1.74	1.56	0.9	1.92	15.41	22〜48	23.0	SB2・4 SD3・4・5 SK30・50	
9	N−45°−W	3	2	6.53	2.80	18.28	2.17	1.40	—	—	—	16〜45	21.0	SB6・15 SR2 SD35〜37・59・60	
10	N−42°−W	2	2	4.10	3.24	13.28	2.05	1.62	—	—	—	26〜36	26.1	SR2・3 SE34・42 SD32・35 SK27・36	
11	N−52°−E	3	2	6.58	5.12	33.68	2.20	1.71	—	1.86	12.03	12〜34	27.0	SE30・37 ST1 SD7・38・39・49〜51・58	
12	N−43°−W	(3)	2	3.90	2.77	10.80	1.30	1.38	—	—	—	12〜27	15.0	SD32	桁行北側3間 桁行南側2間
13	N−53°−E	2	1	3.94	3.22	12.68	1.97	3.22	—	—	—	20〜40	24.5	SD3・4	
14	欠番														
15	N−43°−W	2	1	5.13	2.51	12.87	2.56	2.51	—	—	—	20〜35	20.5	SD36・37・39・59	

第49表　柱穴列一覧表

番号	方位	間数	長さ(m)	柱間(m)	直径(㎝)	深さ(㎝)	重複	備　考
1	N−45°−E	2	5.36	1.75	27〜33	12〜21	SD10・11	
2	N−41°−E	4	5.51	1.36	14〜28	5〜16	SD4・5・53・55・56 SC1	

第50表　周溝状遺構一覧表

番号	グリッド	方位		長軸(m)	短軸(m)	開口部溝幅(m)	深さ(m)	溝幅(m)	深さ(m)	重複
1	F−3・4	N−45°−W		8.38	3.92		—	0.90〜1.20	0.31	SE26・27 SK16・18 SD38・39
2	E・F−3・4	N−45°−W		9.32	5.21	0.85	0.07	0.53〜1.30	0.16	SE33・41 SB10 SE35 SK36 SD5〜39・40
3	D・E−2・3	N−45°−W		9.42	6.50	1.05	0.20	0.38〜1.05	0.21	SE35 SB10 SR2 SK36 SD35・38・39

第51表　井戸跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	重複	備考
1	C−4	N−30°−E	楕円形	1.60	—	[1.25]	SE2より古い	
2	C−4	N−30°−E	楕円形	1.77	16.6	[1.25]	SE1より新しい　SD1	
3	B・C−4	N−24°−W	楕円形	1.52	1.34	[0.42]	SD1より古い	
4	D−5	N−23°−W	円形	0.76	0.74	[1.49]	SD1より新しい	
5	C−3	N−35°−E	円形	1.46	—	1.33	SE12より新しい SD4より古い	
6	C−3	N−50°−W	円形	1.86	1.72	1.44	C-3GP76	
7	B−3	N−37°−E	円形	0.73	0.70	[1.40]	—	
8	C−5	N−39°−W	楕円形	1.02	0.88	0.57	SD1	
9	C−5	N−31°−W	円形	1.64	1.52	0.46	SD1	
10	C−5	N−6°−E	円形	2.49	2.22	1.25	SD2	
11	D−5	N−45°−W	円形	1.28	1.16	0.96	SD1	
12	C−2・3	N−51°−W	楕円形	2.36	1.79	1.30	SE5より古い SD4	
13	C−4	N−44°−W	円形	0.78	0.72	[1.05]	SD1	
14	C−4	N−45°−E	円形	1.05	1.02	[0.79]	SK1	
15	C−4	N−40°−W	円形	1.28	1.09	1.39	SD11より新しい	
16	D−4	N−13°−E	楕円形	1.49	1.26	1.27	SD10・57より新しい SB3P7	
17	D−5	N−15°−W	円形	1.16	1.12	1.25	—	
18	D−5	N−9°−W	円形	0.72	0.68	1.30	—	
19	E−7	N−14°−E	円形	0.78	0.69	1.37	—	
20	E−7	N−31°−W	円形	1.15	[1.06]	0.84	SD14・16	
21	D・E−7	N−45°−W	楕円形	[3.66]	1.44	1.24	SD8	
22	C−6	N−22°−E	楕円形	1.15	0.96	1.39	SD26より新しい	
23	B−6	N−5°−W	円形	0.88	0.80	1.22	—	
24	欠番							
25	C−7	N−83°−W	楕円形	1.66	1.38	[1.43]	—	
26	F−4	N−20°−W	円形	—	1.34	[1.31]	SR1	
27	F−4	N−31°−W	楕円形	1.08	1.00	1.23	SR1より新しい	
28	E−2	N−0°	円形	1.01	0.94	1.35	—	
29	F−3	N−80°−E	楕円形	2.20	1.92	1.39	—	
30	D−2	N−75°−W	円形	1.12	1.03	1.14	SD50より新しい	
31	E・F−3	N−49°−E	円形	1.19	1.10	1.35	SD38・39より新しい F-3GP7・8	
32	E−3	N−4°−E	円形	1.13	1.03	1.24	—	
33	E−3	N−9°−E	円形	1.17	1.11	1.36	SR2より新しい	
34	D−3	N−57°−E	方形	1.33	1.07	0.83	SD32より新しい	
35	D−3	N−83°−W	円形	2.46	2.29	1.47	SD32より新しい	

番号	位置	主軸方向	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	重複	備考
36	D－3	N－84°－W	円形	1.76	1.60	1.12	SE42・SD32より新しい	
37	D－2	N－14°－E	円形	1.13	1.05	1.26	SD32	
38	F－5	N－45°－W	円形	0.94	0.86	1.46	SD25	
39	C・D－2	N－32°－W	円形	1.69	1.47	1.35	SD32より新しい	
40	E－3	N－0°	円形	0.76	0.69	1.15	SD32より新しい	
41	E－3	N－27°－W	楕円形	1.85	1.49	[1.24]	SD35より新しい・SR2	
42	D－3	N－57°－E	楕円形	1.59		0.68	SE36より古い・SD32より新しい	
43	E－3	N－14°－E	円形	0.75	0.67	1.17	－	
44	D－1・2	N－37°－E	楕円形	0.79	0.69	1.31	－	
45	D－3	N－13°－W	円形	0.73	0.60	1.19	SD32より新しい	
46	欠番							
47	欠番							
48	D－4	N－22°－E	円形	0.77	0.69	1.40	SB2P4より新しい	平面観察
49	E－5	N－11°－E	円形	0.81	0.71	1.27	－	
50	D－1	N－33°－W	円形	1.27	1.19	0.75	－	
51	D－1	N－4°－E	円形	0.81	0.73	1.15	－	
52	A－7	短軸方位N－89°－W	方形	－	1.55	[0.97]	－	

第52表　土壙一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	重複	備考
1	C－4	N－43°－W	楕円形	0.96	[0.89]	0.29	SB3P3 SE14 SD15	
2	E－6	N－45°－W	楕円形	0.87	0.41	0.24	SD19より古い	壺器筒碗
3	C－6	N－80°－W	隅丸方形	0.79	[0.75]	0.50	SD14	大甕
4	E－7	N－69°－E	楕円形	0.86	0.68	0.55	E-7GP7	
5	B－6	N－40°－E	不整形	2.36	2.10	0.52	－	木片
6	D－6	N－48°－E	楕円形	1.08	0.58	0.08	－	焼塔
7	D－6	N－17°－W	隅丸方形	0.96	0.54	0.14	SB1P6	
8	C－6	N－33°－E	隅丸方形	1.83	1.63	0.25	－	木製品
9	B－6	N－41°－E	方形	1.12	0.90	0.12	SD26より新しい	
10	B－6	N－20°－E	(楕円形)	0.74	[0.72]	0.10	SD26より古い	
11	C－6	N－0°	楕円形	1.05	0.91	0.13	－	壺器脚
12	C－6	N－52°－W	楕円形	1.06	0.44	0.34	SD29	陶器猫餌
13	C－6・7	N－34°－E	不整形	1.1	0.67	0.12	－	碗・猫餌・焼塔
14	C－6	N－0°	円形	1.45	1.33	0.65	－	
15	E－2	N－37°－W	隅丸方形	0.98	0.92	0.46	－	
16	E・F－4	N－71°－W	不整形	1.56	0.67	0.15	SR1	土師器3点
17	欠番							
18	E－3	N－69°－E	楕円形	1.71	1.12	0.41	SR1	
19	D－1	N－48°－W	楕円形	3.12	0.92	0.15	SR4 P7	
20	E－8	N－90°－E	(楕円形)	1.16	[1.06]	0.20	－	
21	E－3	N－88°－E	不整形	0.91	0.44	0.09	－	
22	E－3・4	N－52°－W	隅丸方形	1.14	0.90	0.06	P77 P78	
23	D－2	N－51°－E	長方形	3.08	0.86	0.24	SD51 P32 P36	土師器高杯・甕
24	欠番							
25	D－4	N－50°－W	方形	0.90	0.71	0.52	－	
26	C－4	N－50°－W	不正形	0.76	0.60	0.60	SD15	
27	D－3	N－55°－W	楕円形	0.68	0.50	0.13	SB10 SD32	縄文
28	E－3	N－43°－W	長方形	0.76	0.18	0.04	SB5P3	
29	E－4	N－30°－E	長方形	2.00	0.40	0.07	－	
30	D－4	N－64°－W	長方形	2.10	0.40	0.04	SB8P17	
31	D－8	N－28°－W	方形	1.33	0.63	0.15	－	
32	D－7	N－42°－E	方形	0.80	0.36	0.09	D-7GP2	
33	欠番							
34	E－4	N－25°－W	円形	[0.91]	1.64	0.39	SD65	
35	E－1	－	－	0.60	－	0.36	－	南西壁面基本土層
36	E－3	N－35°－W	不整形	1.15	0.75	0.20	SR2 SR3	
37	E－7	N－73°－E	(楕円形)	[0.82]	[0.23]	0.39	SD20	
38	E－5	N－64°－E	楕円形	0.87	0.48	0.69	－	
39	C－6	N－53°－W	(円形)	1.04	0.32]	0.08	SD26	
40	C－6	N－54°－W	楕円形	0.80	0.66	0.08	C-6GP1	
41	C－6	N－30°－W	楕円形	0.72	0.48	0.04	－	
42	E－3	N－49°－W	不整形	1.13	0.45	0.23	SB5P2 SD61	
43	E－5	N－51°－E	不整形	1.08	0.54	0.32	SD9 SD10	
44	E－5	N－51°－E	楕円形	[0.96]	0.67	0.31	SD25より新しい	
45	B－6	N－39°－W	(不整形)	0.58	[0.46]	0.17	SD26	
46	C－3	N－44°－E	(不整形)	0.82	0.26	0.35	SB7P1 SD4	
47	C－3	N－45°－W	(不整形)	[0.64]	[0.22]	0.29	SD46	
48	D－3	N－41°－E	(不整形)	0.86	[0.39]	0.21	SD7	
49	D－3	N－34°－E	不整形	0.80	0.50	0.18	SX1 D-3GP27	
50	D－4	N－71°－E	楕円形	0.56	0.52	0.09	SB8P3	
51	D－4	N－90°	不整形	0.86	0.18	0.17	SB3P10	
52	D－4	N－63°－W	円形	0.62	0.58	0.13	－	
53	D－6	N－18°－W	楕円形	0.65	0.50	0.16	－	
54	D－7	N－0°	楕円形	0.64	0.64	0.28	－	
55	E－2	N－63°－E	円形	0.71	0.63	0.06	－	
56	E－7	N－41°－W	隅丸方形	0.82	0.35	0.15	－	
57	E－7	N－44°－W	楕円形	0.65	0.41	0.25	－	
58	F－3	N－0°	円形	0.64	0.56	0.08	－	
59	F－3	N－40°－E	楕円形	0.64	0.35	0.07	F-3GP15	
60	D－1	N－68°－E	円形	0.57	0.49	0.06	－	
61	E－7	N－37°－W	楕円形	0.62	0.46	0.19	－	

第53表　火葬土壙一覧表

番号	グリッド	方位	長軸(cm)	短軸(cm)	埋道長(cm)	深さ(cm)	平面形	重複	遺物	備考
1	D－2	N－29°－W	83	29	42	14.6	T字形	SD7	骨NO.1～NO.17	平均深さ5.25cm 埋道深さ平均5.05cm
2	F－3	N－42°－W	77	44	－	13.2	楕円形	－	骨NO.1～NO.12	浅い所2.5cm

第54表　溝跡一覧表

番号	位置	方位	方位	長さ(m)	幅(m) 最大	幅(m) 最小	深さ(m) 最大	深さ(m) 最小	重複
1	B－4 C－4·5 D－5·6 E－6	N－45°－W	－	39.34	3.55	3.10	0.92	0.6	SD2·18·SE4上より古 SE3より新 SD7·8·25 SE1·2·8～11·13
2	B－4 C－4·5 D－5·6 E－6	N－45°－W	－	32.48	2.60	1.76	0.69	0.5	SD1より新 SD8 SE10
3	C－2·3 D－3·4·5 E－5·6	N－50°－W	－	45.80	0.66	0.28	0.09	0.02	SD4·7～11·32·43 SB2·13 SB4P6 SB7P6 SB8P7 SX1
4	C－2·3 D－3·4 E－4·5	N－45°－W	－	38.45	1.02	0.57	0.12	0.04	D43より古 SD3·7·25·53·SE5·12·SB2P1～3より新 S SK46 SB4P10 SB7P1·2 SB8P5 SB13P2
5	C－2·3 D－3	N－50°－W	－	12.85	0.69	0.37	0.08	0.02	SB8 SD7·53·55 SC1
6	B·C-3	N－45°－W	－	6.99	0.84	0.79	0.80	0.71	
7	C－3·4 D－2·3 E－2	N－45°－E	－	30.52	1.44	1.24	0.74	0.65	SD1·3～5·11·15·32·35·38·39·48·52·58 SK48 SX1 SD1 SB1P3·4·12
8	C－7·8 D－6·7·8 E－5·6·7 F－5	N－45°－E	N－40°－W	45.00	3.90	2.00	0.93	0.47	SD1～3·14·19·23·25·27 SE21
9	E－5	N－43°－W	－	5.66	0.40	0.26	0.07	0.05	SD3 SK43
10	D－4·5 E－5	N－40°－W	－	12.54	0.55	0.38	0.21	0.08	SE16より古 SD3より新 SB3 SD11 SK43
11	C－3·4 D－4·5 E－5	N－45°－W	－	29.60	0.89	0.36	0.57	0.05	SD3·7·10·25 SE15 SA1P2 SB3P1·6
12	欠番								
13	C－2	N－30°－W	－	0.99	[1.35]	－	0.22	－	SD43より古 SD54より新
14	B－3 C－5·6 D－6·7 E－7	N－50°－W	－	39.68	3.24	1.17	1.35	0.94	SD16より新 SD8·29 SE20 SK3
15	C－4 D－4·5	N－40°－W	－	20.99	0.50	0.25	0.30	0.11	SD7 SK1·26 SB3P3·5
16	E－7	N－40°－W	－	3.00	1.18	1.10	0.79	0.55	SD14より古 SE20
17	欠番SK32に変更								
18	E－6·7	N－55°－E	－	2.46	0.24	0.24	0.04	0.03	SD1·19より新
19	E－6	N－55°－W	－	2.04	0.52	0.38	0.09	0.04	SD8·18より古 SK2より新
20	E－7	N－50°－W	－	3.88	0.58	0.51	0.17	0.17	SK37より新
21	C－5	N－40°－W	－	1.23	0.50	0.39	0.10	0.08	
22	B－5	N－50°－W	－	2.98	0.70	0.35	0.12	0.10	
23	C·D-8	N－45°－E	－	4.56	1.96	1.87	1.07	0.48	SD8
24	D－8	N－45°－W	－	4.36	1.29	0.89	1.06	0.98	
25	E－5·6 F－5	N－45°－E	－	15.40	1.52	0.94	0.73	0.66	SD8·SK44より古 SD1·4·11 SE38
26	B－5·6 C－6	N－50°－W	－	19.70	0.78	0.44	0.25	0.06	SE22·SK9より古 SK10より新 SK39·40·45
27	C－7·8	N－20°－E	－	6.47	1.69	0.89	0.89	0.59	SD8
28	欠番SK44·SD25に変更								
29	C－5·6	N－40°－E	－	3.35	0.66	0.36	0.10	0.07	SD14 SK12
30	B－5·6	N－45°－W	－	5.33	0.60	0.23	0.31	0.16	
31	欠番								
32	C－2 D－2·3 E－3·4 F－4·5	N－45°－W	－	39.50	1.71	1.16	0.40	0.09	SD3·7·25·35·37·42·43·58 SE34～37·39·40·42·45 SK27 SB6P1 SB10P1·2 SB12P6
33	欠番SK－21に変更								
34	欠番SK－21に変更								
35	D－2·3 E－3·4	N－40°－W	－	19.98	0.58	0.30	0.22	0.05	SB3·SB10P5より新 SB2 SB6·9 SD7·32·37·44 SE41
36	E－3·4 F－4	N－50°－W	－	3.44	0.30	0.22	0.02	0.02	SD33 SB9P7 SB15P3
37	E－3 E－3·4	N－55°－W	N－50°－E	20.60	0.32	0.18	0.18	0.10	SD38より新 SD32·35·39 SB9P6·10 SB15P6 SR1·2 ST2
38	D－1·2 E－2·3 F－3·4	N－40°－W	－	33.20	0.88	0.24	0.12	0.09	SD7より古 SD39·SE2上より新 SD7·49·51·58 SE33 SB11 SB8P4 SR2
39	D－2 E－2·3 F－3·4	N－40°－W	－	30.66	0.85	0.50	0.10	0.06	SD37·38·51より古 SR2·3より新 SD7·40·44·59· 61·66 SE31 SB5P4·8 SB11P7 SB15P4～6 SR1
40	D·E-2	N－45°－E	－	5.11	0.50	0.47	0.06	0.04	SD38·39
41	E－8	N－25°－E	－	1.50	1.26	1.10	0.21	0.14	
42	C·D-2	N－55°－E	－	3.66	0.18	0.14	0.05	0.03	SD32·51
43	C－2 D－1	N－45°－E	－	20.52	0.69	0.50	0.27	0.12	SD13·53·54より新 SD3·4·32
44	E－3	N－45°－E	－	2.90	0.50	0.42	0.06	0.04	SD35·39
45	欠番SK42に変更								
46	B·C-3	N－40°－W	－	7.37	1.05	0.95	0.78	0.41	SD47より新 SK47
47	B·C-3	N－40°－W	－	7.10	[0.70]	[0.43]	0.29	0.15	SD46より古
48	E－2	N－50°－W	－	3.10	0.52	0.33	0.19	0.09	SD7
49	D－2	N－40°－E	－	1.85	0.23	0.22	0.10	0.08	SD50 SB11
50	D－2	N－60°－W	－	3.11	0.19	0.17	0.08	0.05	SE30 SD49·51 SB11
51	D－2	N－40°－W	N－5°－W	5.00	0.40	0.29	0.09	0.06	SD39より新 SB11 SD38·42·50·66 SK23
52	C－3	N－35°－W	－	0.84	0.32	0.28	0.03	0.02	SD7
53	C－2·3	N－30°－E	－	5.83	0.95	0.76	0.28	0.17	SD4·43より古 SB7 SD5·55·56 SC1 SA2P1～4
54	C－2	N－65°－E	－	1.85	[1.04]	[0.57]	0.36	－	SD13·43より古
55	C－2·3	N－50°－E	－	1.19	[0.41]	－	0.07	－	SD56より古 SC1 SD5
56	C－3	N－45°－W	－	1.36	[0.39]	－	0.06	0.03	SD55より新 SA2P5
57	D－4	N－40°－W	－	1.36	0.22	0.18	0.06	0.05	SK16 SB3
58	D－2·3	N－40°－W	N－5°－E	4.68	0.58	0.48	0.05	0.04	SD7·32 SB11P1～3
59	E·F-3	N－60°－E	－	1.60	1.02	0.64	0.07	0.03	SD39 SB9P7 SB15
60	E－3·4	N－45°－W	－	2.18	0.14	0.12	0.11	0.03	SK2 SB9
61	E－3	N－45°－E	－	0.77	0.40	0.33	0.12	0.07	SB5 SD39 SK42
62	E－7（断面観察）			不明	1.80	－	0.56	－	
63	F－4	N－43°－E	－	1.24	0.26	0.22	0.11	0.07	SD64 SK34
64	F－4	N－45°－E	－	4.14	0.52	0.38	0.16	0.13	SE26 SD63·65
65	F－4	N－50°－W	－	0.76	0.46	0.32	0.08	0.06	SD64
66	D－1·2	N－40°－E	－	4.86	0.77	0.57	0.21	0.13	SD38·39·51 SK19